
復讐裁判官 藍の章

式乃菜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐裁判官 藍の章

【Nコード】

N7354D

【作者名】

式乃菜子

【あらすじ】

12月、連続猟奇殺人事件に静まり返る街。新月の夜に始まる狩り。月が満る時にみる仮初の解決。月の欠ける頃、動き出す藍色。恋人たちの聖夜。復讐の裁きに解決を。戦闘少々、恋愛適量の現代ファンタジー風味。

ヒトツノハジマリ 01 (前書き)

この作品は時系列的に前作品『破綻少女 黄の章』の後になりますので、設定等ご理解頂く為には、そちらを先に読まれることをお勧めします。

とはいえこの作品だけでも一応完結しますので、その辺は好みにお任せします。

ヒトツノハジマリ 01

復讐裁判官 藍の章

寒い冬の日。

黒と白の外套が訪れる。

怪物と魔法使いが、黄金からの許可を言い渡す。

相容れなかった銀色への復讐。

時はきた。

藍色は矛を手に取り狂喜に吼える。

この手で裏切り者を裁くのだと。

0

地下深く、地獄まで続いているのではと思わせる、洞穴の暗い闇を下り続けると現れる広大な空間。

荒廃とした岩盤むきだしの空洞は、地中の確かな冷氣と、濃密な靈気を漂わせ息苦しさを感じさせる。

暗黒のはずの地の底の奥には、微かな光が灯っていた。

灯りに引き寄せられる蛾の如く、蜜に引き寄せられる蝶の如く、そちらに歩を進めると出現するのは巨大な翡翠の鳥居。

静寂な佇まいをみせる鳥居をくぐり抜けると、大理石と黒曜石が敷き詰められた二色の参道が延びている。

幽玄な黒白の参道の左に紫水晶、瑠璃、右に琥珀、黄水晶の灯籠が妖艶に、あるいは凶暴に立ち並び、その先には紅玉と蒼玉の優雅な獅子と勇猛な狛犬が守りを固める、黄金と白銀で建築された聖魔の社。

その毒々しいまでの光々しさを放つ社の中に、その扉はあった。

七色の宝石の輝きすら眩む、太陽のような煌きを発し、靈的に尊

やかな足取りで、社から下り参道を歩く少女。

鮮やかな虹色の髪、真なる黄金の瞳。

紛い物ではない、本物の姿が忽然とそこに現れていた。

「――俺を……俺を助ける」

現れた少女に向けた、少年の第一声はそれだった。

それは、畏怖すら恍惚のものに変えるほどに巨大な力を持つ存在を前に、呑み込まれまいとする彼が精一杯に張った虚勢だった。

しかし、少女はその言葉を見做して歩き去ろうとする。

まるで、彼の言葉どころか存在すら意識していないというように。実際、その少女には彼のことなど、どうでも良い存在だったのだろう。

路傍を闊歩する虫けらの如く。

ましてや、それが死にかけているのならなお更だ。

道端で死に掛けた虫をいちいち気にする者などいない。

だが少年は、自らがそんなちっぽけな存在である、と認識されることが我慢ならないのか少女に向かって血反吐を吐きながら必死に叫び続ける。

「俺を助けるっ!!」

散々、少年が喚き続けると、少年の脇を通り過ぎる間際に漸く、少女は無表情で地に伏せる少年を見下ろした。

「どうしてかしら？ 私、負け犬には興味ないのだけれど」

全てを見透した黄金の瞳を向けられ、吸い込まれなくなるような衝動を抑えながら、少年は言う。

「俺は……俺は負けてなんかいないっ!」

「そんな状態で言われても説得力ないわね」

少女は虹色の髪を人差し指でくるくる弄りながら、興味なさそうに満身創痍の少年に言った。

「こっこれは油断したただけだっ! まともにやればあんな奴には負けなかった!!」

全てを魅了する完全たる少女を前に、強靱な自我をむき出しにし

て紡がれた少年の台詞。

更に少年は、少女を下から睨み付ける。

少女はそれを見て、くすりと笑う。

「3対1じゃなく、1対1なら勝てた？」

「ああ、あんな卑怯な策に嵌っていなければ、俺は負けなかった」
今のズタボロな有様と反して、彼は自身に満ちた声で頷いた。

しかし、少女はその自身をくだらないと切り捨てる。

「言い訳にすぎないわね。3対1だろうが、どんなに卑怯な策だろうが、ここにひれ伏しているのはあなたただわ。その結末に変わりはないの。わかる？ この負け犬さん」

そう言ってクスクスと、声に出して少女は笑った。

少年は普段であれば反抗の言葉を返したであろう、その少女の言葉と笑いに、何も返すことが出来なかった。

少女の黄金の瞳が、彼が自分に向ける全ての反応を許していなかったから。

「……ふうん。ただの蛮勇者ではないのね」

少女は少年が自分に反抗してきたらすぐに殺して、立ち去るつもりでいた。

だが少年がそれを察知して何も言ってこなかったことに、少し感心したように頷いてから続けて言う。

「わかったわ。少し面白そうだから、助けてあげましょうか」

彼女の言葉に賛同するように、一際大きな地響きがした。

少女はその音に顔をしかめて、

「ちょっと煩いわね」と言うと、指をパチンと鳴らした。

少女の指音が大空洞に木霊する。

すると、まるで時が止まってしまったように、今まで呻りを上げていた全ての崩落が止まった。

「……な」

ただ指を鳴らすだけで、彼女はこの落ちていく世界に命じ、その理を止めた。
ことわり

そんなこと、どんなに偉大な魔法使いも、どんなに摩訶な怪物でも出来やしない。

少年は、漸く今自分の目の前に立っている存在を心だけでなく、頭でも理解した。

「アンタが……『始まり』か」

「そうね。怖気づいたかしら？」

「そんなわけないだろ。俺は奴に復讐が出来るなら、どんなものにも縋り付いてやる。むしろアンタが『始まり』だというのなら、それは俺の望むところだ」

少年は震えていた、それは恐れではなく歓喜。

自分が、自分たちが求め、そして辿り着くことが出来なかった、存在に出会うことができたのだと。

少年の言う、『奴』と同じものを観れたのだと。

そして、自分はその存在を前に呑み込まれなかったのだと。

しかし、少女はそんな少年の感慨に反応せずに言う。

「助けてあげる前に一つだけ。あなたが物語に登場して良いのは、今から4年後の12月。それまで待ちなさい。それが条件。どう？ 飲めるかしら？」

「……いいだろう。その代わり、俺からも条件がある」

少年はあくまでも、自分はこの存在に吞まれずに、我を保っているのだと主張するように言った。

「何かしら？」

「一人、俺に忠実な部下を用意しろ。……最強の盾を封じることが出来るくらいの奴が良い」

「へえ、もう戦いのことを考えているのね。いいでしょう。なら飛びつきり皮肉な部下を用意してあげるわ」少女はその整った口元を歪めて頷く。

そして、世界の全てが畏怖によって凍りつき、歓喜に燃え上がるような、美しく荘厳な声で謡う。

「あなたの神性は完全に殺されている。まずは神性を剥奪されたあ

なたに、再び神性を与えましょう」

少女は片手を空に差し出し、神殺し『夜月』に対なす、彼女の神具を取り出す。

何もなかった空間に極熱の光の束が集まる。

桁外れの力の渦。

「神を殺し、

堕ちるは、

夜の月。

神を生み、

昇るは、

――朝の日」

虹と黄金の少女の手に握られた、一振りの剣。

太陽の如く輝く、その凶々しい光は黒金。

少年は自分が畏怖によって激しく震えていることに気が付かないほどに、その少女と剣に魅入っていた。

頂点の神具、神生み『朝日』を持つ、完全なる虹と黄金の少女、『
オリジナルワン唯一の一』。

それは、世界の始まりの姿。

「大丈夫、上手に与えてあげるわ。

――世界創世の業火に耐えることが出来るのならだけんど」

極光の少女は無常に微笑むと、恐怖に震える少年の胸に、その剣を突き立てた。

少年の体が光の渦に飲み込まれる。

狂ったような絶叫が停止した大空洞に響き渡り、色を失っていたその眼に、藍色と復讐の焰が色付いた。

＊

少年は気付かない。

彼は少女に呑み込まれなかったのではない。

最初から、少年は少女の手の平の上にいるのだということ。

全ては筋書きのある物語。

少年は最後まで気付かない。

ヒトツノハジマリ 01 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

今章は『黄の章』の次の物語です。

色々ある章なので前章よりは長くするつもりです。

ただ、その分^{いつものことですが}ペースが遅いかもかもしれません。

読んでいただいた方に、少しでも満足して頂けるように書いていきますので、よろしければ最後までお付き合いください。

＊あらすじの雰囲気を少し変えてみました。

藍の章 02

1

12月5日。晴れ、気温摂氏3℃、北風強し。

その冬の街は鬱々とした雰囲気醸し出していた。

日中だというのに人影は見当たらず、血液のように絶え間なく、道路を循環しているはずの車の姿は限りなくまばら。

空席ばかりの電車が、聴くもののいない音階を刻みながら通り過ぎる。

暦は師走に突入しているのに、活気のない街全体の動きは、まるで沈殿した泥のように鈍く重い。

不気味な静けさ。

澱みを帯びた街。

それは冬の寒さのせいではなく、この街を今恐怖のどん底に叩き落している、連続猟奇殺人事件が原因。

被害者は、体中の血液を吸い尽くされているという凄惨な事件。

現代に現れた吸血鬼として、10月の初旬から徐々にニュースで話題になり、11月の頭に一度鳴りを潜めていたのだが、ここ12月に入ってから再び話題に上っている。

それは11月にぱたりと止まっていた被害が、12月に入ってから急激に増加していることを意味する。

昼夜問わず、老若男女関係のなく、無差別に行われる残酷な犯行。加速する犯行に伴い、今では誰もが夜どころか昼にも外出を控えている。

そんな廃墟のような閑散とした街を一組の男女が、事件のことなど気にした風もなく、悠々と闊歩していた。

「……本当に誰もいないね」

「そうだね。まあ人混みでこった返してるよりは良いけど」

あまくらたけ あらかわすくね
天倉竹は荒川宿禰ののんびりとした感想に、普段通りのやや平坦な口調で答える。

それは適当な対外的な喋り方ではない、仲間内での口調。

1ヶ月ほど前から竹は、宿禰に対してそう振舞うようにしていた。

「やっぱり、吸血鬼事件のせいかな？」

「そりゃあね。それ以外の理由なんてないだろうし」

「……だよね」

宿禰は小さな溜息をついた。

別にそれは竹の喋り方が、やや冷たいものだから、というわけではない。

宿禰には、これが竹本来のものだと、なんとなくだがわかっていたし、むしろそれは宿禰にとって嬉しいことなのである。

それは竹が、自分を彼の輪の中に認識してくれた証だったから。だから宿禰の溜息の訳は別にある。

「とりあえず関係ないって前にも言ったでしょ」

竹が宿禰の溜息の理由を察して、フォローするように言った。

「……そうだけど」

「それとも何？ まさかオレの知らないところで荒川さんがやってんの？」

「ちっ違うよっ！ そんなわけないじゃん！！」

竹の質問に猛然と反発した宿禰だったが、すぐに自分がからかわれているのだと気づき、じと目で竹を睨んだ。

「だしよ。だったら気にする必要はないと思うけど？」竹は笑いを含んだ顔で、肩を竦ませた。

「……うーっ、天倉君て本^{ほん}当意地悪だよね」

「まあね、自分でもそう思う」竹はねめつける宿禰の視線を軽くかわすと、カラカラと笑った。

「ああ、でも関係なくもないのか。吸血鬼事件のお陰で、昼で授業が終わりになってるから。楽で良いね。期末が終わったからってのもあるんだろうけど。他の学校もそうみたいだし」

「……確かに楽だけど、不謹慎じゃないかな？ 実際死んでる人がいるんだから」

「ん、まあそうか。そいつはすみませんでした」

「ううん。別に怒ったわけじゃないんだけどさっ」宿禰が恐縮したように言った。

「あら、そっか」竹は真面目な反応を返してくる宿禰に、少し苦笑いしながら返した。

そんな軽口を言い合い仲良く歩く姿は、どう見てもカップルに見えるなかったが、二人が向かっている場所と目的は、そんな甘ったるい幻想とは、かけ離れていた。

10月の終わりに、とある事件に巻き込まれ、竹の失態により人ではなくなった荒川宿禰。

その直接の原因であろう、ドラッグの売人の死体の検証、更にそれらに関連したドラッグ『D&』の成分分析等、それら全ての検証がやっと終わったという報告を、『意外精神』ドクター いしわた なおや石渡直也から受けて、二人は今からその結果を聞きにいく途中だった。

*

やっと。本当にやっとである。

宿禰の体に変調が現れてから1ヶ月。

1ヶ月待たされたのは、竹にとって誤算以外のなにものでもなかった。

いや、誤算というのなら、待たされたことよりも大きな誤算があった。

事件の直後、竹が荒川宿禰に施した忘却の魔術。

それが何故か、次の日に突然完全に解けてしまい、宿禰が全てを思い出してしまったのである。

しかも話は、それだけでは終わらない。

宿禰にはあの夜以降、人として逸脱した身体能力が備わっていたら

しく、厄介なことに当初の宿禰はその自覚がまったくなかったのだ。階段を二蹴りで駆け上り、怒涛のスピードで廊下を爆走し、遅刻だった為に閉じていた教室の扉を開ければ、勢い余って破壊する。被害者が出なかったから良かったものの、洒落おのがみしんりになっていなかった。その時は、前夜に大方の事情を聞いていた大神深翠と山吹蒼香やまぶきそうかが、授業そっちのけで即座に宿禰をその場から拉致し、美少女の微笑みという究極の武器をダブルで使って、適当に誤魔化したことで事無きを得たらしい。

そして、大きな破壊音の直後、階段の踊り場でなおも混乱していた竹に、某局に捕らえられた宇宙人のごとく、両脇を蒼香と深翠に抱えられ引き摺られて、文字通り持ってこられた不安げな顔をした宿禰。

彼女を突き付けながら、不満げに状況を説明した二人の話を聞いた竹は、最初本気で信じられなかった。

昨晚、宿禰には記憶の忘却とともに、異常性の抑制も入念に施したはずだったからだ。

しかし、目の前で実際にキレかけている蒼いと翠の、更に記憶を思い出した宿禰が並んでいては、それを事実として受け止めるほかなかった。

とはいえ、その時の竹は逆に安心していった。

明確な実害が出る前に、それに気付けたのだから。

教室の扉を破壊した。

忘却させた記憶を思い出した。

それだけならまだ、いくらでも取り繕うことは出来る。

もう一度、宿禰に全てを忘れてもらい、異常性の抑制を更に入念に施す。

教室に戻ってからの言い訳が、多少面倒なものになりそうだったが、たったそれだけのことで全てが元通りになるはずだ。

だが、そんな簡単に話しは終わらなかった。

誤算続きも、ここまで来ればいっそ清々しい。

竹にとって最大の誤算となったそれは、宿禰をそのまま階段の踊り場から学校の屋上へと連れて行き、深翠と蒼香も同席させた場所で起こった。

宿禰に何も説明せずに全てを元通りにしようと、強行した忘却と抑制の魔術。

それが荒川宿禰には、どういうわけかそれらの一切が、効かなくなってしまうたのである。

竹がいくら記憶を忘れさせようとしても、異常性を抑えようとしても、全く効果が得られなかった。

それどころか、何も説明せずに再び忘れさせようとしたことに対して、宿禰に怒られる始末。

竹は何度やっても成功しない自分の術に若干へこみながら、結局、宿禰をそのままにすることを余儀なくされたのだった。

なので宿禰は、それから今の今まで、2年前のことも、10月最後の夜のことも覚えた状態で、異常な身体能力をそのままに日々を過ごしていた。

そして、竹は自分の責任でそうってしまった宿禰を、そのまま放っておけるわけもなく、監視の意味を込めて、今日まで殆どの時間を宿禰と一緒に過ごしていた。

登校から下校、昼休みに放課後の時間。果ては休日に至るまで。

その間、ずっと二人きりというわけではなかったが、竹はそれぞれ朝から晩まで宿禰と一緒にいた。

さすがに夜は一緒にいれないので、宿禰には秘密で監視用の鳥型人形を1体、『創生の絡繰師』^{アーティスト}松田聡也^{まつだとしや}から譲ってもらって、宿禰の自宅に張り付けていたりもした。

当初はそれも石渡の検証が終わる数日だけのことだと思って、腹をくくっていた竹であったのだが、思いのほかに時間がかかり、結局1ヶ月ばかり待たされたのである。

その待たされた1ヶ月の間に、竹もただ指を銜えていたわけではない。

魔術のことは魔法使いに聞くのが一番良いだろうと、黒澤^{くろさわ}怜^{れい}の元に宿禰を連れて行ったり、宿禰のことを出来損ないの鬼と称し、何かわかっていそうだった秋野^{あきの}紅葉^{くれは}に話を聞きに行ったりした。

その結果、竹がわかったことは、怜が忙しくて当分相手にしてくれないということと、噛まれてそうだったんだから、いわゆる吸血鬼の類に分類されるものになったのでは、という紅葉の不確定な意見、そして宿禰を連れて行くと二人が不機嫌になるのだという、実に手ごたえのないものだけだった。

吸血鬼になった。

それは紅葉の見解であって、正確に決定されたことではなかったのだが、それを聞いた宿禰の反応は実にあっさりしたものだった。

むしろ何かを喜んでいる節さえ見受けられたくらいだ。

人ではなくなったと言われたのに、そんな反応が出来る宿禰の心境は、竹には不可解なものだった。

しかし、12月に入って急増していく、吸血鬼事件のニュースを見ていくうちに宿禰の顔色が変わった。

自分と何らかの関わりがあるのでは、と目に見えて不安がっていたのだ。

それならば、と竹は『電子^{マルミグ}の蜘蛛^{ナット}』脇光太郎^{わきこうたろう}に巷で話題の吸血鬼事

件と、ついでに実際にいた吸血鬼の情報を調べてもらったのだが、宿禰に繋がるような実になる情報は今のところ何も得られなかった。その時点で竹は八方塞がりになり、漸く光明が見えたのが今日の朝だった。

そして、竹たちと同じく学生である石渡の自宅に、お互いの学校の終わる昼過ぎに行く約束をして、二人は学校帰りの足で向かったのだった。

＊

古い人家の立ち並ぶ住宅地の中でも一際ぼろい、築30年は経って

いる木造のアパートの1階に到着した竹と宿禰は、3つある扉の一番右の扉の前に立つと、音が本当に出るのか不安なほどにチープなチャイムを鳴らした。

宿禰にとって5度目の石渡宅への訪問だったが、宿禰は慣れた様子もなく、むしろいつにも増して緊張しているようだった。

検証結果の報告。

それは彼女にとって大きな岐路になるのだから、緊張するのも当然だろう。

緊張した宿禰を見て、竹はそう考えた。

竹は何か声をかけてあげようかと考えたが、声をかける前に、学校の制服に白衣姿の石渡が木の軋む音をあげる玄関の扉を開けて出迎えたので、結局何も言わなかった。

「ういっす」

「こっこんにちわ」

二人は出迎えた石渡に挨拶をした。

「うん。じゃあ、まずあがって」

石渡は宿禰を一瞥すると何か苦い顔をして、そう言った。

竹に嫌な予感が過ぎる。

だが竹がその表情の真意を確認する前に、石渡は部屋の中に引っ込んでしまったので、竹と宿禰は石渡を追う形で、玄関で靴を脱ぎ、病院のように設置されているスリッパに履き替えてアパートの中に入った。

部屋の間取りは六畳一間で全面畳張り。

トイレ共同、風呂、台所なし。

ベニヤ板の薄い壁。

天井には染みが付属されていて、アパートの外観のイメージ通りのボロっちいものだった。

しかし、それは表向きのものである。

竹と宿禰が部屋に入ったのを確認すると、石渡は部屋の一番奥の畳を一枚持ち上げた。

若干の埃が宙を舞い、畳の下に鋼鉄製の扉が現れる。

石渡は現れた鋼鉄製の扉をスライドさせて開けると、その下に続く螺旋階段を下っていった。

竹は宿禰に先を譲り、最後にその螺旋階段を下り、その途中で天井になる鋼鉄の扉を閉めた。

消毒液の臭いに鼻腔を刺激されながら、螺旋階段を下りきると、新しい病院みたいに真っ白な空間が広がっている。

面積は丁度、このアパートと同じくらい。

カーテンで今は隠されているが、病人用の簡易ベッドが3台。

無機質なデスクの上にパソコンが置かれていて、ガラス戸の本棚には本、書類、怪しげな薬品がびっしり収まっている。

更に壁際には怪しげな計器が数個備えられていて、その横には扉があり、もう一つ同じ面積を持つ石渡の本当の部屋へと続いている。

その様子は病院というよりもむしろ研究所。

いや、どこぞの悪の秘密結社の秘密基地のようだった。

石渡は自分用のデスクの椅子に座り、引き出しの中からいくつかの書類を取り出す。

「えっと、じゃあまず座って」石渡が階段を下りてから所在なさげにしていた宿禰に、自分の前にあるキャスター付の丸椅子に座るように言った。

宿禰が言われた通りに石渡の前に座る。

竹は、螺旋階段の横に十数脚積まれているパイプ椅子を一つ持ってきて、宿禰の横に座った。

竹が座ったことを確認して、石渡は口を開く。

「じゃあ検証結果が出たから教えとくわ」

ゴクリと、ガチガチに緊張した宿禰が息を呑んだ。

その様子が伝わってきて、微妙に竹も緊張する。

「あっと、そうだった。その前にこれを読んで」石渡はそう言って、竹と宿禰に一枚ずつ持っていた紙を渡した。

「焦らすね」すぐに本題に入ってくれると思っていた竹は、待たさ

れた1ヶ月分の抗議も含めて言う。

その横で、宿禰も微妙な顔をしていた。

「いいから。とにかく読んで」

石渡の台詞には、読んでくれないと始らない、という意味込められていた。

「――OK」それにすぐに気付いて、竹は頷く。

そして、竹と宿禰は言われた通り、石渡に渡されたA4の用紙にプリントされた文字を読み始めた。

藍の章 02 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

前章の緩い雰囲気の反動でしょうか。雰囲気を変えることにてこずっています。

なのでミス等ありましたらご指摘ください。

藍の章 03 (前書き)

今話の冒頭にあつた設定をいじくりました。一度読まれた方は申し訳ございません。

藍の章 03

＊

『吸血鬼の特徴』

吸血鬼は人を襲って血を吸い、その傷跡に血を与えられた者は吸血鬼になる。

吸血鬼は『魔』の系統樹に属しており、大本から人とは別の存在である。

しかし、吸血鬼に血を与えられて吸血鬼と化したものは、『人』の系統樹からの派生となる。

その場合の分類は系統樹が『人』、属性が『鬼』、分類が『吸血鬼』となる。

逆に初めから吸血鬼だったものは、系統樹が『魔』、属性が『鬼』、分類が『吸血鬼』となる。

この系統樹の違いは大きなものがあり、系統樹が『魔』の吸血鬼と系統樹が『人』の吸血鬼とは、持っている力に大きな隔たりがある。

このことから、『魔』の系統樹に属する吸血鬼は、『人』の系統樹に属する吸血鬼を隷属させる立場にある。

その間には『血縁』の繋がりが存在する。

この『血縁』とは『神性』のことである。

吸血鬼は基本的に太陽の光に弱いが、系統樹が『人』の吸血鬼は、元々が人であったため、系統樹が『魔』の吸血鬼よりも、日光に対して強い耐性を持っている。

系統樹が『魔』吸血鬼は、日の光に弱いため日中は棺桶の中で眠り、夜に行動するものが大半。

そして日中は、自分に隷属させている系統樹が『人』の吸血鬼を使って、身の回りの世話をさせている。

吸血鬼は人よりも犬歯が発達していて、鋭く大きく、肌の血色も良くない。

系統樹が『魔』の吸血鬼は、暗示の魔眼をもっていて、その効能時間は吸血鬼の力次第。

系統樹が『魔』の吸血鬼は、強力な魔法や魔術の類を操り、その中には特異な能力を有す者もいる。

オーソドックスな例は、蝙蝠などに変身する能力。

系統樹が『魔』の吸血鬼の身体能力は、最低でも成人男性の5倍以上。

系統樹が『人』の吸血鬼の身体能力は、最高でも成人男性の10倍以下である。

ただし、どちらも大なり小なり神性を宿す存在である。

吸血鬼には明確な寿命はないが、定期的に人の血を吸わないとその力は減少していく。

銀製の武器を使えば傷付けることができ、白木の杭を心臓に打ち込めば死亡する。

なお、これらの特徴を持った吸血鬼は3年前に絶滅している。

『連続猟奇殺人事件（吸血鬼事件）に関する情報』

最初の事件は9月23日に発生。

その後12月3日までで、同様の事件が16件起きている。

月別の内訳は、9月（2件）、10月（7件）、11月（0件）、12月（7件）である。

報道陣への情報規制が解除されたのは、10月7日の3件目の犯行から。

現在、事件が起きた周辺の幼・保育園などの児童施設は、休園になっている場合が多く、小・中・高等学校などでは、授業時間の短縮、集団登下校などの対応が取られている。

被害者の共通点は、体中の血液を吸い尽くされている以外に特になく、犯行時間もバラバラだったのだが、12月に入って同時刻に

複数の場所で事件が発生している。

このことから、12月に入ってから的事件は、複数犯によるもの
と考える方が自然である。更に11月に事件が発生していないこと
を考えると、9～10月に起きた事件と12月の事件は別人、また
は別の集団による犯行の可能性がある。

警察は、今のところこの不可解な連続殺人の容疑者の特定まで至っ
ていない。

また、荒川宿禰個人と今まで発生した、これらの事件との関係性
は見受けられない。

＊

宿禰より先に読み終わった竹は、嘆息をつくように石渡に言う。

「……これ、オレがコーチンに調べてもらったやつと同じなんだけ
ど」

石渡から渡された『吸血鬼の特徴』、『連続猟奇殺人事件（吸血
鬼事件）に関する情報』、両方の調査結果は、竹が脇に頼んで調べ
てもらったものと一字一句が同じだった。

「うん。知ってるよ」

「知ってて、読ませたのかよ」

「結果を話す前に一応だよ。それにそっちの——荒川さんは知らない情報でしょ？」

食い入るようにA4の紙を読んでいた宿禰が名前を呼ばれて、は
っと顔を上げた。

「そりゃこんな情報普通知らないだろ」竹は宿禰の横顔を見ながら
言った。

竹の視線を感じて、気恥ずかしそうに再び紙に目を落とす。

「え？ でも、もう荒川さんは普通じゃないよ」

言ってから石渡は自分の失言に気付き、しまった、という顔をした。

「……まあそうだけど」竹は頷きつつも、お前は馬鹿か、と渋い表

情で石渡を見る。

石渡は気まずそうに、短髪の天然パーマをガリガリと掻いた。
白い部屋に灰色の空気が流れる。

「……えっと、読み終わりました」宿禰が弱い笑顔で二人に言った。
「あー、そう。じゃあこれで話しが進むな」竹は微妙な空気を変えるように、努めて明るい声を出した。

「お、おう。じゃあまずは、死体の検証結果からなんだけど」石渡も竹の調子に合わせて明るい声で言った。

宿禰は成り行きを見守るように、静かに耳を傾ける。

その様子から、当分口を挟むつもりはないようだった。

「こっちは簡単だったわ」

「あんだだけ焼け焦げてたのに？」

ドラッグの売人の死体は、紅葉に体内から血液を焼かれて、見るも無残な焼き具合だった。しかもその死体は、その処理を任された紅葉のメイドが一度、地中に埋めてしまっていて、良好とは程遠い状態だったはずだ。

それを簡単だったとは、どういう意味だろうか。

「うん。確かに身体の内側から、っていうか血液から燃やし尽くされてたのは痛かった。あれをやったの秋野さんでしょ？　ありやマジですげえわ。炎焼系の異能者の中だったら、ピカ1じゃない？　あんなの神性が低い奴が喰らったら、1回でケシ炭だぞ。さすがに三神の一角だわ」石渡は紅葉の能力に対して、本当に感心しているようだった。

「いや、そんな話し今はいいいから。あれの段違いさは、実際に喰らったオレはわかってるし。それよりも――」

「ああ、悪い。でも本当にあれは凄いだって。だってあの死体さ、ケシ炭にこそなってなかったけど、生きている細胞が一つもなかったんだって。だから、あの死体からは何もわからなかったんだわ」石渡はあっさりと降参宣言をした。

そりゃ何もわからなかったのなら、ある意味簡単だっただろう。

しかし、そんな報告で納得いくわけがない。

「はあ？ 何だよそれ」竹が当然のように声を荒げた。

「待ってって。まだ話しは終わりじゃないから。それでも一つの推測は立ったんだよね」石渡がもったいぶるように言った。

「推測って何だよ？」

「言ったでしょ。秋野紅葉の能力を神性が低い奴が喰らったら、1回でケシ炭になるって。でもさ、あの死体は全ての細胞が死んでいたけど、ケシ炭にはなっていないかったわけよ」

そこまで言われて、竹は石渡の言いたい事がわかった。

「ん、ああ。じゃあそいつには、多少なりとも神性が宿ってたってことか」

「うん。それが唯一、あの死体を調べてわかったこと。でもこれはあくまで推測でさ、しかもこの推測は間違ってたんだわ。そして同時に一つの可能性も消えた」

「どういふことさ？」

「えっと、あの時以来、健診で形で荒川さんと竹がここに定期的にきてたべ？ それで荒川さんの身体を調べてわかったんだけど、荒川さんには神性が全く宿ってねえんだ。でも荒川さんの身体に異常が発生したのは、アレに噛まれてから。つまり――」

「つまり荒川さんは、吸血鬼として分類されるものではないってことか。吸血鬼の系統樹は『魔』にも、『人』にも神性が宿っている。もしそいつが吸血鬼だったら系統樹が『魔』だろうと系統樹が『人』だろうと、噛まれて身体に異常をきたした荒川さんに、その神性が与えられてなければおかしいからな」

「……つまりはそういうこと」石渡は竹にいいところを取られて、納得いかなそうに声を漏らした。

「でもさ」竹は短く呟くと、宙に舞う埃を眺めているような、胡乱な顔をした宿禰を見ながら、「だったら荒川さんは何なんだ？」と石渡に問いかけた。

吸血鬼ではない。

それは別に良い。

むしろ吸血鬼なんて厄介なものにならなくて、竹は正直ほっとしているくらいだ。

「少なくとも真正の吸血鬼ではないね。ていうかさあ、元々吸血鬼っていう可能性はなかったんだって。コーチンの調査結果にもあったべ？　吸血鬼は絶滅してるって。……ていうか、それは竹が一番良く知ってるじゃん。3年前に吸血鬼を滅ぼしたのは、騎士団と竹たちなんだから」

「まあそうだな」竹は3年前のことを少しだけ思い出しながら、なんの感慨もこもっていない声で頷いた。

「それでさ、じゃあ結局なんなんだよって話だけど。その話の前にまず『D&』ってドラッグの成分分析から話すよ」石渡はデスクの引き出しから、ビニール製のパケを数袋取り出す。

パケの中には、色別に分けられた半月状の錠剤が入っている。

そのカラフルな錠剤こそ、10月の終わりに、アレクサンドラから依頼された竹が回収した薬、『D&』である。

この薬が、ある意味全ての発端と言えよう。

石渡は、数袋あるパケから一粒ずつ取り出し、デスクの上に置いた。ドラッグという言葉聞いて、真面目な宿禰が眉をひそめる。

竹からある程度の話は聞いていたものの、その辺へ対する抵抗感はまだあるらしい。

「これの大まかな成分自体は、殆ど従来の錠剤型麻薬となんら変わりなかった。でもこのドラッグから、従来の合成麻薬の中には含まれていない成分がごく微量だけど、1種類ずつに検出されたんだわ」

石渡はデスクに出された錠剤を指で示しながら言った。

「1種類ずつって？」

「うん。この麻薬って七色あるべよ？　その七色にさ、それぞれ別の成分が含まれてるんだよね」石渡は選り分けた7粒の錠剤を手に乗せて、竹と宿禰に見せた。

宿禰は、石渡の手の平に乗せられた錠剤の色を口に出して確認す

る。

「赤、青、緑、黄色、オレンジ、紫……と」最後の色で宿禰の声が詰まった。

それを竹が補うように言う。

「――藍色」

「あ、そっかあ。そうだった」宿禰が何かを思い出したように頷いた。

そして、宿禰は思い出した話をしようと横目で竹を見て、結局やめた。

竹の表情に不安と混乱が浮かび、それが戦慄すら感じさせる壮絶なものだった為である。

宿禰はまた暫く黙っていようと思った。

「……虹の色だな」竹が余裕なさそうに呻る。

「そうだね」石渡が竹に同調するように重い声で言った。

「……どう思うよ？」

「うーん、わからない。偶然って言いたいけど、そう言い切れない事態が発生してるし」石渡は深く溜息をつく。

「……この七色の錠剤にそれぞれ含まれた微量の成分ってさ、全く未知のものだったんだわ」

「全く未知？　なおでもわからなかったの？」竹の顔に驚愕が刻まれる。

「いや、未知だった、だから。今はその成分の性質の解明は完了してるよ。効能もどんなものかある程度はつきりしたし」

「効能って……まさか使ったのか？」

「なわけないべ。松じゃあるまいし」石渡は笑いながら言った。

「……なおが松をどう思ってたのかはスルーするけど、じゃあどうしたんだよ？」

「人体実験みたいなもんな。っていつても昔みたいに人間の被検体は使えないから、松から人型の精密な生人形を3体買ってやったんだけど。ていうかマジで超高かったんだけど」石渡は今はここに

いない、声の高いBーBOYに憤慨したように言った。

竹はさっきの石渡の台詞は、そんな背景からきたものなのか、と納得しつつ、自分は松田から人形をただで譲ってもらっていたので、その話題は広げないようにすることにした。

竹はばつの悪そうな顔をして聞く。

「じゃあそれで実験したんだ？」

「うん。1ヶ月もかかったのは、こっちに時間かかったからでさ。

まず最初の一体に投薬してから、1週間は何の成果もなくて焦ったわ」

「でも今は成果出たんだろ？ さすがだね」

「おう。もっと言ってくれ」

石渡が気分良さそうに言ったに対して、竹は平坦な声で返す。

「いや、もう言わないけど」

「えー、……まあいいや」

そのテンポの良いやり取りが面白かったらしく、宿禰がくすりと笑った。

「でさ、まず『D&』特有の効能は、二つあって、一つは身体能力、五感の強化。これはほんとに微々たる上昇だけど」

「え？ それって前にコーチンが調べた資料だと、服用者の幻覚体験って話じゃなかったっけか？」

「いや、本当に服用者の身体に影響があったよ。でもコーチンの調べた資料は俺も読んだけど、服用者の幻覚体験の可能性が高い、って書いてあったただだから間違いでもないんだけど」

「そっか。それで二つ目は？」

「ああ。まあこの二つ目が厄介だったわけだけど、でもそれで荒川さんが今どんな状態かわかった。さっき未知の成分が七種類って言ったじゃん？ その七種類だけを『D&』から抽出してさ、少しずつ二体目に投薬していったら、最初何も変化が現れなかったんだけど、七種類の成分がそれぞれある一定の量に達した時に、人形の身体に変化が急に起きた。まずは、大量の発汗に全身の痙攣。更に異

常な興奮性と精神錯乱。これが第一段階」

話す石渡の声が徐々に硬いものに変わっていく。

「そして第二段階は、人体の改変とそれに伴う異常行動」

「……人体の改変？」竹は、心に押寄せる嫌な予感を必死に塞き止めながら聞いた。

「人体の改変っていうのは、簡単に言えば身体能力の向上だよ」

「じゃあそれに伴う異常行動ってのは？」

石渡は竹の質問に対して事務的な口調で短く、

「吸血衝動」と言った。

ビルの窓枠を利用し、低いビルの屋上まで3回の跳躍で上りきる身体能力。

充血した目、口の端から涎を垂らした恍惚の表情。

そして、荒川宿禰の首筋に突き立てられた牙。

「――吸血衝動」竹は1ヶ月前の、ドラッグの売人の行動を思い出しながら呟いた。

「うん。でも、この第二段階ってのには条件があつてさ。第一段階を発現した人形を落ち着けようと、眠らせたら発現したから、恐らく服用者の意識の喪失が発現の条件になったんだと思う」

「――あ」竹が喉から奇妙な声を出した。

「どうかした？」

石渡と宿禰の視線が竹に向けられる。

「い、いや、なんでもない。話を続けて」

竹は動揺したように半笑いで言った。

ドラッグの売人の青年が第一段階の時に意識を刈り取ったのは、他でもない竹自身である。意識の喪失が第二段階の発現条件であるというのなら、青年の意識を失わせた竹の一撃こそ諸悪の根源ではなかろうか。

竹はいやまさか、そんなことは、と自分に都合の良い風に考えようとしていたが、話を続ける石渡にそれを即座に否定される。

「これは実験の最後の話になるけど、この意識の喪失が条件ってい

うのを確認する為に、1体目の人形に第一段階を発現させて、暫く放置しても第二段階に移行しなかった。それでまさかと思って、1体目も2体目同様、眠らせてみたら第二段階が発現したから、この条件はほぼ確実」

竹の心に罪悪感と後悔がいつきに圧し掛かった。

その様子に気付いた宿禰は、声をかけられる雰囲気でない竹を、ただ不審に思うだけであった。それに今の宿禰は、今までの自分の常識を遥かに超える話に、ついていくのに精一杯だった。

石渡は二人の心中に構わずに説明を続ける。

「それで2体目が2段階目に入ってから説明だけど、これは竹が見たドラッグの売人の状態に似ていたから、まだ何もしていない3体目を2体目に与えてみたんだわ。そしたら2体目が嬉しそうに3体目の血を吸いだしてさ、でも何か延々と吸い続けてそうな雰囲気だったから、一度それを止めさせた。高い人形を壊されたらたまらないし、松に金支払ったお陰で、今貧乏だし」

「それでどうなった？」石渡の恨み節に、竹は突っ込む余裕もなく聞いた。

聞かなくても、結末はわかっているのに。

「人間以上の力で暴れる2体目を止めた時に、3体目の状態に変化が起きた。っていうか3体目に襲い掛かれた。勿論、速攻で止めたけど。その後2体の人形を色々と検証して、わかった結果をまとめたのがこれ。これに荒川さんが何になったのかも書いてある」

石渡はやっと説明し終わって、疲れたように再びA4の用紙を二人に渡した。

藍の章 03 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

一度載せたものを、変更してしまい申し訳ありません。自身の力不足に情けない思います。

ただ変えた以上は、より面白いものを書けるようにしていきたいと思いますので、よろしければ、どうかこれからもよろしくお願いします。

藍の章 04

＊

『D&』は人体の改変を強制的に行う薬物である。

この作用は、7種の成分を一定以上体内に蓄積した場合にのみ、効果を得ることが出来る。

この薬物の効果により人体改変が行われた摂取者は、個体差はあるが身体能力がおよそ3～10倍程度まで跳ね上がる。

以前、この効果が現れた大学生が秋野紅葉の一撃を喰らいながらも、消し炭にならなかった理由は、神性の付加ではなく単純に身体の耐久力の向上によるもの。

更に内面の変化として、他者への異常なまでの吸血衝動が精神に湧き上がる。

この吸血衝動に従い吸血行為を行うと、対象の体内の血液を吸い尽くすまで、吸血行為をやめることはない。

これによって血液を吸い尽くされた対象は当然死亡するのだが、何かのアクシデントによりその吸血行為が初期段階で中断した場合、その対象は生存し『D&』による人体改変と同じ効果が発症する。

これは『D&』によって変異したものの唾液の成分に、7種の成分と同じものが大量に含まれていることから、吸血行為により対象の体内に進入した唾液が、『D&』と同じ効果を発揮する為である。

これらの存在に一番近いのが吸血鬼であり、類似点として、その身体能力や、吸血行為などがあげられる。

しかし、類似点以上に相違点は多く、太陽の光に強いことや、系統樹の違いがなく、また自身の力の保持、隷属対象を増やす為に血を吸うのではなく、ただ衝動的に吸血を行うこと。

更にその伝染方法は吸血行為そのものではなく、唾液を介したものであり、また、その身に神性が皆無であることなど。

そして、『D&』による変異者、またはその二次感染者を解剖・検証後、全てを総合し最終的に出した結論は、変異者たちは吸血鬼に近しい、全く新たな存在として生まれ変わったのだといえる。つまり現在の荒川宿禰は、人間とも吸血鬼とも異なる新たな生物である。

＊

読み終わった竹は、今度は宿禰が読み終わるまで待つ。

これは、宿禰を置いてきぼりで話せる内容ではなかった。

竹が読み終わったのに少し遅れて、宿禰が紙を膝に置いて顔を上げた。

それを横目で確認して、竹は口を開いた。

「新たな生物って、どういうことだよ？ 紅葉は鬼の類って言うんだけど、それとは違うのか？」

「うんと、人を超えたとかそういう意味では鬼でもあるかな？ でも神性を帯びていないから、鬼に分類しちゃうと出来損ないだわ」出来損ないの鬼。

紅葉の発言は的を射ていたらしい。

竹は紅葉の観察眼の鋭さに舌を巻き、沈黙する。

「っていつても正しく言うなら、系統樹は『人』、属性は『鬼』、分類は『吸血動物』って感じ。あえて名付けるなら人工擬似吸血鬼だけど、吸血鬼がいなくなった今だったら、もう吸血鬼でいいと思うけど」

「吸血鬼襲名ね。……笑えねえな」

「だよな」

竹と石渡が苦笑いし、少しの空白の時間が出来る。

その短い時間で、その場にいる三人が何か覚悟を決めたような顔付きになった。

「……それで、荒川さんを治す方法は見付かったのか？」竹がゆっ

くりとした口調で石渡に問うた。

今までの長い会話は全て前置き。

荒川宿禰の治療。

そのただ一点だけが、今の竹にとって重要なことである。

運命の岐路。

「結論から言えば――」

審判の時。

石渡が既に決まった解答を口にする。

「――荒川さんを元に戻す治療は不可能だわ」

「……それはどうして？」石渡の解答に竹は、鉛のような声で聞き返した。

「荒川さんの身体は、上っ面だけじゃなく、その存在自体が完全に別の生き物として機能しちゃっている。もうそれを元に戻すことは不可能だよ。俺達ならわかんべ？ 一度人を超えた生き物は、もう人には戻れない」石渡はすまなそうな顔で、自分の前で俯く宿禰を見て言った。

「……なら」

竹が何か思いついたように言うと、石渡が首を横に振る。

「それも無理なんだって。神ですら人に堕とす例外を可能にする、神殺しは使えない。だって荒川さんには、奪える神性が元からないんだから」

「あ」

「それと荒川さんに竹の魔術が効かない理由もはっきりしたよ。荒川さんの身体の中身は、過去に存在しなかった生物になっている。そんな生物の内側に効果を発揮できる魔術なんて、編み出されてないじゃん」

「……じゃあ本当に」

「治療は不可能。打つ手なしだわ」

「……マジかよ」

一生、宿禰の体は元には戻らない。

普通には戻れない。

人間としての死刑宣告ともとれる残酷なその言葉は、宿禰にとってどれだけ重いだろう。

その表情には、どれだけの悲壮が浮かんでいるだろうか。

石渡と竹はすまなそうに、恐る恐る宿禰の顔を見た。

宿禰は二人分の視線を注がれて、今まで沈黙し、俯いていた顔を徐々に上げ口を開いた。

「あ、えっと。大丈夫だよ？」

「は？」

「え？」

竹と石渡は不測の事態に咂然とする。

「えっと……荒川さん。今なんと？」竹がうろたえた声で聞いた。

「え？ だから全然、大丈夫」宿禰は飄々と答える。

「……マジで？」

「うん。マジだけなんで？」

宿禰は、戸惑う二人に逆に聞き返した。

目をぱちくりさせるその表情は、何故二人がそんな風なのか本当に疑問に思っているようだった。

「何でって、君はもう人間じゃなくなっていて、体も元に戻らないんだよ？」

「うん。でもそれで、困ることってなにかあるのかな？」

「うえ？ あ、どうなのその辺？」

なんだが、尋問されているような気分になってきた竹が石渡に尋ねる。

「あー、実生活では、今のところ特にないかもしれない。新しい生物って言っても、殆ど人間と変わらないから」

「じゃあ何も問題ないってことでしょ？」

宿禰がさっぱりとした表情で言ったので、竹はまあそうなのかもしれない、と思ってしまう。

しかし石渡は、

「いや、問題が一つだけあるかもしれない」とかぶりを振る。

「問題って何だよ？」納得しかけてたのになんだよ、という気分で竹が石渡に聞く。

「問題ってのは、荒川さんにさ、吸血衝動があるってこと。ていうかもう何人か吸っちゃったりしてない？俺の調査結果だと、人工擬似吸血鬼には例外なく、吸血衝動が芽生えるはずなんだけど」石渡の確信的な物言いに、竹は即座に口を切る。

「それはないな」

そう言った後、竹は反射的に返してしまった自分の不用意な発言に後悔した。

当然、そう言い切れる理由を石渡が問う。

「どうして？竹が一緒にいるのって、あくまで昼間でしょ？夜中とかわからないべよ？」

石渡だけでなく、宿禰からも疑問の視線が竹に注がれた。

竹は、暫く視線を宙に泳がせたあと、観念したように声を漏らす。
「……あーっとね。夜、内緒で荒川さんの家を監視してました。それで夜に荒川さんに動きがないことがわかってた」

「ああ、そういうこと——」

石渡がなるほど、と頷きかけると、宿禰がガタリと椅子から立ち上がり、

「えええーっ！？ちょっ、天倉君！！監視ってどういうことっ？！まさか部屋のなかとか見てたの！？」と悲鳴に近い大声で竹に問いただした。

宿禰に両肩をつかまれ、ぐらぐらと前後に揺らされながら、竹は努めて冷静な口調で弁解する。

「いや、監視っていつでも映像を見る類のものじゃないから。外出があったときに反応して、オレに連絡が来るようになってるだけのやつだから平気ですよ」

「……本当に？」

「本当です。さすがに部屋の中まで見ちゃったらまずいだろ。女の

子だし」

「……なら良いんだけど」宿禰は椅子に座りなおすと、安心したように息を付いた。

宿禰が座ると、今度は石渡が竹に聞いた。

「……なあ、それって本当なの？」

「あ？ 何が？」

「だから荒川さんが夜に出歩いてないってこと」

「嘘言ってどうすんだよ。本当だよ」疑うような聞き方が少し癪に障ったらしく、竹は声を尖らせて言った。

「じゃあ、血を吸ったりしてないの？ 竹に隠れてとか」

石渡が今度は宿禰に聞く。

「しっしてないですよ！」

「血を吸いたい気分になったりとかは？」

「ないですっ！！」宿禰は頬を膨らませて、はっきりと断言した。

二人の怒りの対象にされて、石渡は困ったように呻る。

「……うーん」

「何が気に入らないんだよ？」

「いや、気に入らないっていうか、ありえないっていうか……」

「まあ、吸血衝動がないっていうのは、なおの調べた結果と違うけど、実際ありえてるからな。どこでも例外は存在するものだら」

「……かなあ。まあ良いか。じゃあとりあえず、もう俺が言えることはねえわ。報告は以上」

石渡がそう言葉を締めると、竹が立ち上がる。

「わかった。さんきゅう、報酬はあとで振り込んどくから」

「おお、なるべく早めをお願いね。今貧乏だから」

「了解。じゃあ荒川さん行こうか」

竹が宿禰に立つように促し、宿禰も立ち上がった。

「あ、うん。それじゃあ石渡君また今度ね」

「じゃあお疲れ」

二人が螺旋階段へ足を向けると、石渡がそれぞれに声をかける。

「とりあえず、荒川さんはまだ定期的に来てもらえる？ 吸血衝動が何でないのか、とか気になるから」

「おっけーです」宿禰はぺこりと、頭を下げて螺旋階段を上り始める。

竹もその後を追うように、階段を上る。

「竹さ、『D &』って薬だけど。こんなものがただの薬学生に製造できるわけがねえよ」

「……わかってるよ。でもオレには関係ない話しだろ」竹はその話題を避けるように、早足で螺旋階段を上りながら言った。

「関係ありそうだから言ってるの。今は何もなくても、絶対これから何か出てくるよ。てか気付いてるんじゃないの？」

「……」竹は何も言わず、螺旋階段を上りきった。

階段を上りきって、ぼろい畳の部屋に出た後、竹はあることに気付いて、宿禰に聞いた。

「えっと、天井の扉、開けたの？」

隠し部屋の天井に蓋をしていた、鋼鉄製の扉の重さは半端ではないはずだ。

竹でさえ、少し重いなと思うくらい。

しかし、竹に質問に宿禰は呆気羅漢と、

「え？ うん。普通に開けたけど？」と答えた。

「ああ、そう。普通にですか」竹は狼狽した内心を表には出さずに小声で言った。

だが小声で言ったはずの、その声は宿禰に届いてしまったらしく、「普通にだけど？ どうかした？」と問われる。

「どうもしないよ」

竹は宿禰の身体能力の向上具合に、いたたまれない気分になった。そして、靴に履き替えてから、部屋を出る前に、もう一度確認するように聞いた。

「……荒川さんさ」

狭い玄関で真面目な顔を向ける竹に、宿禰は心音を早めながら、無

言で竹の次の言葉を待つ。

「荒川さん、本当に平気なの？ そんな一生そんな体になっちゃって」竹は硬く張り詰めた声で問いかける。

もう人に戻る望みがなくなった荒川宿禰に対して。

自分が原因でそうなってしまった、荒川宿禰に対して。

「私は――」

宿禰はその問いかけの意味を察すと、穏やかな表情でゆっくりと胸の内を語り始めた。

「私は本当に大丈夫だよ。もうこの身体は普通じゃないのかもしれないけど、でもそのお陰で、今の私は天倉君と一緒にいれるんだから。むしろ私は感謝してるくらい。これで私は、大神さんや山吹さんと、同じ場所に立つことが許されただってね」

本当に心から幸せそうな笑顔。

その本心から打ち明けられた言葉に竹は絶句し、

「……そんなことで」と言うのが精一杯だった。

しかし、宿禰はその竹の言葉に怒ったように返す。

「あーっ、それはひどいよっ！ 女の子にとって、それはとーっっても重要なことなんだからっ！！ もうっ！ 天倉君で、なーんにもわかってないよねっ！」

宿禰はぷりぷりと言った後、竹から顔をそむけて、玄関から外に出てしまった。

まさか宿禰がそんな行動を取るとは、夢にも思ってた竹である。

「え？ あー」

ボタンつと勢い良く閉められた、ベニヤの扉を視界に収めて、竹は困惑したように頭をかく。

そうすることで、驚愕にノックアウト寸前だった脳みそに再起動をかけると、まず携帯電話を取り出し、急いでメールを作成・送信した。

それから竹は「おじゃましました」とまだ地下にいる家主に向けて

言ってから、玄関から飛び出した。
まだそう遠くには行っていないはず。
とにかく荒川宿禰を追いかけよう。
そして、とにかく謝ろう。

竹はヘタレた感情に身を任せて走り出した。

＊

現在起こっている連続猟奇殺人事件と、『D&』との関係性を調べてください。

どうやらオレは、ひよっちまったみたいだ。

脇光太郎は、突然竹から送られてきたメールを見て、パソコンの画面に、飲んでいたダイエットコーラを吹き出した。

そして画面にかかったコーラを、丁寧にふき取ったあと一人ごちる。

「そんなの前からじゃん」

藍の章 04 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

前話は急に変更を加えたりと、混乱させてしまい申し訳ありません。まだ知らない方は前話の冒頭が変わっていたりするので、お手数ですがお読みください。

二度とこのような混乱は招かないようにしますので、どうかこれからもよろしく願います。

藍の章 05

2

携帯電話を片手に、竹は厳しい顔付きで、自室のパソコンの液晶画面を眺めていた。

さきほど送られてきた一通のメール。

それを開封してからずっと、竹は何かを考え込んでいる様子だった。「――ねえ、ちゃんと話し聞いている？」電話の相手が、あまり反応の良くない竹に聞く。

「聞いているよ。それでどうしたの？」竹は相手に聞こえない程度に小さく肩を落として、メールの本文から一度視線を切った。

「……聞いているのなら良いんだけど。それでね、お父様がこの国に新しく騎士を派遣するつもりらしいのよ。やっぱり私一人じゃ心配みたいね」アレクサンドラ・ワーナーは、憂鬱そうな声で言った。

「ふうん。今更って気もするけど、まあ別に良いんじゃないの？来るの何番目よ？」

「良くないわよ！ 全っ然、良くないわ！！」

「……なんでよ？」竹はこれ以上鼓膜に攻撃を受けないように、携帯と耳の距離を離して、聞いた。

「何でって、それは……」竹の質問に対して、アレクサンドラの声が徐々に小さくなっていった。

「なんでよ？」言いづらそうにするアレクサンドラに、竹は訝しげにもう一度同じ台詞で問う。

「……だから」

「だから？」

「あー、もうっ！ ちょっとは気付きなさいっ！！」

「は、はあ？ 何で急にオレ、キレられてんの？」

突如怒り出したアレクサンドラに、竹はわけがわからなかった。

「うっさいっての！ 自分で気付け！」

「いやいやいや、意味わかんねえから。だって、別に新しく騎士が来たところで問題ないだろ？ むしろお前一人だけで、この国の騎士団の仕事するのはいい加減きついだろ」

「そんなことはないわ！ 今、私一人だけだけど、以前と同じくらいの結果は残しているもの！」

「あー、そうなの？ じゃあ何で伯爵は、こっちに騎士寄こすって言うてんだよ？ 前と同じ結果出してるんなら、必要ないんじゃないの？」竹は怒り続けるアレクサンドラに、若干呆れたように言った。

「……うっ」アレクサンドラは言葉を詰まらせる。

竹はアレクサンドラの意図の読めない発言続きに、首を捻る。

何で彼女はそんなに怒っているのか。

騎士が来て何かまずいことがあるのだろうか。

ヴィンセント伯爵が何故、今になって騎士を派遣すると言い出したのだろうか。

「……あー、もしかして」

竹は考えた末に、あることに思い至る。

「あれか、伯爵は騎士団の王の娘が、前の六番目と同じ程度の働きしか、出来ていないことに不満なのか？」

「そっ……そう。そういうことよ！」アレクサンドラは、一度言いよんだものの、竹の発言に同意した。

「ああ、やっぱり」

確かにそういう理由で騎士を派遣された時、アレクサンドラの面目は丸つぶれだろう。プライドの高いアレクサンドラが、それを言いたくなかったのも頷ける。

「じゃあどうする気？ 伯爵に断るのか？ でもあの人のことだから、ちよっとしたことじゃあ方針を曲げないと思うけど」

「……わかってるわ」アレクサンドラが、深い溜息をついた。

竹は再びパソコンの液晶を見る。

アレクサンドラの業績向上を助けるなら、これを解決するのが良策だろう。

だが――、この解決はどうにも血生臭すぎる。

竹は一先ずこの考えを保留することにした。

「とりあえず、何か良い案が浮かんだら連絡するよ」

「……ええ、お願いするわ」

「おう。それじゃあ、今日はもう寝るわ」竹はまだ何か話したそうにしている、アレクサンドラにそう言った。

「え、うん。……おやすみなさい」アレクサンドラは一瞬名残惜しそうにしたが、何か思うところがあつたのか、思いのほか素直に引き下がった。

「はい、おやすみ」

竹は就寝の挨拶を告げて、王女との会話を切った。

＊

『連続猟奇殺人事件と、『D&』との関係性』

まず、連続猟奇殺人事件に関する追加情報として、12月4日に4件発生したので、合計20件の事件が起きている。

現在起こっている、連続猟奇殺人事件の犯人は、今のところ12名（うち死亡1名）。

いずれも『D&』の常習服用者であった。

『D&』が人体に及ぼす影響等は、既に知っているとあるので省略。

犯人の氏名、年齢、及び職業は以下の通り。

青山衛（17歳・高校生）。

上田千紗（20歳・専門学生）。

木嶋のぶゆき（21歳・公務員）。

国分寺博士（19歳・漁師）。

澤郁美（16歳・無職）。

下嶋圭吾（23歳・会社員）。
曾我宗助（22歳・DJ）。
常盤敦子（21歳・看護士）。
二本木大二郎（20歳・大工）。
三橋拓也（18歳・大学生）。
森えりな（16歳・高校生）。
横田大河（21歳・大学生）。

現在、彼らの全てが行方をくらませているか、死亡している。

死亡しているのは、横田大河。

彼は『D&』のバイヤーであったが、10月の終わりに、秋野紅葉のよって殺害されている。

9月、10月の事件は全て、横田大河によるものであり、他の人物が『D&』の過剰摂取よって、新種の吸血動物に変異したのは12月以降である。

11月の空白は、犯人不在だった為の必然と言ってよい。

『D&』の流通元であった横田大河が死亡し、天倉竹によって彼が所持していた『D&』は処分された為、『D&』の流通自体は11月以降ストップしており、それ以前に流通していた量から計算すると、これ以上の変異者は現れないだろう、というのが甲斐輝明の予測である。

しかし、変異はせずとも変異予備者は数百名に上る。

生存中の変異者を繋ぐ線は、『D&』の服用者という事項以外なく、面識もない。

つまり、彼らは完全に個人の意思で、連続猟奇殺人という同一の犯行を重ね始めている模様。

これは、変異者の吸血衝動によるものだと思われる。

また、荒川宿禰個人と今まで発生した、これらの事件との関係性は見受けられないが、変異者となった荒川宿禰が、今後も事件に関わらないとは言い切れない。

＊

竹は憂鬱な顔で、がりがりと頭をかいた。

『連続猟奇殺人事件』。

昼間の石渡との会話で、この事件と『D&』の関連には気付いていたが、どうしたものか。

もしこの事件を解決するなら手は一つ。

変異者の殲滅。

これ以外にない。

ただこの解決方法は、気が進まない。

別にこのリストに載っていた人物を、殺したくないとかそういう理由ではない。

知らない奴のことなどどうでも良い。

しかし、知っている奴のことをどうでも良くは思えない。

問題は、変異者の中に荒川宿禰が入っているということだ。

もし変異者の殲滅という解決方法を取るのなら、そこに例外は許されない。

たとえまだ事件を起こしていなくても、可能性があるのなら芽が出る前に、それを摘み取る必要がある。

「……どうしたもんかねえ」竹はジレンマに動けない自分を皮肉るように呟いた。

以前の自分なら、構わずに殲滅の一手を打っていただろう。

だが、今の自分はそれが出来ない。

荒川宿禰の事をどうでも良く思えない。

昼間の宿禰との時間を思い出しながら、竹は苦笑いする。

「……本当に、びよびよにひよってるな」

昔みたいに簡単に、切り捨てられないものが増えてきた。

仲間だけいれば何もいらな、と思えなくなってきた。

大切なものが増える分だけ動きづらくなる。

それが幸福なことであると理解する反面、それを受け止め続ける

のが大変になっていく。

竹は、ぐるぐると同じ思考が回るだけで、結論の出そうにない不出来な頭に、燃料を供給してやろうとタバコをくわえる。

そしてタバコに火を点けようとした時、一番簡単で、一番最悪な出来事が起こった。

荒川宿禰の自宅を見張らせていた、監視用の鳥型人形。

人の出入りを報告するだけの、その人形からの報告が入った。

それは、誰かがこの時間に外出したということ。

そして、それは恐らく荒川宿禰が夜の街に繰り出したということ。竹に連絡も入れずに。

つまり、荒川宿禰はそんな事をする余裕もなく、出掛けたということだろう。

多分、人の血を吸う為に。

藍の章 05 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

色々やることがあったので、かなり間が空きました。
まだ暫くこんな感じになると思われます。

藍の章 06

＊

「——ええ、お父様。わかっています。ですが騎士の派遣の件はお断りします」アレクサンドラは携帯片手にシルクのネグリジェ姿で、ふかふかのソファに座っていた。

「それは出来ぬな」

携帯からクリアに聞こえるヴィンセント・ワーナーの声は、変わらず重厚な王のものだった。

「どうしてでしょうか？ 自分で言うのもなんですが、私は結果を出しているはずですよ」

「うむ。それはわかっている。お前はその国で、たった一人で良くやっていると思う」

数秒前の『騎士団』の王たる威厳はどこへやら、ヴィンセントは父親の声で言った。

「でしたら、騎士は必要ではないと思います」

「サンドラ。我が前に話したことを忘れたのか？」

ヴィンセントは溜息混じりの声に、アレクサンドラは毅然とした声で返す。

「覚えています。ですがあんな理由では私は納得できません。私のお目付け役も兼ねて騎士を送るなんて……私がお目付け役を送られるようなことを、何かしたでしょうか？」

「してはおらんのだが……。しかし、お前はまだ若い。何か間違いがあったら大変であろう」

「間違い、とはなんでしょうか？」

「いや……」ヴィンセントは一瞬言いよどんだ後、「例えばだ、我はまだ孫の顔を見る気はない」と口ごもりながら言った。

「孫？ …………… なっ、お父様！ 何を仰っているんですか？！」

そのような冗談は止めてください!!」アレクサンドラはソファから立ち上がって、父親を怒鳴りつけた。その頬は際限なく紅潮していく。

ヴィンセントは、娘に怒鳴られて難しそうに呻った後、「冗談ではないのだサンドラ。しかし、その様子だとアマクラとはまだ何もないのだな?」とどこか安心したように言った。

「あっ当たり前ですっ! 私とアマクラの間には、そのようなことはありません! 全くお父様は、いつからそのような下卑た勘繰りをされるようになったのですか!」

「うっ、いや落ち着けサンドラ。我もな、このようなこと、言いたくて言っているわけではないのだ」ヴィンセントは狼狽したように言った。

「だったら、どのようなわけで言っているのですか?!」

「騎士たちからな、そういう声があがっているのだ」

「誰ですか?」

「それは言えんが、まあほぼ全てといっても良いだろう。元々、アマクラとのことも、お前が一人でその国に残ることに、皆良い顔はしておらんかったからな。我慢の限界というやつだろう」

「そんな……随分と信用されていないようですね、私は」

「そう言うな。あやつらもあやつらなりに、お前の事が心配で言っているのだ」

「……それはわかりますが。だからといって騎士の派遣には頷けません。そういう理由でしたらなおさらです」アレクサンドラは、不機嫌そうに言った。

「……むう。しかしだな、騎士の派遣は既に決定していることだ」

「お断りします」

「決まったことだ」

「なら変えてください」

「出来ん。王の命が聞けぬのか?」ヴィンセントは威厳のある声で言う。

王の命と言われては、頷くしかなかったアレクサンドラだったが、最後の足掻きとばかりに言う。

「……わかりました。ですが一つ条件があります」

「言ってみろ」

「1ヶ月、騎士の派遣は待ってください」

「それでどうする？ ただの時間稼ぎであれば頷けんぞ？」

「1ヶ月で、今までの倍の結果を出してみせます。そうすれば、お目付け役などと言っている者たちの声も抑えることが出来るでしょう？」

「まあ、確かに。しかし倍だと？ 今、出している結果でさえギリギリだと思っていたが、そんなこと出来るのか？ しかもお前は一人ではないか」

「いいえ、一人ではありません。我が夫となる人に協力していただくつもりです。ですから倍の結果など朝飯前ですわ」アレクサンドラは自身満々な風に言った。

「……アマクラがそのようなことに協力するとは思えんが、良いだろう。出来るものならやってみろ、我が娘よ」ヴィンセントは、苦笑をまじえた声で娘にそう言うのと、通話をきった。

アレクサンドラは通話の切れた携帯を、眺めて溜息をつく。

「……私もアマクラが協力してくれるなどと、思っていないせんわ。お父様」

そう切なげに呟いたあと、携帯をテーブルに置き、寝室へと向かうとしたとき、携帯電話が音楽を奏でた。

その音楽は、ある特定の一人からの電話がかかってきたときだけ流れるものだ。

何というグッドタイミング。

アレクサンドラは、寝室に向かっていた足を携帯の方へと向けて、テーブルから携帯電話を持ち上げる。

その際、慌てすぎて、テーブルの足に小指をぶつけた。

「ったー！ー！！」アレクサンドラは、なんともいえない痛みに涙

目になりつつも、通話ボタンを押す。

「もしもし、今平気？」

「え、ええ平気よ」

「？　なんか声が変わだぞ」天倉竹はアレクサンドラの涙声に、怪訝そうに聞いた。

「気にしないで。ちょっとしたハプニングがあっただけだから」アレクサンドラは澄ました声を無理やり作って返した。

テーブルに小指をぶつけた、などと恰好悪いことは言えない。

「そうか？　まあ良いや。それでさ、ちょっと話しがあるんだけど」「何かしら？」アレクサンドラは、ぶつけた小指をさすりながら聞く。

「最近、オレの住んでいるあたりで、連続猟奇殺人って事件が起こってるのは知ってる？」

「知っているけれど？」

「じゃあその犯人は？」

「知らないわ」

「そうか。じゃあさ、吸血鬼っていうのは知ってる？」

「ええ、あなたとお父様たちで滅ぼした化け物でしょう？　かなり手強い相手だったみたいね」

「ああ、結構厄介な連中だった。オレ達4人とヴィンセント、更に『騎士団』の1、2、3、4、8番が集まって、手こずったくらいだったからな」

「ねえ、タケ君。あなた何が――」言いたいのに、そう言い掛けて、アレクサンドラは声を止めた。

さっき電話したばかりなのに、何故竹がわざわざ電話をかけてきたのか。

先ほど竹は、騎士の派遣を嫌がるアレクサンドラに『何か良い案が浮かんだら連絡する』といていた。

電話をかけてきた、ということは良い案が浮かんだのだろう。そして、唐突に聞いてきた連続猟奇殺人事件と吸血鬼の話題。

アレクサンドラは、全てを総合して考えた結果、王の娘として威厳に満ちた声で携帯越しの相手に語りかける。

「『騎士団』の王女、アレクサンドラ・ワーナーの名の下に、解決士に依頼したいことがあります」

「何？」竹は全てをわかつている声で聞く。

アレクサンドラは、国の秩序を守る騎士王の娘。

その王女が、天倉竹などという人外から、逆に依頼を持ちかけられては面子が保てない。

だからこそ、竹はアレクサンドラから依頼をするように差し向けたのだ。

アレクサンドラは、竹の気遣いに感謝しつつ解決しに依頼内容を話す。

「この国の秩序の為に、連続猟奇殺人事件の犯人を捕えてください。場合によっては、犯人の殺害も許可します」

「OK。その依頼、確かに引き受けた」

「お願いします。報酬は――」

「報酬は、この国への騎士の派遣中止。それとこの件の処理を、全てこちらに任せてもらうこと。それで良い」

アレクサンドラは想像もしていなかった、要求してきた報酬の内容を聞いて、驚きと若干の戸惑いを合わせて聞く。

「そんなことで良いの？」

「良いの」竹はしっかりと口調で言った。

竹が良いというのなら何も問題ないので、アレクサンドラは最後に一つだけ確認をする。

「そう。ではこちらから一つだけ確認です」

「何かな？」

「その報酬に見合うだけの利益が、私にもたらされるのかしら？」
なんとも卑しい言葉だな、と思いながらもアレクサンドラはその感情を割り切って言った。

「ああ、少なくともヴィンセントの意見を変えるだけのカードには

なるはずだ」竹は自信に満ちた声で答える。

「よかった。じゃあそれでよろしく頼むわ」

「了解。それじゃあ今度こそおやすみ」

「ええ、おやすみなさい。今度こそ」

電話を切った後、アレクサンドラは、自分の幸運ぶりに小さくガツポーズを取った。

「ふふ、まさかこっちから頼まなくても、タケ君が協力してくれるなんて。もしかして、私って愛されているのかしら？」

アレクサンドラは、幸福そうに微笑みながら寝室へと足を向けた。

それが彼女の為でなく、別の彼女の為であることを彼女は知らない。

＊

アレクサンドラとの電話を終えてから、竹は一息つくと寝巻きから、外出用の服に着替える。

狩りの開始。

今宵は新月。

月が再び現れる頃には、終わらせよう。

竹は一人で夜の外を駆け始めた。

藍の章 06 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

本当にゆっくりの更新ですみません。

例によって何かミスがございましたら、ご指摘ください。

藍の章 07

3

12月14日。

松田が学校から帰ってくると、誰もいないはずのリビングの隅っ
こで、竹が転がって寝息を立てていた。

渡してある合鍵で入ったのだろう。

特に珍しいことでもなかったので、松田は竹から視線を切って、鞆
を床に置き制服から部屋着に着替え始める。

松田の着替えが終わったところで、竹が寝返りを打った。

完璧に無警戒の状態で寝続ける竹に、やや呆れながらも松田は空
気清浄機のスイッチをオンにして、帰宅始めの一服を開始する。

タバコの甘い煙が少しだけ空気を刺激しはじめると、今まで起きる
気配のなかった竹が薄っすらと目を開けた。

「いつ来てたん？」

松田は部屋の真ん中にある背の低いテーブルの前に直に座ると、
美味そうにタバコの煙を吐き出しながら聞いた。

それに対して竹は、再び目を閉じてから、もごもごとした口調で、

「……今何時？」と聞いた。

「2時だよ」松田は、自分の質問に答えなかった竹意識の大半が、
まだ睡眠状態だということを考慮して、完結に答える。

「夜の？ 昼の？」

寝ぼけた声で、再び聞く竹に松田は律儀に応対する。

「昼の。まだ明るいでしょ」

「……そうか」

竹は小さく頷いた後、数秒間全く動かなかった——と思ったら突然、
バネ仕掛けの人形のように勢い良く上半身を起こした。

停止していた数秒間は、睡眠と起床の葛藤に揺れていたのだろう。

上半身を完全に起こした竹は、

「じゃあ1時間くらい前かな」と松田の一番初めの質問に、目をぱつちりと開いて答えた。

「さつきか」松田はタバコの灰を灰皿に落としながら頷いた。

「さつきです。あ、タバコ一本頂戴」

「うい。寝ぼけて絨毯に落とさないでよ」松田はそう言って、タバコの箱とライターを竹に投げた。

「大丈夫です」竹は頭をガリガリ掻いたあと、タバコを一本口にくわえた。

「そう言ってこの前、落としたんだから気をつけてよー」

「あいよ」竹はライターで火を点け、テーブルまで這って移動し、箱とライターをテーブルに置いた。

それを自分の近くに寄せながら、松田がなんとなしに問う。

「学校さぼり系？」

「いえす」

「てか、ずっと来てなくねえ？」

「うん。まあもうすぐ冬休みに入るから良いだろ」

良いか悪いかで言ったら確実に悪いのだろうが、そんなことを気にする松田ではない。

「ふうん」松田は気のない風に頷いてから、「てかそんなに大変なの？」と聞いた。

「何が？」竹が漸く頭が回ってきたという風に紫煙を吐き出す。

「仕事。吸血鬼退治やってんでしょ？」

「大変ちゃ大変だな」

「何体いったの？」

松田がちびたタバコを灰皿にこすり付け、何体の吸血鬼を殺したのかと聞く。

投棄されたタバコの火は、まだ完全に消えておらず、その先端からゆらゆらと4メートルある高い天井に向かって、煙を吐き出し続いていた。

「今のところ6体かな」

少し神経質な竹はそれが気になったようで、自分のタバコを口に銜えて煙たそうにしながら、そう答えて、灰皿のタバコの火を完全に消す。

「いつからだったつけ？」

「6日からかな」

「それにしたら遅くない？」

松田はそう言うとは一度立ち上がって、冷蔵庫から2リットルのミネラルウォーターのペットボトルを取り出して、それをラッパ飲みしながら再び絨毯の上に座った。

「そうかね？」

「そうだよ。もう、えーっと1、2……9日も経ってるし。まあ良いけど。それでその中に、荒川さんは？」

5日の深夜、日付的には6日から荒川宿禰は失踪している。

松田が竹に貸した監視用の人形を破壊して。

何故、失踪したのかわからない。

しかし、予想は出来ている。

荒川宿禰は既に吸血鬼になっていたのだから。

「……まだいねえよ。ていうか、あの子が見つかる気配が完全にな
い」

竹は自嘲気味に言った。

今なお被害者を増やしていく、連続猟奇殺人事件の犯人。

『D&』と呼ばれるドラッグによって、新種の吸血鬼となった連中の捕縛。

その開始当時から、竹は宿禰を優先して探しているのだが、彼女が見つかる気配は今のところ一切なかった。

「どうして？」

「知るか。わかったら苦労しないだろ」竹は最後の一吸いをした後に、短くなったタバコを灰皿に押し付ける。

「あれ？ コーチンには何も聞いてないの？」

「聞いてない」

「なんで？」

「いや、何か毎度毎度だと悪いじゃん」

向こうは気にしていないかもしれないが、わからないことがある度に、その都度、脇に調べてもらうのも気が引ける。

ただでさえ、この件については事前に色々調べてもらっているのだ。あとは自分でやったほうが良いだろう、と考えて竹は独自に調べて完全に単独で行動していた。

だからこそ、松田に遅いと言われるほどに時間がかかっており、未だに宿禰を見つけることが出来ていないのだった。

「ふうん。じゃあ手伝う？」松田は、最近暇だし、荒川さんは知り合いだし、と付け加えて言った。

しかし竹は、

「いや、ありがたいけど遠慮しとく」と言っただけでそれを丁重に断った。

「どうして？」

「なんとなく」

「なんとなくかよ」

「なんとなくだよ」

松田はそれ以上何も言わずに、新しいタバコに火をつけた。

竹はもう一本松田からタバコを貰おうか、悩んでいるうちに再びまどろみに落ちていく。

「TK? ……寝ちゃったよ。まあいっか。それよりも今度のイベント用に曲作ろ」

松田は寝てしまった竹を放っておくことにし、自分がMCとして出演するイベントの曲作りに勤しむことにした。

地鳴りにも似た、hip hopミュージックの爆音が部屋を揺らす。

5分もして、竹が不機嫌そうに起きたのは言うまでもない。

宿禰を含めて、12人いた吸血鬼も今現在、生存しているのは6人。

竹は、あえて時間をかけているかのように見える。

脇に聞けば宿禰がどこにいるかなど、すぐに調べがつくことなのに。松田に手を借りれば、手間が省けたのに。

それは、観たくないものを遠ざけているかのように思えた。遠ざけようとも、

どう回り道をしようとも、そのうち竹は宿禰までたどり着く。

これは決定的な事実。

吸血鬼如きが、どう足掻いたところで最終的に『神の複製品』から逃れる術はない。

藍の章 07 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。
予定通りには中々いかないものです。

藍の章 08

＊

本来、生物が寝静まるはずの夜。

不眠症にかかった街はそれらを凌駕した、人々の自尊と傲慢を象徴するかのように、人工的な輝きと喧騒を放っている。

だが、その明々とした騒がしさも一歩道を外せば、仄暗い、澱んだ空気にも包まれる路地へと繋がっている。

暗黒にか細い息遣いが木霊する。

それは何かを畏れるように。

それは何か悦に浸るように。

そこは、優しい灯りを拒絶した者たちの吹き溜まり。

お手軽に自身の精神を高揚させてくれる、お薬に熱中していた5人の青年たちの輪の中に、ふらふらと頼りない足取りの少女が迷い込む。

ところどころが破れ、汚れたどこかの高校の制服姿の女子高生。

自分たちよりも、圧倒的に弱い獲物を発見した青年たちが、嬉しそうに少女を取り囲む。

ただ快楽を求めるように。

薬物による精神改革で、青年たちのストッパーは既に外れている。

「……どいて……ください」

吐く息は白く、額には珠のような汗が浮かぶ。

何かを堪える苦しさに苛まれながら、絶え絶えと紡がれた言葉。しかし、青年たちは元よりそんな言葉を聞くつもりはない。

餌の命乞いを、わざわざ聞いてやるような馬鹿ではない。

理性を失っていても、彼らは地上でもっとも賢い生物なのだ。

「そこを……どいて……」

少女の拒絶の一言は、少年たちをさらに欲情させる。

既に青年たちの我慢は臨界点に達していた。

「……お願い、だから」

俯き、右手で胸を押さえる仕草をしながらの懇願。

その声は、おそらく青年たちの短い生涯の中で、最も蟲惑的で淫靡なものだったであろう。

青年たちはその誘惑に、どう楽しもうか考えていた思考を止めて、ただ単純にこの夜を愉しもうと自らの欲望を爆発させ、少女に飛び掛った。

もし、ここにいたのがただの獣だったら、真っ先に逃げていただろう。

夜をも越える知性を持ってしまったことで、本能を鈍らしてしまった生き物であること。

それが彼らの人生を終わらせることになる。

「……助けて……天倉君」

宿禰は小さく呟き、何か諦めるようにくたり、とアスファルトの上へへたり込んだ。

「——今の今まで、逆らっている奴がいたと思ったが、奴の関係者だったのか。ここまで親の親である俺の命令に逆らう強靱な精神も、その数奇な運命も面白れえ。お前は何か使えそうだ。とりあえず、そこを動くな」

いつの間に現れたのか、そんな愉快そうな声を乗せて、目前に迫った陵辱者たちと宿禰を遮るように、藍色の少年が立ち上がった。それは、宿禰の望んだ少年ではなかった。

そしてその少年は、間違いなく今の宿禰にとって最悪の人物である。

宿禰はその事実を本能で理解した。

——駄目だ。

この人の近くにいては駄目だ。

早く、逃げないと。

幸いにも、少年は宿禰の前に立ったため、青年たちの怒りを買っ

ている。

彼らを囚にして一刻も早くこの場から離れよう。

「――!?」

足が動かなかった。

いや、足だけではない。

全身のどの部分も微動だにしなかった。

「動くなど言った。子が親の親に逆らえるはずないだろ」

藍色の外套纏った少年は、後ろに座り込む宿禰を見ずに言った。

次いで破裂音に近い斬切音が、凍えるような冬夜の路地裏に響き渡る。

直後、先頭の青年の首から上が消え失せ、残った体がへなへなと崩れ落ちた。

壮絶、凄惨を通り越して、小気味良いとさえいえるその光景を目の前に、

「ノーマルの人間相手ならこんなものか」

と少年は感情の籠もっていない声で言った。

宿禰はその両手に異様な冷気を纏う少年よりも、首から上が無くなった死体を眺め喉を鳴らす。

どくどくと噴水のように噴出す、赤い血液。

「――あ」

あれを見てはいけない。

あれは私を壊すものだ。

今まで耐えてきたのに。

今まで堪えてきたのに。

「いいから飲めよ。喉が渴いてるんだろ？」

突然起こった惨状に、青年たちが恐怖で喚き出す。
うるさい。

頬に跳んできた一滴の血飛沫を指で撫でる。

目の前が霞む。

5体の人が背を向ける。

逃げるのか。

……の癖に。

「ああ、そうだ。あれは、全部お前の餌だ」

藍色の少年はその口元に笑みを浮かべ、宿禰が何を考えているのかわかった風に言って振り向いた。

宿禰は薄い赤色で湿った指を舐める。

瞬間、これまで感じたことのない快樂が骨の髄まで駆け巡った。

「――あはは」

湧き上がってくる至上といってもいい快樂と愉悅。

先ほどもまでの胸を締め付けるような苦しさや脅えは一切ない。

体は湯水の如く湧き出ていた、欲望の支配に身を委ねている。

今までこれに抗ってこれたのは、人間としては破格の宿禰の精神力である。

しかし、今やその心も折れ畜生道へと堕ちた。

だが、心も身体も軽やかで、最上の歡喜に包まれている。

宿禰は慄然となった。

これが今の私の真実か。ほんとう

全身に活力が漲る。

泥の棺桶のようだった世界が輝いてみえる。

なんとという甘美な夜。

凍てつく冬の風の音は神々の音楽のように吹き渡り、闇の香りは優しく甘く、月と星々の瞬きは、震えるほどに美しい。

10メートル先には、背を向け、逃げ惑う5人の青年の姿が見える。

なんて愚かな奴ら。

私から逃げられるわけないのに。

すくつと立ち上がった宿禰の微笑は、清々しさに満ちていた。

「餌は餌らしくしてなきや」

たん、と軽やかに地を蹴り、藍色の少年の頭上を超え、二蹴り目で青年たちの頭上を越えた。

宿禰は路地から出る間際だった青年たちの目の前に立つと、一番手近だった青年の頭を両手で掴み首を捻り切る。

流れるような手際の良さに、青年たちがそれを理解する前に、二人目の青年の胸に右手を突き刺す。

胸を通り抜けたその腕は奇怪なオブジェにみえる。

漸く、理解が追いついた三人の青年が悲鳴を上げて、進路を変える。

宿禰はビクビクと痙攣する獲物の胸から腕を抜くと、その指と爪で背を向けたうちの一人の背中を切り裂く。

背中から肺まで、深々と五本線に抉られた青年が血の泡を吐きながら倒れる。

残り二人となった青年は、それを後ろ目で察すると立ち止まった。進路を変えたところで、その先は行き止まり。

更に藍色の外套の少年が立ちはだかっている。

行き止まりに男。

抜けられる方に女。

怯え、混乱したその頭でも、どちらに向かうのが得策か考え付いていた。

しかし、二人のうち一人はガタガタ震え、尿を漏らして、その場に立ち竦むことしか出来ないようだった。

それは賢しい生物ゆえの諦めだったのだろう。

もう自分が助からないと、彼は悟っていた。

だがもう一人の青年は彼とは逆に、雄叫びを上げ、拳を振り上げながら、宿禰に向かって走り出した。

それは、ある種の行動爆発に近かった。

例え賢しい生物であろうと、人も生物のうちであるということだろう。

宿禰に駆け寄った青年はその勢いのまま、拳を振り下ろした。

それは宿禰のテンブルを直撃し、ゴン、と鈍い音を放つ。

普通の少女であれば、昏倒させることも出来たであろう一撃だった。

しかし、宿禰は加えられた打撃を一切意に介さず、青年の喉を&#25681;み、片手の指を左肩に食い込ませた。指はスポンジ並みのスムーズさで沈んだ。

——いけない。

と精神のどこかが叫んでいた。

「——っ！」

宿禰は、何かを忌避するその衝動に駆られて、青年の身体を突き飛ばした。

青年は数メートル宙を飛び、衣類と体の肉をたつぷりとアスファルトの地面に剥ぎ取られて、路地裏の行き止まりに叩きつけられる。ぐちゃぐちゃして、よくわからない形になった青年。

それを眼におさめて、宿禰の中にあつた最後の何かが弾け跳んだ。もう遅い。

もう戻れない。

濃艶に充満する血の臭いに、口元はどうしようもなく緩む。

——もうこれで良い。

さあ、あと一人。

棒立ちになって、惨劇を見守っていた最後の一人となった青年は、宿禰の注意が自分に向けられたのを知って、我に返った。

「ちっ近寄るなー！」

ゆっくりと近寄る宿禰に、青年はみっともなく叫んだ。

誰か助けが来てくれることが最後の望みとでもいうように。

だがここに助けなど来はしない。

ここは、優しい灯りを拒絶した者たちの吹き溜まり。

日が落ちた夜に、光が射す事はない。

喉を潰す勢いで、叫び続ける青年の声が耳に障る。

断末魔とはここまで聞き苦しいものなのか。

宿禰は眉根を寄せ、まず餌が喚くのを止める為に、脆い首をへし折ってから、その牙をゆっくりと獲物の首筋に突き立てた。

降りしきる血潮の中、どこを裂いても血が出ることが堪らなく愉快だった。

藍の章 08 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。
相変わらず遅い更新ですみません。中々にやることが多いです。

藍の章 09

＊

人の世とは隔絶された儂くも確かな世界。

広大とも狭小ともいえる空間に、洋風の館と和風の屋敷が建っている。

その建築物は両方が両方とも豪壮というには余りにも可憐で、神々しいというにはひどく魔的だ。

「――どうやら堕ちてしまったみたいですよ？」黒須螢はくろすほたるそう言つて、柔らかな微笑をつくつた。

「ええ、そうですね」

「この場合は――残念、と言うのが正しいと思いますか？」

「さあ？ 私からはなんとも」いえません、と天野輝血はあまのかがちかぶりを振る。

それに合わせたように庭園に設置された添水そうずの明鏡な音が、障子と襖で囲まれた幽玄な雰囲気を持つ和室に響いた。

死に装束のように純白の着流しを着たカガチと、鴉のように漆黒の着流しを着た黒須は、その静謐な音に耳を傾ける。

青々とした畳。

艶のあるこげ茶色の机を挟んで、雲のような座布団の上に座る黒と白。

無論、ここに存在する全ての調度、物質が何らかの神的なものであるのだが、その極端なほどの対比はこの場にある何よりも異彩を放っていた。

「……まあ確かに。僕たちに彼女が考えていることなんて、わかりませんからね」

「そういうことです」

カガチは黒須の発言に淡々と頷き、今まで季節感に統一性のない

庭園をみていた視線を、ここでようやく黒須へと向けた。

深淵の闇よりも暗い漆黒の男に焦点が合う。

黒須は何かを待ってるように、ニコニコしている。

ふう、とわざとらしく溜息をついてからカガチは口を開く。

「――では、貴方はどう思っているんですか？ イレギュラーが堕ちたことを」

「特に、と格好つけたいところですが、正直少し残念ですね」

「何故です？」

「単純に、せっかくのイレギュラーの意味がなくなってしまったからですよ。これでは今回は何も波乱はないでしょう。この度、破綻はなし、ですよ」黒須は引き笑いをして肩をすくめる。

「……確かにそうかもしれませんね。ですがこれで一つの事象が証明されたのでは？ 物語に登場するはずなかった人間が、ただ登場しただけでなく中心になった。しかし、それは一つの物語の中でのみ。次には持ち越せない」

「おや。あなたにしては、断定するのが早いですね」

「私は貴方が言いたかったことを代弁しただけですよ、と格好つけたいところですが、流れを見るにそうとしか考えられませんからね。そうでしょう？」

カガチは薄く笑い、黒須が頷いた。

「はい。全くの同意見です。しかし、それが正解なのかは僕たちにはわかりません」

「そうですね。私たちには彼女が考えていることはわからない」

「……振り出しに戻りましたね」

「私たちではこの程度でしょう。彼女の物語の中で動かされるだけの私たちでは」

「その通り。では誰ならその先の答えが出せると思いますか？」

黒須が邪惡な笑みでカガチを見た。

カガチはその笑みに清廉な微笑みで返す。

「その質問に答える前に、貴方の意見を聞きたいですね」

「ははは、疑問文に疑問文で答えますか」

「この世界の円環は閉じず。それを知る私たちには、相応しい答えだと思いませんか？」

「——これは一本取られました。しかし、円環と言う言葉は、貴女にこそ相応しいと思います」

限りない再生と訪れない死。

それが天野輝血という怪物の特性。

確かに、黒須の言う通り円環という言葉はカガチに相応しい言葉だろう。

しかし、カガチは首を横に振る。

「私はそれに近いだけで、円環には程遠い。明確に死の形が存在しているのですから。貴方もそれを知っているでしょう」

王女の聖槍。

それが死なない怪物にもたらされる、確実な死だと決められている。

『唯一の一』オリジナルワンによって。

「これは失礼しました。気を悪くしたのなら謝ります」黒須は頭を下げた。

「いえ、別に——」

気にしていませんよ。

そうカガチが続けようとした声は、一瞬で彼女の喉の奥へ引っ込んだ。

「あなたたちつまらないことしているわね」

気だるい言葉。

しかし、そのなんでもない声に最強と怪物が魂の底から震えた。

カガチの声が引っ込んだのも仕方ない。

襖をゆっくりとした動作で開けながら、二人のいる和室へと入ってきたのは、命あるものであれば——いや、世界に属するものの全てが平伏す存在なのだから。

『唯一の一』オリジナルワン。

世界の始まりにして、物語の筆記者。

この世界を創りあげた、全能の存在である。

「随分と暇そうですね。まあやることがないのだから仕方ないのかしら」
そう言って、少女の姿をした全能者は四角い机の上座。白い女に差し出された座布団の上に座った。

彼女の光り輝く虹色の髪の毛は、立っていても地面スレスレまでの長さがあるので、穢れ一つない畳に扇状に広がる。

少女は燃えるような黄金の瞳で黒須とカガチを交互に見る。

それだけで二人は緊張とも緊迫とも違う、独特の精神状態に陥る。ただ圧倒され、圧迫され、しかしそれが心地良い。

「楽にして良いわ、といっても意味がないわね。堕ちたイレギュラーと同じに」

先ほどまでこの場におらず、二人の会話を聞いているはずのなかったはずの少女は、クスクス笑いながら続ける。

「良いわ。あなたたちに、暫くやることがないのは私の責任でもあるし、やることがないのは私も同じだし、退屈しのぎに付き合ってあげるわ」

少女の言葉に、カガチと黒須は無言で頭を下げた。

「ああ、でもその前に、何もないのは味気ないからお茶を用意してくれる？　意味はないけど、雰囲気作りは重要な一つだと思うわ」

少女に言われて、カガチが一礼して席を立った。

カガチが席を外すと、少女が黒須に言う。

「蛭。調子はどうかしら？」

「……いたって順調です」

「どこまでやれそう？」

「………歴史通りに」

「それで良いわ」

「……………」

黒須は声を出さず小さく頷いた。

短い言葉の応酬だったが、黒須の背中では大量の汗に濡れていた。どんな時でも余裕を感じさせる男にしては、珍しいというかあり

えない状態である。

それは何故か。

暫くするとカガチがお茶を3つ、お盆に乗せて戻ってきて、それぞれの前に置いた。

そして、カガチが自分の席に腰を下ろしたところで、少女が再び口を開いた。

「輝血。調子はどうかしら？」

瞬間。

ぱしゃり、と小気味良い音がして、カガチの左腕が指先から肘の辺りまで潰れた。

銃弾をいくら受けようと、表情ひとつ変えなかった女の顔が苦痛に歪み、額に脂汗が噴出す。

少女はそれに構わずに言葉を続ける。

「どこまでやれそう？」

今度は残っていた肘から肩口までが潰れた。

「それで良いわ」

三言目には右腕が一気に肩口まで綺麗になくなった。

しかし、どんな不思議か隻眼の女の死に装束は血に濡れていない。ただ両腕が潰れている事実だけはある。

そして、その両腕は潰れた先から高速で再生し始めている。

その様子を見て、少女が冷たい、色のない声で言う。

「暇潰しにやってみただけど、即興じゃこの程度かしら。魔法使いと蛇も殺せないなんて、全く情けない神様だと思わない？」

黒須が背に大量の汗をかき、カガチの両腕を潰し、顔を苦痛に歪めたのは、この少女が二人に同じ攻撃を加えたからである。

だが、少女が何かをした素振りはなかった。

いや、何かしたというなら、確かに彼女は何かした。

三回、言葉を投げかけた。

調子を問い。

実力を問い。

労った。

少女はその三つの言葉に、人体を飴玉程度まで瞬圧させる術を乗せたのだ。

それも即興で。

なんとなく、暇潰し程度に。

無意味に振るわれた理不尽で圧倒的な暴力。

全能と呼ぶに相応しい、馬鹿げた力だった。

この場合、その攻撃から生還した二人を褒めるべきだろう。

破格の魔力とその魔力を完璧に扱う術を有していたからこそ、再生する身体とその肉体を完全に支配出来ていたからこそ、

二人は生き永らえたのである。

「――さて、戯れは終わりにして、退屈なお話をしましょうか？」
少女は極上の微笑みを浮かべて、お茶を一口すすった。

藍の章 09 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

今話のもっとさらっと流すつもりが、半端に長くなりそうな気配だったので分割させることにしました。

後編は次々話あたりの予定です。

一日が40時間くらい欲しいです。

藍の章 10

＊

夜が明ける前、これまでで一番わかりやすい食事場所に到着した。これだけ派手にやらかされているにも拘らず、まだ誰にも見付かっていないらしい。

これ幸いに、とその路地裏に足を踏み入れた。

アーティスティックにべつとりと、壁に地面に張り付いた大量の血痕。

ゴミのように散らかった肉片。

一、二……破片から何人分なのか数える。

——五人。

バラけてはいるものの、足りない部品はないようだ。

それにしても、一気に五人。

今までになかったペースだ。

いや、注目するのはそこでない。

この五人の憐れな被害者は、軒並み解体されているのだ。

これは今までの事件とは明らかに違う。

ならばこれは自分が追ってる事件とは別か。

「……なわけないな」

竹は血の気の一切ない死体を眺めて呟く。

この界限で、血液が吸い尽くされている事件なんて一つしかない。

連続猟奇殺人事件。

「——でもなあ」

なにかがおかしい。

今までの事件は、昼だろうが夜だろうが必ず被害者は一人ずつだった。

そして、被害者の体は原型を留めていた。

しかし、今回は一晩で五人。

更に見るも無残に解体しつくされている。

これをやったのはよっぽどの大喰らいか、それともそれだけ腹が減っていたのか。

もしくは――、

「これが初めてで、加減がわからなかったか――」
選択肢は他にもあった。

この凶行が複数の吸血鬼によるものだとか。

一連の事件をなぞった模倣犯だとか。

だがそんな可能性は竹の頭には浮かばなかった。

胸に穴が開いた死体の横にしゃがみこむ。

事実は常に残酷に。

笑ってしまうくらい退屈に。

竹は乾いた血溜まりの中に指をあてる。

二本の指でつまんだのは、一本の髪の毛。

血に染まり色こそ変わっているものの、自分も含め、この場の誰の長さとも違う。

男性では少ない、肩口までくらいの長さだろうか。

この髪の毛が気になったのは、丁度このくらいの髪の毛の長さの知り合いのことが頭に浮かんでいたから。

――そう。

この髪の毛は、荒川宿禰の髪の毛によく似ていた。

やはりこれをやったのは宿禰なのだろうか。

今まで一切見付かる気配がなかったのは、竹が予想した通り、これが彼女の吸血鬼としての初体験だったから。

だから吸血鬼を追っていた竹は探せなかったのか。

「――」

結論の出ないまま、竹は立ち上がる。

振り向くと、いつの間にか、竹の背後には一人の女性が立っていた。

人混みに出れば埋没してしまうであろう、特徴のない顔立ち。流行を取り入れたカジュアルな服装をした、どこにでもいそうな一般女性。

しかし、女はこの惨たらしい路地裏を見ても悲鳴一つ上げず、どころか爛々と血走った眼には喜びを映している。

餌場の匂いに誘われたか、それとも偶然か。どちらにせよ間が悪い。

竹は女の姿を見て、即座に頭の中にあるリストを検索。

今残っている女性は、澤郁美か常盤敦子の二人。

前者は16歳、後者は21歳だったか。

見た感じ、16歳には見えない。

「常盤敦子か？」

とりあえず問いかける。

処理した6人全てにしている通過儀礼。

これは確認。

完全に吸血鬼となった者に知性と理性が残っているのか。

しかし、今のところダイスの目は全て同じ。

女は竹の問いかけに、口の端から涎を垂らしながら応える。

「――そうだけど。何で名前を知ってるの？」

しっかりとした口調は、知性と理性が残っていることを証明する。だがその眼には、人としての心は残っていない。

このコンクリで囲まれた、狭い空間に充満する血の香り。

それにあてられたように、いやそれより前から徐々に狂気の色を濃くしていく瞳。

それは女がすでに、吸血鬼としての心しか持っていないことを如実に表している。

「黙ってないで教えてくれる？ 何で私の名前を知ってるの？」

そう言って、女は少しずつ竹の近くへ足を進める。

まるで肉食獣の狩りのように、静かにゆっくりと、相手に警戒させられないように。

竹は一步後ろに下がる。

路地裏とはいえ、あまり通りへの入り口に近い場所だと後々不都合が多い。

「ねえ、教えてくれる？」

じりじりと、女はにじり寄る。

「教えてらどうなる？」

竹はもう半歩後ろに下がって、そろそろかな、と相手に悟られないように心と身体を構える。

「教えてくれたら――痛くないように食べてあげる――！！」

案の定、女は人を超えた速度で竹に飛び掛ってきた。

2メートル弱を一瞬で0にする跳躍。

なんの小細工もない、自己を絶対的な強者と位置づける生物ゆえの直線的な行動。

今まで彼女が襲ってきた人間であれば、咄嗟の反応すら出来ないだろう。

確かに大型の肉食獣相手に、生身の人間では太刀打ちできない。

ましてや、今の女はそれらの猛禽類よりも遥かに強く俊敏だ。

対して相手は、見た目ただの人。

策も警戒も持つ方が野暮というもの。

ただの獣よりも優れている、人としての頭脳を使う必要はない。

しかし、女の行動は当然愚かなものである。

人の知性と理性が、獣としての本能を阻害してしまったのかもしれない。

涎を垂らし、大口を開けて飛び掛った女の顎に、無慈悲な弾丸のような左フックが叩き込まれた。

人を倒す為ではなく、完全に殺しにかかった躊躇のない一撃。

吸血鬼であろうと、その基本的な体構造自体は人と変わらない。

無警戒で開いていた顎へのクリーンヒット、しかもコンクリをぶち抜いてお釣りがくるほどの威力を持った攻撃。

これが効かないわけがない。

女は顎どころか頭蓋まで砕けた痛みも、脳がシェイクされたことも意識する間もなく、殴られるままに体を横に流す。

既に女の意識は飛んでいる。

試合であれば、完璧すぎるKO勝利。

だが、これは試合などという優しいものではない。

そのままでも、女の体は勢いよく灰色の壁へと叩きつけられただろう。

しかし、それでは足りない。

竹は女の息の根を完全に止める為に、容赦なく次の攻撃を放つ。

左フックから独楽こまのように体を回転させて、女の首へ回し蹴りを入れる。

悪魔めいた連撃。

刹那こきり、と軽快な音とがして、女は今度こそ路地裏の壁に叩きつけられた。

コンクリの壁にめり込んだ体はひしゃげて、肋骨が花のように皮膚を突き破り、頭蓋骨は砕け、眼球が飛び出し、首はだらしなく伸びたゴムのようになり、腕や足はあらゆる角度に折れ曲がった。

そうして、常盤敦子という人間だった吸血鬼は絶命した。

天倉竹による、7人目の吸血鬼の駆除が終了したのである。

これで残りはあと5人。

裂けた箇所から血液がどくどくと流れ出るのを、銀色の瞳で眺めながら竹は出来立ての死体に語りかける。

「間が悪かったな。今、知り合いのことで少し気分が悪くなったところだったんだ。だからつい本気でやっちゃった」

まだ握っていた髪の毛をポケットにつっこむ。

とにかく、この時の竹に出会ってしまったこの女性は間が悪かった。いや、間が悪かったというよりは運が悪かった。

荒川宿禰の現状。

それを自身の不甲斐無さと取ったのか、それとも他のなにかだったのか。

それは竹自身も判然としないことだったが、一つだけ言えることがある。

竹は自分の内に浮かんだ、嫌な予感を振り払う為に、八つ当たり気味に攻撃を加えたのだから。

普段、相手が女性であれば大なり小なり手加減はする男である。

それが何の躊躇もなく、息つく間もなく、かつて人間だった生き物を屠ったのだ。

それだけ気分が悪かったのだろう。

本当に運が悪かったとしかいえない。

「——でもまあ、この人、別に美少女って感じじゃなかったし構わないか」

知り合いには甘く、それが美少女ならなお甘く、それ以外には容赦なく。

人格的に最低なことを簡単に嘯いて、竹は女の死体の処理を開始した。

——本当に運が悪かったとしかいえない。

藍の章 10 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

相変わらず不定期更新ですみません。

何故か最終章のラストシーンを先に書いてたり、思い付きでアルモノガタリの続編を書いてたり、色々ふらふらしてます。

そんなことより、さっさと続き書けよって話ですよね。
すみません。

藍の章 11

＊

「――まずあなたたちの考えは正しいわ。いくら破綻した登場人物も話しが変われば、その位置は相応の場所に収まる。まあそれでも元々登場するはずのなかった人物だから、多少の影響は出ただけれど」

本来、物語に何の関わりもないはずだった少女は10月にその運命を大きく変えた。

そして、その運命の道筋は当然その先に続く物語に繋がっている。荒川宿禰という吸血鬼が藍色の手に堕ちたこと。

「――でもただそれだけのことよ」

大局には影響しない、と全能は優雅に微笑する。

決められた道筋。

破綻した物語はすでに終わっているのだ。

「ですが、これで藍色は一つ使える駒を増やしました。それは『神の複製品』^{デッドコピー}にとって不利益に働くのでは？」

落ち着きを取り戻した黒須が問う。

「そうね。現状、全て藍色の思惑通り――いえ、それ以上に事が運んでいるわけだし」

「では何か手を打ちますか？」

「いいえ、その必要はないわね。言っただでしょう。多少の影響は出たけれど大局に変わりはないって」

――何もするな。

黄金の両眼が黒白の^{こくはく}人外を射抜くように見据える。

何よりも重く、何よりも鋭い圧迫感。

カガチと黒須は日々瞬々刻々理解する。

この眼前の少女が、自分たち如きでは足元にも及ばない全知全能

の存在であることを。

いや、その理解すらこの少女には追いつかない。

先の先のそのまた先、想像し得るあらゆるものを内包し、そして更にその先へいる。

一人の少女の形をした虹と黄金は、そういうものなのだ。

恐れはおこがましく。

崇拜はあつかましい。

少女が手の平の上で何を見て、何に魅ているのか、怪物と魔法使いでは解るはずもない。

「――それにしても、あの吸血鬼は運が良いわよね」

黄金の鐘楼を鳴らしたような、天上の美声で少女は言った。

あの吸血鬼、とは荒川宿禰のことだろう。

しかし、人の道を外れ、畜生道に堕ちた彼女を幸運とはどういうことだろうか。

元は物語に関わるべきではない、ただの人間。

その身に起きた厄災は、どう考えても幸運と呼べるものではない。同時に黒須とカガチの内に浮かんだ疑問。

それを少女は問われることもなく答える。

「大吉にあたるのも大凶にあたるのも、どちらも同じことでしょう。あの吸血鬼は、その数少ないカードを引いた。これは幸運ということじゃないかしら」

違う？

少女は、くすくすと笑いながら二人の調整者に問いかける。

隻眼の女はその問いかけには答えず、

「――ひとつ、よろしいでしょうか？」と声をあげた。

再生することのない片目と違い、弾けた両腕は完璧に元通りになっている。

黒須は何も言わず、成り行きを見守る。

「勿論だわ。暇潰しに付き合ってあげると言ったでしょう。なにかしら？」

「せっかくのイレギュラーの意味がなくなってしまった現状を、どうお考えでしょうか？」

「それは私の心を聞いているのかしら？」

「……はい」

カガチは頷いた。

この質問は先ほど黒須がカガチにしたもの。

黒須はその時この事態を残念がっていた。

しかしカガチは、はぐらかして明確な答えを口に出していない。

「あなたらしい原始的な質問ね。まあ出所は黒須だろうけど、それを私に聞いてくるなんてね——。いいわ、その問いに答えましょう。でもその前に、あなたの答えを聞かせてくれるかしら？ あなたはイレギュラーの意味がなくなった、と私が言い切った現状をどう思っているの？」

黄金の瞳が白い暴君を映す。

「私は——正直残念です」

「どうしてかしら？」

「あなたが手放し、破綻した物語の結末から続く物語として、これではあまりにも陳腐すぎるからです」

その言葉に黒須の口元が誰にも悟られぬほど小さく、甘く、苦く緩む。

しかし、少女は誰にもわからないはずの黒須の表情の変化を感じ取り、

「——蛍、あなたも同じ考えなのかしら？」と無垢な笑みを向けた。

黒須は少女に自分の笑みが悟られることを承知していたように、

「はい。全く同じ考えですね」と滑らかに頷いた。

人々の住まう現世うつしよと神々が住まった常世の、狭間の幻想ともいうべきこの世界。

それを創造したのは、この少女である。

つまり、この世界は全て彼女のモノ。

いや、この世界自体が、云わば彼女の体内とでもいうべきだろう。

己の体内で起きた変化を、この虹色の長髪を持った少女が見落とすわけがない。

故に、彼女は黒須の表情の変化に気付き、それを黒須は承知していたのである。

「そう。あなたたち二人の言いたいことはよくわかったわ。確かにわざわざ手放してあげた物語の続きなのに、そこから登場したイレギュラーが何の影響もなしでは、陳腐だと思うわ。私もそんな物語見せられても面白くもなんともない。でもね――」

少女の瞳の奥に鬼気とも喜々ともとれる色が蠢く。

「――」

「――」

最強と呼ばれた魔法使いも、怪物と呼ばれた暴君も、

その色彩鮮やかな美貌の虜になったように息を飲む。

「私が影響がないと言ったのは、あくまでも物語の大局になの。小さな特異点では、私が書いた物語に影響を及ぼすほどの力はない。けれどそれで十分でしょう。小さき駒に影響を与えるにはね」

極光が御しがたい魔性に揺らめく。

「――4年ぶりの再会はすぐそこ。藍色が裁くのは、図らずも相応のものとなった。想った通り、面白くなってきたわ」

少女は深遠の淵のような黄金の笑みを浮かべた。

藍の章 11 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

中盤戦もいよいよ、というかやっ和大詰めに迫り着きました。
もつと速筆だったらと常々思います。

藍の章 12

4

12月21日。

竹がアレクサンドラの依頼で、吸血鬼退治に乗り出してから十数日がたっていた。

依頼されたといっても、この仕事はある意味竹から持ちかけたようなものである。

しかし、そもそも労働意識が少ない竹が、自分から仕事を持ちかけるというのは異例の事態であり、竹をよく知る人物であれば彼に熱があるのではないか、または何か企みがあるのだろうか、と疑いかねない話なのだが、なんだかんだで竹を信じ切っている年頃の王女様はそんな心配などとは遠く無縁だった。

依頼内容は、連続猟奇殺人事件の犯人の捕縛または殺害。

その依頼達成でもたらされる報酬は二つ。

一つはこの国への騎士の派遣中止。

もう一つは、この件の処理を全て竹に任せること。

この報酬も竹から言い出したものである。

本来、金銭等でやり取りされるはずの報酬を、誰がどう見ても変則的なもので要求した真意はなんなのか、と普通は懐疑的になるものである。

だが、アレクサンドラは一つ二つ問いかけただけで、この話に乗った。

それはアレクサンドラ自身が、他の騎士をこの国に派遣されたくなかった一心だったということと、やはり彼女がどうしようもないほどに、脳内がピンクに染まる病氣にかかっていたということだろう。

それを竹が解っていたのか解っていないのか、それともいつもの通り気付かないふりをしているのかは不明なのだが、この変則的な報酬は竹が自分で言い出したものだ。

ならば当然、竹にとって何らかの利があるのだろう。

そしてそれは恐らく、二つ目の報酬について。

竹がこの件のどのように解決するのか。

新月から始まり、満月まで持ち越された、その解答が今宵出るのだ。

23時過ぎ。

自宅マンションから出た竹がまず見たのは、髑髏を連想させる真っ白な満月。

その不吉な色合いに、途端に気分が悪くなる。

虫の知らせか。

はたまた長年の経験からくる勘なのか。

どちらにせよ、どこにあるかわからない心は確かに沈んでいる。

「――でも、今日で終わりだ」

竹は疲労と憂鬱を混ぜた重い息を吐く。

今年一番の冷え込みだという、凍てついた夜。

生暖かい吐息は白色を帯び、冬の冷風に拡散していく。

それは人体の美術か、自然の芸術か。

普段気にもとめないこの儚い刹那のアートを、今夜、はたして何人が眼に出来るだろうか。

歩道を歩く人影も、道路を行く自動車も皆無。

連続猟奇殺人事件、または吸血鬼事件と呼ばれる最悪の惨殺事件が刻み続けた爪痕は、わかりやすい形で人々に恐怖を植え付けている。

誰もが日が落ちる前に自宅へ戻り鍵をかけ、日が昇っていようと人通りの少ない道や場所は避ける。

1週間ほど前からは街のいたるところに警官が配置され、巡回するパトカーの台数も日に日に増えている。

しかし、それでもそれらを嘲笑うかのように事件は続き続けている。

12月から急増したと言われている事件数は、ここに来て更なる猛威をふるっているのだ。

今までは一つの現場に一人の被害者だった図式が、15日の早朝に発見された事件により崩されてから。

その日から、被害者の数は今までの比ではないほどに増えている。その数、実に23名。

14日以前の被害者を合わせると、合計44名にもぼる人が死んでいる。

9月から始ったこの凄惨な事件は、今まさにピークを迎えているのだ。

明日か明後日には、自衛隊がこの街に配置されるという話もある。

この界限は、そんな物騒な街に豹変してしまった。

それを承知で闊歩するのは、よっぽどの馬鹿か、相応の理由のあるもの。

——またはその当事者だけだろう。

自分はどれにカテゴライズするのだろう。

竹は疲れた足取りで、しかし巡回する警官やパトカーに見付からないように慎重に歩きながら考える。

此度の犯人は、まごうことなき吸血鬼。

無論、一般市民の安全を守る公務員たちが、それを知るわけもなく、彼らがこの事件を解決することはないだろう。

その事実を知っているのは、竹とその友人数名だけ。

そして、それを解決出来るのは、6日から今日まで、たった一人で行動してきた竹ただ一人。

もし、竹が友人たちに助力を願ったのならば、ここまで被害は拡大しなかったはず。

しかし、竹はそれをしなかった。

その真意はわからないが、何か考えがあるのだろうことだけは、容易に想像できよう。

被害者にあつた者やその家族友人たちからすれば、その真意にどんな理由があろうとも納得できるものではないだろう。

だが竹はそんな見ず知らずの人間に慈悲を加えてやるほど、優しくもなく、正しく清い心を持っているわけでもない。

それを人間は悪事、蛮行と非難し揶揄するだろう。

だが、なんという皮肉。

それでも、人々に厄災を振りまいたこの事件を止めることが出来るのは、人ではないのだから。

すでに竹は11体の吸血鬼を処理していた。

残すところ、あと1体。

それを処理すれば、この寂しい夜も終わるだろう。

人が再び夜を取り戻すだろう。

その功績をもってしても、人は彼を責め立てることが出来るのだろうか。

無論、その問題に答えられるものはいない。

人はこの夜、起こる出来事も、竹が今までしてきた行動も知ることはなく、そもそも竹はこれらのことを問題だなんて思っていないのだから。

……マンションから出て十数分。

なるべく暗い道を、出来るだけ人気がない場所を探して、普段通らない道を迷いなく歩き続けた。

欠けている時は、脆弱な灯火にしかない月光は今夜に限って鋭く、見上げると少しだけ目が眩むほどだ。

視界を戻した途端、違う世界に投げ出された気がした。

——予感。

この道の先を見てしまえば、自分の持っていた救いのない淡い希望が打ち砕かれてしまうだろうと。

それでも、軟弱な精神を叱咤するように足は前へと進む。

足の向く先には、詭えたかのような広い公園。

なるほど、舞台としては相応しい。

そんな感想でぶれた心を落ち着かせ、その公園へと足を踏み入れた。

公園といっても、自然公園の類なのだろう。

幼子が遊ぶような遊具はなく、周囲は銀杏並木で囲われており、公園の半分が芝生地の広場。もう半分にはレンガ地が続き、今は止められている小さな噴水と時計台が置かれている。

平時であれば、昼は家族連れや、犬の遊び場、または仕事をさばりにきたサラリーマンが共存し、夜は暇を持て余した若者たちの遊び場か、夜伽のメッカだっただろう。

しかし、今この公園は、異常なまでの静寂に包まれている。

「――この匂いは」

現実感を失わせるような静けさの中、確かに漂う、むせ返るほど濃厚な血の匂いが鼻腔を刺激する。

その香りの強い方へ歩を進める。

数少ない外灯が月明かりと合わせて足元を照らす。

少しずつ、朱色の匂いが肌にまとわりついていき、それはすぐに現れた。

いや、最初から見えていたのかもしれない。

ただ、それは白い光を放つ月光では見づらかったのだろう。

薄い雲が一瞬、月を遮断し白が黄色く変化した。

公園の半分を占める芝生の広場。

黄色い月下。

人が死んでいた。

何人いるかもわからない。

パッと見ただけで、誰ひとり息をしているものはいないとわかる。枯れた芝生にゴミのごとく積み上げられ、原型が辛うじてわかる程度にズタズタで、行儀悪くまき散らされた血と肉片と臓物は、冷た

い外気にさらされ湯気さえ出ている。

どろどろとした生き物の匂い。

無数の死体の山。

その中心に佇むのは、嘲笑と恍惚の笑みを浮かべた紛れもなく、人の血を奪う篡奪者の姿。

吸血鬼は竹に気付かず、自制を失ったかのように死体の山を楽しそうに食る。

死体の腕を折り、足を引き抜き、目玉を潰し、腹を割き、飛び散る血飛沫を美味そうに舐めとる。

その瞳から見て取れるのは、わかりやすい狂気と漂う威圧感。

野に咲く花のようだったその笑顔は、密林で口を開く毒花のそれと成り果てた。

「――」

なにかに酔ったかのように、その行為を続ける吸血鬼の光景が幻のように揺らいでいる。

未知の感情が脳を支配している。

怒りと嫌悪がバランスよく混ざり合っている。

それは憎悪となって、まだ見ぬ誰かに向けられている。

ぎしり、と奥歯が軋む音がした。

その音で気付いたのか、それとも竹の憎悪に反応したのか、はたまた新たな獲物の臭いを嗅ぎ取ったのか。

吸血鬼は解体作業を中断し、荒い息で竹を見た。

「あああああああー！ー！！」

直後、吸血鬼は遠吠えじみた咆哮を上げ、一心不乱に肉の山から駆け出した。

その身の速度に任せた直線的な突進。

竹は後ろに飛んでやりすごす。

自身の突進が避けられたのは初めての体験だったのだろう、吸血鬼は一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐに体を反転し構わず竹へと襲いかかる。

何の策も立てず、その馬鹿げた身体能力に頼りきった攻撃。

吸血鬼はメチャクチャに腕を振り回す。

しかし、その全てを竹は淡々とかわし続ける。

当たる筈もないことは、吸血鬼にもわかっただろう。

しかし、吸血鬼はそれでも執拗に腕を振り続ける。

――そして、そこに変化が生まれ始めた。

腕の一振り一振りが少しずつ、本当に少しずつだが正確さを帯び、更にその速度も同じくらい僅かに上がり始めてきたのだ。

「ああ――ああああああ――!!」

一撃ごとに激しさと正確さ増していくそれはキリがないように見え、吐き出される殺意をまとった咆哮は竹を威圧するに十分だった。

「は――」

その尋常でない殺気に幾度もの戦いを経験してきた体が咄嗟に反応し、数十回目になる攻撃を横にかわし、がら空きの横っ腹を蹴りつけた。

吸血鬼は、カウンター気味に入った蹴りで盛大に吹っ飛び、ゴロゴロと芝生を転がった。

「――やば」

まだまだ様子見でいようと思っていたのに、反射的に反撃してしまった。

咄嗟の反応だった為に、全力でのものではなかったが、それでも通常の人体なら楽々破壊出来るほどの威力を持った一撃だ。

それを無防備なところにカウンターで入れられたら、下手をしたら死ぬ。

それは吸血鬼であっても同じだ。

たとえ常人を越えた身体能力、人体強度を誇ろうと『神の複製品』の蹴りはぬるくない。

実際、竹が今回処理した2体目の吸血鬼は、同じ程度の攻撃でほぼ瀕死になった。

竹は11体の吸血鬼を処理してきたうちに、吸血鬼にも強い弱い

個体差があることを知っていた。

……死んでないよな、と恐る恐る吹っ飛んだ吸血鬼に近付く。

吸血鬼はゲホゲホ苦しみ、未だ立ち上がれないものの息はある。

——良かった、と竹は安堵の息をつく。

柔らかい芝生を転がったことがダメージを軽減したのか、それともこの吸血鬼に竹に蹴りに耐えうるだけの強度が元々あったのか。とにかく良かった。

——何故、竹は倒すべき吸血鬼が生き延びることで安堵したのか。そもそも何故、竹は初めから攻撃の意思を見せなかったのか。それは——、

「げほっ、げほっ……あ——あれ？」

吸血鬼の瞳から狂気の色が薄らぎ、その双眸が近付いた竹を初めて本当に捉えた。

「——あ、天倉くん……？」

「くんばんは」

竹は頷くと静かな声で、荒川宿禰に声をかけた。

「あと久しぶり、荒川さん」

天倉竹と荒川宿禰。

16日ぶりの再会だった。

藍の章 12 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。
何かおかしい部分がありましたら、ご指摘ください。

藍の章 13

＊

「え、あ、久し——振り？ ……えっと、天倉君どうしたの？」
宿禰はキョトンとした表情で目の前で立ち止った竹に聞いた。

「あー……」

竹はどう説明しようか言葉に詰まる。

竹が困った顔をしているので、宿禰は首を傾げてから、まず立ち上がろうと思い——

「——痛っ」

わき腹を押さえてへたりこむ。

「あーっと、平気？」

竹は自分の蹴りが思った以上に宿禰にダメージを与えてしまったのだと判断し、若干の罪悪感にさいなまれながら宿禰に手を差し伸べた。

「とりあえず立って話をしよう」

竹が差し出した右手を見て宿禰は俯き、

「あ……ありがとう」と小声で言い、その血色の良い唇を禍々しく歪めた。

「——っ?!」

その時の竹の判断は早かった。

宿禰が俯いていたためその表情の変化は見れなかったものの、差し出した手を引込めると同時に後方5メートルへ跳躍した。

「あれ？ 天倉君。手をとってくれるんじゃないのかな？」

宿禰が残念そうな声で言った。

しかし、その口元は声とは裏腹に笑み保っている。

「……」

竹は何も答えず、自分が1秒前までいた場所を見た。

竹が立っていた地点——正確には竹が宿禰に手を差し出した場所に、宿禰の右手がめり込んでいた。

それはどう見ても、ただ手を掴もうとする行動では出来ないものだ。

宿禰は右手を地面から抜くと、ゆっくりと立ち上がる。

まるで一切のダメージがないような、確かなたたずまい。

ぐるぐると様々な思考と想いが頭の中で駆け巡り、竹はかける言葉が見付からないでいた。

「ひどいなあ。無視するなんて」

宿禰は口を尖らせて不満そうに言うと、乱暴に地面を蹴って跳ねるように移動する。

着地点は死体で築かれた山の麓。

何をするのか。

竹は宿禰の一挙手一投足も見逃すまいと注視する。

宿禰はその竹の視線に気付いて——一層嬉しそうな空気を隠さずに纏い、軽く腰を曲げて屈んだ。

「なーんて、天倉君にあんな奇襲が通用するとは思ってなかったけどねっ。でもあそこまで軽々避けられちゃうと、少し悔しいかなあ。だからちよっと栄養補給するねっ！」

ずしゃり、と築山の麓から肉と骨が千切れる音がして、宿禰が姿勢を正す。

宿禰の手に握られたのは、肘から切り離された人間の腕だった。

宿禰はそれを竹に見せ付けるように頭上に持ち上げると、夜空を仰いで口を開ける。

大きく開けた口の端から覗く鋭い牙が月光に反射する。

千切られた切断面から垂れる血液を嚥下するその姿は、最上級の美酒を嗜むソムリエのような喜悦が滲む。

「ほきゅうしゅうりょう！。よしっ！ これでさっきよりも少しだけパワーアップ出来たかも！！」

宿禰は愉快そうに言って、握っていた手を空き缶をぽい捨てする

程度に軽々しく、放り投げた。

竹は見ず知らずの屍に対する同情が少しだけ湧き上ったが、それよりも聞いておくことがあった。

「……奇襲って言ったな？ てことはオレの差し出した手への攻撃は、別に力加減を間違えたわけじゃなかったか」竹は普段よりも一層低く平坦な声で言った。

「――」

竹の言葉に宿禰は目を丸くしたが、

「あははっ！ 今更なに言ってるの、天倉君？ そんなの当たり前だよ。私は天倉君の右手を斬り潰すつもりでやったんだからっ！」と嘲るように笑う。

「そうか。じゃあ暴走気味に襲い掛かってきたのも、蹴られて苦しそうにしたのも演技ってことか」

「そんなのもちろんだよー。そりゃ少しは痛かったけど。でもそれくらいしないとダメだと思ったから――天倉君の血を吸うにはね」まあでもそれも失敗しちゃったけど、と宿禰は言った。

決して軽くはない竹の蹴りを、少し痛い程度で片付ける宿禰。

どうやら彼女のポテンシャルは、竹の予想の斜め上を軽々越えているらしかった。

「――オレの血を吸う？ それが目的？」

「うんっ。だから少しでも強くなるために、いっぱい血を吸う必要があったんだっ！」

自らが築き上げた無数の死体の山を背に、一見無邪気に説明する様子は、狂気以外のなにものでもなかった。

何故、彼女はそんな狂気に侵されてしまったのか。

いや、それよりも今宿禰はなんと言ったか。

……強くなる為に血を吸う？

なんだそれは。

そんな情報、竹は知らない。

「荒川さん、今の話、一体誰から聞いた？」

「それは秘密だよ。ていうか私もよく知らないしね」

「そうか」

「うん。ごめんね、天倉くん。でもその人のお陰で今の私はあるんだっ。私が苦しくてどうしようもなかった時に、あの人が私をこんな風にしたんだから」

「……どういうこと？」

「えっとね、つまりはこういうこと」

宿禰がしゃがんで、死体たちから流れる血液を掬い上げる。

「――その人が、これの美味しさを教えてくれたの。無理やりにね」宿禰は一瞬だけ、悲壮な表情を浮かべたものの、それはすぐに法悦へと変わる。

「でも私は後悔してないよ。だって、今の私、とっても強くなったんだからっ!!」

宿禰は爆発的な脚力で、眼前の獲物へと疾走を開始した。

目前に迫る宿禰の姿に竹は目を細める。

頭を掠めたのは、16日ぶりの再会で変わり果ててしまった立場の違い。

大量殺人者と解決士。

『吸血鬼』と『神の複製品』。

狩るものと狩られるもの。

何の迷いもなく振り下ろされる両腕。

それは彼女の言った通り、後悔を全く感じさせない鋭さを持っていて――とても頭にきた。

宿禰をこんな風にしてしまった、まだ知らぬ人物に。

竹は振り下ろされた宿禰の両腕を両手で掴み取る。

「――っと。まだ質問があるんだ」

「えっ――」

宿禰の両目が見開く。

人の頃より、自分の身体がこうなった時よりも、そしてつい先ほどよりも上昇したはずの攻撃をいともあっさり受け止められたのだ。

仕留められると思ったのに……。

竹は宿禰の手を簡単に掴んだように見せたが、実際は結構効いていた。

それを宿禰に悟られぬように、竹は銀色に変異しはじめた瞳を向ける。

「オレの血を吸う目的の意味は何？ 強くなる為か？」

鋭利な刃物を突きつけられたような感覚。

宿禰は一瞬躊躇したものの、胸に秘めた思いを吐露する。

「……天倉君を……仲間にするの。だって……私だけこんな……」

竹は脳を直接金槌で殴打されたような気分になった。

『この吸血衝動に従い吸血行為を行うと、対象の体内の血液を吸い尽くすまで、吸血行為をやめることはない。』

これによって血液を吸い尽くされた対象は当然死亡するのだが、何かのアクシデントによりその吸血行為が初期段階で中断した場合、その対象は生存し『D&』による人体改変と同じ効果が発症する』。宿禰は噛み千切るほど強く唇を噛む。

血の気の失せた唇を裂き、赤い血が垂れる。

——一人では寂しいから。

こんな身体になってしまったから。

だから、仲間が欲しい。

ならば自分の最愛の人が良い。

それが宿禰の決意。

どうしようもなく歪んでしまった、平凡な恋の成れの果て。

普通だった少女の成れの果て。

「ああ——今、解った。そういうことか」

これは自分に責任を取れということだ。

『知らない奴の事はどうでも良い。』

だが知っている奴をどうでも良く思えるほど強くはない』

そんな偏愛に対する責任を、今、求められているのだ。

だから——竹は決めた。

「……わかった。荒川さん。責任を取ろう」

竹が宿禰を見つめる。

「……え？　それって……」

宿禰が嬉しそうな顔をして、竹を見つめ返した。

竹が自分の願いを聞いてくれたと思ったからだ。

しかし——そんな淡い希望は一瞬のうちに碎かれる。

竹の銀色の瞳が、身の毛もよだつ殺気を放った。

宿禰の全身を支配したのは、数日前に感じた恐怖と同等がそれ以上の畏怖。

「いやっ」

宿禰は掴まれていた両腕を力任せに捻って外す。

ガッチリ掴まれていたので、外す時に肉が削げる。

「——っ」

鋭痛が両腕に走り、血が吹き出たが気にせず竹から距離をとった。

竹はそんな宿禰を一切の情を棄てた表情で見ながら、両手に残った宿禰の肉を捨てて言う。

「荒川さん。オレはお前の、その歪んだ心に付き合ってやるつもりはない。半端に前向きで、どうしようもなく後ろ向きな考え方はムカつくし、大嫌いだ。だからオレは最もシンプルな解決方法を取ることにした。オレは——お前を救わない」

その言葉は、宿禰を絶望に叩き落すのに十分すぎた。

心に微かに残っていた希望が消え失せる。

10月の終わりから12月5日まで、彼女は身体こそ吸血鬼と変わっても人として生活してきた。

抗えないはずの吸血鬼としての衝動を、抑えることが出来ていたのは、ずっと竹が傍にいたから。

まだ人に戻る希望があったから。

しかし、彼女に突きつけられたのは、もう人には戻れないという現実。

それを知った夜に心に渦巻いた吸血衝動の奔流。
理性を総動員しても勝手に獲物を求めて彷徨う足。

それでも彼女は踏ん張った。

血を吸えと訴え続ける本能を抑えつけ続けた。

それは驚くべきことだった。

新たに形成された吸血鬼としての本能が溢れてなお、生物としてか
弱い人の理性が抑えたのだ。

だが、それも一人の少年に破られた。

彼女を子といった藍色に。

それでも希望は残っていた。

自分になった吸血鬼の特性を使えば、大好きな人に使えば、それは
小さくとも歪んでいようとも確かな救いになるのだと。

そう信じていたのに――それすらも拒絶され砕かれた。

「――はは、は。そっかあ……私、嫌われちゃったんだ」

「おう、たった今、嫌いになった」

竹は淡々と頷いた。

銀色の瞳が、頭上で新円を描く月明かりよりも爛々と輝いている。

「このちょっとした事件を終わらせよう、吸血鬼」

その言葉と視線に込められたのは、宿禰を自分の敵として、倒すべ
き相手として、ただ一体の吸血鬼として捉えた無慈悲な最後通牒だ
った。

藍の章 13 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

今話で一つの区切りにしようと思っていたのですが、そうすると更新がまだ伸びそうだったのであえて分断しました。ただでさえ遅いの、これ以上お待たせするのは忍びないので。

まだ続きますので、よろしければ暫くの間お付き合ってください。

藍の章 14

＊

――がしゃん。

宿禰の精神の奥で何かが割れ、どす黒いものが解き放たれる。

それは1ヶ月以上も吸血衝動に耐えるという、偉業をやった宿禰の鋼鉄の精神力によって彼女の心の織に閉じ込めていた最後の魔物だった。

彼女は唯一片隅に残っていた、荒川宿禰という人間の心を亡くした。

「あ――あああ、うう……っ」

宿禰が体を九の字に曲げて、苦しげに呻る。

全身はガタガタ震え出し、額には汗が浮かび、髪の毛が張り付く。

「げほっ、えほ、――んっ、うあああっ……っ」

震える体を必死に押さえ込むように両腕で抱きかかえる宿禰の体内で、今まさに起きている変調。

それは、檻から解き放たれた吸血鬼の鼓動。

荒川宿禰の身体を、その精神に相応しいものにする為の変異であった。

バキバキと骨が折れては、再生してより強固なものになり。

バリバリと筋繊維が切れては、修復して強靱なものとなる。

10秒ほどして、宿禰が顔を上げた。

「――なんかすっきりしちゃった」

晴れ晴れとした声とは不釣り合いな妖艶な瞳。

宿禰は自分で噛み切り、口の端から出ていた血液を、ぺろりと淫靡な舌使いで舐め取ると、悩ましげに髪をかきあげる。

「ねえ、天倉君。一応聞くけど、見逃してくれたり――しないよね？」

そう聞いた宿禰の声には、先ほどまではいなかった女の色気が住

んでいた。

「……」

竹は無言だった。

宿禰から発せられる威圧感が、つい数十秒前とは比べ物にならない質に変わっている。

それは今まで倒した11体の吸血鬼。

その誰よりも重く鋭く、妖しいものだ。

もはや、彼女のそれは一種の美しさを感じさせる。

——そう。

まるで——かつて滅びた、『魔』の系統樹たる本物の吸血鬼のように。

「そうだね。見逃してくれるわけないよね。うーん、だったら戦うしかないのかなあ」

竹が何も返答しないことを答えと取ったのか、宿禰は胸に片手を添え、艶かしく溜息をつく。

男を誑かす色香たっぷりの吐息に竹は、

『——うわ、エロっ』と心の中で鼻の下を伸ばした。

実は竹は、宿禰の突然の変化に相当パニックっていた。

無計画なようで、実際無計画な竹なのだが、それでも行き当たりばつたりの中で、自分の行動の後に起こるであろう事象くらいは、いくつか予想して行動している。

満遍ない優秀さを持つ竹である。

わざと外す予測とは違い、大抵の場合はそれで事足りる。

それ故に、当てにあって、当てにしていた予想——外のことが起きると大変取り乱す。

外面こそ平静を保っているように見えても、内心は泡喰って狼狽していたりする。

今の竹の状態は、まさしくそれにぴったり当てはまっていた。

宿禰から放たれる、人では決して持つことが出来ないはずの、真魔の妖気。

大気を侵し、震わせる穢れた瘴気。

それらを久しぶりに肌に感じ、少しあてられる。

「——おいおい、どういふことよ」

呟いてみても、答えが出るわけもない。

『電子の蜘蛛』^{マグミグナット}からの情報にも、『意外精神』^{ドクター}からの検証結果にも、なかった未知の状況。

竹はやっぱり手を借りておくべきだったかも、と毎度毎度の後悔をした。

とはいえ後悔ばかりはしていられない。

何故なら、吸血鬼の瞳が獲物を狙う法悦に酔いはじめていたから。これから一瞬でも油断すれば、かの鬼はそれを見逃さずに襲い掛かってくるだろう。

竹は弛緩していた心を落ち着かせる。

「あはっ、さすが天倉君だね。私がどれだけ天倉君に近くなったか、説明しなくてもわかってるみたいだもん」

「近くなった、か。確かにそうみたいだな。お前はあくまで人だったさっきよりも、オレに近いものになっている。……出来れば何でいきなりそうなったか、教えて欲しいんだけど？」

「さあ？ わからないよ。さっきも言ったじゃない、よくわからないって」宿禰はゆるやかにかぶりを振る。

予想通りの返答。

「……そーいやそーうだったな」

竹は溜息交じりに言った。

「ふふふ。でもね、一つだけわかったことがあるよ」

「なに？」

「こうなったのは、天倉君の責任だってこと。全部全部全部全部全部全部ぜーんぶっ、天倉君の責任だよ。だからちゃんと責任取ってね？ ——勿論私が望む形で」

歪んだ微笑。

確かな魔性。

本当の意味で違うものになった宿禰の望みは――

「天倉君を私と同じものにするんだっ!!」
切ないほどに、変わらない。

「……どうやって?」

「そりゃ無理やりだよ。天倉君さっき断ったじゃない」
「そうだな」

「うん。とっても傷ついたんだからっ! でもそのお陰で、さっきよりもずーっと強くなれたから我慢するよ」

宿禰は裏のない笑顔で言った。

「我慢……許してはくれないのか」

宿禰はこれまた裏のない笑顔で言う。

「許すと思う?」

「思わない」

竹は即答して、理解した。

彼女の笑顔は裏がないのではなく、裏しかないのだと。
ダークネス。

「……なんかすぐく失礼な風に思われた気がしたけど、まあ良いや。あとでじっくり聞けば良いことだしね。その為にはまず天倉君を私の爪で倒さなきゃ。大丈夫だよ――殺しはしないからっ!」

宿禰の両手の指先が、ビキビキと小さく地割れをしたような鳴動を立てて、硬く刃のように変貌していく。

身体の一部の変異強化。

それは『魔』の系統樹に属する吸血鬼が持つという、変身能力によく似ていた。

両爪が吸血鬼の狂暴性と残虐性を顕在化したかのような、凶悪なデザインへ変貌を遂げると、宿禰は哄笑とともに目的対象へと疾駆する。

竹は素手でそれを迎え撃つ。

激突する刹那、吸血鬼と解決士の視線が交錯する。

両者の瞳が物語るのは、相手を排除せんとする純粹な殺意。

二人はわかっていた。

これがお互いが確かな眼で、相手をみれる最後の機会になるのだと。それでも――竹と宿禰は自らが下した決断を曲げることはない。

「はっ、やっ、ふっ――」

先ほどの倍はある速度で連続して繰り出される凶爪を、竹はステップとスウェーバックのたった二つの回避行動で、綺麗にかわす。それでも構わず、宿禰は力任せに左右の腕を振るい、竹に肉薄していく。

どれだけ攻撃を避けようと、格闘技術を持たない宿禰には、それを続けるしかないのだ。

事実、この暴風じみた爪の舞を一撃でも当てられれば、いくら竹であっても無視できないダメージを負うだろう。

最悪、致命傷になりかねない。

しかし、竹は何故反撃しないのか。

これだけ避け続けることが出来るのなら、攻撃することも可能はず。

その答えは、二十数回目の宿禰の攻撃の瞬間だった。

「はあっ――!!!」

宿禰の叩きつけるような右爪が振り下ろされたのより少し早く、竹の拳が宿禰の左脇腹に突き刺さる。

その衝撃で一瞬呼吸が止まり、右腕の勢いも殺される。

しかし、宿禰は流されそうになった体をその場に踏み止め、秒も満たぬ速度で反撃。

左の爪を下から全速で振り上げた。

「――くっ、ああ――っ!」

だが、その攻撃も竹にはあたらなない。

右拳を既に引っ込めていた竹は、上体を捻っただけで追撃をかわすと、宿禰の鼻っ柱に左手で掌底を打ち込む。

斜め下から打ち上げられて宿禰の頭が上がる。

そして、竹はがら空きになった胴体、鳩尾へダメ押しの中段突き

を放った。

デタラメな宿禰の攻撃と比較するのが馬鹿馬鹿しくなるほど、流麗な連続打撃。

その対比を考えると、この戦いは、人と獣の具現といえた。

——しかし、これが人と獣の闘争の具現というのなら、あれだけの攻撃で獣が屈するはずがない。

タイミングも威力も申し分なかった竹の打撃を、全てくらったはずの宿禰は、その勢いで数歩後方へ後ずさっただけだった。

「——ちっ」

竹の小さな舌打ちと、宿禰が地を抉り飛ばしながら再び前進してくるのは同時だった。

IFの話をしたところで状況が何も変わるわけではないのだが、もし竹が徒手ではなく何らかの武器を持っていれば、今ので既に勝負は決していただろう。

だが竹は、これまで倒した11体の吸血鬼も素手で事足りていたので、何も持って来ていなかった。

考えが甘かったのか、それとも現実が厳しかったのか。

どちらにせよ、この戦いは純粹な身体能力だけの攻防で、勝敗を決するしかなかった。

とはいえ、それでも竹は優位に立っていた。

いや、もしかすると身体能力だけでみれば、荒川宿禰という吸血鬼は天倉竹を凌駕しているかもしれない。

それでも、竹の優位は動かない。

開始から二十回以上、宿禰の攻撃を避けた竹は、宿禰の攻撃方法、速度、癖など全て解し終えていたのだ。

『影見』。

正式には『影見る蛇の眼』と呼ばれる、万物を解析し、理解し、獲得できる銀眼の異能を所有する竹にとって、吸血鬼の動きの解析など『影見』を発動させるまでもなく、自らの血肉に染込んだ技術だった。

手の内を余すところなく把握された宿禰は、檻に閉じ込められた獣に他ならない。

獣が檻の中でいくら暴れようと、その爪が人に届くことはないのだ。しかし、これは決して宿禰が弱いというわけではない。

むしろ、竹が解析を終えるまでに、二十以上もの攻撃を繰り返せた宿禰を賞賛するのも悪くない。

何故なら、竹が解析を終えるまでに避けた攻撃は平均の約二倍。

型に嵌らないデタラメな攻撃と、旋風を巻き起こすほどの速度を持つていたゆえの功績である。

だがしかし、この場合宿禰に送る声は賞賛のそれではなく、憐憫の声なのだ。

相手が悪かった。

ただ、この一言に尽きよう。

その言葉を表すように、宿禰は当たらない両爪を繰り返し続け、竹はそれを淡々と避けながら、隙を見つけては拳を、掌底を、蹴りを入れていく。

竹の手数を一とすれば、宿禰の手数はその三から四倍。

しかし、三倍以上の手数を出そうとも、当たらぬ攻撃では意味がない。

対して、竹の攻撃は必ず当たる必中の一。

秒刻みで疲労とダメージを蓄積させ続けていく吸血鬼。

特攻を美德とでも捉えているように、宿禰の前進は止まらない。

そして——そこに変化が生じ始めた。

ぎこちなかった足捌きは、段々と様になり。

間髪いれず振るわれる両爪は、徐々に的との距離を縮め、その両腕の速度も一撃、一撃速度をあげていく。

戦闘経験のなかった吸血鬼は、今まさに経験を積み、自分の身体の動かし方を学習し始めていた。

「はっ——っ——っ——！」

瞬きすらせず開かれ続け、血走り自動的に涙を流す両眼。

呼吸すること暇すら惜しんで動かし続けた肉体は、心肺機能の限界点をとつくに突破して悲鳴をあげ、脳に身体の活動停止を要求する。それらを見殺しして、宿禰は両腕を、両足を絶えず動かし続ける。もつと速く。

でなければ、この相手には敵わない。

より正確に。

でなければ、この獲物を仕留めることは叶わない。

喉は酸素を求めて喘ぎ、チアノーゼを起こし青紫色になった口角から、泡が垂れる。

それも構わず、吸血鬼は自身の肉体の限界を越えんとする。

じゃないと——私はこのまま一人で終わってしまう。

それは今や声を出すことすら適わない、少女の声なき声。

しかし、その魂の叫びを表すのは、歪んだ精神と凶^{まが}った身体。

そして、それを包む吸血鬼という魔性の殺意だった。

「——、——、——！！！」

限界を超えた動きに断裂した筋繊維が、主の動きに応えようとその強度を増し、再び破裂する。

臨界を越えた速度に粉碎した骨細胞が、主の速度に耐えようとその硬度を増し、軒並み亀裂を入れていく。

宿禰は更に増した俊敏さとしなやかさで、両爪を振り回す。

自らの命を削りながら、猛威を振るう爪の乱舞は、それでも——その全てを、竹にかわされていた。

いかに宿禰が速度を増していこうと、それは最後まで竹には届かない。

そもそも実力が違いすぎる。

経験値が違いすぎる。

付け焼刃の技術、たった数分にも満たない経験では、その圧倒的な溝は埋らない。

細胞の一つ一つが悲鳴をあげる力を以てしても、宿禰は竹に遠く及ばない。

「は、あ——あああああ——っ!!」

しかし吸血鬼は雄叫びをあげ、勝利を求めて突き進む。

「——うおう」

この嵐はここにきて更に凶暴さを増した。

その圧力に圧され、竹がじりじりと後退する。

これが燃え尽きる蠟燭の、最後の炎なのだということは瞭然だった。多分、このまま何もしなくても竹は勝利を手にする事が出来るだろう。

宿禰が進む道には自滅の二文字しか待っていない。

だが、それでは解決したことにはならない。

竹が欲しいのは勝利ではなく、あくまでも解決なのだ。

幕を引く役目は、解決士の役目。

竹は右手を奇妙な形にした。

拳でも掌底でもなく、何か物を掴むような形。

そう——例えば蛇が大口を開けて獲物を呑み込もうとしているような。

狙う先は吸血鬼の白い喉。

竹の右手はその柔らかい喉に喰い込み、削り飛ばすだろう。

しかし、射程距離にはまだ半歩遠い。

確実に一撃で引導を渡すには、あと半歩分近付かなければ。

竹はその半歩を埋める為に、宿禰の右爪を屈んでかわしながら、左足を踏み出した。

あとはそのまま右手を振るうだけ。

——だが、竹の右手は宿禰の喉を食い千切ることにはなかった。

竹の体勢が微かに崩れ、右手が空を切る。

「——にえ？」

竹は間の抜けた声を出しながら、確かに見た。

吸血鬼の眼光が鋭く輝き、ニヤリと口元を歪めたのを。

藍の章 14 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。
すみません、決着にはあと1話必要みたいです。

藍の章 15

＊

左足を踏み出した瞬間に感じたのは、なんとも気色悪い異物感だった。

ぐにやり、という擬音の後にずりり、という擬音がピッタリはまってしまう感触が、踏み込んだ左足から這い上がる。

そこで攻撃をやめることが出来れば良かったのだが、異物感が脳まで到達するより一足早く、身体は予定通り右手を振るっていた。

踏んでしまった何かの影響で、身体が僅かにぶれる。

どうやら滑りやすいものを踏んだらしい。

右手が目標を通過していくのを見届けながら、自分が何を踏んだのか瞬時に把握する。

——誰のものであったかも知れぬ、転がった片腕。

それは死体の山から離れた唯一の残骸。

吸血鬼が首の皮一枚で、竹の右腕を回避する。

——ああ、これが狙いだったのか。

竹は宿禰の狙い理解し、最高速で迫る回避不能の一撃に覚悟を決めた。

／

私では彼に攻撃をあてることは出来ない。

そんなことは、これだけ避けられ続ければ嫌でも理解できた。

だから私は考えた。

両手を振るいながら、熱に侵される脳みそと、吸血鬼の本能に問いかけた。

どうすれば、彼に攻撃が当たるのか。

その問いの結論は、99%不可能だろう、という絶望的なものだった。

だが、辛うじて1%は残った。

それは、愚にもつかない無謀な策で、光明というには暗すぎる光だったが、私にはそれに賭ける道しか残っていなかった。

もし、彼に反撃できるチャンスがあるとしたら、それは彼が勝負を決めようとする大振りの一撃、それをかわした直後しかない。

いくら彼といえど、大振りな攻撃をした後は、格闘戦のセオリー通りに隙が出来るはず。

だから私はその刹那に最高の一撃をくらわせる。

しかし、彼が勝負を決めるような大振りをしてくるってことは、それは恐らく彼の最高速での攻撃になるだろう。

……私に避けることが出来るのか？

無理——普通に考えたら、そんな攻撃出させた時点でジ・エンドだ。でもそれをかわさなければ私に道はない。

どうやって？

どうやって？ どうやって？

どうやって？ どうやって？ どうやって？

どうやって？ どうやって？ どうやって？ どうやって？

考えている最中も、身体は限界へと向かっていく。

このままじゃ、私は何もせずに死ぬ。

私はこのまま一人で終わってしまう。

——そんなのは嫌だった。

物言わぬ死体になりたくはない。

——死体？

それでピンときた。

それもまた、愚策も愚策。下の下の策ではあったが、もう限界も近い。

これに賭けてみるしかなかった。

——彼の勝負を決める一撃を繰り出すときを狙って、その足をすく

ってみよう。

さっきそこに棄てた死体の腕で。

もしそれが成功すれば、自分の回避能力と合わせてギリギリでかわせるはず。

それが荒川宿禰という吸血鬼の出した、無謀で絶望的な決断だった。

／

無謀を愚策で補強するという、最低最悪の組み合わせは、最高の結果を生み出した。

引導を渡すはずの一撃は、ここぞというタイミングで足が滑ってかわされるといふ、なんとも間抜けな結果になった。

そして生み出された一瞬の隙。

宿禰は限界を突破しつくした最高速で、左爪を竹の右胸に突き出した。

右腕を振り切った竹にとって、右の胸は無防備な上に死角。

最高のポイントを最短のルート、最小限の動きで狙われた竹に避ける術はない。

——ビシャッ。

肉が裂け、血が飛び散る音。

「——くっ」

竹の口端から血が垂れる。

「な——」

宿禰の口から驚愕の声が漏れる。

吸血鬼の左爪は、確かに竹の衣類を突き破り、右胸に突き刺さっていた。

しかし、致命傷を与えるはずの一撃は、深さ1センチほどのところで止まっていた。

否——止められていた。

「なんて——」デタラメ。

宿禰は、震える声で呟いた。

最速の一撃を放ったはずの左腕が、その目的を達成する途中で竹の左手に掴まれたのだ。

竹が左手を動かした瞬間はわからず、掴まれた後に始めて認識できたほどの神速。

掴まれた左腕は1ミリだって動かない。

狙いが外された者。

狙いが的中した者。

その程度の差では、竹と宿禰の差は埋らず、結末は覆らない。

「死ぬかと思った」

ぽつり、と竹が言った。

その声は、今まで宿禰が聞いた竹の声の中で一番穏やかで、それ故に――宿禰に戦慄が走る。

限界を超えた代償か、今はもう宿禰の体は掴まれた左腕だけじゃなく、その全てが動かせない。

それでも、逃げ出したくなるほどの恐怖。

竹はそんな宿禰に、優しく微笑むと、ゆっくりとした動作で突き刺さった左手を引き抜いた。

ぴしゃり、と微かに血が吹き出て宿禰の顔にかかる。

念願だった竹の血。

しかし、それは今となっては、絶対的な死を香らせる恐怖の対象でしかない――

「――あ、あああああああああああああ」

死を予感した獣が、満足に動かない体で最後の抵抗を見せる。

吸血鬼に残された最後の武器。

鋭い両牙をむき出しにして、宿禰は竹に倒れ掛かるように近付いていき――

「じゃあね」

……そんな別れの言葉を最後に聞いた。

それは今まで打ち込んだどの拳よりも、速く重い一撃だった。

吸血鬼の胸に叩き込まれた右ストレートは、肋骨を粉碎し、背骨をへし折る。

竹の右拳に骨が折れていく不快な感触が伝わり、その感触の中で、宿禰の心音が止まったことを確認した。

衝撃で後方へと吹っ飛んでいく宿禰の体に、先ほどまでの獣の身のこなしはなく、地面に落ちた後も壊れた人形のようにゴロゴロと転がっていく。

そして、十数メートルのところで止まった宿禰に、竹は無言で近付いた。

「……っ」

竹は頭上に輝く月を見据えるように、仰向けに倒れた宿禰を見て、息を飲んだ。

見下ろした吸血鬼に生气というものはない。

荒川宿禰は、竹の一撃によって生命活動を完全に停止したのだから。

だがしかし、宿禰の表情は竹が最後に見た死に抗う吸血鬼のそれではなく――竹がよく知る、野に咲く花のような笑顔だった。

何故、最後に彼女がそんな表情を作ったのか竹にはわからない。

問いかけようにも、宿禰はたった今、竹が殺してしまったのだから。

竹はもう一度、宿禰の穏やかな笑顔を見て呟く。

「……笑えねえなあ」

その呟きは、静寂を取り戻した公園に吞み込まれ、透き通った夜空に満ちた月が変わらず座している。

「寒い」

もう一度だけ白い呟きを吐く。

感傷と後悔を忘れるように。

竹はそれで気持ちを切り替えたように、手足を動かした。

それが誤魔化しであろうと、竹の仕事はまだ終わっていないのだ。

死体だらけの、この場の処理をしなければならない。

竹は寒空の中、せっせと働く。

出来るだけ早くここから離れたかった。

それは自己の罪からの逃避か、あるいはその罪すら認めてしまう
酷薄な心からの逃避か。

とにかく、竹は後片付けを手早く済ませようと行動した。

その最中、竹の携帯電話が鳴った。

処理がまだ完璧に終わってはいなかったたので、電話を取るか迷ったが、一向に鳴り止む気配がなかったたので、竹は仕方なく電話に出た。

「あい、もしもし」

「竹？ えっと、落ち着いて聞いて」

電話口で松田が興奮を無理やり抑えたような声で言う。

竹はその声色に、なにか普通ではない雰囲気を感じ、真面目な声で聞き返した。

「なに？」

松田は一度大きく息を吸い込むと硬い声で、

「――大木がやられた」

そんな信じられない言葉を口にした。

＊

まだ物語は、解決などしていない。

白銀と藍色。

解決と裁き。

今宵、満ちた月は、欠け始める。

藍の章 15 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。
更新遅くてすみません。

とはいえやっところまでできました。
次回より漸く後半戦突入です。

俺は選ばれた存在だと思っていた。

『天岩戸』という特別な組織においてすら、俺は選ばれた存在だと思っていた。

事実、生まれた直後の『八咫鏡』やはたのかがみによる神格測定では歴代最高値を更新し、神々が遺した神秘の工芸品、アーティファクト『神具』の一つを有し、史上最年少で組織を実質的に運用する『管理者』セブンスの座の一つについた。藍の位を託された俺の上には、組織の長たる最高神『天照』あまそらすしかなかったし、ゆくゆく俺はその座につくのだろうと確信していた。間違いなく俺は栄光の道を歩んでいた。

……まあ一時期、同じ『管理者』の男女と組まされて、『始末屋』なんていう些事に奔走したこともあったが……。

それでも俺は間違いなく、トップへの道を、そして——扉の向こう側への道を進んでいたのだ。

しかし——『天照』のみが許される、純白の外套。

その組織の者なら誰もが羨む死に装束を纏う指名をされたのは、俺ではなく別の人物だった。

天倉竹。

豊作と言われた同年に生み出された者たちの中で、神格も能力も特別秀でたものが何一つなく、多少器用であるという評価から、こ
とあるごとに様々な部署を渡り歩かされていた、ある種、便利屋の
ような人物だった。

その在りえない采配に誰もが驚き、阿鼻叫喚の大騒ぎになった。

当時の天倉竹の階級は中級神であり、『神具』はおろか、その下
位に位置する『宝具』さえ有していなかったのだから。

だが組織の長である『天照』の決定に逆らえる者は、誰一人いなか

った。

もし、当時の『管理者』全員で不服を申し立てたとしても、その決定は覆らなかっただろう。

それは『天照』の権力が絶対だったのではなく、『天照』という称号を持った天野輝血という人物の力が絶対だったというだけの話。自分の強さに絶対の自信を持っていた俺でさえ、あんな怪物を相手するのは御免だった。

しかし、その決定に異議を申し立てた愚か者が、一人だけいた。

天倉竹、本人である。

“面白くなさそうなんで、嫌です”

正直、気でもふれているのかと思った。

『天岩戸』という組織で生まれ育った者であれば、『天照』という位は誰もが羨み、何ものよりも尊いものなのだ。

その指名を断るなど、その場にいた『管理者』、テンポイント『幹部』の殆どが馬鹿みたいに口をあんどりと開けて、驚天動地を表現したのも無理はない。

当然、俺もその中の一人だった。

しかし、その状況の中、さも可笑しげにして口元を押さえていた人物が三人いた。

『赤の女王』と『黄の翁』、そして当の『天照』である。

何が可笑しいのか、全く理解が出来なかったが、それでも俺はチャンスだと思った。

『天照』に逆らった罰に天倉竹が殺されてしまえば、次期『天照』は別の人物になる。

そして、当然その役回りは俺に回ってくるはずなのだから。だが、その算段は脆くも崩された。

何を思ったのか、『天照』はすぐさま天倉竹に譲歩案を出したのだ。あの『天照』が譲歩をするなど、聞いた事がなかったし、その異常事態に数名が卒倒した。

そんな事はお構いなしに、『天照』と天倉竹は会話を進めた。

“では今すぐには言いません。

暫く私の下で働きなさい。

そうすれば、そのうち気も変わるでしょう。

もし気が変わらなくとも――あなたもこの組織の者なら、この決定が覆らないことはわかるでしょう？”

“……わかりました。その代わり一つ条件があります”

“なんですか？”

“何人かオレが自由に使える人物が欲しいんですが”

“良いでしょう。”

今まで使われる側だったあなたが、使う側に回るのでから、そういう経験も必要でしょうね。

ただ、どこも今は人手が足りないので完全な直属というわけにはいきません。

ですが出向という形で、必要な時に自由に出来る人物を用意しましょう。

誰か希望の人物はいますか？”

“はい。何人か”

“では今日中に、リストアップしたものを私まで持ってくるように”
“了解です”

“――それでは、今より天倉竹を次期『天照』とします。

ただし、これは外部には漏らさないように。

『黒の教団』が壊滅して、『騎士団』の風当たりも強くなってきますからね。

彼の近くに余分な虫を近付かせるのは、よろしくありませんので”

そんな『天照』の言葉を最後までまともに聞き届けられたのは、終始笑みを絶やさなかった『管理者』の二人と、栄光の道を突如遮った天倉竹に対する憎悪を灯した俺だけだっただろう。

そうして、天倉竹は次期『天照』という裏の地位と、彼のためだけに新たにつくられた部署、司令部と十二名の出向部下という表の地位を得たのだった。

——結末として、この裏の地位は組織の外に知られることはなかった。

＊

「——大木がやられた？　どういうこと？」

説明してくれ、と竹は松田に促す。

「いや、俺もよくわかんないんだけど。とにかく来て。今、なおやんの家にいるから！」

最初こそ冷静に話していた松田だったが、段々と声に動揺の色が帯びてくる。

「……了解。こっちももう終わるからすぐに行く」

竹はその声から、松田もよく現状を把握できていないのだと判断して、電話をすぐに切った。

その際に、携帯電話を握りつぶしてしまっそうだった。

松田以上に現状がわからない竹は、それだけ動揺していた。

十三夜のメンバーで友人である、大木直也^{おおきなおや}がやられた。

竹は、『どうして？』、『なぜ？』、『誰が？』、『まさか死んでないよな』など様々な疑問を一時無理やり凍結させて、残った処理を手早く行うことにした。

今は、一刻も早く、石渡の家に行かなければならなかった。

竹が石渡の住むアパートについたのは、それから1時間ほどしてからだった。

時刻は既に深夜1時を半周近く回っている。

死体の処理を終えて、公園から直行すればもっと早く着いたのだが、竹は一度自宅に戻ってやることをやってから行く事にしたのだ。電話を切った直後こそ、一刻も早く行かなくてはと思っていたが、『大木がやられた』ということは『死んだ』のではなくまだ生きて

いるのだと推測し、更に石渡の自宅にいるということは、既に治療が開始しているのだろうと考えて、今の自分が行っても邪魔になると判断してのことだった。

神域の医者と人形師が一緒にいて、電話をしてくる余裕があるのだから最悪のケースはないだろう。

どこか冷めたものの見方だったが事実、自宅に戻った時に松田から「まだ？」という連絡が入ったときに、大木が生きているという確認はとれた。

なので、2度目にかかってきた訪問を急かす為だろう電話は無視した。

電話を取るよりも、やることを迅速に片付けたほうが効率が良いと思ったのだ。

そのついでに、右胸の治療と着替えは済ませた。

竹は、一応ノックをして、中からの確認を取らずに部屋へと入る。よっぽど慌てていたのか、それとも竹が来るからそうしていたのか、地下への扉は開きっぱなしだった。

竹は靴を脱いで、一直線に地下への螺旋階段を下りた。

およそ2週間ぶりの白い空間は、以前来たときよりも一層、病院としての匂いが濃く充満していた。

鼻を通り抜ける消毒液の匂いに混じって、ねっとりとして血液の臭いがまとわりつく。

先ほどまで嗅いでいたのと同じ、その臭いに眉を寄せつつ、竹は疲れた様子で椅子に腰掛ける松田と石渡に声をかけた。

「大木は？」

アスクレピオス

「『医神の間』にいる。今は麻酔で眠ってるよ。あと1、2日くらいはそのままかな」

石渡は壁際にある扉に目をやりながら言った。

その扉の奥には、石渡が普段生活している部屋が数部屋あるのだが、その一画に『医神の間』アスクレピオスという部屋がある。

その部屋こそ、自己の医の境地に至った、石渡の本当の仕事部屋である。

ただ、石渡は滅多に部屋を使用することはない。

何故なら、竹が知る限り最高の医者である石渡は大抵の場合、研究・実験室でもあるこちらの部屋で医者としての仕事をこなすことが出来てしまうからだ。

それに、そもそも『医神の間』アスクレピオスなどと大層な名前が付けられているが、その部屋自体は何の変哲もない手術室だったりする。

要は心持の問題。

その部屋を使うのは、医の神の領域に足を踏み入れた石渡が、その医术を十二分に発揮しなければならぬ患者が現れた場合のみなのだ。

そして、その部屋を使ったということは――

「そこまで……酷かった？」

「治療があと少し遅れてたら、死んでたかもしれないくらいの重体。まあまつつんがいたから、色々と助かったけど」

石渡はげっそりとした顔で答えた。

「マジか……」

竹は啞然とするとともに、自分の推測の甘さに苛立ちを覚えた。

なにが、『死んだ』のではなくまだ生きている、だ。

もし治療したのが石渡じゃなかったら、大木は間違いなく死んでいた。

なにが、今の自分が行っても邪魔になる、だ。

松田は早く来てくれ、と言ったのは、松田と石渡が揃って、なおかつ『医神の間』アスクレピオスを使用して万全ではないと判断してのことだったのだ。

「……ごめん」

竹は素直に頭を下げて、石渡と松田、そして眠っている大木に詫びた。

「あい。もう良いよ、二人でどうにかなったしねー。でも何で遅く

なったかは教えてよ」

タンクトップ姿の松田が言った。

竹はこの真冬に何故にタンクトップ、という疑問はひとまず置いておいて、松田の疑問に答える。

「……いや、アレクサンドラから請けてた依頼が終わったから、その処理をしてから来たんだわ」

竹は、パイプ椅子を広げて二人の近くに座った。

「あー……、報告とかそっち系だ？」

「まあ——そんな感じ」

竹が一瞬、右手に寂しげに目を落としてから頷いたのを、松田は少し沈痛な面持ちで見届けた。

竹が請けていた依頼を終えたという意味。

そして、竹が寂しげに右手を見た意味。

それは——つまりはそういうことなのだろう、と松田は全て聞くことなく理解した。

石渡も事の内容を全て理解したわけではなかったが、その竹の様子に気付いて、微妙な表情をする。

「……」

「……」

「……あーっと、さ……松は何故にタンクトップ？」

少し気まずい空気になったのを振り払うように、竹が茶化した口調で言った。

「え？ あ、これ？ これは熱くなったから脱いだけ。治療手伝った時、汗かいたからねー」

「ああ、そういうことね。んで、その着てた上着はどこにあんの？」

「——どこだっけ？」

「いや、オレが聞いたんだけど」

「まっつんの上着は、『医神の間』アスクレピオスで脱ぎっぱなしになってた」石渡が言った。

「あー、はいはい。そうだったそうだった」

松田はよく響く高い声で言いながら、ズボンのポケットからタバコを取り出して、一本口に銜えて100円ライターで火を点けた。その動きがあまりにも自然だった為、竹は最初気が回らなかったが松田が煙をひと吐きしたところで、ふと思い出した。

ここってタバコ良かったんだっけ？

まがいなりにも医療行為がされる部屋である。

大分前にこの部屋は禁煙だとか聞いていた気がしたが、仕事の疲れと深夜2時近いこともあって、よく思い出せなかった。

だが石渡が何も言わないところを見ると、禁煙は思い違いなんだろう。

どころか、疲れた様子の石渡は松田がタバコを吸い始めると、

「あ、まっつん一本もらえる？」

などと進んで吸おうとしていた。

「じゃあ、松。オレも頂戴」

「うい」

竹と石渡は松田からタバコを貰い、ライターを借りて火をつける。

ごく当たり前に、美味そうにタバコを吸う高校生。

いい感じに最低の図だった。

更に松田が、「なおやん、灰皿どこ？」と聞くと、

石渡が「あ」と何かに気付いたように呻き、続けて「おおーい！

この部屋禁煙じゃなか！」と軽く叫んで天然パーマの頭を抱えた。大木を治療した疲労に加え、松田にあまりにも自然にタバコを吸われた為、全く頭が回っていなかったらしい。

竹は、あーやっぱりそうだったか、と自分の記憶力に自画自賛しつつも、

「じゃあ灰皿ないから、ここに灰捨てちゃって良いんじゃない？」と無責任なことを言った。

「ちょ、良くないっての！」

石渡が焦ったように言う。

「あとで掃除するから」

松田が、だったら良いでしょ、みたいな顔で石渡に言った。

「そういう問題じゃないから！ あー、もう、しょうがない。今、灰皿持ってくる。頼むから灰落とさないでよ」

石渡はそう松田と竹に念を押すように言って、タバコを銜えながら、私室へと歩いていった。

禁煙の部屋に灰皿持ってくるくらいなら、三人が向こうでタバコ吸ったほうが良いんじゃないのか、と思ったが口には出さなかった。動くのが面倒だったのと、先に吸い始めた松田のタバコは、先端がよい感じの長さになっていたのだ。

既にデッドラインスレスレ——どころかデッドラインは当に突破している。

しかし、それでも貪欲にニコチンを求める松田。

灰を落とさないように、慎重に口元に持ってこられたタバコは——案の定、真っ逆様に白い床に落ちた。

「……あ」

「あらら。駄目じゃん松」

くつくつと引き笑いをする竹。

その時、竹は油断していた。

竹のタバコの先端もまた、重力に逆らえなくなる長さへと成長していたのだ。

「くくっ……あ」

垂直落下、第二弾。

「……」

「……」

落ちた灰を呆と見つめる竹と松田が次に取った行動は——

「——松、そこにあるティッシュとって」

証拠隠滅だった。

松田が立ち上がり、石渡のデスクからティッシュを竹と自分用にとる。

「はい」

「さんくす」

二人は落ちた灰をティッシュで取って、デスク横の燃えるゴミ用のゴミ箱の中に投下し、微妙に残った灰は、息で吹き飛ばして散らした。

「おっけーい」

「完璧だな」

二人は頷き合い、パイプ椅子に座って、石渡が帰ってくるまでタバコを吸わずに待つことにした。

石渡はその後すぐに戻ってきて、灰皿を差し出した。それを竹が受け取る。

灰皿の中には、一本、吸殻が入っていた。

石渡の手にタバコがなくなっていたので、石渡であることは間違いなかった。

部屋が禁煙ということを思い出したので、消してから来たのだろう。

竹が松田に灰皿を向けながら、二人ともタバコを消した。

それは、灰が短くなってるタバコに気付かせない為の誤魔化しだったのだが、幸いにも石渡に気付かれることはなかった。

それに一先ずほっとする竹と松田だった。

しかし、ほっとしたのも束の間。

「何か焦げ臭くない？」

と言って石渡が鼻をスンスン鳴らす。

「ああ、そういえば」

焦げ臭いな、と竹が相槌を打って、キョロキョロ臭いの出所を探す。

すると、松田が「煙！ 煙！」と指差した。

松田が指差したのは、先ほど『例の物』^{フツ}を投下したゴミ箱だった。水色のゴミ箱から、ゆらゆらと煙が立ち上ってきていた。

その煙は徐々に勢いを増していく。

三人は慌てて立ち上がる。

「うおう?!　なお!　水、水!」竹が石渡に言った。

「何で燃えてんの?!」石渡はわけがわからないといった様子だった。

「いいから水!」

「水ないよ!」

「ねえのかよ!　あ、松それナイス!」竹がいつの間にか移動していた松田を見て、言った。

それを見て石渡が叫ぶ。

「つてまっつんなにしてんの!」

「ええ?!」

松田は戸棚に並べてある薬品を手に取りろうとしていた。

「その薬品はかけちゃ駄目だから!」

「駄目なのかよ!」

「かけたら死ぬよ!」

「じゃあこっち!」

「どれも駄目だったの!」

そんな馬鹿みたいなやり取りをしているうちにも、火は勢いを増してきていた。

どうする!?

足が火傷するの覚悟して、踏み消すか?

そう竹が考え、実行に移そうとしたとき、

「うおおおおお」

松田が怒声を上げながら走ってきて、火の手があがるゴミ箱を両手でひっくり返した。

当然、ひっくり返されて、燃え盛る中身が床に落ちる。

そして、更に松田は「熱っ、熱っ」とひるんだ声を出しつつも、逆さの状態のゴミ箱をその炎の上に被せた。

ぴったりと床に面したゴミ箱の中に、燃焼に必要な酸素は入らない。とっさの判断としては上々だった。

「……………あー。グッジョブ」

とりあえず、竹は松田に声をかけてから、

「なお、水持ってきて。オレと松はこれ見とくから」と言った。

「お、おう」

石渡は頷いて、少し煙たくなった部屋から再び私室へと歩いていった。

石渡が扉を閉めてから、残った竹と松田は口々に呟く。

「やべえな」

「やっぱいねー」

「どっちのだ？」

ゴミ箱が燃え上がった原因は、どう考えても二人がタバコの灰を包んだティッシュだろう。

「竹でしょ」

「いや、松だろ」

「絶対、竹」

「絶対、松だな」

二人が二人とも罪を押し付けあう。

「……」

「……」

二人は不毛になりそうな押し付け合いをやめて、

「誤魔化そう」

「だねー」

と共犯関係の継続を取ることにした。

「竹、なんか言い訳考えといてよ」

「何故にオレ。松も考えてよ」

「いやいや、俺は火を消したから」

松田は逆さのゴミ箱を見ながら言った。

「うっ……、OK。考えときます」

竹は溜息をつきながら頷いた。

そして、竹は石渡が戻ってきた時にする言い訳を考え始める。しかし、別の思考が言い訳を考えることを阻害する。

それは、あの程度の火があがっただけで三人が三人とも取り乱した
こと。

通常であればありえないことだ。

いや、そこらの高校生であれば、あのくらいの動揺は当然かもしれない。

しかし、竹たちは普通の高校生ではなく、人外の異能を持ち、数々の
修羅場をくぐってきた者たちだ。

それが、突然のこととはいえ、小火騒ぎであの体たらく。

最後は松田が機転を利かせたから良かったものの、それまでは皆が
うろたえるだけだった。

それは何故なのだろうか。

釈然としない疑問に決着が付いたのは、水を張った風呂桶を持って
戻ってきた石渡の顔を見た時だった。

ああ——そっか。

竹は合点がいった。

次いで、竹は松田の顔を見る。

——やっぱり。

松田と石渡の顔に浮かんでいたのは疲労の相。

多分、鏡を見れば竹も同じようなものだろう。

三人は、とにかく疲れ果てていたのだ。

小火に動転して、その対策をすぐに取りれないほどに。

竹は連日続いた仕事によって。

石渡と松田は大木の治療によって。

だから竹は、あることを決定して口にした。

「——とりあえず、今日はもう寝ようぜ。皆疲れてるだろ」

それは、三人の体調を慮ってのことであると同時に——小火騒ぎ
を誤魔化す為のものであった。

藍の章 16 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

間が空いてしまった分、少しだけ、本当に少しだけですが長めです。一応、簡単に見直してから投稿していますが、何かありましたらご指摘ください。

藍の章 17

＊

12月22日。

一番早く目を覚ましたのは竹だった。

いつもと違う部屋の様子に、一瞬、ここはどこだ、とクエスチョンマークが浮かんだものの、寝起きで朦朧としていた意識が少しずつ覚醒していき、自分が昨晚あのまま石渡の家に泊まったことを思い出した。

小さくあくびをして、まだ疲労感漂う体で、のそのそと起き上がり簡易ベッドに腰掛ける。

閉じていたカーテンを開け、隣のカーテンを少しずつ拉してその内を覗く。

竹と同じく、昨晚は石渡の研究・実験室ベッドの一台を借りて泊まっていた松田は、まだ眠っていた。

竹は松田を起こそうかと思ったが、まだその必要性を感じなかったのでやめておいた。

それよりも、と竹は枕元に置いておいた携帯を回収し、二つ折りの携帯を開く。

ディスプレイは、現在時刻を9時23分を表示しており、そしてメールの受信を示していた。

受信していたメールの数は5件。

竹は、まあこんなもんだろ、と内心で頷きながら受信メールを一つずつ開いていく。

内容はどれも似たり寄ったりだった。

マジで？ OKっす。

了解しました。

わかった。気を付けとくよ。

はいよー。

マジかよ。了解。

——実にあっさりした内容である。

だが、この内容も竹は予想の範疇であった。

これらの受信メールは、昨晚の竹が送ったメールに対する返信だ。昨晚、竹は眠ってしまう前に、大木が重体となった、ということと、詳細がまだ不明な為、とりあえず身の回りに注意しておくことを、松田と石渡を除く、他の十三夜のメンバーに一斉送信しておいたのだ。

そのメールに対する反応が先の通りである。

友人の一大事に全員から返信が来ず、しかも返信してきた面々も簡潔な文面だけ。

さらには重体となった大木に対する気づかいなど皆無。

普通に考えて、本当に友人なのか、と疑いたくなるような淡白さである。

しかし、竹にはそんな疑いも、彼らに対する非難も一切ない。

竹たちは十三夜という一つのチームではあるが、別に馴れ合っているわけでもないし、それぞれ依存しているわけでもない。

つかず、離れず。

だけど、必要な時が来れば必ず集るし、力も合わせる。

十三夜は組織ではなく、あくまでも個の集り。

だから、事実の把握と注意を促しただけの竹のメールでは、皆、あの程度の反応なのだ。

——何かあれば言うてくるだろう。

十三夜は、ともすれば、いい加減にも思える信頼関係で成り立っているのである。

今までも、そしてこれから。

竹はメールの受信画面を閉じてから、カラフルな液晶を何か迷っ

ているように眺める。

そのまま少し眺めた後、今度は携帯を折畳んでは開き、折畳んでは開きを繰り返す。

パチ、パチと携帯の開閉音が室内にシャープに響く。

落ち着きのない自分に竹は溜息をついた。

竹が迷っているのは、大木がやられたという情報を大神深翠、山吹蒼香、秋野紅葉、アレクサンドラ・ワーナーに教えるべきか否かである。

これは微妙な問題だった。

大木がやられた詳しい経緯は一切不明ではあるものの、身の注意を促すという点では教えておいた方が良いのだろう。

まがりなりにも、彼女たちを守らなければならない竹の立場的にもその方が良い。

しかし、無闇に彼女たちをこちらの世界に引っ張るのは、竹としては避けたいところでもある。

元々それぞれが、裏の世界に足を踏み入れていた彼女たちである。今は現役で騎士団の王女であるアレクサンドラ以外は、そこから距離を取らせているものの、知れば確実にそんな距離などお構いなしに近づく。

——世界の方から這い寄ってくる。

それも物語に深く関わった彼女たちに近付くのは、並みの世界ではなく、深淵に最も近い世界だ。

力がなければ、命など簡単に失う場所。

つい数時間前に散った、吸血鬼になった少女のように。

それが竹を一層迷わせる。

昨晚など、ベッドの中で迷ったまま眠ってしまったくらいだ。

竹は決断が出来ない自分の無様に、もう一度深く溜息をついた。

「……はあ。まあいいや」

竹は結局、その問題を先送りすることにした。

注意を促すにしても、もう少し情報が出揃ってからにしよう、と

いう真つ当な理由をでっち上げて自分を納得させて。

……ヘタレである。

竹はそう決めると携帯をポケットにしまい、今度こそ松田を起こすことにした。

ベッドから立ち上がって、カーテンを勢いよく開くと、シャーツと、カーテンレールが景気よく音を立てる。

松田はそれだけで、すぐに起きた。

隣の竹が起きた気配で、殆ど覚醒状態だったのかもしれない。

「……いま何時？」

未だにタンクトップ姿の松田がもぞもぞと、体を起こしながら聞く。

竹は寒くなかったのか、と考えつつも答える。

「9時半くらい」

「……学校遅刻じゃん」

寝起きなので、松田の声は若干擦れている。

「あー、そういえばそうか。でも今日行くつもりあった？」

「……ないっす」

「だしょ」

二人はそう言って軽く笑う。

「――でも竹やばいんじゃない？」

「なにが？」

「ずっと学校来てないじゃん。出席日数とか色々」

松田は色々、のところを強調して言った。

竹は苦笑いしながら、

「……多分平気だろ。なんとかなる、なんとかなる」と言った。

「まあ良いや。なおやんは？」

「さあ？ まだ寝てるんじゃない？ とりあえずあっちの部屋行ってみるか」

竹が石渡の私室への扉を顎で示す。

「そうだねー」

松田が頷いたのだけ確認して、竹は扉へと向かった。

ドアノブに手をかけたところで、一度後ろを振り向いて松田を待つ。

松田は枕元に置いていた、携帯やタバコをポケットに収めてからベッドを降りた。

竹はそこまで確認すると、ドアを開いて通り抜けた。

スリッパがペタペタ音を立てて、後ろについてくるのを聞きながら、竹はとりあえず部屋の一番奥、茶の間へと音を立てずに歩く。

音がないのは、別に竹が特殊な技能を発揮しているわけではなく、松田と違ってスリッパを履いていない為である。

茶の間へと到着すると、石渡が牛乳の入ったコップ片手に昨日とは違う服でテレビを観ていた。

その様子を見るに、竹は一番早起きではなかったようだ。

「おー、おはよう」

「おはよ」

竹は石渡の挨拶に答えながら、木製のローテーブルを挟んで石渡の対面に座る。

ヒーターで暖められた部屋で、座布団だけが冷たい。

竹がひんやりとした座布団の心地よさを感じていると、遅れて松田が入ってきた。

「ういー」

「おう」

適当な松田の朝の挨拶に、石渡は片手を上げて同じく適当に答えた。

松田はサイズの大きいスタジャンを着ていた。

かなり良い一品なのだろうが、B系の服のブランド知識などない竹には、よくわからなかった。

ただ、一つわかることがあるとすれば、

「寒かったから取ってきた」

やっぱり寒かったのか、ということくらいである。

松田は、竹と石渡の間に座りながら石渡のコップを見て、

「なおやん、何か飲み物ない？」と言った。

「おう、牛乳で良い？」と立ち上がって聞く。

「お願いしまーす」

「あ、じゃあオレ、お茶下さい。冷たいの。なければ水で」

竹が微妙に我俣っぷりを炸裂させて、キッチンに向かう石渡に言った。

石渡は微かな苦笑いを浮かべて、キッチンで冷たいお茶と牛乳の用意を始めた。

竹と松田は飲み物が届くまで、石渡が見ていたテレビを眺める。初老の男性の散歩番組だった。

「松、タバコまだある？」

竹がテレビから視線を外して聞いた。

昨晩と違い、この部屋には灰皿が常備されている。

「ん？ あー、あるある。吸う？」

「下さい」

「あいよ」

松田が二本タバコを取り出して、一本を口にくわえて、もう一本は竹に渡した。

竹は松田に火をつけてもらって、二人で寝起きの一本を吸う。

石渡が牛乳とウーロン茶を持って戻ってきた。

竹と松田は礼を言いながらそれを受け取って一口飲んだ。

石渡が再びあぐらをかいて座り、自前のタバコを取り出して火をつけた。

「そういえば、なおは学校は？」竹が聞いた。

「今日は休むしかないわ。大木いるし」

「そりゃそうか」

竹は頷きながら煙を肺に入れると、

「――じゃあ、そろそろ本題に入ろうか」

ゆっくりと紫煙を吐き出して続ける。

「何でこんなことになってんの？」

竹の言葉に石渡と松田は、どちらが先に説明するのか相談するよう一度目を合わせた。

「……あー、昨日の12時過ぎだったかな」

相談の結果、松田から説明を始めるようだった。

竹はそれを黙って聞く。

「何か音がしたから玄関の覗き穴から外覗いてみたら、大木がいきなり俺の家の前で倒れてたんだよねー。滅茶苦茶ボロボロの状態で意識ないし。それで――あとはなおやんお願い」

「え、ここでパス？」

石渡は松田の突然の振りに、戸惑いながらも、その後を継いで説明を始める。

「んと、俺はまっつんから電話かかってきて、大木がやばいからすぐに行くって言われて、その後10分くらいしてからまっつんが大木背負って来て、あとはすぐに治療しただけ」

「そんで俺はなおやんのヘルプ入る前に、竹に電話した感じ。そのあとは竹も知ってるから別に良いっしょ？」

「ん、ああ、それは良いんだけど……それだけ？」

竹がタバコの灰を灰皿に落としながら言った。

「それだけって？」

松田は竹に聞き返してから、コップに残っていた牛乳を一気に飲んだ。

「いや、誰にやられた、とか。大木が倒れてる時に怪しい人影見た、とかないの？」

「ないねー。てかいきなり人の気配が現れたから。多分、大木の能力使ったんだと思うよ」「まぢか……てことは、大木は瀕死の状態で、松のところまで逃げてきたってことか？」

「そうじゃないの？」

「そうじゃないのって……簡単に言うなよ。大木だってうちのメンバーだぞ？ そこの奴には負けないだろ」

「でも複数に奇襲にでもあったとか？」

「んー、だったら戦わずに逃げるんじゃない？　それこそ『空間接続』ならそれが可能だし。実際そうやって逃げてきたわけだし」

「いやいや、大木さんは何気に好戦的だから」

松田がタバコを灰皿で捻り消す。

「……否定できないところが恐いな」

竹もタバコを灰皿に押し付けながら、眉をひそめた。
すると、今まで口数の少なかった石渡が口を開く。

「――あのさ、多分だけど相手は一人だと思うよ」

「まぢで？」

「なんで？」

竹と松田が同時に言った。

「傷の付き方とか深さとかから見た感じ、かな」

石渡はギリギリまで短くなったタバコを灰皿に投入して、

「しかも相手は素手だったみたい」と続けて言った。

「――はいいい？！　一人で、しかも素手で大木をあそこまでやったって！？」

冗談だろ、と竹が叫んだ。

松田も同じ心境だったらしく、目を丸くしている。

「本当だって。まああくまでも俺の見立てだけどさ」

「い、いや、なおの見立てだっていうなら間違いはないんだろうけど……ありえねえ」

竹の言葉に石渡も頷く。

「うん。俺もそう思うから、今まで言わなかったんだわ。大木を素手であそこまでやれる奴なんてそれこそ、いいちゃんとか、おいちやんとかしか思い浮かばないし」

「……いや、あの二人でも無理だろ。まあ大木も素手で、能力使わなかったら出来るだろうけど。その辺どうなの？」竹が石渡に聞く。
「能力の方はわからないけど、大木も素手だったみたい。武器の類は何も持ってなかったし」石渡が答えた。

「……お互いが素手。相手は不明。能力の使用も不明。よくわからんな」

「だねー。でも大木が起きてから聞けば良いべ」松田が場を取り繕うように殊更明るく言った。

その言葉に竹も頷く。

「まあそうだな。今のところ大木個人の問題って線もあるし、もしそうなら下手に介入は出来ないしな」

十三夜はあまり組織として活動することではなく、基本的に個人的な仕事ばかりしている。

そして、個人の仕事に関しては、頼まれない限り手助けしないようにしているのだ。

これは、一応ではあるが十三夜をまとめている竹の方針である。

組織ではなく、あくまでも友人の集まり。

そんな青臭い決意である。

あまりにも滑稽。

裏の世界で、いや何処の世界でも一笑に吹かされてしまうだろう。だが、それでも竹のその決意は変わらない。

竹が集めた友人たちは、皆が変わらず同じ想いを秘めているのだから。

竹の言葉に、松田は頷いた。

「そうだねー」

「治療した時点で微妙な気がするけど」石渡が苦笑いしながら言った。

「まあな。でもそれでうちに矛先が向かうなら、別にそれでも良いだろ。その時は誰であろうと完膚なきまでに叩きのめしてやる。君等もそんな時はよろしく」

「あいあい」

「わかった」

三人は口元を緩める。

竹は残りのウーロン茶を飲み干すと、

「それじゃ、大木が起きるまでオレは一旦家に帰るよ。何かあったら連絡して」と言って立ち上がった。

「俺も帰るか」

松田もそれに続いて立ち上がった。

しかし、その二人をすぐに石渡が止める。

「ちょっと待って！」

「……なに？」 竹が問う。

石渡は立ち上がった二人を睨みながら、

「まだ昨日の燃えカスの片づけが残ってるから」と言った。

「「ですよねー」」

竹と松田は、引きつった表情でそう言って、二人で片づけをすることにした。

藍の章 17 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

アップしておいてアレですが、何か書き忘れている気がしてなりません。

お気付きの際はご連絡ください。

＊

竹と松田が、自業自得な後片付けをしている頃。

アレクサンドラ・ワーナーは、昨晩深夜に天倉竹から受けた依頼達成の報告内容とその詳細について、まとめた後、父であり騎士団の王であるヴィンセント・ワーナーに連絡をしていた。

「――というわけです。お父様」

執務室のヴィンセント直通のホットラインを通じて、アレクサンドラは一連の報告を終えた。

ここは、8月の終わりに王や騎士たちが仮宿とした白い城ではなく、超が付く高級ホテルのスウィートな一室である。

アレクサンドラは、この国に居座ることを決めた時に、このホテルの最上階33階、ワンフロア丸々を借り切り、なおかつ全ての部屋を自分のいように模様替え、または小規模な工事をともなうリフォームを潤沢な資金によっておこなっていた。

ワーナー家という由緒正しき、資産家の娘でもある彼女の金銭感覚は、常人には及びもつかないほどにズレているのだ。

さすが一大テーマパークのシンボルでもある城を、こともなしげに自身の宿にする男の娘である。

しかし、だからといってそんな横暴が良く通ったものだと思うが、そもそもこのホテル自体、ワーナー家と何らかの関わりがある宿泊施設だったので、存外問題はなかったとか。

彼女にとって問題があるとすれば、このホテルから竹の自宅まで、車で1時間以上かかるというところくらいである。

――それはさておき。

「……むう」

そんな大富豪でもあるヴィンセントは、アレクサンドラの報告内

容を一通り聞いて低く呻った。

アレクサンドラからの報告は、数ヶ月間で50名以上の人間を殺害した新種の吸血鬼を12体殲滅した、というものだった。

「新種の吸血鬼の詳細についても、先ほどそちらにお送りした資料のとおりです」

「……うむ。その、なんだ、まあ良くやった」

秩序の護り手として、申し分ない結果を出した娘を労うヴィンセントであったが、どこか齒切れが悪かった。

人ならざる魔の排除。

真性の吸血鬼ではないといものの、その在り方はヴィンセントの知る既に滅びた魔の眷属となんら変わりはない。

だからこそ、その化生を12体屠ったというアレクサンドラの報告に、ヴィンセントは複雑な心境を持っていた。

——まさか、一月と経たずここまでの結果を出すとは。

ヴィンセントがアレクサンドラと交わした約束。

それは一月で従来の倍の結果を出すことが出来れば、予定していた騎士の派遣は中止する、というものだった。

到底出来るわけがない、と高をくくってした約束を、彼の娘はあっさりとなしてしまったのだ。

——これでは約束通り、騎士の派遣を中止するしかない。

これらの確固たる事実がヴィンセントの齒切れを悪くし、複雑な心境を作った正体である。

とはいえ、彼は秩序を護る騎士の王。

この結果自体には、最大の賛辞の念を抱いているのも事実である。

数ヶ月で50名の人命を奪った、12体の吸血鬼。

この50という数字を多いとるか、少ないとるかといえ、考えるまでもなく後者である。

過去にヴィンセントが対峙した吸血鬼共は、たった半日で数百の人命を奪ったこともある。

例え、別種のものであろうと、賞金首でなかりと、吸血鬼は吸

血鬼。

その未曾有の危機を未然に防げたのだから、アレクサンドラの功績は素晴らしいものであるう。

だが、ヴィンセントは、

——まともな手駒も無しに、このまま我が娘をあの国に止めることを認めなければならぬというのか……っ。

それはいかん！

そんな危険な状態を継続させることは断じて出来ぬ！

何か、何か打開策はないのか！！

騎士の王たる男は、究極の親馬鹿な上に、往生際も悪かった。

「あー、サンドラ。この資料に間違いはないのか？ 特にこの吸血鬼がこれ以上増えないというのは」

ヴィンセントは、アレクサンドラから送られてきた資料を見ながら問うた。

「私が直接調査をしたわけではありませんが、まず間違いはないと思います」

その問いに、アレクサンドラは毅然とした声で答える。

「む、直接調査をしたわけではないのか。ならばこの資料を作ったのは誰だ？ その相手は信用が持てる相手なのか？」

ヴィンセントは食い下がるように言った。

彼がここまで食い下がる真意は、

『もしこの資料が間違っているか、または信憑性に欠けるのであれば、その討伐・調査隊として騎士を派遣してしまおう、そしてそのまま居座らせてしまえ』という微妙に卑怯臭いものである。

「送った資料自体は私が作成したのですが、そこに載せてある情報の全ては、アマクラタケからのものです。彼の話では、吸血鬼やそれに関連した薬物の情報は、十三夜の『電子の蜘蛛』と『意外精神』、その2名の調査結果であるとか。彼らの能力の高さはお父様も知っておいでしようから、信用もおけるものかと」

電話口からのアレクサンドラの言葉を最後まで聞き届ける前に、ヴ

インセントの表情が険しいものになった。

アマクラに十三夜だと？

何故、そこで奴等の名前が出る？

まさかこの成果を討ち立てたのは……。

「……問おう。我が娘よ。此度の12体に及ぶ吸血鬼の討伐。これを成し遂げたのは誰であるか」

「？ 何を今更。無論、私の夫になりますアマクラタケですわ。お父様」

「……」

——アマクラあああああああ！！

ヴィンセントはそう叫びたがったが、娘の手前なんとかその叫びを喉の奥で止まらせ、代わりに自分の予定を狂わせた少年の顔を思い浮かべて、頭の中で繰り返し殴り倒した。

どうして最初にアレクサンドラが、今回の報告をしてきた時に気が付かなかったのか。

アレクサンドラの実力では、12体もの吸血鬼をこの短期間で滅ぼすことなど出来るはずがない。

ならば、誰かに手を借りたと見るのが妥当だろう。

そもそもアレクサンドラは、最初から竹に手を借りると言っていた。だがヴィンセントは、竹がアレクサンドラに協力するなど露ほども思っていなかったのである。

ヴィンセントはこめかみに青筋を立てて、憤怒の形相をつくっていた。

——何故、奴が娘に手を貸したのだ？！

奴の人となりを考えれば、わざわざ面倒事に首を突っ込んでいくわけがない！

それに、騎士の派遣自体は奴には悪い話でもあるまい？

我が娘の仕事量を減らせるのだぞ！

婚約者として、それは喜ばしいことであろう？！

何かそうしなければならぬ理由でもあったのか！？

何だというのだ！

まさか我が娘との蜜月を邪魔されたくなかったのか！！

いや、それはこの前の我が娘の反応からありえん！

ありえんっ！

だとすると……………ハッ！

単純に我への嫌がらせか！？

それだ！

そうに違いない！！

天岩戸出身者は須らく、我をコケにするらしいなあああ。

敵は極東の地にあり！

いやいや、今はそんなことを考えている場合ではない。

落ち着くのだ、我。

アマクラ殺害計画は後でいくらでも練れる。

というか、もしアマクラが娘を不幸にした時の為に、既に計画自体はいくつか練ってあるではないか……っ！

とにかく、今は騎士の派遣問題の方が先だ。

「——様、お父様、どうかなさいました？」

会話の最中に不意にヴィンセントが数秒間沈黙したので、アレクサンドラは声をかけていた。

「むっ、いや、なんでもない。気にするな」

ヴィンセントは、出来るだけ不審にならないように答えた。

だが目下、ヴィンセントの頭の中は騎士問題のことで一杯だったので、少しだけ嘘くさかった。

アレクサンドラはその嘘くささに気付きながらも、さっさと会話を進める。

彼女は彼女で思惑があるのだ。

「そうですか？ なんでもないのなら良いのですが。それで、こちらの資料の信用性の方は良いでしょうか？」

「……良い」

ヴィンセントは押し殺すような声で言った。

『電子の蜘蛛』と『意外精神』から提供された情報であるのなら、それはほぼ間違いないものであることはヴィンセントも重々承知している。

「ありがとうございます。それではお父様、約束は覚えていますか？」

「な、なにをだ？」ヴィンセントの背に冷や汗がつつう。

「従来の倍の結果を出すことが出来れば、予定していた騎士の派遣は中止する、という約束です。まさかお忘れのはずがないでしょう？」

アレクサンドラは、自分の父親が親馬鹿であることも往生際が悪い事も知っている。

故に彼女はこの話題に早く入りたかったのだ。それこそが彼女の思惑であった。

対してヴィンセントは、

——まずいいいいいっ！

リミッター限界だった。

「ん、うむ、まあそんな約束も、した……な」

「ええ、それで今回の結果を鑑みて、どうでしょうか？ 私としては、条件はクリアしていると思いますが」

アレクサンドラは畳み掛けるように言った。

「……………そう、だな」

ヴィンセントは観念するように肩を落としながら続けて言う。

「騎士の派遣は中止する。アレクサンドラよ、此度の働き大儀であった。これからもその極東の地にて、秩序の護り手として精進するように」

その声は、先ほどまでの情けない心情を微塵も感じさせない、威厳ある王としてのものだった。

「かしこまりました。これからご期待に添えますよう、精進いたします。——アマクラとともに。それでは失礼いたします」

アレクサンドラはそう言って電話越しに、恭しく頭を下げて騎士

団の王との通話を終えた。

＊

通話を終えたヴィンセントは、アレクサンドラの最後の言葉に苦々しい表情をした。

「……アマクラとともに、だと？ サンドラめ、最後に我に釘を刺しおった」

ヴィンセントは、いつの間にか少し性格が歪んでいた娘を思い、少しだけ切なくなった。

魔人とまで呼ばれる男がそんな風に黄昏ていると――コンコン、と彼の執務室をノックする音がした。

「――入れ」

ヴィンセントは気を取り直して、訪問者に短くそう伝えた。

重厚な木製の扉を開いて入ってきたのは、脇に書類を抱えた騎士団の一番目だった。

「失礼します。つと我が主。どうかしたんですか？」

エドワード・エルガーは入室して、ヴィンセントの顔を見るなり軽薄そうな笑みを浮かべてそう言った。

「……エドワード、貴様、聞いていたのか？」

ヴィンセントは、僅かな怒気を含めた声で問うた。

エドワードは、ヴィンセントが座る執務机の前までやってくると、

「いえ、なにも聞いていませんが……お嬢さまのことですか？」と言った。

『剣手』の言葉に、ヴィンセントの眉がピクリと一ミリほど動いた。エドワードは、その僅かな動きを見逃さず、自らの予想が正しかったことを確認するように頷くと、

「良ろしければ、相談に乗らせていただきますが？」

やはり軽薄そうに微笑みながら言った。

「……」

ヴィンセントは、3秒ほどエドワードを見据えた後、

「いや、もう良い」と諦めるように言った。

エドワードの顔に嘘は見つけられなかった。

というより、そもそもこの聖者は嘘などつかないのだ。

「そうですか？」

「うむ。それよりも何だ？ 何か用があつて来たのであろう？」

「ああ、はい。まずはお嬢様の下への騎士の派遣についてですが――」

「その話しはもう良い。騎士の派遣は中止だ」

エドワードが書類をパラパラ捲りながら話すのを、ヴィンセントは遮るように言った。

「え？ 良いんで？」

エドワードが珍しく目を丸くして驚いていた。

ヴィンセントは、無言で頷く。

エドワードはそれで全てを察したような顔をしたが、それについては何も触れなかった。

彼とて主に忠誠を誓う身である。

その辺りの引き際は、承知しているのだ。

「そうでしたか。では『2番目』^{ビアンキ}には、派遣中止の旨を王から伝えておいて下さい。彼女、かなり張り切っていましたから、そこそこ梃子搦ると思われませんが」

「……むう。エドワード、お前から言っておいてくれぬか？」

「お断りしますよ、我が主。僕の口から言ったりなんかしたら、命が危ない」

エドワードは茶化すように言ったが、その言葉は何か真に迫っているものがあつた。

「かもしれぬな。『炎脳』^{ビアンキ}には我から言っておこう」

「早いうちにお願いします」

「うむ。それで、話しはそれだけか？」

「いえ、もう一つ。アマクラ、というか十三夜のことです」

「何だ？」少し緩んでいたヴィンセントの声が、鋭利に尖る。

「実はですね。まだ今月は十三夜から賞金首の提供がなされていないんですよ」

「何だと？」

騎士団と十三夜が結んだ協定内容には、

一、一ヶ月に二名以上の賞金首を捕らえ、騎士団に受け渡すこと。

一、但し下位ランカーは不可とする。

というものがある。

それがまだ今月は果たされていないというのだ。

「まあまだあと1週間程度ありますから、問題はないと思うんですが、一応報告だけでもと思ひましてね。……どうかしましたか、我が主？」

エドワードは、自分の言葉の最中に徐々に口元を歪めていった王を見て、怪訝そうに聞いた。

「いや、なんでもない。気にするな。さて、報告は以上か？」

ヴィンセントは口元を引き締めなおすと、そう聞いた。

「はい。以上です」

「ええ。では下がれ。あとビアンキに来るように伝えておけ」

「かしこまりました」

エドワードはヴィンセントに一礼した後、書類を抱えたまま王の執務室から出て行った。

執務室から出たエドワードは、20歩ほど歩いた後、苦笑いしながら呟く。

「アマクラも災難だね。どうも」

正しく邪な男は、ヴィンセントの心境と竹の状況を見抜き、把握して、やれやれと肩をすくめた。

その後、エドワードに言われて、騎士団2番隊隊長、『炎脳』クリステイーナ・ビアンキが王の執務室でヴィンセントに申し渡されたのは、

王女の下への派遣は中止。及び、もしこのまま十三夜から賞金首の

受け渡しがなかった場合、十三夜の討伐隊としての指名、であった。「ひゃっほううううう!!」と盛大に喜ぶビアンキを横目にヴィンセントは、

——アマクラ。まさか、我が娘への協力に氣を取られて、肝心の協定の方を忘れたか？

もしそうなら、我は貴様を評価しよう。

このまま賞金首を騎士団に引き渡さずに協定を破ってくれれば、貴様を殺す障害がなくなるのだからなあ。

ふはっ、ふははははははは！

などと、とても歪んだことを考えていた。

あの娘にして、この親あり、なのである。

——だが勿論、そんな事態は起きるわけがないのだが。

藍の章 18 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

ヴィンセントさんは、もっと渋いキャラだったはずなのですが……。
おっかしいなー、どこで間違えたかなー、と自分でも首を捻る親バ
カに出来上がってます。

藍の章 19

＊

掃除を終え、石渡の家からの帰り道。

竹と松田は自宅ではなく、駅を目指して歩いていった。

松田がどこかで何か食べよう、と言い出したからだ。

竹はその提案に、最初は首を横に振った。

何故なら、石渡の自宅から駅までの道のりは、モロに松田の帰宅コースと被るからである。

それだとなんとなく、一人で帰るのが退屈な松田に、利用されている気がしてシヤクだったのだ。

あと、早く帰って昼寝をしたかった。

なんだかんだで、竹は疲れたままなのだ。

しかし結局、そこそ良い時間だったことと、一度駅を回って家に帰ってもそこまで遠回りにならない、という自分を納得させる理由を自家発電して、それを了承した。

昨日の疲れた様子などで微塵もなく、ハイテンションで執拗に誘ってくる松田の体力に若干呆れた、ということもある。

――スタミナ太郎め。

そんな感想とも罵倒とも取れぬ言葉を胸の内で抱きつつ、ややスローなペースで30分ほど歩いて駅前に到着した。

この駅から徒歩で、10分かからないくらいの距離に松田の自宅はある。

対して、竹の自宅はここから松田の自宅とは違う方向に15分ほど。

竹はとりあえず、残りの距離はタクシーに頼ろう、とブルジョアなんだか貧弱なんだかわからないことを考えながら、

「なに食うよ？」周辺を見渡して松田に聞いた。

一通り見渡せる範囲には、ファミレス、ファーストフード店、ラーメン屋等、そこそのラインナップが揃っている。

「どうしょ？　竹はなにが良い？」

「んー、ラーメンはさすがに重いな……」

「じゃあ、あそこは？」

松田の視線の先にあったのは、緑色の看板のファーストフード店だった。

竹がラーメンで重いと言ったので、一番軽めな店をチョイスしようだ。

「ああ、良いよ。んじゃあそこ入ろう」

「ういー」

幸いにも店内はそこそこ空いていて、すぐにメニューを注文することが出来た。

二人は、番号札が乗せられたトレイを持って喫煙席に座る。

松田は準備よく、席に着く前に灰皿を自分用と竹用に二つゲットしていた。

まず二人は、

「とりあえず、お疲れい」

「お疲れーっす」とお互いの労をねぎらい、一服することにした。

竹は、までの道中で買っていたので、もう貫いタバコではない。タバコを吸いながら、注文した品が届けられるまで、くだらない話題で盛り上がる。

カウンターで注文を取っていたのが、おばちゃんだったのはいかなものか。

どうせ注文取られるなら若い方が良い。

そもそも制服は若い女の子が着るから良いのだ。

じゃあ制服なら何が一番か。

ていうか高校ってある意味天国だよね。

などなど、本当にしようもないことで盛り上がった。

そんな会話しているうちに、それぞれ注文したものが届く。

やっぱり、おばちゃんだった。

二人は平日午前中のファーストフード店に絶望しながら、ブランチを取り始めた。

基本的に食べるのが早い松田は、5分もかからずにフィッシュなバーガーを完食。

今はセットで頼んだフライドポテトをつまみながら、女の子へメールを返信作業へ勤しんでいる。

対して、食べるのが遅い竹はマイペースにライスなバーガーを食べつつ、トレイに内に敷かれた肉の生産地なんかが書いてある広告チラシを、興味なさげに読んでいた。

すると、竹のポケットの携帯が振動して着信を告げた。

竹はバーガーをトレイに乗せて、ナプキンで手を拭いてから素早くポケットから携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

「もしもし」

「あ、もしもし、タケ君。今、大丈夫かしら？」

電話をかけてきた相手は、アレクサンドラであった。

「平気だけど。どうかした？ 何か昨日の報告に問題あったとか？」

竹は昨晚の自分の報告に何か問題があっただろうか、と考えを巡らせながら聞いた。

「いえ、そっちの話は全く問題ないのよ。処理も完璧。さっきお父様に報告して、騎士の派遣が中止に出来たくらいだしね」

「あら、それは良かった。じゃあ何？ その報告の電話とか？」

「ええ、それもあるんだけど、ついでに確認しておくことがあるの」

「確認って……何の確認よ？」

竹は何のことかわからない、と首をひねる。

その時、メールの送信作業を終えた松田と眼があった。

松田は女の気配を感じたのか小声で、「誰？ 誰？」とニヤニヤしながら竹に聞いてくる。

竹はそれを軽く無視しつつ、電話に集中する。

「確認というのは、今月はまだ十三夜から騎士団への賞金首の引渡しがされていないことについてです。まだ1週間ほど時間はありますが、一応その辺りがどうなっているか確認しておこうと思ひまして」

アレクサンドラは、普段のフランクな口調ではなく、お仕事モードな声で言った。

しかし、竹は、

「ああ、そういえばまだそっちは終わってなかったっけかと、あっけらかんとした口調でそれに返した。

「そういえばって……そんな風で大丈夫なの？」

アレクサンドラは竹の気の抜けた返事に、呆れながら言った。あまりに呆れすぎて、口調が元に戻っている。

「まあ大丈夫だと思うよ。……多分」

「多分って、本当しっかりしてよ？ ……ていうかまさか、私からの依頼でそっちの仕事が出来なかった、とか？」

「ん、違う違う。そもそも今月はオレの担当じゃないし」

十三夜から騎士団への賞金首の受け渡しの際は、十三夜内で月2名ずつがローテーションふろすして行われている。

今月の担当は、脇ふろすと古巣である。

竹はその二人に後で、連絡しておこうと考えながら、今月の担当に大木が入っていないくて本当に良かったと内心で安堵する。

もし大木だった場合、残り1週間弱でその分を誰かが代わりにやらなければならない。

そんなのは竹は御免だったし、他のメンバーもそうだろう。

自分がやりたくないことは、人もやりたくないのである。

「そう。なら良いの」アレクサンドラは、安心したように言った。

「何だ、心配してたのか」竹は苦笑いしながら言った。

「ええ、まあ少しね。あと、もし忘れててそれを果たさなかったら、お父様が十三夜討伐隊とか結成しそうな予感がしたから」

「……マジでありそうだから困るな。ヴァインセントの事だから、騎

士の派遣中止に手を貸したオレに切れてそうだし」

「私もさっき電話して、そんな雰囲気を感じたわ」

「やっぱな」

竹とアレクサンドラは互いに深い溜息をついた。

「それじゃあ、そっちの件は終わり次第連絡してちょうだい。なるべく早い方が良いわ。なんだかんだで年末は忙しいから」アレクサンドラが憂鬱そうに言った。

「了解——っと、そうだ。ちょい待ち。今、電話代わるから」

「え？ 代わるって誰に？」

竹はアレクサンドラの、その声を聞く前に、携帯電話を松田に差し出した。

松田はポテトを食べ終わり、タバコを吸っている。

いきなり携帯を差し出されて、松田は驚きながら、

「誰？」と聞いた。

「アレクサンドラ」

竹が短く答えると、松田はすぐに携帯を受け取って耳にあてる。

「ういーっす。どうも、松田です。久しぶりい。元気だったー？」

松田がニコニコと電話しているのを見ながら、竹はバーガーの残りを食べ始める。

別に代わらなくても良かったのだが、いきなり松に代わったらアレクサンドラはテンパるだろうなあ、という悪戯心がふと湧き上がっての行動だった。

そんな確実に一杯一杯なはずのアレクサンドラに対して、

「あ、マジでー？ ホントにいい？ へえー、そうなんだー」

アレクサンドラとの会話回数が、数えるほどしかないはずの松田は絶好調だった。

さすがに、複数の女子と同時に関係を持てる男である。

そういう所業も、こういう会話のテクニクがあるゆえのことだ。ちなみに、関係がある女子は全員、彼女にはしないあたりが松田のプラトニックなところだったりする。

竹は、さすがにすげえな、と漠然と感心しながら、

「食べ終わるまで繋いで」と残り2口ほどになった、ライスなバーガーをみせながら松田に言った。

いつもであれば、自分の悪戯に対してすぐに助け舟を出す竹であったが、今だけはそれは出来なかった。

ライスなバーガーは冷めると、悲劇的に不味くなるからだ。

世にも勝手な行動を起こしまくる竹だった。

松田は竹の言葉に『OK』と頷きながら、アレクサンドラとの会話を楽しむ。

「てか最近、サンドラちゃんどうなのー？ 竹とのこととかさー。

え？ マジ？ やばいじゃーん」

そろそろ話題が自分の事に飛び火し始めたので、竹は最後の一口を口を含むと、むしゃむしゃ咀嚼する速度を少し上げた。

飲み込んで、ストローからお茶をすすって、松田に携帯を返してと手を出す。

「こっちは大木が大変でさあ。あ、じゃあ、そろそろ竹に代わるから。え？ ああ、じゃあその話しは竹に聞いて。ういー。またねー」

松田は満足した顔で、竹に携帯を返した。

その際に竹が苦い顔をしていたが、松田は特に気にしなかった。

竹は苦い顔のまま、携帯を耳にあて、

「もしもし？ あー、じゃあそんな感じで。またー」とすぐに電話を切ろうとした。

だがしかし、

「そんな感じって何！？ ていうかいきなり電話代わったりしないで！ ビックリするじゃない！！」と怒られた。

自業自得である。

「それと大木が大変ってどういうこと？ 大木って十三夜の人でしょ？ 何かあったの？」

「いや、えーっと……」

まだアレクサンドラに、昨晚の大木の事をいうつもりがなかった竹

は、どうにか言い訳しようと考えながら、余計なことを言った松田を恨みを込めた視線で見た。

しかし、当の松田は自分の携帯を再び操作し始めていたので、その視線の効果は全くといって良いほど得られなかった。

そもそも、この事態は竹が松田に電話を代わらなければ起こらなかったことなので、恨むのはお門違いなのだ。つまりこれも自業自得である。

「話して」アレクサンドラは、威圧感のある声で言った。

それは竹にとって、騎士の王よりも威圧感を感じさせる声であった。

「いえっさー」

竹は背筋を伸ばして返事する。

「って言っても、まだオレも良くわかってないから簡単になるよ」

「わかったわ」アレクサンドラは、やや満足したように言った。

「うん、じゃあ簡単に。昨日、ってか今日の夜中になるのか？ まあ良いや。とにかく昨晚、うちの大木さんが何者かに、意識を失うほどの重傷を負わされたって話ですよ」

「は？ ちょ、ちょっと待って！ それって本当！？」

「本当。嘘言ってどうすんだよ」

「そう、だけど。信じられない……」

アレクサンドラの知る限り、今まで十三夜の誰かが、そこまでの重傷を負ったことはない。

だからこそ耳を疑った。

「そりゃあな。オレも最初は信じられなかったし。でも事実だ」

竹は落ち着いた声で言った。

その声は、普段にも増して落ち着いた声だった。

アレクサンドラには、竹が無理やり感情を殺しているのが、痛いほど伝わった。

そこでアレクサンドラは、ふと気付く。

昨晚も竹はこんな声で報告をしていなかったか。

「……昨晚っていつの話？」

「サンドラに報告入れる前かな。その時はもう知ってたけど」

アレクサンドラは、何故昨晚の自分はこの悲しい声に気付かなかったのか、悔やむと同時に疑問に思ったが、その答えは出なかった。

——何故、アレクサンドラが気付かなかったのか。

それは、昨晚の竹は今よりもずっと、感情を押し殺していたからである。

誰にも気付かれないうちに。

自分の内に、全てをしまいこんでいたのだ。

だからむしろ、今の声色と昨晚の声色を繋げることが出来た、アレクサンドラの察しの良さこそ異常であった。

まあこの察しの良さは、翠のとか蒼いのか紅いのも持っているだろうが。

「……どうして言ってくれなかったの、とは聞かないわ。返ってくる言葉は想像出来るし」

——良くわからなかったから。

言うべきか言わないべきかわからなかった。

どうせ返ってくる答えは、こんなところだろう。

それが容易に想像できるから、アレクサンドラは別の事を聞く。

「私は——どうしてれば良い？」

アレクサンドラの問いに、竹は淡々と答える。

「何もしなくて良い。何かあればすぐに伝えるから」

「そう。わかったわ。その方が良いものね。私が初めて知ったところを観るに、まだこのことは公になっていないみたいだし。下手に私が動いたら大事になりかねない。……もう十分に大事なんだろうけど」

「そうだな。オレ等としては大事だ」竹は苦笑いする。

「うん。それじゃあ何かあったら教えて。協力出来ることはあまりないと思うけど」

「ああ、ありがとう」

「いいいえ。未来の旦那様の手助けくらい当たり前にするわよ」

アレクサンドラの言葉に、竹が乾いた笑い声で返した。

「ふふ、あと協定の賞金首の方も忘れないでおいて。それじゃあ、またね」

「おう。あーっと、そうだ。最後に一つ」

「何かしら？」

「とりあえず、何があるかわからないから用心だけしておくように。じゃあ、また」

竹は最後にそう忠告して、アレクサンドラの返事を待たずに電話を切った。

アレクサンドラは、電話が切れた後、どこか幸せそうな表情をして呟く。

「心配——してもらっちゃったっ」

アレクサンドラが言っただけの言葉を、竹は最後の最後で言っただけだ。

さすがに、複数の女子から好意を持たれる男である。

そういう悪行も、こういう神懸った天然のテクニクがあるゆえのことなのだ。

それを人は、主人公属性という。

閑話休題。

竹はアレクサンドラとの会話を終えた携帯をポケットに仕舞いなおすと、松田に言う。

「一服して帰るか」

「そうしょっか」

松田はそう言って頷いた後、

「竹、一本もらって良い？」と竹に聞いた。

松田のタバコは、すでになくなっていたのだ。

竹は昨日から何本も貰いタバコしていたので、わざと恭しく、「どうぞ」と言ってタバコを松田に渡したのだった。

藍の章 19 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

このくらのペースで更新し続けられたら良いんですが……やっばり難しいですね。

でもそれを目指していきたいと思います。

天倉竹に対して、仄かな憎悪を灯した俺ではあったが、その憎悪もそれから暫く鳴りを潜めていた。

あの指名の時より、俺は今まで殆ど面識などなかった天倉竹と、会話をする機会が増えたことが主な原因だろう。

次期『天照』と『管理者』という立場は、俺と天倉竹の距離を嫌でも縮めた。

抱いていた嫌悪と憎悪も、天倉竹と会話をしていくうちに自然と打ち解けていた事実だ。

天倉竹は、自分とは全く違う価値観の持ち主であったが、何か人を惹きつける何かを持っていたように思う。

事実、天倉竹が部下に選んだ十二人は、それぞれが良くも悪くも次世代の『天岩戸』を担うであろう、と密かに目されていた面々ばかりであった。

何故なら、その能力もさることながら、十二人全員が『神具』の所持者であったからだ。

そして、その十二人は、十二人とも天倉竹の誘いを迷うことなく快く承諾した。

——ただ、天倉竹は部下であるはずの彼らに対して、あくまで対等の付き合い方をしていた。

まるで、普通の友人関係のような。

そんなものは、生まれた時から普通でない自分たちにとって幻想でしかない、と思っていた俺だったが、天倉竹と顔を合わせるうちに自然と、自分もその輪の中に片足を突っ込んでいた。

矜持を持ちつつも他者を受け入れるという感情が、既に俺の中で確固たるものとして形成されていたのも、それを手助けしたんだろ

う。

その輪の中でも、気が合う、合わないはあったものの、俺はいつの間にか彼等とともにいることを心の拠り所にしていた。

そう——ありていに言えば、俺は彼らのことが好きで、信じ切っていた。

同じ、扉の向こう側を目指すものとして。

まるで、本物の友人関係を築けたように、なかったはずの幻想を抱いたのだ。

——天倉竹が、裏切る直前までは。

＊

「闇討ちっすか？ 最近は、そんなことされるような仕事はしてなかったと思うけど」

コンビニに行った帰り道。

ビニールの袋を片手に下げたたてはな なおと館花直人は、暗い夜道で突如、目の前に現れた人物に向けてそう言った。

余裕を感じさせる台詞の割に、彼の声はやや硬く緊張したものである。

住宅街の真っ只中。

50メートルほどの直線の道の両脇を、車が1台ずつすれ違える程度の幅を挟んで、整然と民家が立ち並んでいる。

館花がその道の真ん中まで歩いた瞬間に、人避けの結界が張られた。戦闘畑の館花だが、いや、だからこそそれなりに知識はある。

知っているのと知らないのでは、戦闘の際にその差は大きく出るからだ。

——結界の規模は、そこそこ。

発動されるまで気付かなかったということは、それなりの手練の業

か。

……いや、それにしても随分と雑だ。

これじゃあ5分もしたら、結界は消えちまう。

というより、問題はそこじゃない。

館花にとって問題なのは、この結界が天岩戸の術式で組まれているということ。

そして、無言で立ち上がるこの人物は、隠しても隠し切れない血の臭いと、強者独特の空気を纏っている。

館花の知る中でも、これだけの雰囲気を持った人物は数少ない。

もしも、結界の術式から天岩戸出身者と限定するのなら、その数は更に絞られる。

にも関わらず、館花の記憶には目の前の人物と重なる天岩戸出身者はいない。

館花が緊張した理由は、そこだった。

——もしかして出身者じゃないとか？

だからこんな雑な結界になった？

いやいや、5分で消える結界なんてメリットがないでしょ。

なら何の意味が？

結界が消えてから何かあるとか？

でもそんな感じもしないし。

……全っ然わっかんねえ。

ていうかそもそも顔が見えねえ。

かなりの高身長で館花と、20センチ以上の差はあるであろう小柄な体躯をした目の前の人物は、その顔を隠すように童子の仮面を付けていた。

インディゴ色のトレーナーとジーンズという現代の出で立ちに、能面というスタイルはアンバランスを通り越して気味が悪い。

ましてや、街灯の明かりも乏しい夜道だ。

ちよっとしたホラーである。

童子の仮面を付けた人物が、ようやく口を開いた。

「――死ね」

仮面のうちから発せられたくぐもった男の声には、明確な殺意が込められていた。

絶対零度の氷の如く冷たい殺意。

声の主はその殺意が館花に突き刺さると同時に、殺すべき標的へ向けてその場から爆ぜた。

「――速っ?!」

それはさながら瞬間移動だった。

童子の仮面の男は、5メートルは開いていた館花との距離をたった一足で詰め、驚愕冷めやらぬ館花の顎へ右のショートアッパーを放つ。

その拳は警戒していたとはいえ、相手の実力がここまでのものであるなどと、夢にも思っていなかった館花の無防備な顎を丸々吹っ飛ばす速度で直撃する。

ぱーんっ、と夜道に破裂音が鳴り響く。

「――ちっ」

童子面の男は、自らの拳が打ち抜いた物が飛び散るのを見て舌打ちし、後方へ小さく跳躍する。

「あっぶなかったわー」

館花は自分の顎がちゃんとくっ付いている事を確認するように、顎鬚をさすりながら言った。

心底肝を冷やした様子の館花と童子面の男の間には、再び5メートルほどの距離が開いている。

そして、二人が対峙する真ん中の空間には、男の拳が吹き飛ばしたコンビニの袋と、その中身が飛散していた。

「――『支配領域』^{スラッグ}」童子面の男が、憎々しげに言った。

直撃するはずだったショートアッパー、それが顎へ着弾する寸前に館花は自身の能力によって重力を操作したのだ。

銃弾すら地に叩きつけるほどの重力内では、いくら苛烈な速度の拳であろうと、そのスピードが衰えるのは抗えぬ自然摂理。

その僅かな衰えは、館花ほどの戦闘者が回避するのに十分な刹那だった。

しかし、それでも男の放った拳のキレに目に見えるほどの翳りはなく、標的こそ捉えられなかったものの、館花が仰け反って避ける時に僅かに拳のコース上に乗ってしまったビニール袋を木っ端微塵に破裂させた。

この場合、褒め称えられるのはどちらなのか。

咄嗟に能力を発動し、氷柱の如き拳の槍を避け果せた、おお館花の格闘センスと判断力か。

突如、押し掛かった重力の中、それに逆らいながら天に昇る拳を放った、男の豪速か。

どちらにせよ、コンマ10秒にも満たぬ攻防。

両者ともに常人の域を遥かに突き抜けたレベルの持ち主であることが窺える。

12月の寒さの中、館花の頬に汗がつたう。

こと近接戦であれば、十三夜、否、世界でも最強の部類入る館花をして、一步間違えれば倒されていたであろう攻撃と、その速度。

館花は正体不明の人物を最大の脅威として認識し、次の攻撃に備える為にゆっくり息を吐いて左構えの体勢をとった。

「大木直也は同じ状況で、今の一撃が避けられなかったんだが、さすがに戦闘部出身の『支配領域』スラッガー。こと戦闘に関しては、技術部出身の『足跡の旅行者』メッセンジャーとはレベルが一つ違う」

やや広めのスタンスで、どっしりと地に根を下ろすその巖の如き姿を前に、童子面の男はどこか可笑しげに言った。

「……大木をやったっていうのは、お前か」

館花は竹から送られてきたメールを思い出して言った。

「そうだ。あいつは邪魔だったからな。殺せなくて残念だったが、それでも最低限の目的は果たせた」

「目的ってなんだ？」

「教えるわけないだろ？」

「……なら俺を襲う理由は？」

「――クッ」

館花の問いに童子面の男は微かに笑ったようだ。

それは顔が見えずともわかる、憎悪を織り交ぜた歪な笑い。

直後、童子面の男から鬼気が浮かび上がり、

「――単なる腕試しだ。館花直人！！」

男は疾風となって、館花めがけて駆けだした。

展開される重力の暴力に屈することなく、猛然と突進してくる敵対者を、館花は怯えることなく迎えうつ。

両者の戦いは、ほぼ互角だった。

互いに空手。

絶えず繰り出される攻撃に決定打はなく、それどころかどちらもまだ相手の体に触れることすら許されない。

それでもアスファルトの大地を力強く踏みしめる足が、直線に、あるいは曲線に空を切る拳と脚が、地面を砕き、家屋の塀を破壊していく。

暴虐の暴風。

その渦の中心で二人の男は、人外の格闘戦を続ける。

一向に埒の明かない状況に、館花は何の用意もなしに外を出歩いてしまったことを後悔する。

いつもの館花であれば、今回のように竹に身の回りに気を付けるように言われていたら、どこに行くにも最低限の備えはしていたはずである。

行き当たりばったりで意外と突貫思考な竹や、自分は大丈夫と謎の自身を持っている松田などと比べるまでもなく、館花は石橋を叩いて渡るタイプの人物だ。

しかし、そんな慎重な館花だが、ごくたまに石橋を叩くことを忘れてしまう。

慎重の心が休む一瞬がある。

そして、その一瞬はほぼ100%の確率で、何らかの災いを引き付

ける。

格闘戦が不得意というわけではない。

だが館花の本来のスタイルは、2メートルを越す鉄くろがねの金棒を振り回す文字通りのスラッガー。

——自分が負けるとは思わない。

だが、今、館花が相対する男は不完全な状態で、易々と倒しきれのような相手でもなかった。

館花の頭に二つの考えが浮かぶ。

この場を撤退するか、それとも被弾覚悟で一撃を打ち込むか。

二者択一の選択。

その答えを出したのは、館花ではなく童子面の男だった。

「——ちっ、時間切れか」

男は小さく呟くと、館花の重力操作圏外へ飛び退いた。

何が時間切れなのか、館花の疑問に答えるように、周囲に張られていた人避けの結界が消失した。

「——あ、そっか」

5分もすれば結界が消える。

最初に館花がたてた予想通りに、人払い結界はあっけなく消えたのだ。

人が来れば、この惨状だけで騒ぎになる。

ここで、これ以上派手な戦闘は出来ない。

故に、時間切れなのだ。

ならば双方撤退か。

館花はそう思った。

しかし、童子面の男は逆の答えを出す。

「ここまでやったんだ。お互い最後に一矢報いたくはないか？」

挑発的な男の言葉に館花は獰猛な笑みで返す。

「やってやるっぜえ」
yeahと低い声で昂ぶった時の口癖を口にする。

ここで退くのは、館花の戦闘者としての、男としてのプライドが

許さない。

館花は再び左構えの体勢を取り、拳を硬く握りしめる。

童子面の男は、館花から発せられる今まで以上の闘気に負けじと、鬼気を纏いながら構えを取る。

その低い前傾姿勢の構えは、これまでのそれとは大きく違っていた。

それがこの男本来の構えであることは、放たれる鬼気の質がより鋭く冷たくなったことから館花にも理解できた。

だが不可解なのは、その構えが格闘に対応したものというよりも、短距離ランナーのクラウチングスタートに近いこと。

そして、何よりその構えにどこことなく覚えがあったこと。

しかし、今は回顧をしている場合ではない。

「はああああああ——」

それはどちらの叫びか。

神速の疾走者。

重力の支配者。

すれ違った影の間に血潮が飛び散った。

三度、5メートルの距離が開いて、二人は対峙する。

冬の夜空の下、赤い霧が微かに舞う。

「——っ。お前は……」

驚愕の混じった声は館花のものだった。

館花の右膝には長さ5センチ、幅1センチほどの穴が穿たれていた。

ドクドクと、穿たれた右膝から血液が流れ、ズボンを朱に染める。

それでも館花は苦痛を堪え、童子面の男を睨み、警戒を怠らない。

「一矢報いたのは俺だったな。館花直人」

男は勝ち誇ったように言った。

その勝ち名乗りも、この結果をみれば致し方ないことだろう。

しかし、あの一瞬で何が起こったのか。

何故、館花の右膝に何か鋭利なもので貫かれたような傷が出来て

いるのか。

「だけど右膝か。久しぶりに使ったからか、それとも支配された重
力の中で手元が狂ったか。俺は腹を貫くつもりだったのに。まあ一
矢報いたから良しとするか」

童子面の男は、館花の右膝を見ながら言った。

その声はやはり勝ち誇ったものだった。

だが館花は嘲笑をまじえて言う。

「狙いが外れた割には言うねえ」

その言葉に男はやや苛立ちを覚える。

「……狙いは外れたが俺の攻撃は当たった。まさか騙し討ちだから
勝負は無しだとか言うわけじゃないだろ？」

「言わないね。そんなこと言い出したら切りがねえ」

館花は変わらず、男を見下したように言った。

それに今まで冷静だった男が、突如激昂する。

「……なら何が言いたいっ!？」

「はっ、決まってる。騙し討ちに『最強の矛』まで使って万全だっ
たお前は、万全じゃない俺と相討ちになってるってことだっぜえー
!」

Yeahと館花は中指を童子面の男につきたて、一際大きな声で
言った。

すると、男の眉間に微かな痛みが走り――

パキンと渴いた音を立てて、童子の面が割れた。

カラン、と割れた面がアスファルトに転がる。

面が割れて男の素顔が12月の外気に曝される。

館花はその自分と同じ年頃の少年の顔を見て、息を飲んだ。

まさか、と、やはりが頭の中で交錯する。

額から血を滴らせる少年は、館花にも聞こえるほど強く歯軋りを
した後、昂ぶった感情のままに言う。

「くそっ! 予定より前に顔がバレちゃったじゃねえか!」

「その言い方……他人の空似じゃないってことだ」

「ちっ……まあ良い。腕試しは十分できた。あとは奴との本番を待つだけだ！ 奴に言っておけ！ 藍の裁きを受ける準備をしておけってなあ！！」

少年は語気を荒げて、言い切ると館花の前から姿を消した。

館花は後を追わなかった。

負傷した足で追いつける相手ではなく、追いついたところで勝算も薄い。

なので館花は、騒動になる前に素早くこの場から立ち去ることにする。

——それに穴の開いた右膝を治療しなければ。

館花は手早く応急的な血止めだけ済ませると、最近なにかと患者の多い石渡の家に行くことにした。

石渡の家に行く途中、館花は無意識に先ほどの少年の名前を口走る。

「——庵戸^{あんどともちか}朋愛」

それは、4年前に死んだはずの、かつての友人の名前。
最後に自分たちとは相容れなかった存在の名前だった。

藍の章 20 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

実はあまり書いた記憶が残っていない今話です。

なので不備がありましたらご連絡ください。

次話は少し間が空きそうな予感ですが、そうならないようにしたいです。(もし遅くなったら申し訳ありません)

藍の章 21

＊

「マジに朋^{とも}だったの？」

「完璧見間違いでしょー。だって朋は死んだはずっしょ？」

館花が負傷した経緯を簡単に説明した後、竹と松田は、俄かに信じられないといった様子で口々に館花へ聞いた。

「マジだって。間違いなく庵戸だった」

右膝に包帯を巻いた館花が、真ん中の簡易ベッドの上で断言する。
石渡宅の地下室。

日付は変わらず22日。時刻は23時過ぎ。

5分弱の戦闘後に、石渡宅へやってきて治療を受けた館花と、それを治療した石渡。

そして、石渡からの報告を受けた竹と、館花から連絡をされて見舞いがてら来た松田、それに付き合わされた佐藤^{さとう}がいた。

「……おいちゃんを襲ったのが、あっちゃんだったとしても、『あの槍』使ってきたんでしょ？ それってありえなくね？」

館花の右のベッドに腰掛けた佐藤が言った。その隣には松田が座っている。

「そうだな。朋の神性は『夜月』で完全に殺したから、仮にあの状況から生き残ったとしても、神具は使えない」

佐藤たちとは逆のベッドに座った竹が言った。

「でも傷口は『最強の矛』によるものだと思うよ。まあ類似品って可能性もあるけど」

石渡が竹の横で医者としての見解を述べる。

「だから間違いないっすから。ほら、見てって。俺、めっちゃ刺されてっから」

ステレオで聞こえる友人たちの議論に、館花は証拠を示すように

右膝を指差した。

実際にその眼で見て体感した鎗花に、そこまで強く断言されては、皆それ以上疑うことは出来なかった。

ただ一人、竹を除いて。

「悪い。おいちゃん。その時の状況をもう一度説明して。出来るだけ詳しく」

竹とて鎗花を疑っているわけではない。

だがそれでも信じられなかったのだ。

自分が確かに殺したはずの人物が、蘇っていることが。

「おう、いいよ。えっと、コンビニから帰る時にいきなり結界が張られて、変なお面被った奴に襲われたよ。あ、結界の術式は天岩戸式だったな。それで不意打ちだった最初の一撃はギリギリ避けた。そしたら、大木は今の一撃が避けられなかった、とか言ってたわ」

大木はくのくだりで全員が納得したように、小さく頷く。

——大木だしな。

恐らく全員の胸の内に共通の感想が抱かれていただろう。

「それで大木をやったのは俺だとか、大木は邪魔だったとか、最低限の目的は果たせたとか言ってた。目的が何かまでは言ってなかったけど……それで結界が切れるまでガチの戦闘」

「その時はまだ素手だったんでしょ？」松田が確認するように聞いた。

「うん、二人とも素手。それで結界が切れたあと、最後に一矢報いたくないかって挑発されて」

「それに乗ったわけだ」竹が苦笑いして言った。

「いやあ、何かすげえムカついちゃってさー。なんだこいつ、って思っちゃってね？」

「あー、なんとなくわかる」佐藤が半笑いで同調したように頷く。

「でしょ？ それで一撃勝負っぽくなって——激突する時、最初はクロスカウンターみたいに右手が交差したんだけど、その時、庵戸の左手から『あの槍』が伸びてきたんだ。あれは最初っから用意し

てたっぽい」

「それで？ それでそれで？」

館花の息継ぎのタイミングで、松田が調子の良いノリで先を促す。「それで、さすがに俺も焦ったんだけど。まあ俺も？ そんなちゃんな小細工には屈しないわけっすよ。やばい、って思った瞬間には体が動いてて――」

松田のノリに館花も乗っかりながら言う。

「重力全開にして、あっちの攻撃が当たる前にこっちの拳を当ててやっただっぜえ！ Yeah」

「Yeah」と館花と松田がBーBOY共通言語でハイタッチをかわす。

「KJ。TKも」

松田はそのノリに入るように竹と佐藤にも呼びかける。

基本的にノリに合わせられる二人は、「Yeah」とノリを合わせて、手を打ち鳴らした。

呼びかけられなかった石渡は、別に虐げられているわけではなく、このノリについていけないだろう、という松田の判断である。

事実、その様子に石渡は若干引き気味だったが、一通りハイタッチをかわした竹が座りなおす時に「なお」と声をかけて手を差し出してきたので、場に合わせてその手を叩いておいた。

その音は、ペしり、と随分と締りのない音だったとか。

石渡とタッチをかわした後、脱線しかけた話を元に戻すように竹が言う。

「そんで続きは？」

「ああ、それでまあこっちの攻撃は当たったことは当たったんだけど、本当に当てるだけ当てたって感じだったから、重力と足しても槍の軌道を逸らす程度にしかなくてさ。右膝がこの様ってわけっすよ」

倒す攻撃から当てるだけの攻撃へ。

拳に乘せられた『倒す』という枷を外した拳は、その分だけ確実

に速い。

とはいえ0コンマの世界で、それだけのことが出来るのは、館花直人という戦闘者の強さがあってこそ。

どこかの技術部出の男ではこれは出来ない。

「それでお面を割ったら庵戸だったんだ。最初は自分の攻撃だけ当たったと思ってたみたいで勝ち誇ってたんだけど、俺の攻撃も当たってたからね。めっちゃ取り乱してた」

「だろうねー」松田が言った。

「あとは、腕試しは十分できた、とか本番まで待つだけとか、あと藍の裁きを受ける準備をしておけて。多分、それは竹にだと思うけど……こんなとこだね」

館花が説明を終えると、4人が4人とも微妙な顔をした。

「どう思う？」館花は自分に再度の説明を促した竹に聞く。

「……うーん。まあ、あれだ。今のところ、そいつは朋っぽいな」

「どの辺が？」

「頭悪いところ」

松田の問いに竹は即答した。

「まあ、もしそいつが朋じゃなかったとしても。そいつ馬鹿すぎるな」

竹が言うと、全員が同意して頷く。

「大木が邪魔、腕試し、藍の裁き、奴に言っておけ。どう考えても、オレが目的だろ。目的バレバレじゃねえか」

「自分で言ってて気付くっしょ、普通」

「気付かないから馬鹿なんじゃないの？」

「相変わらず、おつむが弱いなあ」

松田、館花、佐藤の順で、庵戸デイスに入る。

石渡はそれを苦笑い半分に見ていた。内心は同意している。

竹は無駄に盛り上がる会話に入りたかったが、その誘惑を抑えて考えるべきことを考える。

それに気付いて佐藤が竹に声をかけた。

「お？　どうかしたの？」

「ん、いや、仮にそいつが朋だったとしたらさ、どうして生きてるのかなと思って」

「そんなの奇跡の生還じゃないの？」

「……だとしても、ただ生きていただけじゃ『最強の矛』を使った理由にはならない。最初に言っただろ、朋の神性は殺したって」

「じゃあ類似品とか」

「それも、なおがとりあえず否定しただろ」

「あー、そっかそっか」

三度、お気楽な松田の意見を一蹴する竹。

その表情は優れない。

「じゃあ、どういうこと？」

「……考えられるのは一つだけ。ていうかお前もわかってて聞くな」
奪われた神性を再び与えることが出来るもの。

殺された命に生の灯火を再び点火出来るもの。

そんな埒外は世界に一人、否、一つしかない。

「——『唯一の一』オリジナルワン。アレがやったんだろ」

竹の言葉に全員の表情が一瞬にして凍りつく。

『唯一の一』オリジナルワン。

黄金と虹色の少女。

その名を、たった一言口にするだけで、その有様だった。

それは言った竹とて例外ではない。

白い病室に流れる空気は、先ほどの弛緩した様子は微塵もない。

「……でもあの世界と、この世界を繋ぐ扉は壊したはずじゃあ」

そう。神の世と人の世を繋ぐ岩戸は竹が4年前に破壊した。

ならば『唯一の一』とて、こちら側に渡るのは不可能なはず。

しかし、彼の少女は——全能。

「……」

誰も何も言えなかった。

一縷の望みを口にした松田も、自身の言葉がどれだけ無意味なこ

とか察していたし、他の4人も松田と同じ望みを抱いていたし、それが無意味なことかわかっていた。

だから何も言えなかったのだ。

あの少女に不可能、などという言葉ほど似合わない言葉はない。それは全員が考え付いても、考えないようにしていた最悪のケースだった。

ゴクリ、と誰かの喉が鳴った。

それが合図になったのか、再び竹が口を開いた。

「オレ達はまだ甘くみてたみたいだ。朋に神性と生命を与えたのが、『唯一の一』オリジナルワンだとしたら、それはオレが岩戸を壊して去った直後だ」

断絶された世界が再び繋げることが出来るのは、例え全能の存在であったとしても、早くても数十年。

あわよくば数百年、数千年。

どちらにせよ、自分たちが死ぬまでは不可能だと思っていた。

だが、その見立ては大きな間違いだった。

——いや、本当はわかっていたのだ。

扉を壊したくらいでは、アレは閉じ込めておけないことを。

だが、考えないようにしていただけ。

考えなくなっただけ。

全員、背筋に悪寒が走る。

あんなものがこちらに来ている。

あんなものと再び対峙する。

それを考えるだけで、全員の顔に恐怖と絶望が浮かび上がる。

「……まあ救いがあるのは、今まで知らずに済んでたことか」

竹が重々しく続ける。

「でもいつかは現れる。……知ってしまった、いや、気付いてしまったから」

「いつになると思う？」 館花がひきつった顔で言った。

「わからない。でもそう何年も先じゃないと思う」 竹は首を振る。

「だね。ていうか今まで現れなかったのが奇跡じゃん」

「うん。そう思うわ」

松田が言って、石渡が同意した。二人とも表情は固まっている。

「じゃあ竹、これからどうすんの？」佐藤が鬱々とした顔で問うた。
「どうしようって言われても……どうしようもないだろ。こっちからどうにかしようとは絶対思わないし。アレにもう一度会うなんて死んでも嫌だし」

竹の言葉に4人は激しく頷いた。

「だからなにもしない。……まあいつかはあっちから来るだろうけど」

「その時は？」佐藤が聞いた。

「逃げるか、時世の句を読むか」

「……逃げれると思う？」松田の表情は笑ってこそいるが、悲壮感たっぷりである。

「……思わねえ」竹は頭を抱えながら言った。

他の4人も同じだったのか、遠くを見ながら溜息をついた。

竹は諦めたように溜息をついたあと、

「とりあえず、そっちは今のところ放置しておこう。多分まだ出てこないだろうし」と言った。

その言葉に、他の4人の表情がやや明るくなる。

「どうして？」

「朋がいるから。多分、それを愉しんでるんだろ。朋とオレ達の話
をな」

「――あー、じゃあやっぱ朋が今まで出てこなかったのは、『唯一
オリジナルワン
の一』の指示系だ？」

「それしか考えられないだろ。朋の性格ならすぐにオレ達の前に出てきたはずなのに、それが4年も間をおいてるんだから」

竹は松田の問いに淡々と答えた。

「ああ、じゃあ庵戸は俺達に気付かれないように4年間何もしてなかったから、腕試しなんだ？」

「多分ね。実際、オレ達皆が朋の生存なんて知らなかったし。本当

に何もしてなかったんだと思う。まあ腕試しで、おいちゃんを選ぶあたり自信家っぷりは変わってないみたいだけど」

竹が苦笑い交じりに言って、館花が深々と頷く。

「大木がやられたのは？」石渡が聞いた。

「あの時と同じやられ方をしない為、だと思う。頭悪いなりに考えてるんだろ」

「そういえば、あっちゃんを倒した時って、竹と大木と本ちゃんでもやったんだっけ。……あれ？ そしたら本ちゃんもやばいんじゃない？」

佐藤の発言は最もだった。

4年前と同じ徹を踏まないようにするのに、念を入れるなら大木だけじゃなく、本多も戦闘不能にしておくべきだろう。

「うーん、そこが微妙なところ。もしオレだったらそうするけど、朋はあととは本番を待つだけって言ったんだしょ？」竹が館花に確認するように言った。

「そう言ってたね」

館花が思い出すように言うと、

「じゃあ、本は放置で確定ってことだ？」松田が竹に向かって言った。

「朋の言葉を信じるなら。でも、昔と違って今の朋は――」

竹は最後の言葉を口にしなかったが、4人には伝わったようだった。

「ならどうするの？」

「とりあえず、今から全員を招集する。朋の事と『唯一の一』の事を話さなきゃならんし、今後の事も相談したいし。……あ、それとケンジと松は、本の迎えに行ってくれる？ 一応、念を入れておきたいから」

「了解」

「わかった」

松田と佐藤が頷く。

「よろしく。なるべく早くお願いね。ここは、なおのホームだけど怪我人が二人いるから」

佐藤と松田を抜かすと、ここで今まともな戦力は竹と石渡の二人だけだ。

館花はそこまで重傷ではないが、それでもまともな戦闘は出来ない。

それに加えて大木はまだ目覚めていない。

もし、今、襲撃されると、二人を庇いながらになる。

さすがにそれはきつい。

しかし、いくら庵戸が頭が悪いといっても、そこまで馬鹿ではないだろうから、襲撃してくることはまずないだろうけど。

「ういー。でも招集かけるなら、心配くない？ どうせ皆来るんだし」

「……すぐ来るならな」

「あー、そういうことね」

松田は苦笑いしながら言った。

石渡、館花、佐藤も苦笑いしている。

十三夜はマイペースな輩の集りなのだ。

よほどの事でない限り招集してすぐに集る、ということは滅多にない。

まあ今はよほどの事なので、そこそこのスピードで集るだろうが、それでも出来る限り迅速に行動しておきたい。

それに、早めに全員を集めておきたいのは、襲撃してくる可能性があるのは庵戸だけではないのだ。

大木がやられて既に一日。

いくら情報を隠していても、どこからか漏れているのが、裏社会の常識だ。

それに加えて今は館花もやられた。

それを好機とみた、名を上げたい馬鹿どもが集ってくるという可能性もある。

とはいえ、その程度ならまだ良い。

どうせ二流、三流の輩だ。

それよりも竹が危惧しているのは、『唯一オリジナルワンの一』の存在に気付き、確信を持ってしまった今、あの二人が現れるのではないかということ。

『唯一オリジナルワンの一』を絶対の者として崇め、仕える黒と白の存在。

その二人の登場が、今この時に、襲撃という形でないと言い切れないのだ。

だからこそ、早めに全員を集めたい。

「それじゃあ連絡はしておくから、行ってきた」竹は携帯を取り出しながら行った。

佐藤と松田は、竹に促されて立ち上がる。

「んじゃ、KJ行きますか」

「うん。行くか」

螺旋階段を上っていく二人に、館花と石渡がそれぞれ声をかける。

「二人とも気をつけてよ」

「いつてらしゃい」

ういー、はいよ、という短い返答が聞こえ、二人は本多の迎えに行った。

竹がそれを見送ると、耳にあてた携帯が通話状態になる。

「あ、もしもし、本？　ちょっと急ぎの話があるんだけど。今家にいる？　――え、マジで？　縦浜で飲んでんの？」

竹は、あらら、と上手くない状況に頭をかいた。

てっきり本多は自宅にしていると決め付けていたのだが、どうやら明日が祝日なので飲みに行っているらしい。

松田と佐藤は、本多の家に向かっていているだろう。

しかし、本多は自宅にはいない。

縦浜にて飲み会の真っ最中。

どうしたものか、と考えるが、考えはすぐに纏まった。

「あー、じゃあ悪いんだけど、すぐにこっちに戻ってきてくれる？」

「なんで？」と若干不満げに聞いてくる本多。

まあいきなり、楽しい飲み会から帰って来いなどと言われては、不満を抱くのも仕方ないだろう。

だがその不満も、

「十三夜全員、今から集めることになったから」

という竹の発言で一気に拡散する。

「――おっけ。すぐに戻る」

「悪いね。あ、足はタクシーじゃなくて電車でよろしく。人が多いし、まだ終電前でしょ？」

「わかった」

本多が頷く後ろから居酒屋の喧騒が聞こえる。

「それじゃあそんな感じで。あと、松とケンジが駅の方まで迎えに行くから、こっちに着いたら二人と合流して。それじゃ、またあとで」

竹は電話を切ると、すぐに松田に電話して本多が今自宅にいないことや、駅に行く事などを伝え、その後、他のメンバーに連絡をした。

竹が一通り連絡を終えると、館花が首尾を問うた。

「どうだった？ 皆集まるの？」

「とりあえずはね。本以外は全員、自宅にいたから。まあ遅くても1時間以内には来るんじゃない」

「へえー、良い出席率じゃん」

「中々にね。そういえば、なおは？」

「向こうの部屋行ったから、大木診てるんじゃない？」

「そっか。皆が集る頃には、大木も起きるかな」

「ああ、もうそんな時間だ？」

「もうそろそろ日付変わるよ」

手近に時間を確認するものがない館花に、竹が携帯のディスプレイを見せながら言った。

「本当だ」

液晶画面に羅列された無機質な文字は、『12/22(水)23..46』。

あと十数分で日付が変わろうとしている。

館花に携帯みせたあと、竹は一度疲れた溜息を吐くと、再び電話をかけた。

念には念を入れるために。

藍の章 21 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

更新遅くてすみません。次話もどうなるかわかりません……が、近々短編を載せます。

アルモノの続編ですが。

あと、もし書いてほしい人の話がありましたら、試しにご連絡ください。何か起きるかもしれません。

日付は既に一つ進んで23日、祝日。

松田と佐藤は、無事に本多と駅にて合流することが出来ていた。皆が集合しているであろう石渡の家まで、三人は夜道を歩く。

タクシーを利用した方が良かったのだが、歩くのが好きな松田が、「歩いていかない？ 本、酔い醒ました方が良いでしょう」

と提案し、本多と佐藤がそれを渋々了承したのだ。

渋々だったのは、タクシーの方が人目があることに加えて時間的にも、ついでにこのクソ寒いのに歩きたくはなかったからなのだが、すでに歩く気満々の松田に結局、押し切られる形になった。

「うー。やっぱビールはくるわー」

松田がビール缶片手に言った。

「……くるけど、寒くね？」

「超寒いんだけど……ビールはくるけどさ」

佐藤と本多がそれぞれ微妙な顔をして答える。

二人の手にもビール缶が握られていた。

これも寒いので内側から温まろう、という松田の提案だった。

本多の酔いを醒ますという最初の提案は、殆ど口から出任せだったらしい。

まあそれに対してあまり反対をしなかった二人も二人だが。

肌を引き締める寒さと、舌を潤す苦さ、内から半端にと火照り出した体。

三人は歩きながら、そんな形容し難い感覚に囚われていた。

気分は良いが、どこか悪い。

そんな中途半端な感覚。

それがある種の勘だということに、この時の三人はまだ気付いていなかった。

＊

石渡の家にパラパラと十三夜のメンバーが集合する中、先日の負傷により眠っていた大木が予定よりもやや早く目を覚ました。

「竹、大木が目覚ましたよ」石渡が言った。

「話せる？」

「うん。普通に話せるよ」

昨日、意識不明の重体だった人物が会話が出来るまでに回復している。

否、回復させている石渡の業に、竹は毎度のことながら感嘆の息をつく。

「わかった。じゃあ少し話してくる」

竹は石渡と集っていた数人にむけてそう言うのと、『医神の間』アスクレピオスに向かった。

『医神の間』に入るとベッドの上に、大木が寝ていた。

寝ていた、といっても目は開いているので、まだ体は動かさないのだろう。

「ういっす。酷い目にあっただみたいじゃん」

大木は寝たままの体勢で首だけを動かすと訪問者を視認する。

「あ、竹か。いや、ホント酷い目にあっただよ」

そう言って苦笑いした大木の体は、重傷を負ったとは思えないほどに綺麗だった。

包帯を巻かれているわけでも、絆創膏が貼られているわけでもない。

傷一つないのだ。

だがそれは見た目の話で、内臓等にはまだ深いダメージが残っているのだ。

「具合はどうよ？」

「見ての通りボロボロ。パーマの話だと、あと半日もすれば動けるようにはなるって。日常生活に限りって感じらしいけど」

「そっか。そりゃよかった」

「うん。それでさ、驚く話があるから」

大木が少し興奮気味に言った。

「何？」

傷に響かないのだろうか、と心配しつつ竹は聞き返す。

「いや、ホント驚くから」

「驚くのはわかったから言えっての」

強く言われて大木は一瞬、しゅんとなったが、これから自分が口にする言葉でどれだけ竹が驚くか想像して頬が緩む。

「えっとさ、実はね。俺がこうなったのは、ある人に襲われたからなんだけど――」

大木が期待に満ちた笑みで続ける。

「そいつがなんと！ あっちゃんだったんだよ！！」

「あ、それもう知ってる」

「ええ！？ ホントにい？！」

「うん。大木が寝てる時に、おいちゃんも襲われたし」

「マジで？！」

「マジで。まあおいちゃんはお前に比べたら軽傷だったけど」

「……そ、そうなんだ」

驚かせるはずが、驚かされ、更に自分との差を遠まわしに突き付けられた、大木は空笑いを浮かべた。

その様子はどこことなく憐憫を誘うものだったが、竹は完全に無視した。

「で？ それで以上？ 大木情報は」

「……はは、以上です」

「そっか。ならオレからいくつか話しておくことがある」

竹は大木に、大木が寝ている間に起こったことや、まだ皆には話

していないこれからの方針について話し出した。

『唯一の一』の名が出た時、大木も竹たちと同じ反応をしたことだけ付け加えておく。

ちょうど竹が話し終わると、『医神の間』アスクレピオスの扉が勢いよく開けられた。

扉を開けた人物は、松田だった。

その後ろに佐藤も控えている。

どちらもバツの悪い顔をしている。

何事か、と竹が問う前に松田と佐藤が交互に口を開いた。

「えー、竹さん……やっちゃいましたー」

「本ちゃん……やられちゃった」

「はいい？」

あははー、と誤魔化すように笑う二人に竹は頭を抱える。

「……どうしたことよ？」

これでもかというくらい引きつった口元を隠さずに、竹は問うた。

「いやー、それがさー、やべえことが起きたんすよー。ねえケンジさん？」

「ああ、かなりやべえ。ドッキリかと思ったね。竹もかなりビツクリすると思うよ？」

「完璧驚くでしょー。なんたって死んだはずの大ちゃんだいが生きてて、本に攻撃してきたんだから」松田が言った。

「――まだで？」

「マジマジ」佐藤が頷く。

「……そいつは確かにビツクリだ」

竹はそれなりに驚いた顔をして言った。

それなりだったのは、殺したはずの庵戸が生きていた、という話の後だったためである。

あと、自分では驚かせられなかった竹が驚いた顔をしていて、大木はどこか悔しそうだった。

竹たちの知るところではないが、かませ犬の気分を味わったらしい。

そこで、松田と佐藤が大木が起きていることに気がついた。

「お、大木さん。起きてるじゃん」

「ホントだ。元気かー？」佐藤が大木に手を振った。

「ケンさん。いや、元気ではないよ」

「だよねー。完璧、ボロ雑巾だし」

「まっつん、うっさい」

別に松田は悪気があるわけではないのだが、大木はなにかと松田の言葉が癪に障るらしい。

このまま放置すると軽いケンカに発展しそうだったので、竹が話題を戻す。

「で？ 本は今どこにいるのよ？」

「向こうの部屋でなおやんが治療中。あと大ちゃんも」佐藤が答える。

「あー、大ちゃんもいるんだ？」

「そりゃいるって。本と相打ちの後、放置ってわけにもいかないっしょ。本をやったのと同時に大ちゃん気絶してたし」

「それもそうか」

松田の言葉に頷きつつ、竹は更に問いかける。

「それで二人の傷の程度は？」

「大木さんよりずっと軽傷」

松田が大木をみながら言った。

「まっつん、うっさい。ホントにうっさい」

大木は心底うざそうな顔をしていた。

そのやり取りを苦笑い混じりに見ていた、佐藤が捕捉する。

「本ちゃんは結構ピンピンしてるよ。大ちゃんは言ったけど、まだ気を失ってる状態」

「そうか。じゃあ一先ず、なんでそんなことになったか説明してくれ」

「わかった。向こうの部屋じゃなくて良いの？ 久しぶりに大ちゃんの顔見たくない？」

松田が聞くと、竹は少し考えるように天井を向き、視線を戻して言う。

「あー、ここでいいや。向こうはまだ治療中だろうし、大ちゃんの顔もあとで見れる」

「良いの？ もしかしたら俺たちが勘違いしてるだけで、今気を失ってる奴が本物の大ちゃんじゃないかもしれないけど？」

佐藤の言葉に、竹は即座に首を横に振った。

「それはないだろ。松もケンジも、実際見て体験した結果、そいつを大ちゃんだと判断したんだろ？ だったらそれに間違いがあるはずない。それに既に死人が一人生き返ってることだしな」

竹は最後こそあっけらかんと言ったが、松田と佐藤に向けた言葉にどれだけの信頼が込められているかは、想像に難くなかった。

「わかった。でも一応、竹もあとで確認してよ？」

「当然するよ。でも後でな。今、確認に行っちゃうと、大木さん一人になって寂しいだろうから」

竹は視線を大木に向けた。

すると、大木が遠慮したように言う。

「いやいやいや、向こうで話してきていいよ」

だが竹はそれを無視して、佐藤と松田に話すように視線で促す。

「了解っす。それじゃどっから話す？」

松田が佐藤に問うように顔を向ける。

竹が視線で促したのが角度的に見えなかった大木は、松田に無視されたものだと思い、若干イラついたような表情をしていた。

その大木の表情と、何も気付いていない松田の顔を同時に視界に収めて、佐藤は助けてくれという表情で竹の方を向いた。

竹は三人の表情を見比べて、状況を一瞬で把握すると、肩をすくめてニヒルに口元を歪めた。

「じゃあととりあえず、何で二人の顔が赤くて酒の臭いがするのか、

から話してみれくれる？」

藍の章 22 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

すみません、お待たせしましたにも関わらずかなり短いです。

最低でも週2回は更新したいのですが、未熟すぎてすみません。

藍の章 23 (前書き)

前話22話の後半を13日に少し弄ってあります。それ以前に読まれた方は、お暇があれば目を通してください。すみません。

藍の章 23

＊

緊張感なくビール缶片手に歩いていった本多、佐藤、松田の前方から歩いてくる人物がいた。

遠目にも強風に吹かれただけで、ふわりと飛んでいってしまいそうながりガリの体軀をしていることがわかった。

更に特徴的だったのは、その歩き方だった。

つま先だけで歩いているのか、足を踏み出すたびにヒョコヒョコと体が上下する。

世界は広い。

そんな奇妙な歩き方をする人間は、探せばそれこそ数多もいるだろう。

だが三人が知る限り、そんな歩き方をする人物は一人だけだった。三人はその奇妙な偶然に懐かしくなり、そして微かな寂しさが胸に去来した。

隙間風のような侘しさを感じ、会話が一瞬途切れるも、歩みは止まらない。

それぞれ前に進む三人と一人。

そしてお互いの顔が確認出来るくらいまで近付く。

……三人と一人。

その歩みが止まった。

「おーっす。まっつん、ケンさん、本ちゃん。久しぶりい」

上から下までそのままRPGにでも入れそうな洋服に裾の長いコート。ギョロつとした大きな目。贅肉どころか、殆ど肉付きのない身体。

その懐かしくも、自分たちと同じく年齢相応の成長を遂げた人物を視界に捕え、三人は目を見開き、言葉を失う。

まるで幽霊でも見たかのように——という言葉があるが、今の三人にその言葉は的確すぎた。

「……あれ？　もしかして忘れちゃってる？」

驚愕に口を閉ざした三人を窺うように、超痩身の少年が言った。

「——え、ええ？　マジで大ちゃん？」

深夜の路地に松田の驚く声が響く。

「あー、良かった。覚えてた。4年ぶりだねー」

今野大はそう言って、ゆっくり頷くと朗らかな笑みを浮かべた。

「な、え？　どうして？」

松田が混乱したままに問うた。

佐藤も本多も同じく混乱している様子だ。

……混乱せぬわけがない。

4年ぶり。

その言葉の通りに、今野大は4年前に死んでいる。

否、正確に言えば天岩戸と十三夜の戦争の直前に、今野大は庵戸朋愛の手により殺されているのだ。

それが何故、何事もなかったかのように自分たちの前に姿を現し、極々普通に声をかけてきたのか。

松田の問いに今野は困惑した風に答える。

「あつれー？　あっちゃんが、おいちゃんと戦って正体がバレたから、出てこれただけど……もしかしてまっつんたち、まだ聞いてなかった？」

今野の言葉を聞いた瞬間、松田と佐藤の背に動揺が走る。

その中で本多だけが、何がなにやらわかっていない様子だった。

何故かというと、全員が石渡の家に集ったときに竹から説明されるだろうし、内容が内容の為、不用意に外で話すことが憚られた為、佐藤と松田が何も教えていなかったからである。

それにしても、庵戸が鎗花と戦い、正体がバレたから出てこれた、どういうことだろうか。

いや、そもそも何故、死んだはずの今野が生きているのだろうか。

そして更に不可解なのは、今野は自分を殺したはずの庵戸のことを言葉にするとき、何の憎しみも感じさせないどころか、どこか親しんでいる様子さえ見受けられた。

これらが意味することは――

「あはは。そうそう。なんとなく気付いた？」

今野は三人を見据えると、清々しいほどの笑顔を浮かべ――

「生き返らされて、それで、今の俺はあっちちゃんの忠実な部下にされちゃってたり」

そう言つて、コートの中から取り出したのは、長さ50センチ、身幅が8センチ弱の短剣。

鰐は太く、同じく幅広の刀身には4本の縦溝が掘られており、その三角形の姿とあいまって人間の指の模しているようだ。

剣全体に絢爛豪華な装飾が施された、チンクエディアと呼ばれる種類の短剣。

本来、美術工芸品として作られた剣で、殺傷能力を度外視した飾り付けが成されたその宝剣は、しかし、今野大という男が持った時に限り、最高の殺傷能力を有す魔剣、一つの呪いを完遂させる呪式礼装と化す。

「『最強の盾』を封じる為に、庵戸の下に就かされた役目がやっと終わるよ。じゃあ本ちゃん。ごめんね――」

4本の溝で仕切られた5本指の刀身に本多の姿が映る。

その姿は5つ。

危険を察知した佐藤が左腕を今野に向け、松田がそれを止めようとその場から駆け出す。

だが遅い。

呪いの魔剣に5人の自分の姿を映させてしまった時点で、既に呪式は完成していたのだから。

それがわかっていたからこそ、本多は一步も動かなかったのだ。

「――『自傷癖』^{ホリック}」

細い弦きが張り詰めた冬夜の空気に流れ、今野は短剣を自らの腹

に突き刺した。

粉のような深紅の鮮血。

それは何か目に見えないものに飛ばされ、松田が組み伏せた今野の傷と、突き出した左の掌から目に見えない何かを放った佐藤の隣にいた本多の腹部から、同時に吹き出した。

今野大の異能、『自傷癖』^{ホリック}。

自らが身体に付けた傷と同じ傷を対象の相手にも負わせるという、一種の呪いとも呼べる異能。

ガリガリの身体は、この能力の通りを良くする為には最適の身体といえる。

自身が傷を負わなければならないことや、複数を同時に相手にできないことなど、中々に使い勝手がよろしくない能力なのは確かだが、今野はその能力を、『神具』に位置する『宝飾の魔剣』により、一つの最強へと引き上げた。

一を負えば一を負わせる。

その呪いの定理を覆したのだ。

彼の短剣の5本指に傷を負わせる対象者を映し、そして自傷することですその呪いは完成する。

一を負って五を負わせる。

そのえげつなさと、対人戦における絶対的な殺傷力は、外部からの攻撃に対して決して貫かれることのない、『最強の盾』を有していた本多を地に伏せたことで証明された。

だが、この力にもデメリットがないわけではない――

「――ぐう……」

「ちっ……！」

腹部からとんでもない量の血をまき散らし、前のめりに倒れる本多を佐藤が支える。

「くそっ！」

松田は組み伏せた今野の手から短剣を奪い、既に意識を失っている今野の顔を念の為に殴っておいた。

「だ、大丈夫、本ちゃんっ?!」

佐藤が本多をゆする。

「だい、じょうぶなわけ、ねえ……」

本多は腹部を抑え、口元を僅かに緩めながら言った。

佐藤はその顔を見て、とりあえず大事には至っていないことを確認して、ほっと息をつく。

もし今野の呪いが完全な形だったのなら、間違いなくその時点で本多は死んでいた。

一人一殺の定義を持った、五倍の呪いはそれほど苛烈なものだ。だが幸運だったのは、今野がデメリットを克服していなかったことと、佐藤がこの場にいたことだ。

一つ目の幸運、今野が克服していなかったデメリットというのは、今野は自を傷つける行為を行った際に限り、通常の数倍の痛みを感じるということ。

——人を呪わば穴二つ。

それはどんな方法、手段を用いても緩和させることが出来ない、今野大という存在自体に組み込まれた、真実、呪いじみたものだ。

そして、二つ目の幸運は、遠距離での高速攻撃が出来る佐藤がいたこと。

『戦神の左腕』^{ウェボン}。

その左腕を以って空気を時には弾丸に変え、時には刃に変えて多様に扱う、近・中・遠距離どの距離でも戦うことが出来る異能を有した戦闘者。

それが佐藤だった。

佐藤は今野が自らの腹を刺した後、更にその刀身で腹を割こうとした直前に、左手に収束させた空気の塊を弾丸のようにして放ったのだ。

既に常外の激痛で朦朧としていた今野の意識は、それにより完全に刈り取られた。

「まっつん、そっちは!?!」

佐藤は本多の傷口の止血を始めながら、松田に聞いた。

「平気。完璧に気を失ってる」

今野が着ていたコートを裂いて、松田は意識を失った今野の両手を縛り上げる。

「わかった。とにかく早くなおやん家に行こう」

佐藤が本多を両手で抱え上げる。

本多は意識こそはつきりしているが、流れ出る血の量は予断を許さない。

「了解。よつと」

松田は刀身に血の付いた今野の短剣を左手に持つと、拘束した今野を右肩にかかえた。

そして、二人は全速力で石渡の家へと走り出した。

＊

「――話はわかったけど、なんて言ったらいいのか……」

説明を聞き終えた竹は、非常に微妙な顔をしていた。

二人を非難するべきか、否か。

竹は判断に迷っていた。

念を入れて本多の護衛に松田と佐藤を付けたにも関わらず、本多は負傷してしまった。

しかも、駅からの帰還手段に徒歩を選択した上に飲酒までして、だ。

これだけなら、非難するべきだろう。

だが話は変な具合にややこしい。

本多に傷を負わせた相手が、生存――否、この場合は蘇った今野だったことだ。

本多一人だけだったら最悪死んでいたところを、負傷ですませることが出来た。

これは評価できるところだ。

以上のことを踏まえてプラスなのかマイナスなのか……判断にと
ても迷う。

——と、ここまで考えて竹はあることに気付いた。

「ん？」

駅からの帰還手段を徒歩で提案したのは誰だったか？

松田だ。

道中で飲酒を提案したのは誰だったか？

これも松田だ。

「んん？」

では、今野が割腹しようとしたのを止めることが出来たのは誰だ
ったか？

これは佐藤だ。

「んー、わかった」

竹はさっぱりと清々しい顔で、うんうん、と頷いてから、

「とりあえずケンジはお疲れ。松は死ね」と爽やかな口調で言った。

「うえ！？　なんでよ？！」

松田が驚きと抗議を混ぜた声で竹に言った。

「いや、今回の君、かなりの役立たずじゃん」

そうなのだ。

佐藤と松田、二人を一緒にして考えるから判断が難しかったのだ。

それぞれ別個で考えたら、どう考えても佐藤はプラスの行動。

松田はマイナスの行動しか起こしていない。

「いやいや、ちゃんと大ちゃんを捕縛したから」

「その時はもう気を失ってたんだろ？　だったら、あんまり意味ね
えし」

「……いやー、あそこで俺が捕縛してなかったら、もしかしたら大
ちゃん起き上がったかもしれないね」

言い訳じみた松田の反論に竹が白い目をして聞く。

「念には念を入れた行動ってこと？」

「そうそう。そういう感じ」松田が、まさしくそれ、と頷いた。

「でもオレも念には念を入れて二人を本に付けたんだけど？　そこ
んどこどうなのよ？」竹の追求する声は厳しい。

松田は「あー、それはー……」と何か考えるような表情をみせた
あと、

「……悪い」と項垂れながら言った。

「OK。許しましょう」

竹は自らのミスを認めた松田を慰めるように言い、

「まあオレが言うようなことでもないんだけどな」と肩をすくめた。

本来、ここで松田を非難する権利があるのは、負傷した本多だけ
だ。

更に、非難されるという立場を言うのなら、本多の護衛に松田と佐
藤を指名した竹も同じだろう。

竹は二人を信じて頼んだのだから、非難するのはおかしい。

だがしかし、竹はあえて松田のミスを非難した。

何故なら、本多は今回のことで松田にも佐藤にも竹にも怒る気はな
いだろうから。

本多だけでなく、この程度のミスをいちいち非難するような人物は
十三夜にはいない。

最大の信頼で結ばれているから。

赦されてしまう。

しかし、だからこそ、竹はその都度ミスを指摘し、非難する。

自分たちの関係性が何よりも綺麗で尊く、何よりも歪んでいること
をわかっているから。

それは他のものたちも同じだ。

だけど竹のような形で非難することは、まずない。

指摘はしても、非難はしない。

性分、ということもあるだろうが、第一にそれが自分の役目では、
役割ではないと思っているから。

それが形なりにも十三夜を結成し、運営している天倉竹の最大の役

割だということを、わかっているから。

故に竹はわざわざ松田を非難したのだった。

しかし——非難するのが竹のみの役割だというのなら、竹に対して同じことをしてくれるのは誰だというのだろうか——

「そういえば……」

黙っていた大木が口を開いた。

竹が松田を非難したことで、やや重くなった空気を変えようとしたのかもしれない。

自分に三人の視線が向けられると、大木は更に続ける。

「大ちゃん、このあとどうするの？ 連れてきちゃったみたいだけど」

このあと今野をどうするか、それはある意味核心ともいえた。

今野は自分の口で、大木と館花を襲撃してきた庵戸の忠実な部下だと言ひ、そして本多を手にかけたのだ。

普通に考えれば、かなりの危険人物である。

それが例え、4年前の友人であっても、相応の処分をしなければならぬ。

大木はそう思ったのだろう。

しかし、竹はそんなこと微塵も思っていなかった。

「別にどうもしないよ。大ちゃんは、もう大丈夫だと思う」

竹の言葉に、松田と佐藤も同意するように頷いた。

その意味がわからず、大木が聞き返す。

「え？ どうして？」

「ん、じゃあ説明しようか」

竹はそう言ってから、「あれ、オレってやっぱ説明キャラなのか？」と小声で自問する。

竹の自問に、三人が小さく頷いていたが、竹はそれを視界に納めつつも何も言わず、説明を始めた。

「もし大ちゃんが本を本気で殺すことだけを考えていたのなら、刃

を突き刺す部位は腹ではなく別の場所だったはずだろ。でも大ちゃんはそのようななかった。それは何故か？　そもそも大ちゃんには殺すつもりがなかったからだと思う」

「どうして？」　大木が短く聞いた。

「大ちゃんは『最強の盾』を封じる為、って言っていたんだろ？」

竹は松田と佐藤に問うように視線を投げかける。

「言ってた」その問い佐藤が答えた。

「うん。そうするときは、『封じる』ってというのがポイントだと思うわけよ。まだ見てないけど本の傷自体はかなり深いと思う。中途だったとはいっても『自傷癖』^{ホリック}をモロにくらったんだから。一箇所の傷を比べたら下手したら大木よりも深いかもね。見てないからわからんけど……まあとにかく、そうそう早くに回復するようなものじゃないことは、確かだと思う。つまり、本、『最強の盾』は大木とかおいちゃんとかと同じく暫くは戦線離脱ってわけですよ。——これって封じられた、ってことだろ？」

「確かに。でもそれはわかったけど、どうして大ちゃんが大丈夫なの？」

「大木さん、松とケンジの説明聞いてなかった？　大ちゃんは、『最強の盾』を封じる為に、庵戸の下に就かされた役目がやっと終わる、って言ったらいいし、その前には、今の俺はあっちちゃんの忠実な下僕、とも言った。ってことは、まあ、大ちゃんはもう大丈夫と思っても良いんじゃない？　少なくとも、オレはそう思うわけだけだよ？」

竹は長い説明を終えて一息つき、三人をそれぞれ見た。

松田と佐藤は、竹の意見と全く同じだったようで、

「竹さんの意見に一票で」

「俺も竹の意見に一票」と答えた。

大木は竹の意見を少し吟味するように素振りを見せたあと、

「確かに。ああ、確かに」と至極納得したように言った。

竹は三人から同意を得て満足したように頷き、

「まああくまでもオレの推測だから、100%合ってるかはわからない。だから一応、大ちゃんに関しては、まだ気を付けておいて」と最後に釘を刺しておいた。

佐藤、松田、大木が了解して頷く。

すると、扉が開けられて白衣を着た石渡が顔を出した。

「竹、皆揃ったよ。あ、大木も起きてるね。調子どう？」

石渡は十三夜全員が集ったことを報告したあと、医者らしく大木に問うた。

「まあまあだよ。さすがパーマ」

大木は石渡に傷の手当を感謝しつつ、やはり挑発するように答える。石渡は怪我人をど突くことは出来ないので、完璧にそれをスルーして竹の方を見た。

竹は石渡と大木のやりとりに、少し笑みを溢しながら、

「わかった。すぐ行く……だけどその前に」と何かを提案するように松田と佐藤を見る。

「さっきの説明。面倒だから、どっちかしてくれたりしない？」

「パス1」

「パス2」

二人は即答した。

「ていうか説明はTKでしょ」

「期待してるぞっ、説明キャラ」

そう言って、二人は開いた扉に足を向ける。

「……全然嬉しくねえ」

竹は溜息混じりに苦笑いして、そう言うとき大木を残して『医神の間』アスクレピオスを退出した。

一人残された大木の表情は、やはりどこか寂しげだった。

100%合ってるかはわからない。

竹はそう言った。

しかし、竹の意見は間違っていないだろう。

竹はそれに気が付いていない。

否、気が付いていないふりをしているのかもしれないが、どちらにせよ、心のどこかで確信しているだろう。

今野を生き返らされて、庵戸の部下という役割につかせた。

その目的は、『最強の盾』を封じる為。

それが達成された今、この物語での今野の役目は終わっている。

これ以上は何もない。

この物語は、あくまでも天倉竹と庵戸朋愛のものなのだから。

大木がやられたことも。

館花がやられたことも。

本多がやられたことも。

全ては余興。

そして、下準備なのだ。

庵戸の正体が竹にバレたタイミングで今野を登場させ、役目を果たさせたのは彼女からのメッセージ。

全てが『唯一の一』オリジナルワンの采配。

――4年前と同じ終わらせ方は認めない。

それではつまらない。

もっと愉しませる物語を。

もっと面白い結末を。

それは、一つの非難めいたメッセージ。

即ちそういうことだろう。

藍の章 23 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。

毎度お待たせしてしまい申し訳ありません。

実は本来なら今話は22話(13日に後半を少し弄ってます。すみません)と合わせて1話の予定でした。

しかし、パソコンがポンコツ過ぎるせいで、突如強制シャットダウン。既に書きあがっていた1話(22・23にあたる部分)まるまる消去されました。

いい感じにへこんで、泣く泣く思い出しながら書いたのが22・23話です。22が短かったのは、本来1話だった部分をカットした為と、あまりお待たせするのは良くないという判断からです。

それでも遅い更新速度ですが、頑張りますので最後までお付き合いください。

例によっておかしなところがございましたら、ご指摘いただければ幸いです。

AM9…30。

寒空に昇る日輪の陽光は、一晩のうちに益々冷え切った大気と地表の温度を僅かばかり上昇させ、それにともない寒冷の夜を耐え切った動植物がゆるゆると行動を始める。

冬の夜に凍え、凍死の心配に怯えずとも生きていけるようになった、かの先進国に住む人々もその例に漏れず行動を開始する。

それは凍える寒さを超え、暗黒の夜を越えても、変わらず自分たちが日の光の下で生きる、陽光の生命なのだと言張しているようでもあった。

それを証明するかのように、石渡の家からゾロゾロと人が出てくる。その数は7人。

みすばらしいといっても差し支えないであろう、ボロアパートの一室から出てきた人数にしては多めの人数である。

しかし、祝日だからなのか、それとも元々が人通りの少ない道なのか、幸いにもボロアパートから出てきて屯する彼らに好奇の視線を投げかける他者はいなかった。

「まだ少し早かったかな」

人気の全くない道路に出た竹が、何かを待つように遠くを見ながら独り言のように呟いた。

その後ろで、出てきた残りの6人は玄関扉の前に屯し井戸端会議をしている。

彼らの表情は、若干眠そうではあるが、それぞれリラックスしているようだ。

その様子からは、昨晚の動揺が微塵も感じられない。

昨晚、竹は全員を緊急招集した理由、そしてその後起きた今野

のことなど順を追って細かに説明した。

その時の動揺は軽いものではなかった。

特に庵戸を生存させ、今野に生を与えたのが『唯一の一』オリジナルワンだろう、という見解を述べた時は一際大きな、畏れに近い動揺が走った。

しかし、今の彼らは平静としている。

竹はそんな彼らの図太さに友人ながら呆れ、同時に頼もしく思う。

もう一度、道の先を確認して待っているものが来ていないことを確認すると、竹も井戸端会議に参加する。

竹が参加すると、すうっと脇がその横に立ち、小声で何うように言う。

「竹君、本当にうちらが行っちゃって良いの？」

「ん？ 全然問題ないけど？」

「なら良いんだけど……」

そう言っただけのもの、脇の言葉の節々に遠慮しているのが見え隠れしている。

他の面子も、会話を中断して同じように遠慮がちな顔をして竹を見ていた。

まあこれからのことを考えれば、遠慮がちになるのも無理はないだろう。

昨晚、今回のことを皆に説明した後、竹が当面の方針としてうち出したのは戦力の集中だった。

庵戸の目的が竹である、という予想こそ立っていたものの、まだ確定したわけでもなかったし、それを予想した後起きた今野の件もある。

今後、何が起こるかわからない。

なので、戦力は集中させておくことが望ましい。

それが竹の考えだった。

とはいえ既に、石渡の家に十三夜全員が集っている時点で、戦力の集中という目的は達成されている。

しかし、それでは駄目なのだ。

戦力の集中という目的も、結局はその後に起こるかもしれない不測の事態への防護策、一つの手段でしかない。

それに加えて、物理的な問題もある。

石渡の家は地下を合わせれば狭い、とは言えない面積を持っているが、それでも十三人が過ぐすには手狭になる。

一晚泊まる程度なら問題はないだろうが、今回の件の決着がいつ付くかわからない以上、もう少し広い場所に留まりたい。

更に防衛の面でも、石渡宅はあまり適しているとは言えない立地だ。万全を期するなら、それに相応しい地を選ぶべきだろう。

ゆえに、準備が整い次第、広くて防衛に適した場所に全員で移動する。

——というのが、深夜のうちに竹が全員に語った今後の移動についての説明である。

準備が整い次第、というのはこちらにいる負傷者、特にまともに動くことが出来ない大木が、多少なりとも歩けるようになる程度まで回復を待つこと。

それと、これから自分たちを受け入れてもらう場所の準備が完了するまでのことである。

そして双方の準備が完了した今、竹たちが外に出て待っているのは、先方からの迎えであり、同時に脇たちの顔に遠慮が貼り付いているのは、これから自分たちが向かう先が十三人の中でごく一部を除いて、殆ど関わりのない人の家だからだ。

竹も、もし自分が同じ立場だったら同じような顔をしていただろう。それが容易に想像できてしまう為、少しばかり苦笑いしながら、

「夜にも言ったけど、向こうには了解もらってるから心配しなくても平気」と言った。

二度目、という効果があったのだろう。

その言葉で僅かに6人の表情から遠慮が薄らいだ。

竹はそれを認識すると、ポケットから携帯を取り出して時間を確認した。

話では遅くとも30分過ぎには迎えがくるということだったので、そろそろだろう。

携帯をポケットに仕舞いなおし、隣にいる脇に「そういえばさ」と声をかける。

「何かな？」脇が聞き返す。

「いや、君とケンタさ、今月まだ騎士団に賞金首引き渡してないみたいだけど、どんな感じなのよ？」

まさか忘れてたりはしないかな？ と竹は冗談混じりに言った。

しかし、脇はそれを聞いて顔を蒼白にさせ、佐藤と談笑していた古巢謙太^{ふるすけんた}の方を凄まじい勢いで見た。

古巢は、脇の視線が向くと同時に、その太った体からは想像できないほど俊敏な動きで視線を逸らし、とぼけた顔をつくった。

その一連の流れを当然見ていた竹が言う。

その口元は半笑い。引きつっているともいう。

「なあ……まさかとは思うけど」

「ごめん、またうっかりが発動してた。てっきり来月だと思ってましたよ……」

脇は肩を落とし心底申し訳なさそうに言った。

脇には一つ、致命的な欠点がある。

それがこの『うっかり』である。

マルミグナット

この『うっかり』は『電子の蜘蛛』として活動する時には発動されず、脇光太郎として活動する時に限って周期的に発動される謎の欠点だった。

「……今日が23だから、あと約一週間——いや、もっと少なくなるけど……大丈夫？」

普通に考えれば、一週間あれば十分の期日だが、これから竹たちは一箇所に留まることになっている。

しかも、それはどれくらいの日数になるのかわからないのだ。正直、かなり厳しい話だろう。

「かなりきついけど……なんとかするよ。こっちのミスだし」

「よろしく」

竹は脇にそう言うのと、下手くそな口笛を吹いて誤魔化そうとしている古巣を見る。

「でだ、コーチンは来月だと思ってたらしいけど、ケンタは？ もしかしてお前も来月だと思ってたとか？」

古巣は竹に問いかけられると、誤魔化しから一転、いっそ開き直ったように言う。

「いんや、忘れてただけだよん」

「死ね」

竹は古巣の予想通り過ぎた答えに、用意しておいた辛辣な言葉を短く浴びせた。

「ははっ」古巣は全く悪びれた様子もなく、人を喰ったように笑う。彼らの間で、よくあるやり取りだった。

そしてその後、反省の色のない古巣の背後に音もなく近付いて、飯泉和典が制裁の意味を込めて、それはもう爽やかな笑顔で腕に関節技を決める。

「痛ーい、痛ーい、痛ーいっ」

悲痛な声をあげる古巣を、その場にいた全員がゲラゲラ笑いながら見ている。

これもまたよくある光景だった。

関節を決められた古巣のライフポイントがガンガン減っていく中、竹たちの耳に車のエンジン音が聞こえた。

「――あ、来た来た」

竹の言葉に、全員が一斉に道路を見る。

アパートの前に、小型のシャトルバスが停車する。

竹はそれを見て、

「それじゃマメ、中にいる奴等呼んできて」と遠藤涼也えんどうりょうやに声をかけた。

「あいよー。でも怪我人いるから、もう一人、二人付いてきてくれない？」

石渡の家の地下には、大木、今野、館花、本多の4人の負傷者がおり、自力で歩けるのは辛うじて館花くらいだ。

今野は未だ意識不明。

本多は意識はあるが、半日前に付けられた腹の怪我が深い為、まだ自力で歩くのは避けるべきだし、大木は歩ける程度まで回復したとは言っても、それでも完治したわけではないのでまだ安静が必要。一番傷の浅い館花も膝を負傷している為、松葉杖がなければ歩けない。

なるほど、4人の怪我人に対して、地下に残っている松田と石渡、そしてこれから向かう遠藤だけでは足りないかもしれない。

竹がそう納得するよりも先に、甲斐輝明（かいてるあき）が遠藤を手伝う為に逸早く動いていた。

その後ろに、飯泉が古巣の腕を放して続く。

遠藤、甲斐、飯泉が玄関の中に入っていたところで、竹は残った佐藤、古巣、脇に、

「とりあえず、先に乗っちゃおう」とシャトルバスの方を見ながら言った。

自動で開いた扉からバスに乗り込み、竹は運転席のメイド服に挨拶をする。

「わざわざすみません」

「いえ、紅葉様の申し付けですので。お気になさらずに」

運転席の少女、八坂真実（やさかまみ）は柔らかい微笑を浮かべて頭を下げた。

彼女の妹の真逆（まさか）と比べて会話した回数も少なく、その上、会話の続けようがない返答をされ、竹は言うべき言葉が見当たらず、

「あー、とりあえず、どうもです」と曖昧に言って軽く頭を下げた。そして運転席から離れて、既に席に座っていた三人の近くに座り、窓の外を見る。

竹の視線の先では、石渡の家からタンカが2台、松葉杖をつく者、肩を貸してもらって歩く者と順々に計9名もの人が出てくる。

なんの変哲もないボロアパートから出てくるにしては、かなり異

様な光景だろう。

竹と他の二人は苦笑いをしながら、その様子を眺めていた。

藍の章 24 (後書き)

お読み頂きありがとうございます。
そろそろ終わりも見えてきました。長い物語になりますが、もう暫くお付き合いください。

藍の章 25

＊

「……何の用ですか？」

それが第一声。

突然尋ねてきた来訪者に対して、大神深翠はその端正な造りをした顔に敵意を隠すことなくそう言った。顔と同じく、敵意を込めた声だった。

訪問者は深翠の対応が予想通りのものだったのか、敵意を向けられてもさして気にした風もなく、自分から大股で5歩分ほど脇に離れて立っていたもう一人の人物に声をかけた。

「彼女に説明してくれますか、ヤマブキ」

「……わかってるよ」山吹蒼香のツンとした声が聞こえた。

「え、蒼香？」

予想外の人物の声に、深翠の翠色の瞳が驚きに染まる。

ブロンドのウェーブ掛かった髪と胸が特徴的な、この異国人の訪問者がまさか蒼香と一緒にだったなんて思いもよらなかったのだ。

「深翠、おはよ」

玄関扉で隠れて見えていなかった蒼香が、訪問者アレクサンドラ・ワナーの横に立って至極微妙な顔で挨拶をした。

「……おはようございます。それで、どういうことですか？」

金髪に黒髪が怪訝そうな顔をして問うた。

騎士団の王女と殺戮天使の組み合わせが午前中から訪問してくる予定など、今日の深翠のタイムテーブルにはない。

「えっと、まあ簡単に言うと一緒に来いって話みたい」

フードとファー付の暗色系ジャケットの下にタートルニット、チェックのスカートにカジュアルブーツと私服姿の蒼香は、本当に簡単に目的だけを言った。

「ヤマブキノウカ、そんな言葉足らずの説明では、彼女がこの訪問の意味を理解することは出来ないと思いますけど？」

その説明ともいえない説明に、アレクサンドラが苦言を呈した。

彼女もまたジーンズにトレンチコートと冬の私服仕様である。

ただ、一見カジジュアルではあるものの、上から下までどこことなく高級そうな雰囲気を持っている。

「だったらあなたが説明すれば良いじゃない」蒼香が鼻を鳴らして言った。

彼女も深翠同様、アレクサンドラに対して敵意が隠れていない。しかし、アレクサンドラはやはりその敵意を意に介していないらしく、キビキビとした口調で言う。

「私が説明するよりも、あなたから説明してもらった方が手早く済むだろうと思ってお願いをして、あなたもそれを了承したはずでよね？」

「……っ、わかってるわよ」

自らの敵意を流されているだけではなく、その上で年下の相手を諭すような言い方をされ、蒼香のイラつきが増す。

そのあまり良いとは言えない様子に深翠が割り込む。

「一緒に来いって、何処へですか？」

「釜蔵だつてさ」

蒼香が短く答えた。

それを不十分と取ったのか、

「正確に言くと、釜蔵にある秋野の屋敷あきのです。オオガミ」とアレクサンドラが続けた。

それに蒼香と深翠がそれぞれ顔をしかめる。

蒼香は、そこまで言うなら最初から説明しろよ、というイラついた感情によるもの。

深翠は、秋野の屋敷、という場所に対してだった。

「……一緒に、ということは私と蒼香とあなた三人で、ということですか？ 何故、行く必要が？」

秋野の屋敷に行く、ということは秋野紅葉あきのくれはに会うということである。

あの浮世離れしているくせに、どこか俗世慣れした紅い鬼とは、正直なところあまり会いたくはない深翠だった。

数回しか会ったことはないが、その数回で彼女と絶望的なまでに相性が悪いことがわかっていた為だ。

なので、あの屋敷には近寄りたくないのだが――

「そうですね。私たち三人で一緒に秋野邸まで来てくれと言われてます。それと泊まりになるそうなので、一、二泊分くらいの用意はしてください」

結局、蒼香に説明させるよりも、自分で説明した方が手っ取り早いと判断したらしく、アレクサンドラが言った。

「言われた？ 誰からですか？」

「アマクラですよ。オオガミシンリ」

深翠の問いかけに、アレクサンドラは即答した。

この返答に深翠も蒼香も心中穏やかではいられなかった。

どの辺りがポイントだったかというと、アレクサンドラに蒼香と深翠を連れて秋野邸まで来るように指示したのが竹だったことと、その話を蒼香も深翠も全くもって知らなかったことである。

蒼香はアレクサンドラから、このことを聞いてからきているので耐性が付いていても良さそうなものだが、そうもいかなかったらしい。

竹が蒼香と深翠ではなくアレクサンドラを選んだともいえる、この状況では致し方ないのかもしれないが。

「竹さん、ですか？」

深翠は静かに感情を押し殺した声で聞き返した。

蒼香はあからさまにアレクサンドラを睨んでいる。

アレクサンドラは、そんな二人の様子に半ば呆れたようにため息をつき、

「そうよ。私はタケ君に指示されてあなた達二人を連れて来いと言

われたの。疑うのなら電話して聞いてみれば良いわ。それとね、あなた達は私が選ばれたと思っているのだろうけど、それは間違いよ。今回はたまたま、私に頼むのが一番都合が良かったただけだから」

と先ほどまでとは打って変わって砕けた口調で言った。

その変化に少し面食らいながらも、蒼香が問う。

「……一番都合が良いってどういう意味？」

「足があるかないかよ」

「足？」 深翠が聞く。

「そう、足。移動手段。この場合は車ね。あなた達は車持っていないし、運転もできないでしょう？」

深翠が確かに、と頷く。

蒼香は実は運転出来たが、問答無用で無免許だったので黙っていた。

「私は自宅からこっちに来るのに大抵車だから、どうせだからそれに乗っけて三人で来いって言われたの。バラバラに来させるのが不安だったんでしょね」

「不安って？」

「その辺は向こうに着いてからタケ君が説明すると思うわ。……まあ普通は騎士団の王女たる私に、あなた達の迎えをやらせる方が不安だと思うけど。でもそれを平然とやるのが彼なのよね。何故だかわかる？」

アレクサンドラは意地悪く微笑んだ。

「……」

「……準備してきますから、少し待っててください」

蒼香は何も答えず、深翠はコートを取りに玄関から踵を返す。

それを見て、アレクサンドラが変わらぬ微笑のまま蒼香に声をかける。

「確認の電話はしないの？」

「……するわけじゃない」

蒼香が憮然とした表情で答えて、アレクサンドラは楽しそうに、

「そうよね」と笑った。

そう。

確認する必要などない。

騎士の王女に自分たちの迎えをさせたのは何故か。

そんなこと聞かれるまでもない。

答えるまでもない。

「――お待たせしました」

さほど時間はかからずに、ピーコートを羽織って、ボストンバッグを持った深翠が戻ってきた。

「それじゃあ行きましょう」

深翠が自宅に鍵をかけたのを見届けると、アレクサンドラが歩き出す。

口調はまた、どこか高貴さを感じさせるものに戻っている。

その変化を気にした風もなく、深翠と蒼香もそれに続く。

三人がマンションの前に停められたオレンジ色のミニに乗り込むと、アレクサンドラが思い出したように言う。

「あ、そうそう、秋野邸に向かう前に一つ寄り道しますから」

「どこですか？」

「タケ君の家です。頼まれてることがあるので」

そう言って、アレクサンドラはエンジンをかけ、主不在の竹宅に三人で向かった。

藍の章 25 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

先週からずっと体調が悪くて、全く書けませんでした。

これ以上間は空けられないと、一応キリが良かったので載せました。短くてすみません。一向に治る気配がないので、苦渋の決断でした。今年の風邪は長引くようです。皆様もお気をつけて。

おかしな部分がありましたらご指摘ください。

＊

竹の自宅の玄関前に三人の少女が立っていた。

「……ねえ、思ったんだけど」

金髪セミロングの少女が閉じた玄関を見ながら言った。

黒髪ロングの少女が難しい顔をして、蒼香に同調するように言う。

「ですね。私も車の中でずっと考えてました」

「だよ。ねえ、王女様。竹の家に来たのは良いけど、竹は秋野の屋敷にいるんでしょ？」

蒼香は視線を玄関ドアから、もう一人の少女へと変えた。

「そういう話になっています」

ブロンドのウェーブヘアが小さく頷いて言った。

蒼香はアレクサンドラの態度に、自分たちの言わんとしている事が伝わっていないのだと判断して、やれやれと口を開く。

「だったら、ここに来てても仕方ないんじゃないの？ 竹が不在だったらここは開かないでしょ？ それとも、そんな事にも頭が回らなかったの？ 騎士団の王女様は」

自分を馬鹿にしたような蒼香の言葉に、アレクサンドラは逆に蒼香を小馬鹿にするように小さく鼻を鳴らす。

「何よ？」

「いえ、何でもありませんわ。ヤマブキシウカ」

「何でもないことないでしょう。何かあるなら話さないよ。この年増」

「ええ、話しますとも。ですから少し黙っていただけますか？ それと私はあなた達と二つしか違いませんわ。貧乳のお嬢さん」

「ひ、人の身体的特徴を?!……この虚乳っ」

「あら、先に仕掛けてきたのはそちらでしょう？ あとこれは残念

ながら本物です。いえ、残念なのはあなたの方かしら？」

アレクサンドラは自分の大きな胸と蒼香の残念な胸を比べながら、皮肉に笑う。

「ふ、不必要に大きなものをぶら下げて、でかい顔しないでくれる？　そういうのは、大きければ良いってもんじゃないのよっ！」

蒼香が顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

それにアレクサンドラは、

「貧相なものよりは、よっぽど需要があると思いますわ」

と言って勝者の笑みを浮かべた。

もしここにおっぱい星人の某『電子の蜘蛛』マルミグナットがいれば、静かにアレクサンドラの右手を持ち上げて勝ち名乗りを上げただろう。

『乳とは、虚ろわざるものにして、全てなんだよ……。ていうか貧乳に用はないよね』

なんて馬鹿にしか思えない言葉を大真面目な顔をして。

そして、それに某十三夜の半数以上が賛同の喝采を送ることだろう。

——さて、そんなおっぱい星人どもの話はどうでも良いので話を戻そう。

売り言葉に買い言葉で、アレクサンドラと蒼香は睨み合ったまま。

一向に話が進まない。

そこに埒を明かしたように深翠が言葉を挟む。

「そんな話はどうでも良いですから、話を進めてもらえますか？

あとあまりこの場で、その話をするのはやめてあげて下さい。なんというか、竹さんの円滑な近所付き合いの為に」

確かに竹の自宅の玄関前で、美が付く少女が睨み合って、おっぱいについて怒鳴りあっていたら近所の奥様方の恰好の的だろう。

それに気が付いて、蒼香とアレクサンドラは互いに顔を背ける。

蒼香が顔を背けた先には、呆れたような顔をして二人を見ていた深翠がいた。

否、そこにあったのは王女様よりは小さいものの、それでも割り

と大きなものをお持ちになった翠の瞳をした少女だった。

「ま、まさか……そんな……深翠、あんたまで、そっち側の住人だったなんて……」

ふふふ、と蒼香は暗い笑みを浮かべて肩を落とし、ぶつぶつ言っている。

深翠は触れぬが花だろう、とダークサイドに堕ちたっぽい蒼香を極力視界に入れないようにしながら、アレクサンドラへ言葉をかける。

「頼まれた、ということは鍵を開ける方法があるんですよね？ アレクサンドラさん」

深翠も蒼香と同じく、竹が不在であればこのドアは開けられないのではないか、と考えた。

しかし、竹が用事を頼んだということは、アレクサンドラが鍵を開ける方法を持っているか、知っているかのどちらかであることは、想像に難くなかった。

だが、その結論に到達してもそれを深翠は否定していた。

何故なら——深翠も蒼香もこの鍵を開ける方法を知らないからである。

自分たちが知らないのに、アレクサンドラだけが知っている。

深翠は車の中でずっと、その結論に到らない道を考えていたのである。

しかし、そんな道など見つからず、一縷の望みに賭けて問うた答えは——

「さすがに理解が早くて助かるわ」

否定し切れなかったものだった。

「タケ君は——ていうか誰だって普通ドアを開けられない人に、頼み事なんかしないわよね」

どんな心境の変化か、アレクサンドラの口調はフレンドリーなものに変わっている。

「ですよ。では、どうやって鍵を開けるんですか？ アレクサン

ドラさん」

深翠は内心のショックを隠しながら言った。

「そんなの簡単よ。あ、でもその前に私を呼ぶ時はサンドラで良いわ」

「……そうですか。では私は深翠で良いです。サンドラさん」

「さん、もいらないのだけど？」

「いえ、一応年上ですから」

深翠は年上の部分を若干強調して言った。

蒼香よりはマシだが、深翠もアレクサンドラに対して好印象はないようだった。

それにアレクサンドラは、軽く苦笑いをする。

「……そこがあなたと私のラインってことね」

「蒼香よりも話が進められれば問題ないでしょう」

「それもそうね。それじゃあ、今から鍵を開けるわ」

「どうやってですか？」

「そんなもの決まってるわ」

「決まってる？」 深翠が首をかしげる。

「ええ。鍵が閉まってるなら、鍵を開ければ良いだけよ」

アレクサンドラはそう言うのと、コートのポケットに手を突っ込んで、あるものを取り出した。

それを見て、深翠と、自分の世界に入り込んでいた蒼香の顔が一瞬にして強張り、

「な——馬鹿な——?!」

「う、嘘でしょ!？」

驚愕の声が漏れる。

アレクサンドラの手握られているもの。

それは——竹の家の合鍵だった。

殺意のこもった視線を向ける二人を尻目に、アレクサンドラはその合鍵で竹の玄関ドアを開けた。

ガチャリ、と鍵穴がターンし、

カチャリ、といった間に出したのか蒼香がデリンジャーをアレクサンドラに向けた。

本気で殺る気満々の眼に、アレクサンドラがさすがに焦った素振りを見せる。

アレクサンドラとしては、鍵を開けた後、蒼香をおちよくってやろうと思っていたのだが、蒼香の沸点は想像以上に低かったらしい。「……それはなんの真似ですか？」

アレクサンドラはゆっくり鍵をポケットに戻しながら、怖い声で問う。

秩序を乱すものを排除する騎士団の王女として、蒼香の行為は決して認めて良いものではない。

蒼香は自分を睨む琥珀色の瞳を真っ直ぐ睨み返し、

「見てわからない？」と挑発するように言った。

その一触即発の状況に深翠が慌てながら蒼香を窘め、デリンジャーを構える蒼香の手を下ろす。

「蒼香、それはさすがにまずいです。殺るならもっと別の場所で」

「……わかったよ」

なんだか色々間違った窘め方、蒼香は不承不承といった感じで、デリンジャーをしまった。

蒼香がデリンジャーをしまうと、アレクサンドラは蒼香から視線を外し、鍵の開いたドアノブに手を回した。

そして、その体勢のまま何か逡巡したような素振りを見せると、蒼香へ視線を戻す。

「ヤマブキソウカ。一つだけ忠告しておきます。あなたが過去に犯した罪を騎士団が見過ごしているのは、アマクラタケが騎士団を抑えている為です。それを理解出来るなら、二度と今のような行為はしないように」

それは警告に似た懇願。

アレクサンドラはそう言うと、蒼香の反応を見ずに、再び視線を外してドアを開けて家の中に入っていく。

その横顔は、これ以上の蒼香との対話を拒絶しているように冷たいものだった。

「……蒼香」

深翠が閉じたドアを見据えたまま固まっていた蒼香に声をかける。蒼香は一度深翠の方を見て苦笑いして、

「深翠……お願いがあるんだけど」と言った。

「何ですか？」

「あの虚乳が竹の部屋で悪さしないか見張りに行ってくれる？」

蒼香が肩を竦めて言うのと深翠は、

「わかりました。しっかり見張っておきます」

と微笑とともに答えて、アレクサンドラに続いて竹の家に入っていた。

蒼香はそれを見送ると、おもむろに両手を頬に持ってきて、思い切り自分の頬を引っ張った。

これは竹の心を裏切りそうになった、短絡的な自分へのせめてもの戒め。

そして竹の部屋に入らずにこの場に残ったのは、見逃してくれたアレクサンドラへの少しの感謝と、自分のプライドを守る為。

「……痛い」

思い切り抓り赤く色付いた両頬をさすりながら、蒼香はつぶやいた。

＊

部屋の中に入ったアレクサンドラは、まっすぐに寝室へ向かう。

深翠はその後についていき、

「サンドラさん。竹さんに頼まれている事とは何なのですか？」と聞いた。

「ん？ ああ、あるものを取ってきてって言われたのよ」

アレクサンドラは歩きながら答えた。

「あるもの、ですか？」

「そう。あるもの」

深翠が、それは何なのか、と問う前にアレクサンドラが寝室の扉の前で立ち止まり、ドアノブに手をかけた。

「……タケ君の寝室ってここで合ってるわよね？」

ノブに手をかけたまま、アレクサンドラは深翠に確認するように言った。

「え？ ええ、そうですね。模様替えをしていなければ、この部屋で間違いないはずです」

「良かった」

「？ 何がですか？」

理由が不明なアレクサンドラの安堵の言葉に、深翠は首をかしげた。

「いやね？ タケ君からは寝室に置いてある、あるものを取ってき
てって言われてるんだけど、間違っても他の部屋には入るな、とも
言われてたから」

「ああ、そういうことですか」

自分が不在の家に上がりこませるのだ。

プライバシーの問題もあることだし、いくら信じていても念を押
すだろう。

深翠はそう納得した——のだが、アレクサンドラは僅かに口元を
引き攣らせながら、

「それが、ちょっと違うのよ」とかぶりを振る。

「？」

「確かにプライバシーの問題とかもあるのだろうけど、タケ君が言
ってた言葉には続きがあってね？」

『間違っても他の部屋には入るな。いや、別に入っても良いけど、
その時は命を賭す覚悟をしておけよ』

——だって。何でも侵入者対策に超高度な結界が張ってあるとか
「……それはまさか、竹さんのところの……？」

「そう。十三夜の結界師、エンドウお手製のものらしいわ。悪質よ

ね」

「……………」

アレクサンドラの言葉に、深翠は無言で同意した。

遠藤涼也りょうやの結界の脅威を身をもって体験している深翠としては、当然のことだろう。

「それじゃあ、目的を果たしちやいましょう。外にいる子をあまり待たせると、今度はどんないちゃもん付けられるかわからないし。まったくさつき銃を突きつけられた時は、殺されるかと思ったわ。私はあなたたちと違ってノーマルな人間だから」

そんな風のアレクサンドラは、おどけて言うと言ったと寝室のドアを開けた。

＊

深翠とアレクサンドラが竹の寝室前で言葉を交わしている頃と時を同じくして、玄関前に残った蒼香の前にとある人物が現れていた。

——あ、死んだかも。

蒼香は、その自分と身長が殆ど変わらない小柄な人物を見た瞬間に、そう思った。

インディゴブルーのブルゾンを羽織った、その少年から滲み出る殺気と闘志は、これまで出会った誰よりも鋭く尖っていた。

あの黒い魔法使いよりも。

かの聖剣の担い手よりも。

「——青眼……いや、蒼眼か」

庵戸朋愛は、蒼香を値踏みするように見てから口を開いた。

そして、すぐに興味が失せたように竹の自宅の玄関の中を見据えて、

「……中に奴はいないな」と呟き、

「おい、今この中には誰がいる？」

とドアを見据えながら続けた。

「……『月読の巫女』と『騎士団の王女』」

蒼香は小さく答えた。

質問に答えなければ、この少年は自分を間違いなく殺しにかかってくる。

そういう空気を少年は確実に持っていた。

しかし、そんな蒼香の心境とは裏腹に、庵戸は蒼かに一切の興味が無い風に、竹の家の玄関を睨んだままだった。

「二柱と王女……随分豪華な顔ぶれだ」

庵戸はそう言って、この部屋にいない主を蔑むように鼻を鳴らす。それに蒼香は堪らず口を開いた。

「あなた、ここに何か用？」

「……」

庵戸がジロリと、蒼香へ視線を向ける。

——早まったかも。

反射的とはいえ、蒼香はこの少年に声をかけたことを後悔した。

そして、何が起きても大丈夫のように、さりげなく体勢を整える。

庵戸はそんな蒼香を見ても変わらず、興味が無さそうなままだった。

「安心しろ。俺は偽者を裁くつもりはない。中にいる二人も同じだ」

「……？」

言葉の意味がわからない蒼香に構わず、庵戸は続ける。

「明日の午後6時。八里浜の工場地帯B倉庫前に来いと、天倉に伝えろ」

庵戸は蒼香に一方的に伝えたと、踵を返してその場から立ち去った。

「え？ ……え？」

さっぱり理解が追いつかない蒼香だったが、

「……まあいっか」一先ず何も起きなかったので、全て良しとすることにした。

山吹蒼香は、その体格と反比例して結構大雑把な人物だった。

それからすぐに、深翠とアレクサンドラが玄関から出てきた。

「お待たせしました」深翠が言った。

アレクサンドラはその手に、布で巻かれた棒状のものを持っていた。

「それが頼まれてたこと？」

蒼香がアレクサンドラではなく、深翠に聞いた。

深翠に聞いたのは、竹の自宅の合鍵を再び取り出して鍵を閉めているアレクサンドラを意識しないようにした為だった。

「そうらしいです」深翠が頷く。

「中身はなんなの？」

再び問う蒼香に、今度は鍵を閉め終えたアレクサンドラが答える。

「これは『夜月』です」

中学生の英語の教科書の訳みたいなお答えだった。

「……は？」

あなたには聞いていない、と抗議する前に、蒼香は間抜けな声で驚きを表現してしまった。

そして、そういえばその布切れ前に見たことあるなあ、なんてことを思い出す。

「ってそうじゃなくて、何でそんなもの持っていくの?!」

最上の神秘を宿した『神具』。

蒼香だけでなく、深翠やアレクサンドラにとっても、良い思い出のない一振りの刀。

そんなものをわざわざ自分たちに持ってこさせて、竹は一体何をしようとしているのか。

そもそも、竹は何故自分で取りに来ないのか。

「――あ」

そこまで考えて、蒼香はピンときた。

――さっきの男の子だ。

竹は彼と鉢合わせになりたくなかったのだろう。

でも、それだと竹は蒼香たちを、あの少年と合わせても良いと考えていたことになる。

殺されてしまうのでは、と自分に思わせるほどの、何かを纏った少年にだ。

それは少し——というかなかなり薄情なのではないか？

それとも、竹はあの少年が自分たちに何もしないことがわかっていた、とでもいうのか。

『偽者を裁くつもりはない』

この言葉がキーワードな気がする。

……いつだったか、これと同じような言葉を言われた事がある気がしたが……。

「どうかしましたか？」

驚きを交えて聞いておいて、突然、黙り込んでしまった蒼香を心配したように深翠が聞いた。

「え？ あ、いや……」

「シンリ。彼女は何か気が付いたみたい。何かあったのかしら？」

アレクサンドラは真剣な口調でそう言ってから、口元を歪めた。

蒼香はそのアレクサンドラの表情を見て、すぐに悟った。

……この女、絶対、私がさっき死ぬかもしれない状況にあったことに気付いてた……！？

「そうなんですか？」

蒼香を見ていた為、アレクサンドラの表情の変化に気付けなかった深翠は、さらに心配そうに聞いた。

「……後で深翠にだけ説明するよ。それよりも、さっさと竹のところに行かない？」

蒼香はその蒼い瞳を爛々とさせて、アレクサンドラを睨んでから歩き出した。

「？ わかりました」

自分たちが部屋の中に居るときに、外の状況に気付けなかった深翠は、何がなんだが良くわからないまま、とりあえず頷いて蒼香の

後を付いて足を動かした。

アレクサンドラは、すぐにその後を追って、先を歩く二人に声をかける。

「ちなみに私は、何で『夜月』を持っていくなのか知らないわ」

今更、先ほどの蒼香の質問に答えるアレクサンドラに蒼香の中で、何かが切れた。

蒼香は足を止めて振り返る。

「何も知らされず足にされたり、パシリにされたり、あなたって都合の良い女だね」

蒼香は最大級の皮肉を込めて言った。

ここで手を出さなかったのは、彼女も成長したということだろう。しかし、アレクサンドラはその皮肉を笑顔で受け止めて、

「ええ、そうね。でも敵を前に何も出来ない役立たずよりはマシだと思っわ」と皮肉を返す。

恐らく竹の敵であろう少年を前に、何も出来なかった蒼香と、それに気付き、自分が手を下すことが出来ない蒼香という秩序の敵を、遠回しに屠ろうとしたアレクサンドラ。

どちらも間違っではない。

過去に人を殺め、自分から戦う事を禁じられている蒼香。

あくまでも騎士団の王女であり続けるアレクサンドラ。

違っているのは、二人の立場なのだ。

「あなたとは、何が起きても仲良くなれそうにない」

「何を今更。私たちは元々そういうものだわ。特にあなたとは」

天使と王女は、じっと睨み合い互いの意思を確認して、

「……ごめん。行こう深翠」

「すみません、シンリ。行きましょう」

といきなりの殺伐とした空気にオロオロしていた深翠に言っ
て、再び歩き出した。

その時には、アレクサンドラと蒼香の間にあった殺伐としたものはなくなっていた。

「い、一体、なんだったんですか？」

わけのわからない状況に深翠が、混乱しながら隣を歩く蒼香に問う。

蒼香は曖昧に笑って、

「あー、えっと……なんだろう？」とこれまた曖昧に言った。

要領を得ない蒼香の答えに、深翠は後ろを歩くアレクサンドラに視線を送って答えを求める。

しかし、アレクサンドラも肩をすくめて曖昧に微笑むだけだった。

「大丈夫。別に何もしないから」

首をかしげる深翠を安心させるように、蒼香が言った。

「……ですが、先ほどの二人は……」

あれだけ敵対の意思を絡ませておいて、何もないわけがないだろう。

だが蒼香は納得いかない深翠を安心させるように、

「大丈夫だって」と苦笑いして繰り返す。

「……わかりました」

蒼香が説明する意思を見せず、大丈夫だと言い張る以上、深翠は引き下がるしかなかった。

「ありがと」

蒼香はにっこりと、微笑みながら深翠に礼を述べ、

「本当に何もしないから」ともう一度だけ呟くように言った。

その後、三人は会話という会話もせず、秋野の屋敷へと向かった。

——そう。

アレクサンドラも、蒼香もお互い何もするつもりはない。

二人を同じく繋ぎ止めている、人物がいる今はまだ。

藍の章 26 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

体調も良くなりまして、やっと26投稿できました。

思ったよりも長くなった今話です。ていうか彼女たち勝手に動きすぎです。特に蒼いのと橙の。書いててびっくりのフリーダムっぷりでした。そこを抑えられないのは未熟だからですね。すみません。作品全体だと、ついに枚数が『橙の章』を超えました。

途中まで予定通りだったのに、何故こんなに長くなっているのか：。いい加減完結させろ、なんて思われるかもしれませんが、今しばらくお付き合いください。

竹の家で女三人がゴタゴタやっている頃。

竹たち一行は、釜蔵は秋野の屋敷に到着し、20畳ほどの座敷に通されて腰を落ち着けていた。

胸をすくような、い草の仄かな緑の香りがするこの部屋は、元々は二部屋に仕切られていたらしく、このたび竹たちが訪問するにあたって襖を取り除いてくれたという。

この大きな御屋敷といえど、さすがに十三人も一遍に収容するだけの一室はなかったのだろう。

まあそれでもこうやって襖をちよつと取り除くだけで、簡単に可能にしてしまえるあたり、やはりこの御屋敷の広さ――否、秋野の富豪ぶりが垣間見えるものだ。

二間続きのこの座敷からは中庭がみえる。

屋敷の印象に合わせてなのか、それとも元からなのか、恐らく後者だと思われるが、8月に竹が滞在した秋野の本邸とは違い、完璧なまでの日本庭園である。

季節が季節なので緑は少ないものの、どこか淋しげな枯葉色が逆に庭園の陰影のある味わいを際立てている。

そんな趣き深い雰囲気の中で中てられて、部屋に通されてからの竹たちは暫く口数も少なく、落ち着かない心持ちでいた。

いや、落ち着いているといえば、落ち着いている。

この部屋だけでなく、この屋敷全体の幽寂さは心境を否応なく落ち着かせるものがあるのだ。

――しかし、だからこそ落ち着かない。

慣れない環境というものが多少は手伝っているものの、つい先ほどまで、というか基本的に集まればワイワイやっていたい竹たちか

らすれば、この緊張感は気が詰まる。

加えて、竹たちが落ち着かない原因はもうひとつある。

彼ら十三人だけならば、この強制明鏡止水状態も数分経てば解除されたことだろう。

しかし、そうならないうちにいるのは、この部屋に彼ら以外の人物がいるからなのだ。

秋野紅葉のメイド、八坂真実。

彼女が部屋と廊下を繋ぐ襖の前で、じいっと立っているのだ。

座敷童、なんて空気に近い存在だったらまだ良い。

だが彼女はどうか好意的に見ても、そんな可愛らしい存在には見えない。

今の彼女を表すとすれば、監視者。

これが一番適切な表現だろう。

和室にメイド服という一見シニールな光景も全く笑うことも出来ず、如何に彼女が美人に分類される女性だといっても微塵も心躍らなかった。

表情を変えず、ただ佇んで座っている竹たちを見下ろしている様は、言いようのないプレッシャーに満ち溢れている。

とはいえ別に彼女は不機嫌なわけでも、竹たちを監視しているわけでもない。

主たる紅葉に言われて控えているだけ。

だから、会話のひとつも振れば普通に受け答えしてくれるだろう。だがそれが出来ない。

それはここにいるメンバーの殆どが彼女との会話経験がないこと、そしてこの部屋にいる人数が無駄に多いことにある。

一対一なら否応なく会話もするだろう。

四対一なら自然に会話を振れるかもしれない。

しかし、今はその約3倍の十三対一。

部屋の隅に用意された布団で未だに眠り続けている今野を除いても、十二対一。

男が十二で女が一人。

とても話し掛けづらい比率である。

そんな息苦しい状況が進むにつれ、野郎共の視線が竹に集まっていた。

その視線の全てが、『なんとかしてくれ』と状況の打開を願っていた。

——オレかよ。

竹は集中する視線に迷惑そうな視線を返す、と同時にやっぱり自分がやらなければいけないのか、と諦めに似た感情が去来する。

秋野の屋敷に彼らを集めたのは竹であり、八坂真実と会話したことがある数少ない人物もまた、竹だからだ。

竹は一度、くしゃりと眉間にしわを寄せて友人たちに不満を表した後、覚悟を決めたように八坂真実と話かける。

「えーっと、八坂さん……」

「何でしょうか？」

何を言うんだ、という微妙な興味に竹に注目が集まる。

竹はその注目をひしひし肌で感じつつ続けた。

「……ここってタバコ平気ですか？」

「はい。大丈夫ですよ。ではすぐに灰皿を用意してまいりますね」

八坂真実はそう言って竹たちに一礼すると、部屋から出ていった。

それを見届けて、全員が肩の力を抜くように息をつく。

「きついつて竹さーん」

松田が真っ先に竹に軽く抗議めいた風に口を開いた。

それに続けて館花も苦笑いしながら言う。

「竹えー」

「いやー、やばかった。あれはやばかったねー」

佐藤が自分の額をぺちりと叩いた。

「いや、お前らオレ結構頑張ったぜ？」

竹は疲れたように返す。

それに飯泉や脇たち数人が、

「頑張った、頑張った」と竹を慰めるように頷いた。

「だしょ？」竹は自分の頑張りが認められて、若干気分を良くしたようだった。

しかし、それに横槍が入る。

「頑張ったけどよー」

「何だよ？」

話が収拾しそうだったところに横槍を入れた遠藤に、竹は不満そうにして聞く。

「いやさー、やっと出た言葉がタバコってどうなんだあ？」

低く擦れた濁声に近い特徴的な声で遠藤は言った。

確かに無言に近い状況で、開口一番女性に投げかける言葉としては、正直下の部類に入る発言だった。

その思いは発言した竹も含めて、皆が思っていたことである。

とりわけ、何を言うか微妙に期待をしていた竹以外の面々はその思いが強かっただろう。

「いやマメ、それは言っちゃダメでしょー。完璧デイスだから。TK頑張ったから」

いつの間にか心変わりしていた松田が、フォローになっっていないフォローを入れた。

自分たちが思っても言わなかった事を、直球で言い放つ遠藤と松田のやり取りに殆どの面子が苦笑いする。

皆、思いは同じだったようだ。

そして、古巣が止めを刺すように

「へたれー」と言って畳の上に寝そべった。

「……」

あらゆる角度から精神的にボッコボコにされて、やさぐれた竹は大の字に寝転がる古巣を見て、

「うるせえ、寝てんなデブ」と刺々しく言い放ち、

「ブタかお前は」と追い討ちをかけるように言った。

竹が言い切ると同時に、当事者以外の視線が古巣に集中し――大

爆笑が巻き起る。

畳の上で大の字に寝転がる巨体。

その様は、まさに藁の上で寝るブタだった。

「完璧ブタじゃん！」松田が高い声で笑う。

何気に松田も、この中では古巢に次ぐぽっちゃり体型をしているのだが、そんなことにいちいち突っ込む野暮な人物はおらず。

皆、目の前の爆笑素材を弄る。

「ブタがっ、ブタがいる！ てかカイカイも笑ってるー！！」

佐藤は古巢のことを笑いながら、自分が普段見慣れない甲斐の笑顔に興奮して、勢いで突っ込む。

「うわー、マジでブタじゃん。メタボメタボ」

「ケンタやばいんじゃないの？ 太り方」

館花と飯泉の肉体派二人は笑いながらも若干、古巢の太り方にひき気味に言った。

「餌！ 餌やらないと！」

今まで空気化していた本多は立ち上がって古巢の下へ近づくと、わざと慌てたようにポケットからタバコの箱を取り出して、手をふるさせながら古巢の口に抜き出したタバコを一本銜えさせる。

他の面子も口々に古巢をブタ呼ばわりし、笑いは絶えない。

もはや、重度のイジメである——のだが、特に古巢は堪えた風もなく本多に銜えさせられた火のついていないタバコを口から外したり、銜えなおしたりしていた。

古巢は自分のキャラクターを把握していたし、他の皆も彼のキャラクターを把握しているがゆえの平和な一幕だった。

それから少しして、笑いの波が引き始める。
すると、

「——失礼します」

そのタイミングを見計らっていたように、八坂真実が戻ってきた。ほぐれていた空気が再び硬くなるが、一度ほぐれていただけに先刻までの重さはない。

八坂真実は一礼して部屋の中に入ると、竹たちが囲んでいた座敷机の上にガラス製の灰皿を4つばかり音を立てずに置いた。

「どうもー」

いくら空気が軽くなったとはいえ下手に真面目に礼を言うと、またすぐに緊張感漂う先ほどに状況に戻ることは目に見えていたので、竹は軽い感じで八坂真実到会釈した。

そして八坂真実が定位置に戻ると、喫煙者たちは各々の愛煙する銘柄のタバコを取り出して、待望の紫煙を胸いっぱい吸い込んだ。喫煙率は9割。

甲斐と飯泉以外は待ち侘びたタバコをくわえている。

珍しく、普段そこまで喫煙しない大木までタバコを吸っていた。

——体は大丈夫なのだろうか、と竹は少し心配したが石渡が何も言っていないので、心配することもないのだろうと思直した。

それぞれ喫煙者たちは、溜まっていたストレスを吐き出すように煙を吐く。

そして、竹のタバコが三分の一くらいの長さになった時に、部屋の隅で物音がした。

布が擦れるような音。

全員の視線が一斉にそちらの方へと向けられ、それを確認すると同時に目を剥いた。

部屋の隅に敷かれていた布団から、よろよろと上半身を起き上がった少年は、自分を見つめる十二人+aをぐるりと見渡し——

「あっ、大木タバコ吸ってる。生意気じゃん」

と少し驚きをまじえた声で言った。

——それは今野大が重い枷から解放され、再び友人として、仲間としていべき場所へ戻ってきた瞬間。

そして、竹たちが帰ってきた友人を絶え間ない笑いとともに受け入れた瞬間だった。

藍の章 27 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

もはや予定通りいかないのが予定通りなんでしょうか。

書こうと思っていた内容の入口でこの文字数になるとは……これもひとつの予定調和か？

だったら仕方ないよねー、と開き直った結果が今話です。

いや、自分としては書いてて楽しかったのですが、皆様はどうでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いです。

＊

今野が目を覚ました。

これは通常であれば喜ぶべきことだったが、そう簡単に喜べないのが現状のややこしいところだった。

今野は本多に軽くない傷を負わせた加害者であり、渦中の人物、庵戸との関連を持っているであろう人物なのだ。

例えもう大丈夫だろうと判断していても、これらの前科、疑惑に対し少しでも猜疑心を抱かない方が難しい。

まあその疑いを全く抱いていない、能天気かつお調子者も若干一名いたようだったが、それ以外のメンバーに関しては、程度差はあるものの同じような感情だった。

事実、今野が目を覚ました直後の言動に心から笑ってはいたものの、警戒の構えはそれぞれ怠ってはいなかった。

事情をおぼろげにしか知らない八坂真実ですら、である。

それに引き換え、全く警戒をせず今野が目を覚ましたことにただただテンションが上がって、早々に絡みに行った松の付くBーboyがいた。

「おー、大ちゃん。やべえ久しぶりじゃん」

この恐れを知らぬ蛮行に、おそらく当事者二人を除くメンバーは、

『馬鹿か』。

『おいおい』。

『ちょ……』。

これら三つのどれかで心の中で突っ込んだだろう。

貶すか。

呆れるか。

戸惑うか。

それ程に、松田の行動は豪快だった。

まあこれは、友人^{メンバ}に対して絶対的な信頼を置いているからこそその行動であり、竹が大丈夫だろうと言っていたからこそその行動である。それが松田の良いところなのだが、少しばかり時と場合を考えてほしいものだった。

そもそも竹は、今野に関してはまだ気をつけておけるとも言ったはずだが、そちらに関してはすでに頭のどこかに追いやられているらしい。

「松、ちよい待ち」

竹はすぐさま松田の肩を掴んで、暴走気味の進行を停止させる。

「え？ 何？」

松田は何ゆえ自分が止められたのかわかっていない、不思議そうな顔をした。

「……」

竹は説明する気も失せ、

「大ちゃんと話すのはまだ待て」

「何で？」

「何でも」

竹はそこで言葉を区切ると、佐藤と館花に視線を向けた。

「松、いいからこっち来てって」

「まっつんー。こっちおいでー」

竹の意を察した二人は、松田を手招きして呼ぶ。

竹は松田の肩をぐいっと引っ張って方向転換させて、松田の背を押した。

さすがにこれだけされれば松田も事情を察したようで、促されるままに松田は元いた輪の中に戻っていった。

竹はそれを見て、ほうと肩を上下させると、布団から上半身だけ起こしたままの状態で、その一部始終を楽しそうに眺めていた今野の傍に胡坐をかいて座った。

「お待たせ。あと久しぶり」

「いやいやー、久しぶり、竹君。元気だった？」

「それなりにね。他のやつ等も同じようなもんな。見てわかったと思うけど」

竹が言うと、今野は先のやり取りを思い出して笑顔で言う。

「あはは、相変わらずみたいだったよねー」

「あいつは特にな。でもみんな少なからず変わってるよ。まあ大ちゃんほどじゃないけど」

「うん。まあ確かにそうだね。皆が警戒するくらいには変わっちゃたから」

今野は自分で言って、うんうん、と頷く。

その度に腹の傷に響くらしく、顔が少し歪んだ。

今野への疑いが完全に晴れていなかった為、石渡の施した治療が6、7割のところで止められている為だ。

無論、止めたのは竹である。

名目上、というは事実上、十三夜を仕切るポジションにいる以上、その程度の指示を出すのは当然だった。

そして、だからこそ、竹は今野との会話の先陣を切ったわけだ。

危うく、その思惑を阻止されそうになったが。

「だな。それじゃ、そこまでわかってるなら説明してくれる？」

「それは良いけど、でもどの辺を説明すれば良い？」

「そんなの全部に決まってるだろ。そうしてくれないと、ずっとこのままだぜ？」

竹はそう言って、部屋の対岸で談笑しつつも今野への警戒を怠っていない皆をちらりと見やる。

「だよね。でも全部かー」

「そう。全部。何か問題でも？」

「いやー、問題はー、なくもないかも」

「どういう意味？」

妙な言い回しをされ竹は眉を寄せると同時に、警戒の度合いを上げる。

1%でも疑う余地がある以上、これは致し方ないことだった。
今野もそれがわかっているの、竹が警戒の度合いを上げたことに
何も言わない。

変わりに、竹の質問に頬をかきながら答える。

「いやね？　これを言ったら、すげえ怒りそうだから」

「誰が？」

「竹君が」

「オレが？　何で？」

意味がわからず、竹は首をかしげる。

何を言われると、竹が怒るというのだろう。

そもそも怒るといふのなら、竹ではなく今野にやられた本多では
ないのか。

まあ本多は今野に対して怒りを抱いてはいないようだが。

しかし、今野にかかっている疑いを晴らす為には、全てを語らなけ
ればならない。

だから今野は、

「んー、でも言わないと疑いが晴れないか」

と自分に言い聞かせるように言ってから、

「それじゃあ全部話すよ？」と竹に確認するように言った。

「よろしく」

「うん。それじゃあ最初から。まず最初はどうして、おれが生きて
いるのか。これは竹君も予想していると思う。っていうかそれしか
ありえないんだけど、『唯一のオリジナルワン一』の手によるものね」

竹は小さく首肯する。

死者を蘇らせるなんて真似が出来るのは『唯一のオリジナルワン一』だけだ。

だが、予想が当たっていたことに対する喜びは一切ない。

何故なら、それはあの絶対者がこちら側にいる、またはこちら側に
明らかに干渉しているという、最悪の事実を浮き彫りにさせるから
だ。

「……てことは、大ちゃんはアレにもう一度対面したのか？」

竹は畏れを隠さずに問うた。

「いんや、会ってないから。おれが目を覚ました時に会ったのは黒須蚩だった。いやー、助かったわー。生き返った瞬間にアレを目の前にしてたら即効で心臓止まってるからね」

笑い話っぽく話されたが、全く笑えなかった。

竹は代わりに、

「……同感」と深々と息を吐きながら答えた。

「それで黒須が言ったんだよね。おれを蘇らせたのは『唯一の一』」

で、その理由はあっちゃんの下で来たるべき時に、『最強の盾』を封じる為だって。どうしてそれに従ったかは、言わなくてもわかると思うけど――」

「『唯一の一』オリジナルワンによる演者への強制」竹が呟くように言った。

「うん。蘇った時におれに割り当てられていたのは、『庵戸の忠実な部下』オリジナルワンっていうポジションと『最強の盾を封じる』オリジナルワンっていう演目だった」

流れる物語の中で生まれてきた者でなく、直接『唯一の一』オリジナルワンの手によって明確な役割と演目の下で生命を与えられた以上、それはどうやっても抗えない運命キアスという強制力。

否、例え流れる物語の中で生まれてきた者だとしても、課せられた運命に抗えることはないのだ。

逆らうことすら、砂漠に落とされた一粒の星砂を見つけるよりも稀なのだから。

「それなりに自由意志はあったけど、あっちゃんに命令さえる度に否応なく従わなければならなかった。与えられた演目を終えるまではね」

今野は竹の背後を見るようにして言った。

竹は首だけ回してその視線を追う。

視線の先には、座布団を枕にぐったりして畳の上に横たわっている本多がいた。

自然に耳に届く会話を拾うに、全く治りきっていない体で、タバコ

を吸ったのが原因だったようだ。

「ころ、殺される……」

などと本多が石渡の方を睨みながら呻いていた。

医者として止めなかった石渡が全面的に悪いのは明らかだったが、それを周りは窘めようとはせず、それどころかぐったりした本多と、

「おう、わりい本ちゃん。わりい」

なんて笑いを堪えながら謝罪している石渡のやり取りに爆笑していた。

その様子に竹は鼻息を漏らして薄く笑い、再び今野へと顔を向ける。

「く、くくく……くくく……」

同じ光景を見ていた今野は声を押し殺して笑っていた。

腹を押さえているところを見るに、思い切り笑いたいのだが腹の傷が痛んでそれが出来ないらしい。

竹は薄く笑ったまま、

「それで、与えられた演目は？」と今野に問うた。

今野は、ひーひー言ってこみ上げる笑いを懸命に抑えると、

「本ちゃんがあの状態だからね、一応終わったことになってるよ」と答えた。

「自由の身ってわけだ？」

「いや、それが少し違うんだね、これが」

竹の言葉に今野は残念そうに首を振る。

「どういことよ？」

「えーっとね。今の本ちゃんは、まともに動けないでしょ？ だから『最強の盾を封じた』ことになってるけど……本ちゃんの傷が治る、

というかまともに動けるようになった時点で、おれはまた本ちゃんに攻撃すると思う。逆に傷があのままならこうやって普通にしてくれる」

真剣な顔で語る、今野の言葉に嘘はなかった。

まだ今野に課せられた演目は終わっていないのだ。

竹の表情から笑みが消える。

「だから一応って言ったのか。……それを完全に終わらせることは？」

「現時点では無理だと思う」

今野は諦めたように言った。

竹は『夜月』で今野の神性だけ奪えば或いは、とも思ったが、その案をすぐに退けた。

それをすれば今野が今後能力を失うどころか、下手をすれば殺してしまう可能性があった。

使えば命を削る神具。

それを事あるごとに扱ってきた今の竹には、『夜月』を神性だけ奪うという繊細かつ力技な制御方法で扱うのは殆ど不可能に近かった。

「……だよな。じゃあ現時点じゃ二人とも治せないか」

本多を治療すれば、今野は再び本多への攻撃を仕掛ける。

今の今野は徒手であり、事前に行動がわかってるのでそれを止めることは出来るが、現状で今野の意識が解放されているのだ。

好き好んで今野を敵対者に仕立て上げるような真似は、意味がない以前にしたくない。

「どうしたもんかね……」

竹は参ったようにガリガリ頭をかいた。

「どうしたもこうしたも、現状はこのままがベストじゃない？ それに解決方法がないわけじゃないし。竹君もわかるでしょ？」

「ん……まあ、ね。大ちゃんに課せられているのは『最強の盾を封じる』演目。だけどその演目の前提として、『庵戸の忠実な部下』という役割がある。だったらその前提を崩せば演目も消えるはず」今野を解放する為には、『庵戸の忠実な部下』という前提を崩す。

それが導き出される唯一の方法であることは間違いなかった。

しかし、それは庵戸という存在を消す、つまり殺すということだ。一度殺した相手を、もう一度。

竹は難しい顔をした。

「……それしかない、か。でも大ちゃんは、『庵戸の忠実な部下』として生を与えられたんだろ？　だったらその前提が崩れた時点で、大ちゃんは……」

言葉に詰まった竹の後を今野はすぐに次いだ。

「死ぬ、ってことはないってよ？」

「――まちで？」　竹は驚いたように声をあげた。

「マジで。例え『唯一の一』オリジナルワンでも役目を終えたら寿命が尽きるなんていう、生の与え方は出来ないらしいから」

今野はあっけらかんとした表情で言った。

「……誰が言ってた？」

「天野輝血だけど？」

天野輝血。

その名前を聞いた瞬間に竹の表情は曇る。

「それは、何時の話？」

「えーっと、本ちゃんに傷を負わせる直前だから……昨日、いや今日かな？　ごめん、詳しい時間はわかんない」

「……もしかして、大ちゃん定期的に天野輝血と会ってたとか？」

「まさかー、それはないない。天野輝血と会ったのは、生き返ってから初だったから」

今野は両手を大げさに振って潔白を示す。

竹は今野の声と眼に嘘がないことを確認してから、

「そっか。それで天野輝血にそう言われたと？」と確かめるように言った。

「うん。元々はおれに本ちゃんの前に出る、演目の時間になったことをに伝えに來ただけらしいけどね。よくわかんないけど聞いてないことを話してきた」

「何を言ってた？」

竹の質問に今野は天井を向いて、思い出すような素振りを見せる。
「んー、例え『唯一の一』オリジナルワンでも役目を終えたら寿命が尽きるなんていう、生の与え方は出来ない。その為に私たちがいる、だったかな

？ あとはだからあなたが解放されても死ぬことはない。もしあなたを退場させようとしても、その周りにはそれを阻止しようとする者たちが大勢いるし、そもそもそんな命は受けていないって。そのくらいかな、言ってたことは」

竹は今野の発言を反芻するように両目をぐるりと回す。

「……そっか」

「うん。まあ本当か嘘かはわからないけどね。でもどうであろうと、やることは変わらなくない？ あっちゃんをもう一度殺す。ただそれだけだっ」

今野はそんな冷淡とも思える発言をさらりと言った。

かつての友人は、既に今野の中ではその影はないらしい。

まあ自分を一度殺害したばかりか、その後も良いように使ってきた人物なのだから、それは当然といえた。

……元々、齒に衣を着せぬ物言いをする人物でもあるのだが。

「……大ちゃんさ」

「何？」

「朋の目的はオレで間違いない？」

竹は声のトーンを今までにないくらい落として言った。

「そだよ？ 何言ってるの竹君？ あっちゃんは竹君に復讐する為

オリジナルワン

だけに、『唯一の一』に再び命の灯火と奪われた神性を与えてもらったんだから……。何？ もしかして竹君、後悔してたりする？」

今野はまさか、という顔をして言った。

「後悔はしてないよ。ただ——」竹は言葉を詰まらせた。

殺してしまったと思ったのに生きていた。

それに喜びがないといえは嘘になる。

もう一度、元の関係に戻れるのでは、という希望を抱いていないかといえは嘘になる。

今野はそんな竹の心境を顔色で判断して——その想いを打ち砕く。

「……まあわからなくもないけど、竹君、あっちゃんとは仲良かったし。でもさ、悪いけどそれは無理だから。今のあっちゃんは、本

当に竹君への復讐心だけで生きている。それにあっちゃんは、竹君が絶対に許せないことをしたからね」

藍の章 28 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

かなり期間を空けてしまい申し訳ありませんでした。

これには一応それなりの理由がございまして、今話にあたる28と後に続く29、30までは元々1話分のつもりで書いていました。これは同じ場面の話の上に内容の性質上、分割させる基点がなかった為です。

無理やり分断させたものを、日を分けて更新するという考えもありましたが、そうすると物語の進行にどことなく違和感を感じさせてしまう恐れがあった為、それはやめておきました。

ですが、書き終えてみると約18000文字と予定を大きく上回る文字数。

さすがに、これを1話で載せてしまうと携帯で読んでいただいている方は大変なんじゃないのか(自分はもっぱらPCなので予想です)、と考えギリギリ切れそうなところで3分割しました。

ですので同日、ほぼ同時刻の3話分投稿になります。

それでは地続きの残り2話、時間がある方はお付き合いください。

藍の章 29

「――ど」

どんなことを？

そう竹が聞き返そうとより早く、今野は言葉をつむぐ。

「『D&』。これを製造したのは、あっちゃんだよ。そして、最後までその効力に抵抗していた女の子を変質させたのも」

「――っ」

今野の言葉を聞き終わるやいなや、沸点を突破した怒りが、竹の目の奥を真っ赤に染めた。

周囲の空気が一瞬にして緊迫感に包まれる。

竹が胸の内で抑え切れなかった殺意を孕んだ怒気を僅かに洩らした為だ。

しかし、それも刹那のことだった。

次の瞬間には、竹は自分を諷めるようにひとつ鼻から息を吐いた。その所作に周囲の空気が再びほぐれる。

固唾を呑んでその変質を見守っていた幾人かの口からも深く短い息が洩れた。

竹が怒る、といっていたのはこのことだったのだ。

「……そりゃ怒るよねー」

一番間近でその怒りを浴びた今野は、口調こそ平静のものだったが声色は若干上擦っていた。

本気でキレた状態の竹は怖いとしか形容できないものであることを、今野も他の面々も知っているのだ。

「……それは間違いない？」竹が言った。

落ち着いた感じの声だったが、抑え切れなかった熱の残り香がはつきりと残っていた。

「間違いないよ。っていうか『D&』って名前で思いつきりネタバレしてるからね」

「ネタバレ？ 名前で？」

竹は怪訝そうに眉をひそめ、そしてどこか精神の内に籠もった熱を冷ます意味合いも込めて、『D&』の名前の由来について思い出す。

以前、脇の調査結果では、確か一番有力視されていた『D&』の名前の由来は、ドラッグの形が錠剤型としては珍しい半月状だった事、もしくは麻薬の頭文字Dとドラッグの表面に刻まれた文字『and』からという話だった、いや、そもそもあの薬は正式な名前がなくて、使用者たちの間で自然と『D&』と呼ばれるようになるのではなかったか。

しかし、今野の口ぶりでは、どうやらそれは違うらしいことはすぐに察しがついた。

あのドラッグは、始めから『D&』という名称だったのだろう。

今野は竹がおぼろげに解答に行き着いたことを見た感じで察すると、うん、と頷いてから、

「『D』は吸血鬼の『D』。そしてドラッグに刻まれた『and』は『庵戸』を表してるわけ。だからあれは元から『D&』って名前を付けられてたんだ」と言った。

吸血鬼と庵戸で『D&』。

自分が製造した麻薬に自分の名前を何気なく入れている辺り、庵戸の高い自尊心を感じる。

しかし、竹はその答えに納得がいかないように、すぐさま聞き返した。

「『&』の方はまだいいとしても、吸血鬼の『D』？ ドラキュラってことか？ でもドラキュラは吸血鬼の総称じゃなくて個体名だろ。もし吸血鬼を表したいなら『D』じゃなくて、ヴァンパイアの『V』じゃないのか？」

「いやいや、『V』じゃなくて、『D』にした理由もちゃんとあるんだって。『D』は麻薬、そして今野大の『D』でもあるわけ。…おれも『D&』の製造を手伝ったから」

庵戸朋愛と今野大が製造した人体を吸血鬼の紛い物に変異させるドラッグ。

だから『D &』という名称になったのだと、今野は言う。

『D &』がただの薬学生に製造できるわけがない、そう言っていた石渡の意見は正しかったわけだ。

まあそれは竹もそう思っていたのだが、まさか庵戸の手によるものだとは思わなかった。

庵戸のことは死んだものだと思っていたし、それに4年前当時、庵戸に人体と精神を根底から改造させるような薬物の製造技術はなかった。

そんな薬物が製造出来るのは、石渡が所属していた『治療部』の上位者でも片手の指で数えられる人数しかない。

そもそも藍色の位を与えられた庵戸は『治療部』の所属ではないのだ、そんな人物がただの人間をあそこまで変貌させる薬物を造れるとは露ほども思わなかった。

しかし――

「……大ちゃんも手を貸したんだ」

「うん。あっちゃんに手伝えと言われたら、おれはそれまでだったから……」

そう。『D &』が庵戸だけでなく、今野と協同で製造したのだというのなら話は変わってくる。

4年前当時の今野の所属は『技術部』だったが、今野は元々『治療部』の出身だ。

今野は適性こそ『治療部』寄りだったのだが、結局は他者を治すこととは正反対のその能力ゆえに『技術部』に鞍替えさせられたのだ。しかし、今野は数年間は紛れもなく『治療部』としての教育を受けている。

その中には当然、薬物についての教えもある。つまり下地は少なからずあるのだ。

脇の調査結果によれば、『D &』が流通を始めたのは今年の夏頃だ

という。

庵戸と今野が生き返ってから約3年半。

元は『治療部』に在籍し、竹たちが背を預けるに値する友人と認めていた今野と、最年少の若さで『管理者』^{セブンス}の地位についた庵戸。

その二人がタッグを組めば3年半という期間は、『D&』を製造するのに十分な期間といっても良い。

「……ごめん」今野は力なく言って頭を下げた。

自分が手を貸したことで結果的に、竹の知り合いの少女を死なせてしまったことを詫びているのだろう。

だが竹は、

「ああ、別にいいよ」と軽い口調で返した。

『D&』の製造に関わった事に本人の意志が介在しているならまだしも、今野は庵戸の忠実な部下としての首輪を嵌められていたのだ。

——あの絶対者の手によって。

それに対して責任を問うことなど出来はしない。

「それよりもさ、『D&』の名前の話は大ちゃんが言った通りで間違いない？」

竹が話題を戻す。口調はやはり軽い。

もしかしたら責任を追及されるのでは、されずとも竹の怒りが自分に多少なりとも向くのでは、と少なからず考えていた今野は意外なほど軽い反応の竹に面食らいながら、

「え、あ、うん。間違いないよ」と答えた。

「そっか。じゃあコーチンが調べた由来は間違ってたのか。コーチンが間違えた情報掴むなんて珍しいな」竹は後方の脇を一瞬、後ろ目で見ってから首をひねった。

脇の調査結果が間違っていた事が、どこか釈然としないようだった。

「脇君が調べた由来って、薬の形とかドラッグの頭文字とかだった？」

今野が普通の調子に戻って聞いた。

「そう。あと薬の表面に刻まれた『and』とか」

「ああ、それね。それも間違いじゃないかな。あれはあっちゃんがバイヤーとして見繕った——名前、なんだっけ？ ま、いっか。その薬学部かなんかの学生と何人かの服用者を經由させて、じわじわと広げた噂なんだよ。だから脇君の調査は間違いじゃないんだよね。あっちゃんがちゃんと物語に登場できるようになったのは、おいちやんに正体がバレてからだから」

「そういうことか」竹は納得がいった、と頷いた。

脇が調べた『D&』の由来は間違いではなく、それが正しいものだったのだ。

何故なら、薬の形やドラッグの頭文字、表面に刻まれた文字などの名前の由来の出所は、庵戸から直接流されたものだったのだから。庵戸朋愛は4年前から時が来るまで、舞台上にあがることを許されていなかった。

壇上にあがってからならまだしも、物語から一時的にはあれ完全に退場させられていた人物が発信源の情報。

そんなものは、いくら脇でも調べられるわけがない。

そんな情報はどこをどう手繰っても存在しないのだから。

「存在しない人物から、存在している人間へ与えられた情報。当然、調べることが出来るのは当然後者までだよな。存在してなかったんだから、『D&』の製造者を学生と特定するのも仕方ないか。でも何で朋はそんな由来を流したんだ？」竹が素朴な疑問といった感じで問いかけた。

「んー、もしも、竹君たちが『D&』の事を調べるようになった時の予防線だって。薬の表面に『and』で、薬の色が『管理者^{セブンス}』を表す七色じゃあさすがにやばいでしょ」

「……」

今野の返答に竹は一瞬黙り込み、

「バレないように予防線を張るくらいなら、そもそもそんな危ないもんじゃなくて、形も色も違うのにしとけよ……」と呆れるように

言った。

すると今野がそれに反論するように、

「いやいや、形とか色に関しては、一応薬の効果を高める為の処理の結果だったからさ。しょうがなかったわけですよ」と言った。

それに竹は、

「じゃあ名前は？」と即座に聞き返した。

形や色が薬の効果を高めるために必定のものなら仕方ない。

しかし、『D&』という名前には何か意味があるのだろうか。

まさか本気で、吸血鬼、今野大、庵戸。その三つの要素だけで決めたわけではないだろう。

今野がネタバレと言っていた通り『D&』というそのままな名前は、確かに危険な橋を渡っているといってよい。

まあ竹は教えられるまで全てに気付けたわけではなかったが、それでも危ういことは間違いない。

それにそもそも、ドラッグの名前を別のものにしていたのなら、名前の由来などという偽の情報を流す手間は必要なかった。

ならば『D&』という名前にも形、色と同じく薬の効果を高めたり、または全く別の要素を孕ませる為に選択された名前だったに違いないのだ。

庵戸も今野も、かつて『天岩戸』という一大組織に所属していた手前、本当に必要なことと不必要なことの選択能力は確かなはずなのだから。

竹はそういう考えの上で聞いたのだが、

「……」

今野からは何の返答もなかった。

「まさか……?!」竹は絶句する。

最近で一番の驚き様だった。

必要に迫られたわけでもなく、危ない橋だとわかっていて『D&』などという、紙一重なネーミングにしたというのか。

なんと無謀かつ愚かな行為だろう。

竹の表情が驚きから、失望へと変わる。

どちらが名付け親なのかわからなかったが、自身の二人に対する評価が過大評価だったことに落ち込んでいるようだった。

その竹の様子に今野は焦ったように、

「いやいや、おれが付けたわけじゃないからね？」と自分が名付けたわけではないことを主張した。

「じゃあ朋か『D&』なんて名前付けたのは……」

竹はあからさまにため息をついて、

「……センスねえな。色々」と失望と呆れが混ざった声でつぶやいた。

「……いま考えると確かにやばいね」

「そのときに気付こうぜ。てかあいつもどんだけ自分好きなんだよ」竹が肩をすくめ、今野は苦笑いした。

「まあいいけど。それでさ、あのドラッグを製造者が二人なのはわかったんだけど――」

竹は一度言葉を区切り、

「最後まで薬の効力に抵抗していた女の子を変質させたってのは――どういう意味？」射貫くような視線で今野に問いかけた。

藍の章 29 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

3分割、その2です。

お暇な方はそのまま次話へどうぞ。

藍の章 30

竹の脳裏には、同級生の少女の姿が浮かんでいた。

竹が自らの手で命を絶った少女の姿だ。

その少女は竹の脳裏で朗らかな笑顔をしていたのか、それとも悪鬼の笑みを浮かべていたのか。

どちらにせよ、竹の視線には再び隠し切れない何かが渦巻いていた。

今野は竹の問いかけに、表情を引き締めなおして口を開く。

「『D &』の効果は、一定量を摂取すると人体の身体機能を飛躍的に上昇させて、擬似的な吸血鬼に変えること。これは知ってるでしょ？」

「知ってる。ナオが調べたから」

石渡の調査によって『D &』の効能については全て、余すところなく解明済みである。

『D &』による変異者たちは吸血鬼に近い新たな生物となる、というのがその調査結果だった。

擬似吸血鬼とでもいうのが、的確な表現だろう。

「うん。じゃあどうして擬似的とはいえ、吸血鬼にカテゴライズされるようなものに変える必要があったかはわかる、竹君？」

「それは……」竹は言葉につまった。

庵戸が吸血鬼を選んだ理由。

そんなこと考えたこともなかったのだ。

竹は言われてみて初めて気が付いた、その不可解さに考え込んだ。残忍性と圧倒的な身体能力を有した人の血を吸う鬼。

しかし、ただ単に身体能力を上げ、人の精神を残忍性に傾斜させるだけなら、『D &』よりも更に効果の高いものが確実に製造できたはずだ。

ならば吸血行為に、庵戸は意味を見出したのだろうか。

それはまずない。

『D&』によって擬似吸血鬼へと変貌した者たちの吸血行為は、ただ自身の欲求を満たす為だけの行為で、本来の吸血鬼のように自身の子を増やすという目的意識が根本から欠如しているのだ。

……それもおかしな話だ。

擬似吸血鬼となった彼らは、伝染能力自体は持っているのだ。

ならば当然、その能力を発揮するのが生物の本能ではないか。

あれだけの野生の塊だ。自らのスペックを本能が理解できていなかったわけがない。

いや、あるいは彼らは自身の能力を理解していて使わなかったのか
もしれない。
スペック

本来の吸血鬼は『魔』の系統樹に属し、人間を噛み、自身の血を与えることで『人』の系統樹に属する吸血鬼を生み出し隷属させる。

そこには『血縁』という『神性』の繋がりが不可欠だ。

だが擬似的な吸血鬼の彼らには、主従の立場を定める為に必要不可欠な『神性』がない。

つまり、いくら自分が吸血鬼としての能力を他者に伝染させたところで、自身の利益にはなりえないのだ。

それどころか下手をすれば、自らが敵を作り出してしまうことになる。

ならば自らの人を超えた性能と、渴いた喉を潤す瞬間の異常なまでの優越感を独占したいと思うのも、かつて人間であった頃の昏い本能として存在しただろう。

——違う。

竹はここで一度思考をストップさせた。

この考えは間違っていない。

しかし、このままの道では正解には辿り着かない気がしたのだ。

竹は眉を寄せて、後頭部の髪をくしゃとかき上げた。

タバコでも吸って一息入りたい気分だったが、今野は無言で竹が答えを出すのを、じっと待っている。

竹を捉える双眼は、竹が正解に行き着くことをなんら疑っていなかった。

そんな今野の期待に応える為にも、竹はタバコを我慢することにし、再び思考を開始することにした。

竹は先ほど中断させた思考結果を頭の中に浮かべなおし、同時に本来導き出すべきだった目的を再確認する。

伝染能力があるのに行わない吸血鬼。

そして、庵戸が吸血鬼を選んだ理由——いや、これは導き出さなければならぬ目的ではない。

『最後まで薬の効力に抵抗していた女の子を変質させた』、とはどういう意味なのか。

それこそが、竹が本当に知りたいことなのだ。

「——あ」竹が声をあげた。

色々と考えた挙句、原点に立ち返ったことが功を奏したらしい。

「ああ、はいはい。大体わかったわ。そういうことね。難しく考えすぎてた」竹は非効率に働いていた脳を揺るように首を二、三度縦に動かしてから語り始める。

「『D&』という薬は、擬似的な吸血鬼を作り出す。それは身体能力の向上や、吸血衝動だけじゃなく、その関係性も吸血鬼に似通ったものだった。支配者と従者、隷属させる者とされる者という立場をも再現したんだ。

この場合、『D&』の製造者、庵戸朋愛が血を与えた存在が支配者、そして『D&』によって変異した存在が隷属者ということになる。

そうなると隷属される立場にあるものは、支配者からの命令には逆らえない。最後まで薬の効力に抵抗していた女の子である——」

竹は一度大きく息を吸い込み、重く吐き出しながら独白を続ける。

「——荒川さんは薬の直接摂取者じゃなくて、摂取者から伝染して成ったものだった。だからこそ薬の効果に最後まで抵抗出来ていたんだろう。

だけど『血縁』という意味では朋と荒川さんは、祖父と孫の関係だ。

その支配関係は薄まるとはいえ軽くはない。だから朋は、荒川さんの背中を暗い淵の底に突き落とす事が出来た。

じゃあ、朋はどうしてそんなことをしたのか。いや、そもそもどうして朋は『D&』という薬を製造し、自らの支配下に置いた擬似吸血鬼を何体も生産させる必要があったのか。それはさっきの大ちゃん言葉、そしておいちゃんが聞いた言葉が答えだ」

今野は、庵戸は竹への復讐心だけで生きている、と言った。

そして、館花は藍の裁きを受ける準備をしておけ、と聞いたと言っていた。

「復讐。つまり、オレを殺すことだ。4年前に達成出来なかった、藍の裁きという形をとって。

だけど朋も馬鹿じゃない……いや、あいつは馬鹿か。でも馬鹿は馬鹿なりに考えたんだろ。一度、自分を殺した相手にどうすれば勝てるかを。

4年前、朋はオレの策にまんまと嵌って実質3対1の状況で負けた。でもあの時、朋はこう思ったと思う。『1対1なら負けなかったのに』ってさ。それはあいつの自尊心と、オレのあの時の状況を考えれば自然と想像がつく。

だから朋は1対1の状況を作るため、そしてかつて同じ状況を作らないために手段を講じた。

まずは、自身の『最強の矛』にとって最大の障害となった『最強の盾』を封じるために、『唯一のオリジナルワン一』に『最強の盾』の天敵である大ちゃんを部下として復活させてもらい、時期が来次第、本に大ちゃんをぶつけた。

そして、自分はもう一人の邪魔者である大木を始末する。これで二の轍を踏むことはない。だけどそれじゃあまだ足りない。

何が足りないのかは大きく分けて二つだ。

まず一つは、本と大木を戦線から離脱させたところで、確実に1対1の状況になるとはいえないことだ。オレには他にも頼りになる仲間がいるし、一度3対1という不利な状況に追い込まれ敗亡してい

る以上、勘繰らないわけがない。

そして二つ目はもう二度と負けられない、ということだ。

あいつは自意識の塊である以上に『天岩戸』という組織を絶対視していた。次も、もし自身の役割である『天岩戸の法の裁き』を失敗したのなら、それはあいつにとって組織に対する背信行為に他ならない。

ましてや、オレは『天岩戸』裏切った『十三夜』の先導者だ。そんなオレを二度も裁き損ねることは決してやってはならないことだ。なら朋はこの二つの問題をどうやって取り除くつもりなのか、なんだけど……」

竹は短い沈黙のあと自嘲的に笑う。

「いや、正直まいったわ。今のオレは既にあいつの策にどっぷり嵌った状態みたいだ。二つの欠けた部分がまんまと補われている。あいつはあいつなりに、オレのことをわかってるみたいだな。

現状、オレはオレ以外の『十三夜』の誰も動かせない。負傷者と治療を担当するナオを抜かせば、戦闘可能なのはオレを含めて8人。何か起きた時の為に負傷者に一人ずつ護衛をつかせたら残りは4人になる。

そしてオレは、そこから必ず抜けなければならない。朋と戦うために。これは朋がオレと戦いを所望している云々よりも、朋を倒さなければ大ちゃんの束縛と傷、それに連鎖した本の傷を治すことが出来ないからな」

荒川宿禰の仇、とは竹は言わなかった。

「それじゃあ、その時の朋との戦闘に、残った3人のうちの誰かを連れていけば良いかといえば、そんなことは出来ない。

負傷者に一人ずつ、というのはあくまでも護衛、守備の話で、もしこの屋敷に、『十三夜』数名の負傷を聞きつけた、一流かそれ以上のプロが大挙して襲撃してきた時に負傷者を守ったままで、まともな戦闘なんか出来やしない。

勝利することは出来ても、無傷でいられるとは言い切れない。それ

じゃ駄目だなんだ。

もしその戦闘で新たな負傷者が出たら、ただ状況が悪化するだけじゃなく、最悪、その悪化した状況のまま、延々と同じことを繰り返す羽目になる可能性も出てくる。

最低の悪循環だ。

そんなことには、オレは絶対にさせたくない。

だからそれを防ぐ為の備えとして、襲撃者たちを蹴散らすフオワードが必ず必要になってくる。その役を残った3人に受け持ってもらう。

これは多いか少ないかといえば、正直少ないと思う。いや、通常なら十分な人数なんだけど、今回はどんな化物が出てくるかわからない状況だから」

一気に4人の負傷者。これは少人数である十三夜にとって軽くない数字なのだ。

「まあ戦闘が出来る、っていう意味では今こっちに向かってる子たちも数に入るんだろうけど……そっちはまあ色々あって、あんまり先頭切って戦って欲しくなくてさ。いざとなったら自分の身は自分で守る程度に留めておいて欲しいんだわ」

竹は自らが我俣を通そうとしていることに、若干済まなそうに言った。

生死を賭けるかもしれない状況で、何をフェミニストを気取っているのか、と反論する場面だったかもしれないが、今野はそれに対して何も反論をしなかった。

今野もまた他の『十三夜』の面々と同じように、竹の我が俣については重々承知していたし、本当に必要な場面になれば竹は迷わず、酷薄な判断を下すことをわかっていたからだ。

それをせずに我が俣を通そうとしているのだから、現状にも多少の猶予はあるのだろう。

自分であれだけ危険を指摘しておいて、この我が俣はある意味、竹がどれだけ『十三夜』に信頼をおいているのかを表しているともい

えた。

「そういうわけで、オレは朋と1対1で戦わざるを得ないわけだ。回復の見込みがある、おいちゃんと大木の回復を待つまで持久戦ってのは、今のところ自分の思惑通りにいってる朋が許してくれそうにないしな」竹はうんざりとした表情を作り、喋りを続ける。

「んでもう一つの二度と負けられない、って部分だけど、こちらの策はもう徹頭徹尾完遂済みだよ。まあ本来のあいつの計画と、今の状況は微妙に変わってるんだと思うけどな。多分、朋は元々オレと戦う時に、不意打ち要員の捨て駒を動員する予定だったんじゃないかと思う。3対1だった4年前の当て付け気味に。

で、オレに対して不意打ちをするには、その駒はある程度の強さを持った上で、自分の思い通りに動いてもらわないと困るわけだ。弱者、敵前逃亡者は言うまでもないけど、それよりも困るのが万が一、不意打ちが完全に成功してオレをそのまま殺してしまったらまるで意味がないからな。

いくら殺すな、と命令されても、そもそもオレに向かってくるような戦闘者が、オレを殺せる可能性が目の前に落ちてきて掴まないとだ。だから朋には必要だったんだ。自分の思い通りに動く、文字通りの駒が。

そこで選択されたのが、身体能力に優れ、かつ『血縁』の上位者に逆らえない吸血鬼だった。『D&』が開発された大元の理由は、オレを打倒する為の駒作りだ。

この『D&』によって変貌した擬似吸血鬼たちが、どうして伝染能力を持っているのに、自らの下僕を作ろうとはしなかったのかは、人を超えた個体としての優位性を保持させるという本能以前に、庵戸という『D&』の製造者。つまり『血縁』の上位者に、それが出来ないようにされていたからだ。

それを許せば駒は増えたかもしれないけど、孫や曾孫となっていけば必然と朋の支配力は薄れていくし、無尽蔵にその数を増やしてし

まうと、計画の途中でオレや『十三夜』の誰か、もしくは秩序の護り手である『騎士団』にバレてしまう可能性があった。

そんなことになったら、計画が頓挫するのも目に見えてる。だから朋はあまり大っぴらにならないように、計画に縛りを入れてやっていた」

「だけど、それは結果的に失敗しちゃったんだよね」今野が短く合いの手を入れた。

その表情は、竹が語りだしてから今に至る過程で、刻々と驚きの色を深く染めていた。

驚きに息を呑み、短い合いの手もやっと搾り出した感があったほどだ。

「そう。7月に、この国を受け持っていた『騎士団』の6番目が死亡し、アレクサンドラ・ワーナーという秩序の申し子がその後を継いだことだな。

10月の終わりに護り手として優秀なアレクサンドラは、その事情から人手が足りなかったこともあって、オレに『D&』の販売元の消去を依頼してきた。

『D&』と一番関わって欲しくない、オレが関わったんだから笑い話にもならねえよな。朋にとってはだけど。

まあそれでもオレが『D&』を売ってた学生を処理するだけなら、まだよかった。

でもそうはならなかった。

あの大学生は、オレの目の前で吸血鬼へと変異しただけじゃなく、荒川さんを巻き込んだ」

そこから庵戸の計画は破綻していき、

竹は否応無く『D&』と深く関わることになったのだ。

「オレが『D&』に関わった事を察知した朋は、仕方なく次善の策を用意したんだろ。

それは最初の計画とは正反対のもので、擬似吸血鬼たちを一体一体個別にオレに処理させることだ。

何の為にかというと、対決前にオレに吸血鬼たちを始末させることで、オレの体力を少しずつ削って、あわよくば負傷させるためだ。どうしてそんな計画に変更したのかというと、さっきも言った通り、オレが朋に『1対1なら負けなかったのに』と思わせただろう理由の中に、3対1っていう条件以外にも、オレが朋を斬り伏せた時の状態が、オレよりも圧倒的に戦闘回数が多かった本とか、能力の使用回数が半端じゃなかった大木に比べて散々だったことがあったんだと思う。

まあ元々、自分が一番強いとか思ってた部分もあると思うけど……ってこれもさっき言ったか。

それはともかく、朋はあの時、オレの体力の無さを見抜いた。

だから、オレをあの時ほどとはいかないまでも、疲労させる為に吸血鬼を使っただ。

確実にオレに裁きを下すためにな。

その為に朋は、擬似吸血鬼になった者たちに少しずつ不必要な吸血行為を重ねさせていって、事件を大きくしていき、自分が登場を許される絶妙のタイミングで、アレクサンドラからオレにその件の処理をさせるように仕向けたんだろ。

計画を歪める切欠になった『騎士団』を今度は利用する。あいつにしてはそれなりに凝った策だよな。

……まあその事件に関しては、オレからアレクサンドラに処理をさせてもらえるように吹っ掛けたから、その策も外れっちゃ外れだけど、結果的には変わらないか。

それでオレは晴れて朋の計画ラインに乗っちゃって、朋はめでたく作戦成功ってわけだわ。その結果は言うまでもないね。

オレは十数体の擬似吸血鬼。朋の駒ともいえる存在たちのお陰で、今月の頭からずっと働きっぱなしの状態、朋の狙い通り心身ともに疲労困憊だ」

事実、年々体力が低下している竹は一人で働き尽くめたお陰で、かなり疲労が溜まったままの状態だった。

竹はお手上げのポーズをとり、その両手を下ろしながら、

「大体こんなとこじゃない？」と言ってニヒルに笑った。

竹が話している最中ほとんど黙っていた今野は、まぶたの稼動範囲限界まで目を見開いて、

「……すご、すごくね？　大体っていうかばっちし正解なんだけど。竹君、エスパーかよ」と大いに驚いていた。

庵戸が吸血鬼を選んだ理由だけじゃなく、『D&』を製造した目的、そしてそれに伴い庵戸の計画を一から十まで、今野が知っている事情を全て竹は的確に言い当てたのだから驚きもするだろう。

しかし、竹は驚きを隠さない今野に苦笑いを返し、

「エスパーって……別に凄くもないだろこんなの。単に散らばった情報を繋げただけだし、むしろ察しが悪かった部類だと思うよ。それこそカイカイとかなら、もっと早くにわかっただろうしね」と言った。

その言葉は謙遜ではなく、本当に心からそう思っているようだった。

そんな竹に、

「いやいや、十分すごいからね。普通はそこまでわかんないよ」と返す。

「そうかあ？」

竹はやはり自分ではどうにもすごいとは思えず、疑わしそうに言った。

だが、竹本人がいくら否定しようとしても、今野は自分の意見を変えそうな雰囲気ではなかった。

それに竹は、なんだかむず痒くなり、自分がどうしてそこまで真相に近づけたのか、という理由の一つを照れ隠しの意味もこめて言う。

「本当に大したことじゃないと思うけど……まあそうだな。大ちゃん言ってたな。オレと朋は仲が良かったって。だからってのもあるんじゃないか？　よくわからんけど」

「どういうこと？」今野が問うた。

竹はその質問に、

「朋がオレのことをよくわかってるように、オレも朋のことをよくわかってるってこと」と軽い口調で答えた。

そして短い沈黙の後、

「にしても随分と喋った。少し喉渴いたかも」と言って竹はポケットから漸く待望のタバコの箱を取り出した。

今野はそれを見て、

「あー、竹君。おれにも一本もらえる？」と言った。

「あいよ」

竹はタバコから二本取り出して、一本をくわえ、もう一本を今野に渡した。

そして、自分のと今野の分に火をつけて、有害物質を肺に押し込んだところで竹に辛辣な言葉が降りかかった。

「喉が渴いて煙草、という判断は正直どうかと思うぞ？ 飲み物な言うってくれば、すぐに用意をさせる。防衛拠点として我が家を提供するよりは、飲み物を用意させるくらい簡単だからな。ああ、いや、別に我が家を提供するのが難しい、という話ではないから安心してくれ。単純な規模の話だ。私は竹に望まれるなら、基本的にはなんだってしてやるつもりだからな。私は愛に生きる女なんだ。どうだ？ 良い女だろう？ こんな私を選べる竹は幸せ者だな。――

ああ、そうそう、忘れてた。言わなくても見た通りわかると思うが、一応言っておこう。竹、妾たちが到着したぞ」

地獄の鬼よりも地獄耳な紅い鬼女は襖を開け放って早々に、色々と問題発言をぶっ放した。

秋野紅葉の背後には、彼女に妾呼ばわりされて、こめかみに青筋を立てている三人の美少女の姿があった。

「……」

竹はそれらをしっかりと視界に収めたあと、何か思考を廻らした様子で紫煙を吐き出すし、

「すみません、お茶をくださーい」と言っ
て現実逃避をすることに
決め込んだ。

――庵戸と戦う前に死ぬんじゃないか。
そんな想いが竹の中に去来していた。

藍の章 30 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

28のあとがきで示した通り、28、29、30とここまでで1話だと思ってください。

長い1話になりましたので、どこかおかしな点が出てくるかもしれませんが。もしそんなところを発見したら、ご報告ください。

それではお待たせしてすみませんでした。次話以降もどうかお付き合いください。

藍の章 31

＊

「ふう……」

竹は湯呑に注がれた温かいお茶を飲んで一息つく。

透明感のある上品な甘さと、深みのある渋みが口の中を満たし、爽やかな若草色の香りが鼻腔を駆け抜ける。

別段、お茶に詳しいわけでもない竹でも一口で高級だとわかる。

竹はまったりと人心地ついた気分で、緑茶に添えて出された鳩の形をした洋菓子を一枚袋の中で砕いてから、ひとかけら口に放り込んだ。

高級感という意味では緑茶と比べるまでもないが、名物らしい外れの味だった。

朝から何も食べていない上に、もうじき昼時ということもあって自然と手が進んだが、もう二欠片ほど食べたところで手を止めた。

再度、お茶に口をつけて少し乾いた喉を潤すと、竹はようやく対面に座った紅葉と眼を合わせた。

ここは以前の家主が応接室として使っていた部屋であり、今現在は秋野紅葉の私室のひとつとして使われている部屋である。

以前の家主の時と比べると圧倒的に物量が多く、古今東西の調度品から土産物品、果ては用途不明の実験器具のようなものまで並べられ、部屋を占拠していた。

竹は紅葉が住むようになって、来訪を迫られて半ば強制的に数度訪れた事があるが、来るたびに物量が増している気がした。

配置が変わらないのは、部屋の中央で二人分の湯呑と茶菓子を載せている卓袱台くらいのものである。

これは以前の主の時と同じ配置だったが、新しいものに変えられて

いる。

同じ位置にあるならわざわざ別のものに変える必要もなかったように思うが、色か形か、もしくはその両方を紅葉が気に入らなかったのだろう。

もしかしたら色形というよりも、前の使用者が気に入らなかっただけかもしれない。

そうなるとこの部屋を埋め尽くそうとしている物品の数々には、以前の入居者の気配を物量で消し去ってしまおうという目論みが含まれているのかもしれない。

とはいえ、竹はその点について聞こうとは思っていなかった。

人の趣味にとにかく言うつもりもなかったし、紅葉が会話として好むのは自分のことよりも外のこと。とりわけ竹やその周辺、十三夜のことなどだったからである。

なので竹がこの物置部屋に近い紅葉の私室について聞いたことと言えば、この状態でどうやって寝るのか、くらしいもので、その答えは、寝室は寝室で別の部屋がある、という単純明快なものだった。

竹は件の寝室へは勿論のところ入ったことはないが、紅葉の口振りでは寝室に関しては本当に寝起きするだけにしか使っていないらしく、それを考えればこの部屋こそが正しく紅葉のプライベートルームなのだ。

まあそもそもこの屋敷自体が彼女のものなので、使用人の二人の私室を除けば、全てが彼女の部屋といえなくもない。

竹は対面にたおやかに座っている銀髪の少女を正面から見据え、今日この部屋に入ってから初めて紅葉に対して言葉を投げかける。

「今日……というか今回のことは本当にありがとう」

秋野紅葉はこの屋敷を防衛拠点として提供し、竹たち十三夜とその他三人の女性を駐留させることを二つ返事で了承してくれた。

竹はその連絡の際にも勿論礼を述べていたものの、やはり面と向かってきちんと言うておくのが当然の礼儀だろう。

竹は感謝してます、と真摯な口調で言っ頭を下げた。

「どういたしましてだ。まあ私としては、感謝されるようなことをしてやったつもりはないな。大広間でも言ったが、私はお前が望むのならなんだってしてやるのだから。気にするな」

紅葉は上機嫌そうに言っ、口元だけを動かして薄い微笑をつくった。

この部屋に通され茶と茶菓子を用意してもらい、竹がそれに舌鼓を打つまでの間もずっと、対峙していたのに会話が一切なかったことについて多少の不満があってもおかしくないものだったが、どういうわけか紅葉にはそれはないうだった。

それは紅葉が三人の少女を引き連れて竹の元に現れた直後。

真っ先に何故自分たちがここに呼ばれたのか説明しろ、と詰め寄った深翠と蒼香から半ば逃げる形ではあったが、二人への説明を後回しにして竹が紅葉と二人で会談することを望んだところに起因していた。

深翠と蒼香、それに加えてアレクサンドラという三人の女が揃っている中で、竹と二人きりという状況を、竹が望んで作ったことに彼女は胸を躍らせていたのだ。

更に付け加えるならば、竹がこの部屋から出た後、間違いなく窮地に立たされることにも微かな嗜虐心を刺激されていた。

あまり良い趣味とはいえないが、想い人が他の女に迫られて辟易する状況を悠然と眺めるのは、紅葉にとってそれなりに面白いイベントなのだ。

そのイベントの内容が、自分とのこの状況を少なからず含んでいるのであるのなら、なおのこと愉快的気分させてくれる。

事実、人外との混血ゆえに発達した紅葉の聴力には、説明もされず残されたことに不満が爆発している蒼香と深翠の盛大な愚痴合戦が、少しばかり煩いくらいに聞こえていた。

まあそんな声を聞かなくとも、あの部屋から出るときに眼にした二

人の表情から、そのイベントが確実に起こることは想像に難くなかったのだが。

竹自身も、そのイベントの起動装置を踏んだのがわかっているのだろう。

だからこそ、竹はそれを遠ざけ、あわよくばどうにか回避できないか考える意味も込めて、ここまで会話を始めなかったのだ。

ということは、会話を切り出した竹は、かのイベントを回避する方法でも浮かんだのだろうか。

しかし、竹の表情にはそんな晴れやかなものは一切なく、むしろどこか諦めの色が浮かんでいた。

もしかすると、紅葉には及ばずともそれなりに耳の良い竹にも、彼女たちの喚き散らす声が届いていたのかもしれない。

それで竹は不可避を感じ取り、彼女たちの追及を甘んじて受けることにしたのか。

潔く腹を括ったといえは聞こえは良いが、ただ流れに身を任せることを容認しただけだろう。

なんだかんだで最終的には、楽天思考に走る竹らしい考え方だった。

竹は紅葉になんでもする、と言われて少し居心地が悪くなる思いだった。

竹とて正常な男子である。

魅力的な女性と二人きりの室内で、そんな台詞をさらっと言われて何も思わないわけがない。

竹は気持ちを落ち着かせるように、半分ほどになった茶をちびりと口に含んだ。

しかし、その試みも成功したとはいえなかった。

お茶を飲む所作中も、竹の視線は正面に座る紅葉に否応なしに固定されてしまっていたのだ。

視線を外しても良かったのだが、なんとなくそれをしてしまうと自

分の心境が気取られてしまう気がしてできなかった。

落ち着いたやわらかな薄紅色のしっとりとした生地に、可愛らしい手鞠をさりげなくあしらえた品のいい小紋。

透き通った銀糸の如き頭髮の隙間から覗く、目尻からこめかみまで切れ込んでいるようにみえる釣り上がった真紅の眼は、どこか人を見透かして見ているような、見下ろしているような、ややきつい印象を他者に与える。

しかし同時に灼熱の瞳は人を吸い寄せる光沢を放ち、力強い威厳と悠久を想わせる翳りを漲らせていた。

日本的な美人という意味では、大神深翠こそがその筆頭として相応しいだろう。

深翠を静の美とするなら、紅葉はその対極にある動の美。

紅葉には日本的なのに日本的ではない、もっと原始的で生々しい、他者を圧倒するほどの激しい生命力が宿っているのだ。

それはその身に、鬼という神秘の血が半分流れているところに由来するのだろう。

竹は紅葉のことを見ながら、そんなことを考えていた。

気を落ち着かせるどころか、気を紛らわせる為に考え事をしたのにこの様だった。

竹は自分の滑稽さと、男子としての正常具合に自嘲気味に息を吐く。紅葉は竹の様子に、竹が何を考えているのか大まかに察したのだろう。

瑞々しい唇を艶かしく、歪ませる。

「疲れているみたいだな。寝たらどうだ？　すぐに用意はさせるぞ

？　なんなら添い寝してやっても良い」

どこまで本気なのか、紅葉は金属と宝石が優しく擦れたような、甘く尖った独特な声で紅葉は妖しく誘うように言った。

「……」竹は一瞬、その魅力的な提案に頷いてしまいそうになった。添い寝云々は別にして、竹が疲れているのは紛れも無い事実なのだ。

竹に疲労を溜めさせるのが庵戸の思惑であるのなら、疲れを取るのが正しい選択だ。

だが竹は一步踏みとどまって、その誘いを断った。

「……遠慮しておく」

「どうしてだ？ 添い寝くらい私は一向に構わんぞ？ 無論、その先もだ」

紅葉はそう言って、竹を挑発的に見た。

紅葉と眼が合うと、竹は左手で口元を覆って敗者の苦い笑いを隠した。

蠱惑的に光る瞳、優美な微笑み、妖艶な色気の全ての中に、どこか悪戯めいた色合いが見え隠れしていたのだ。

竹は紅葉と今は亡き彼女の母親の姿がダブって見えたが、こちらの方がやることの性質が悪い上にえげつない。

確かな敗北感に苦笑いを浮かべたまま、竹は机の上に置いておいたタバコを口にくわえて、今度こそ気持ちを落ち着けるように火を点けた。

紅葉はそんな竹の行動を見て、ニヤニヤと愉快そうにして自分の茶を啜っている。

鬼かこいつは、と思ったが彼女にその言葉は圧倒的なまでに無意味だったので、竹は口に出さなかった。

その代わりに竹は紅葉を、抗議をまじえたジト目で睨んだ。

紅葉は一層楽しそうに表情を緩め、

「全く、そんな状態で大丈夫なのか？ いつもの竹ならば、さすがにここまでの醜態は曝さなかったろうに」と言って意地悪そうに笑う。

「……うるせえよ。疲れてるの。疲労です疲労」

もう何を言っても負けな気がしたが、それでもすんなり認めるのは嫌だったので、竹はせめてもの抵抗をする。

情けなくも言い訳をする姿が、程度こそ違えど同じく醜態を曝していることに竹は気が付いていない。

紅葉はそれで、見た目からはわからないが竹が心底疲れているのだと理解し、これ以上弄るのをやめることにした。
万全の状態であれば、竹は言い訳ももう少し上手い口上を揃えるのだ。

「――ふむ。それならば、手伝おうか？」紅葉は平坦に聞こえる口調で言った。

その表情には、数秒前までの巫山戯たものはなかった。

「……」

竹もまた真剣な表情で紅葉を見つめ返す。

何を手伝うかは言うまでもないだろう。

竹がこれから投じなければならぬ戦いのことだ。

数秒ほどそのままだっただろうか、竹が先に視線を外した。

そして、竹は落ちそうになったタバコの灰を竹用に用意された灰皿に落とし、ゆっくり首を横に振った。

「やめてくれ。これはオレの手で決着をつけないければならない問題だから。それに手伝ってもらうって言うなら、もう紅葉にはこの屋敷を貸してもらってる。これ以上のことは望まない」

竹はそう言っ、吸い込んだ煙をゆるゆると吐き出した。

すると、今度は紅葉が首を横に振った。

「……ダメだな。全然ダメだぞ」

「何が？」

「わからないか？」

竹が聞き返すと、紅葉は目を細めて言った。

何か非難されているような紅葉の視線に、竹は困ったように考え始めた。

何がダメだというのだろうか。

吐き出した煙を追うように、竹は視線をゆらゆらと廻らせ――

「……わからん」

結局わからずに視線を紅葉へと戻した。

「……本当に疲れてるな。ならヒントをやろう」紅葉は微かにため

息を洩らして言った。

「ん、答えじゃないのか」

竹が少し茶化したように言うと、

「少し意地悪したい気分なんだ」と紅葉もそれに応えるように軽快な声で言った。

そして煌々と燃え上がる紅い瞳で竹を凝視し、ゆっくりと確認するように口を開いた。

「さて、天倉竹。今のお前は何者だ？　よくよく思い出せ」

そう言って、紅葉は少し温くなったお茶を一口飲んだ。

紅葉が湯呑を茶托に戻す。

磁器と漆器が擦り重なる静かな音色に、

「――はっ」竹の自嘲気味な吐息が被さった。

今の自分が何者なのか、という紅葉の問い。

何の装飾もない、一見無造作なその言葉には根源的な意味合いが含まれていた。

「……助かった」竹が肩の力を抜けたように穏やかな声で言った。

「ふむ。その分だと、もう大丈夫だな」紅葉は肩の力が抜けた竹の姿を見て、安心したように頷いた。

「おう、もう大丈夫。今のオレが何者なのか、ちゃんと思い出した。今のオレは天岩戸にいた頃のオレじゃない。今のオレは解決士だ。だから決着をつけるんじゃないくて、解決をするのが正解だ。そういうことだろ？」竹は少しはにかむように笑った。

紅葉もつられて微笑する。

その微笑に浮かんでいたのは満足感だった。

「そういうことだな。やっとまともな顔になって安心したぞ」

庵戸という過去の亡霊に引き摺られ、竹は今の自分の立ち居地を忘れかけていた。

この見透かした眼をする少女は今日、竹のことを見た瞬間からそれを危ぶみ、そしてそんな竹を好ましく思えなかった。

紅葉にとってこの会談は、偏に竹に今の自分を思い出させるため

のものだったのだ。

しかし、紅葉にとっての会談の真意がそこにあるというのなら、これを端から望んだ竹の真意はどこにあるのだろうか。

「……なんか紅葉には、助けてもらいっぱなしな気がしてきた」

竹は自分自身の情けなさに対する苛立ちをぶつけるように、乱暴にちびたタバコを灰皿に押し付ける。

「気にするな。別に私は構わんと言ったろうに。それともなんだ？
あまりにいい女すぎて魅了されてしまったか？ それならもっと構わんぞ」

紅葉の尊大な物言いに竹は、

「ああ、まあ、少しだけな」と苦笑いまじりに応えた。

「それは重畳。この会談の益としては十分だ。――さて、それではそろそろ戻るとするか。どうやら待ちきれなくなった女たちが、押しかけてきそうな雰囲気だ」

薄く笑った紅葉は少し残念そうに、大広間の方向に目をむけながら言った。

「そうだな」

竹もその方向を見て頷き、

「――あ、でもその前に一つ」と思い出したように言って、立ち上がろうとしていた紅葉を止めた。

「なんだ？」

特に急を要する話が思い浮かばずに、紅葉が怪訝そうに聞いた。

だが、竹が止めたからにはそれなりの話があるのだろう。

そう判断して、紅葉は浮きかけた腰を元の位置へ戻す。

「いや、実はさ――」

竹はどこか躊躇しているようだった。

それに紅葉は、

「なんだ？ 言ってみろ」

いよいよタイムリミットが差し迫ってきたのだろう。

紅葉は急かすような口調で言った。

どうやら紅葉は、この部屋に突撃されるのが心底嫌なようだった。竹はそんな紅葉の意を察して、覚悟を決めたように口を開く。

竹がこの会談を望んだのは、一つは紅葉にちゃんと礼を言う為。

そしてもう一つは――

「悪いんだけど。これから宴会の用意をしてもらえないでしょうか」
やることに特にならない、暇な友人たちの要望を叶えることだった。

「……」

紅葉は竹の言葉に一瞬、呆氣に取られた顔をした後、

「わかった。昼食の用意も出来る頃だ。酒も用意させよう」とほとほと呆れたように溜息をついた。

「いや、本当に申し訳ない」竹が本当にすまなそうな顔をして言った。

「氣にするな。……何度目だこの台詞」

そう言って紅葉は眉を顰める。

「三度目、だったかね」

竹が思い出すように言って、二人は交互に微笑を交換した。

そして同時に立ち上がる。

「……竹、最後に一つだけ」

「何？」

「お前も宴会に加わるのか？ 本当に疲れてるなら――」

やめたほうが良い。

他の者たちと違って、竹には確定した戦いが待っているのだから。紅葉の心から竹の身を案ずる、その心遣いに竹は感謝しつつも、かぶりを振った。

「勿論、参加するに決まってる」

「どうして？」

今までとは打って変わって、不安そうな紅葉の表情。

それに竹は笑いかけながら、

「そりゃ天倉竹は、多少の苦に目を瞑っても、仲間との楽しい時間を取るものだろ」といって大げさに肩をすくめた。

「……全く、正気の沙汰じゃないな」

紅葉は呆れと諦めの入り混じった、しかし楽しそうな表情で竹を非難するように言った。

「どうにかなるだろ。さて、それじゃあ戻ろうか。廊下が騒がしくなってることだし」

竹が廊下の方を見て言った。

確かに、どたどたと板張りの床を叩く複数の足音がする。

紅葉は無言で頷いて襖の方へ歩き出した。

竹もその後ろに続く。

二人が部屋から出ていくのを、碎かれたまま残された平和の象徴が見送った。

藍の章 31 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

どうにかまとめられたかな、といった感じの今話です。

真っ当に紅葉を書いたのが久々な気がします。

その割には、なんか破壊力が高いような。

いよいよ、佳境！

というわけでもありませんが、少しずつ終わりへと近づいていきますので、どうか最後までお付き合いください。

藍の章 32

＊

「明日の午後6時、八里浜の工場地帯B倉庫前に来い。そう言っただけだ？」

やっとのことで蒼香と深翠へここに集めたことの理由の説明を終えた竹は、蒼香が最後に思い出したように告げた言葉に対して、確認するように言っただけ顔を向けた。

顔付きは険しいが、口調にはどことなく安堵が含まれている。

「うん。間違いないよ」

蒼香は小さく頷く。

「……一応聞いておくけど、どんな奴だった」

「えっと、背は低くて、顔は良くて——なんか藍色？」

「ああ——」

竹は遠くをみるように目を細め、

「わかった。まあ何にせよ、何も起きなくてよかった」

今度こそ、はっきりとわかる安堵の息をついた。

竹はまさか蒼香が、庵戸と自宅の前で（……）会うなどと思っただけでなかった。

自分が出向けばいくらか話も変わっただろうが、しかし、いくら庵戸が竹を標的にしているとはいっても、敵の本拠地である自宅にのこのこやってくるわけがないと考えていたのだ。

さすがに安全だろうと思って彼女たちに自宅までお使いを頼んだのが、結果として裏目に出してしまった。

危険から遠ざける為に秋野の屋敷に集めたのに、彼女たちは乗っけから最大の危険物と遭遇してしまったというのだ。

しかも対面した者と、しなかった者がいるという。

もしも危険と遭遇してしまった時の為に、わざわざ三人まとめて来

させたというのに、これではまるで意味がなかった、

竹は自分の見通しと判断の甘さに、心中穏やかではいられなかったが、何はともあれ彼女たちが無事であったことに息をつく。

過程はどうであれ無事なものは無事なのだ。

後悔し、反省するのは全てが終わってからでも遅くはない。

竹は一先ず彼女たちの無事を祝うように、何かから逃避するように目の前に注がれた琥珀色の液体を喉に流し込む。

疲労回復に良いとされる梅の酒は、酒に強いわけではない竹でも先ほどから始まった宴の場を楽しむ為のツールとして十分に機能する。よく冷えたものを飲んだのに、胃の底が徐々に熱くなり始めていくというアルコール特有の奇妙な感覚に陶然としながら、竹は部屋全体を見渡した。

かれこれ1時間ほど前から始まった昼食は、既に完璧なまでの宴席の場と化していた。

酒飲みの連中は紅葉が用意した、見るからに高級そうなボトルを種類問わず片っ端から開けては、飲み比べをして楽しんでいる。

別に芳香を楽しめるほど詳しいわけでもないだろうから、単純に物珍しさと勢いでやっているのだろう。

普通に考えれば行儀が良いとは言えない行為だが、その輪の中には提供者である紅葉が混ざっており、彼女が率先してボトルを開け放っていくのだから恐いものなしかった。

これで顔見知り程度だった親交が深まるだろうから、竹としても文句はない。

いくら竹が大丈夫だと言っても、間違っても無頼漢ではない十三夜の面々は、屋敷にきてからずっと遠慮したような雰囲気があった。

だがそれぞれが紅葉と仲が良くなれば、留まることへの気後れが解消されていくだろう。

もしかすると紅葉は、そんな雰囲気を感じとったからこそ、ああして率先して輪の中に入っていったのかもしれない。

だとしたらホストとして文句のない、どこかお釣りのくる働きだ

った。

紅葉さまさまである。

対して竹と同じく酒に強くない、もしくはあくまでも酒は場を楽しむ為の一要因くらいに認識している連中は、度数が低く自分の舌にあったものをマイペースで飲みつつ、上等な料理とつまみを肴にのんびんだらりと楽しんでいる様子だった。

館花以外の怪我人は体調的なものからだろう、全員こちら側にいる。

秋野家の使用人、八坂姉妹は今やバーテン状態で、こちらの連中に頼まれる度にカクテルやらリキュールやらを作っては提供し続けている。

先ほどまでは時折、姉の真実の方は席を離れては、新たな料理を抱えて戻ってきていたが、今は殆ど立ち上がることはなくなった。

皆の口にするものが料理から酒にシフトしているからだ。

とはいえ、八坂姉妹も働き詰めというわけではない。

主たる紅葉のように率先して宴会の輪に入ることはないものの、彼女たちもそれなりに会話に参加しては自分用に作った酒を嗜んでいる。

酒飲みの相手をするのが紅葉の仕事だとすると、八坂姉妹の仕事はそちら側の相手をする事なのだろう。

至れり尽くせりな状態に、文句なく大満足の十三夜の面々であった。

アレクサンドラは、十三夜と一人でも多く会話をしてみたい、という意図があるのだろう。酒飲みとそうでない陣営をふらふら行き来していた。

そんな状況を見渡して把握した竹は、楽しそうに盛り上がっている連中に羨望の眼差しを浮かべていた。

竹は現状、二つの陣営のどちらにも混ざれないでいたのだ。

仲間に入りたそうに見つめていた竹を横から蒼香がつつく。

「ちよっと、聞いているの？」

「はいはい。聞いてますよー」

「嘘ですね。竹さんは全く聞いてませんでした」

にべもない口調で、右側に座っている深翠が断罪するように言った。

「深翠、そんなことないって。竹のことだからなんだかんだ聞いてたよ、ね？」

なにか確信的な笑顔を蒼香は向ける。

「……聞いてなかった。ああ、聞いてなかったですよ」

「うわ、開き直った。どう思う、深翠」

「最悪ですね」

これである。

紅葉の部屋から戻ってきて昼食の開始とともに深翠、蒼香に説明を始めた時から両者ともにこの調子で刺々しい。

食事をしながらでも15分もあれば終わる説明も、このお陰で三倍以上の時間がかかってしまった。

美少女二人に囲まれて酒が飲める、という字面だけなら最高の状況なのに全然楽しくなかった。

まあこうなることは予想できていたので多少覚悟していたのだが、だとしても1時間もこの調子ではいい加減辛かった。

早いところどちらかの陣営に取り込まれたい。

この際、酒飲みの方でも良いとすら思っている竹だった。

だが今のところこの状況から脱する切欠はなく、両陣営ともに竹に救いの手を差し伸べる気はなさそうなので現状を維持するしかなさそうだった。

竹は酒を一口腹におさめてから蒼香に聞く。

「もう一度言ってくれる？」

今度はちゃんと聞いてますよー、とアピールするように蒼香と目を合わせる。

「……」

はからずも見つめ合う形になった蒼香は、一度竹との視線を外し

て景気づけるように竹と同じ種類の酒をぐいっと煽る。

「わかった。じゃあもう一度言うよ」

蒼香はグラスを置いて、外した視線を再び合わせた。

「その藍色の男の子が『偽者を裁くつもりはない』って言った。それってどういう意味だと思う？」

「――っ！」

竹ははっと、何かに気付いた顔をした。

そして次の瞬間には、ぎらぎらとした怒りが浮き上がっていく。

「何かあったの？」

蒼香が問う。

竹はすぐさま怒りを引っ込め、張り付いたような無表情で言う。

「……いや、何もわからない」

明らかな嘘だった。

『偽者を裁くつもりはない』。

この言葉で、竹が何かに気付いているのは明白だ。

だが蒼香は、

「……ふうん。そっか。ならいいや」と聞くことをやめた。

竹の表情が、これ以上の追求を拒絶していたからだ。

蒼香とて、想い人が心から嫌がっていることをしようとは思わない。しかし、だからといってこのまま引き下がる蒼香でもなかった。

竹は蒼香が自分の拒絶に気付いて、それ以上の追求をやめてくれたことに気が付いているだろう。

つまり、アドバンテージは取った。

それを使わない手はない。

「そういえばさ、今更だけど、自分で取りに行かなくてよかったの？ あの手」

蒼香は自然な口調で話題を変えた。

竹は急にさきほどまで蒼香にあった棘が抜けて不審に思ったが、そんなことを聞くような馬鹿げた真似はしない。

自分から地雷原に飛び込んでいくのは、お馬鹿さんのすること

ある。

「ん、まあオレじゃなきゃ出来ない用事ってわけじゃなかったし。前にもおいちゃんに頼んだことあったし」

自分が自宅に戻る必要があれば、自分が戻った。

だがその必要はなかった。

『夜月』を持ってくる仕事は、自分じゃなくても可能。やるべきことはすでに終わっているのだ。

「ふうん。なら良いけど。それよりも――」

突如として蒼香の声が低くなり、同調するように何か気温的なものも下がった。

竹の第六感が暴風波浪警報を発令した。

背中からじわりと冷たい汗が染み出してくる。

竹は察知した危機的状況を回避する為に、全力で話題を逸らすことにした。

「えっと、そういうえば『夜月』はどこにある？」

竹が視線を極力、左側の蒼香を視界におさめないようにうろつかせる。

「あそこにありますよ」

深翠が大部屋の隅を指差して言った。

その指先を追うと、深翠たちの荷物に紛れて長細い棒状の袋があった。

それを確認して竹は頷く。

「ああ、本当だ」

そしてちよつと確認してくるわ、と竹は流れるような素振りです席を立つ、もとい現場から離脱しようとした。

しかし――

「ちよつと待って」

「竹さん、話は終わってませんか？」

竹は両サイドからセーターを掴まれて、強引に席に座りなおされた。

その力たるや、セーターの裾が伸びきってしまうのではないかというくらい強力なものだった。

「によ」

強引に引っ張られた為、ハイネックの首周りが絞まり竹は珍妙な声を出した。

「な、なにを……」

圧迫された気道付近をさすりながら、竹はあたかも被害者面をして言った。

だが今回被害者に権利はないらしく、蒼香と深翠はむしろ竹を逃亡しようとした容疑者として見なしているようだった。

「では竹さん。一つ聞いておきたいことが」深翠が言った。

そのキンキンに冷えたアルコールよりも冷たい声から察するに、どうやら竹は容疑者どころか犯人確定のようだった。

「……何でしょうか？」

取られていたアドバンテージを踏み倒すことは出来なさそうだ。

竹は観念して、粛々とした気持ちで法廷の場につくことにした。

何を言われるか知らないが、毅然とした態度で臨めば罪は軽くなるはずだ。

もしかしたら冤罪かもしれないし。

裁判長、大神深翠が裁判官、山吹蒼香に続きを促す。

蒼香は深翠の合図に頷くと、どろどろと蠢く滾ったマグマのような低く昏い声で言う。

「なんであの女は合鍵持ってるの？」

声だけで人が殺せるなら竹は死んでいる。

天性の美声が全く正反対のものに変貌した、その声の恐怖は当社比50%増しだった。

「えーっと、どうしてと聞かれましたも……」竹は言い繕うべきか考える。

間違っても、「プロポーズしたのだから、合鍵くらいよこせ」的なことを言われて断りきれなかった、などという真相など語れるわ

けない。

竹が考えあぐねていると、裁判長が口を開いた。

「すぐに言えないということは、何かやましいことがあるんでしょう。そうですね？」

深翠は両手で竹の両頬をがっちりロックして、自分の方へ顔の向きを変えた。

「いやいや、そんなことは……」

「嘘をつくな」

自身のアイデンティティである丁寧語を捨てて、深翠は完全に据わった目で言った。

普段の優しい眼差しは一切無い。

視線だけで人が殺せるなら竹は死んでいる。

此度の裁判にはこれ以上、被告に弁護の機会は訪れないらしい。

何が地雷原に飛び込んでいくのは、お馬鹿さんのすることか。

どう考えても、竹は自分から地雷原に飛び込んでいた。

いや、正確には既に踏んでいた地雷がようやく爆発したといったところだろう。

そして、その爆発の被害は拡大の一途をたどっていた。

「――合鍵だと?! 私ほもらっていないぞ!?!」

「そりゃそうでしょう。タケ君が選んだのは私なんだから」

「ふん、何を言う。選ばれたのは私だろう。竹は私の居るところをわざわざ拠点にしたのだから」

「何を言うかと思ったらたったそれだけ? それで選ばれたなんてよく言えたものだわ。私はすでにプロポーズをされているのよ!」

「はっ、それは言い間違いだったと竹は言っていた。全く、言い間違いを真に受けるとは迷惑な女だな」

「な、なんですって?!」

などといつの間にか傍聴席が騒がしくヒートアップしている。

紅葉とアレクサンドラの頬はほんのり紅潮していた。

ただの酔っ払いだった。

竹から手を離した深翠と剣呑な表情をしている蒼香は、酔っ払いに触れると面倒になることがわかっていいるのだろう。

傍聴席の二人には触れず、早々に判決を言い渡そうとしていた。

「深翠」

「わかってます。言ってやりたいことは多々ありますが、それはこれからとっておきます」

「……」

——これからあるのか……。

竹は頭痛と胃痛がじわじわと襲い掛かってくる気配を感じつつ、黙って判決を聞く。

もはや罪人に残された道は、従順であることしかないのだ。

深翠は静かな口調で判決を述べる。

「それでは竹さん、私と蒼香にも合鍵を作ってください」
嫌と言え——わかりますよね？

深翠の表情には、そんな獄上の脅し文句が張り付いていた。

これで嫌といえるのは、本物の漢か馬鹿かのどちらかだろう。

無論、竹はそのどちらでもない。

「……了解しました」

竹は空気が読めると書いて、ヘタレと読む種類の生き物だった。

「竹！ 勿論、私にも作るんだぞ？」

「じゃあ私はタケ君の家に住むわ！」

傍聴席から紅葉とアレクサンドラが会話に雪崩込んでくる。

すでに勝利条件を手に入れた蒼香と深翠は、その二人を勝者として迎え撃つ。

混戦は必至だった。

竹は泥沼化しそうな戦場からいち早く逃亡する心算を決め、何かこの状況から逃れる手立てはないか探す。

『夜月』を確認すると言っても無理だったのだ、意味も理由も無い状態で逃げ出すことは不可能だろう。

——何か、何かないのか……っ。
もう一度、『夜月』を確認しに？
ダメだ！

目的を達成して、一度それを阻んでいる深翠と蒼香には心理的にも有効だろうが、アレクサンドラと紅葉には効果薄だ。

成功率は高くても五割以下……。
それじゃダメなんだ。

オレはもうこの場から離れたいんですよ！！

もう無理なんだって、色々！

嫌な胃痛のする飲み会なんて、全然楽しくないから！

いや、マジで！！

あれ？

でも美少女4人に囲まれて酒飲むのって結構いいんじゃないか？

そいつはやべえ。

超楽しそうだ！

——って騙されるな、オレ！

ここで挫けたら、あとはずるずる地獄の胃痛パーティーだから！

竹の脳内はパニックに陥りかけていた。

脳内麻薬が分泌され始めて、思考がまずい方向に走り出してしま
いそうだ。

竹はそれを抑えて、とにかく考える。

残された時間も殆どない。

このタイミングを逃せば脱出は不可能になってしまうだろう。

——何か、何か、何か……この場を逃れる術は……。

だが妙案は浮かばない。

正面に紅葉とアレクサンドラが移動してきた。

竹の心に諦めの色で染まりだす。

——もう……ダメなのか……。

屈服しかけた竹の心。

その中にふつふつと浮かんできたのは、こんな飲み会を望んだ友人たちへの恨み言だった。

——あいつらが酒飲みてえとか言ってきたから、こんな状況になったんだ。

なのに、何なんだ！

希望を叶える為に紅葉に頼んだオレが辛くて、希望が叶ったあいつらは何であんなに楽しそうにしている。

どんだけ理不尽なんだよ！

おかしいから！

この世界おかしいから！

現実逃避に走る竹の視界には、それはいい顔で心から楽しんでる友人たちの姿があった。

その先頭を走っている酒飲みサイドは、唯一の女子成分だった紅葉が抜けたせいか、一気クールが入り始めそうな気配が流れていた。その瞬間、竹の中に光明が差した。

——これだ！

竹は室内の喧騒に負けないよう、声を張り上げる。

「松！ 松、オレにもそれ注いで！」

そう言っ、竹は自分のコップを片手に持ち松田に示した。

一氣を終えた直後で顔が真っ赤になっている松田は、竹の突然の要望に一瞬面食らった顔をしたが、酒が入った時は普段以上にノリで生きている松田は、ニヤリと嬉しそうに口角を持ち上げる。

「TK、いっちゃう系？」

「そんなもん——いっちゃう系だから！」

竹は無理やりテンションをトップギアまで昇らせ、コップ片手に立ち上がった。

「竹、やばいから！ またグロッキーになっちゃうって」

過去に酒で悲惨なまでに潰れたことのある竹を鎗花が制止した。だが竹はそれを振り切って、酒飲みサイドに足を向ける。

「いや、おいちゃん、大丈夫。オレは二度限界を突破してる」

などと完全に死亡フラグを嘯きつつ、竹は戦場から酒飲みサイドへの移動を成功させた。

深翠、蒼香、紅葉、アレクサンドラの四人はそれを止めることはなかった。

竹の参戦に盛り上がりをみせ始めた彼らに、水を差すことは出来なかったのだ。

竹はなんとか脱出が成功した喜びで、無理やり上げたテンションを下がらせることなく、松田等が構成する酒飲みサイドに胡坐をかいて座る。

すぐに竹のコップに松田が酒を注いでいく。

「これは竹、死んじゃうー」呂律の回っていない佐藤が心配そうな台詞を言った。

だが心配そうなのは台詞だけで、表情は楽しそうに笑っている。コップになみなみと注がれた蒸留酒の匂いに、早まったかもしれない、と竹の突き抜けていたテンションが現実引き戻されかけた。しかし、酒を注ぎ終えた松田が、ウキウキと一気コールを歌い始める。

「飲んじゃってー、はいちゃってー、いっちゃってえ。はいっ!!」
それに館花、佐藤が続く。

「飲んじゃってー、はいちゃってー、いっちゃってっ!」

一気コールに酒飲みでないサイドが気付き更に続く。

「飲んじゃってー、はいちゃってー、いっちゃってっ!!」

もはや進退窮まった。

竹はなりふり構わずこちらに来てしまった事を後悔しながらコップを傾けた。

「……くはあっ、まっず」

一気に飲み干すと、もう当分酒は飲みたなくなるような、凶悪なアルコールに口内が侵される。

体中が熱くなり、ぐわんぐわんと目の前が揺れた。

だがこれは地獄の入り口にすぎない。

十三夜の一气コールは甘くないのだ。

空になったグラスには、松田が酒を注ぎ足し終えていた。

「ごちそう、さまが聞こえないっ！ はいっ！！」

再び松田発で盛大に伝染していくコール。

これにも当然応えなければならぬ。

竹はこの後、更に1回コールに伝えてからバトンを松田に廻して、ふらふらになりながら一人一回周るまで終わらない、強制一気リレーのコールをやけくそで歌い続けた。

藍の章 32 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

書いてて自分でもよくわからなくなってくるくらい、緊張感の一切ない今話でした。

ゆるさ具合は近々待っているシリアスへの箸休めだと思ってください。

箸休めが多い気もしますが、もう暫くお付き合いください。

藍の章 33

＊

「……………あれ？」

目を覚ました竹の目に最初に飛び込んできたのは、薄くぼんやりした豆電球のオレンジの光だった。

開けた直度で靄がかかっているようだった目を二、三度瞬きさせると徐々に暗闇に順応していく。

上半身を起こしてから薄暗い部屋の中をきよろきよろ見渡し、状況把握につとめる。

体を起こした時もそうだったが、部屋を見渡すために頭を動かす度にとんでもない頭痛がした。

しかも頭が揺れると、それに呼応して嘔吐感が胃の底からせり上がってくる。

重度の二日酔いだった。

——誰もいない暗がりの部屋。

自分がいつこの部屋に来たのか、いつの間に寝ていたのか。

全く覚えていなかった。

辛うじて遡れる記憶は、一気リレーのバトンが十三夜全員に渡って終わるまで。

それ以降の記憶がない。

つまりは——完全に酔い潰れたわけである。

竹は状況を把握すると、悔恨の情にかられ、

「……………やっちまった」と頭を抱えてつぶやいた。

呟いた声が少しだけ枯れていた。

何故かと首を捻る。

「……………あー」

そういえば一気コールで叫びすぎて、途中から声が枯れ出したよ

うな覚えがあった。

「うわー……、うわー……、死にてえ……むしろ吐きてえ」

竹は自分の失態を思い返すと、恥ずかしさと後悔、更に自然に込みあがってくる吐気のあまり両手で顔を覆った。

明かりの少ない部屋でどんよりと、ひとり落ち込むその姿はシュールを通り越して若干だが不気味だった。

「……」

自分でもそれに気が付いたのか、竹は気持ちと体調を落ち着かせるように大きく深呼吸した。

そして、時間を確かめようとポケットに手をかけたところで、とんでもないことに気が付いた。

竹はズボンを穿いていなかった。

ついでに言えば、上半身もセーターではなくTシャツ姿だった。

「……ありゃ？」

竹はどうして、自分がこんな開放感丸出しな格好をしているのか、自分の姿を見ながら考える。

1、酔った勢いで自分から脱いだ。

それはない。

脱ぎ属性があるのは竹ではなく松田だ。

仮に脱ぐことがあったとしても、それは男のみの場合で、仮にも女性がいる場で脱ぐようなことはしない。

酔っていてもそのくらいの節度は保つはずだ。

……いや、保っていて欲しい。

よって却下。

2、暑くなって自分から脱いだ。

これはありそうだった。

だがいくら暑くてもズボンまでは脱がないだろう。せいぜいセーターくらいだ。

ズボンの謎が残るので保留だ。

3、誰かに脱がされた。

ありえない。

何が悲しくて、この年になって他人に服を脱がされなければならないのか。

——と言いたところだが、おそらく正解は3だろう。

布団に入ったことも覚えていないくらい酩酊していたのだ。

自分で服を脱ぐことなど到底出来るとは思えない。

これは自分の能力を卑下しているのではなく、単純に経験則だ。

竹はこれと同じような状況になったことが、過去に二度ばかりあった。

キャパシティを超えた酒を飲み、酔い潰れて、気が付いたら服を脱がされて布団の中にいたことだ。

学習能力がないのではないか、と疑いたくなる経験値だ。

竹が起きた直後に頭を抱えて、『やっちゃまった』と言って頭を抱えたのは、自分の学習能力のなさに落胆した意味合いもあったのだろう。

しかし、今の竹はそんなことよりも重大な問題を抱えていた。

誰かに脱がされた。

それは良しとしよう。

どうして脱がされたのか大体予想できるからだ。

だから問題は誰に脱がされたのか、ということ。

十中八九、十三夜の誰かだろう。

普通に考えたらそうだ……そうであってほしい。

だが、万が一にもそれ以外の人物であったなら……

正直、貞操の危機を感じざるを得ない。

竹が空恐ろしい『もしも』に、ぶるりと背筋を震わすと、暗がりの部屋に光が差した。

「――起きたな」

部屋の戸を開けて紅葉が入ってきた。

紅葉は部屋の明かりを点ける。

一気に明るくなり目が一瞬眩んだが、すぐに明かりに慣れた。

紅葉は右手に水の入ったコップを持っていた。

「飲んでおけ」

紅葉は竹の布団の横に座ると、持っていたコップと閉じていた左手を開いて竹に示した。

紅葉の左手には丸薬が3粒乗っていた。

竹はそれに見覚えがあった。

石渡の調合した酔い覚ましである。

竹は紅葉から酔い覚ましを受け取って、コップの水で一気に飲み込んだ。

竹の顔が歪む。

「……まっず」

舌に乗せていたのは一瞬だったが、石渡の調合した酔い覚ましの不味さは折り紙つきだ。

これで効き目がなかったら絶対に飲んだりしない。

紅葉は顔を苦悶の表情をしている竹に一言、

「自業自得だろう」

と呆れたように言い放った。

「……」

正論過ぎて何も言い返せなかった。

何も言い返さない竹に、紅葉は小さくため息を洩らしたあと、

「まあいい。それで、自分が何でこんなことになっているか説明はあるか？」と聞いた。

「……一応。でもその前に今何時？」

「8時前だな。夜のだぞ？」

「それはわかる。てかオレ、6時間以上も寝てたのか……」

竹はコップの水を全て飲み干して、空のコップを紅葉に渡す。

紅葉はコップを受け取りながら言う。

「気を失ってた、と言った方が正確だと思うな」

「……」

またしても正論だった。

だがこのままへこまされ続けるのも面白くない。

腐っても鯛。

酔い潰れても竹。

竹はMではなくSなのだ。

攻められることに快楽は感じない。

「……気を失って無力だったオレは、どうしてこんなあられもない姿に？」

竹はどこか非難するような口調で言った。

だが紅葉は何の表情の変化も見せず、どこるか逆に非難するよう
に、

「さすがにあのままで寝かせるわけにはいかないだろう」と言った。
「……あー」

竹は数秒前の自分の台詞が失敗だったことに気付く。

どうやら二日酔いと寝起きの相乗効果は体調だけでなく、本来の
S的判断能力にまで支障をきたさせているらしい。

攻めどころを間違えて落ち込んだ竹は、必要以上にへりくだった言
い方をする。

「まさかオレの服、ゲロまみれでしたでしょうか？」
へりくだったのは、自分がやらかしたことへの謝罪の意味もあっ
た。

紅葉はそんな竹に、

「上も下も満遍なくな」と薄い笑いを返しながら言った。

「……ああ、やっぱり」

竹は自身でも酒臭いと感じる息を重く吐き出して、肩を落とした。

竹がTシャツにパンツ姿だった理由は、酔い潰れた竹が着ていた
ものをゲロまみれにしたからだだった。

——正直、死にたくなった。

「まあそういうわけだから、竹の服は洗濯中だ。代えの服はそこに
置いてある」

落ち込む竹を見て、紅葉は少し可笑しそうにしながら部屋の隅を

指差した。

部屋の隅には竹の携帯と財布それと『夜月』、そして旅館にあるような浴衣が置かれていた。

竹たちは皆、自宅に帰っていないので着替えをもっていない。

一度帰って用意をする、という話も出たが、紅葉に電話した時に全て用意してくれるというので甘えることにしたのだ。

「ああ、どうも」

本当に迷惑を掛け通しで、竹は消えていた申し訳なさが戻りかけたが、それは押し止めた。それを言っても紅葉がいい気分がしないだろうからだ。

なので竹は、開いてた口からそのまま別の言葉を言った。

「それで誰が介抱してくれた？」

まさかない、とは思うがそれでも一応聞いておくべきだと思った。

酔い潰れた者は無力以外の何者でもないのだ。

悪しき魔の手にかからないとは言いい切れない。

紅葉は竹のその不安を見抜いたのだろう、口元に嫌な微笑を作る。

竹は一瞬、脊髄に液体窒素を流し込まれたように、氷冷とした心境になった。

「私……と言いたいが、十三夜の連中だ」

竹はほう、とぬるい息を吐く。

それに満足したように紅葉は口角を緩め、

「主に大木と甲斐、それと今野だな」

「大ちゃんも？」

竹は驚いた声で言った後、その表情を隠しきれない歓喜で染めた。紅葉がつい先日までいなかった、ある意味において敵だった今野のことを、当たり前のように十三夜として認識してくれていることが嬉しかったのだ。

だが紅葉は何に竹が喜んでいるのかわからず、普通に竹の問いに答えた。

「ああ、今野もだ。私たちが竹の異変に気がついた瞬間には、いつ

の間にか移動して竹の隣に座っていた甲斐と、ずっと酔った竹の相手をしていた大木、それと竹がダウンしたのがすぐ近くだった今野が介抱していた。いや、あれは介護だったな」と言った。

それを聞いて竹は「そうか」と小さく頷き、先ほどの喜びの笑みを閉ざし、

「……ああ、またあの二人の世話に……しかも今回は大ちゃんまで……」と項垂れながら言った。

過去二回とも竹が潰れた時に介抱、いや介護するのは、何故かその二人が主だってやっていたのだった。

さらに今回は復帰したばかりの今野にまで、介護をやらせてしまったという。

激しく落ち込む竹だった。

下を向くと、少し吐きそうになった。

竹はそれで更に落ち込む。

「……」

紅葉は竹がここまで、真剣に落ち込んでいるところを今まで見たことがなかった。

すごい迫力で落ち込む竹。

紅葉はその初体験のプレッシャーに押され、

「い……いい友人だな？」と柄にも無く気を使って、直球で慰めてしまった。

竹がのっそりと紅葉の方を見ると、紅葉と視線が合った。

——ぬ、ぬかったっ！

紅葉は自分らしくない言動をしてしまったことで、赤面しそうになっていた。

だが竹はそのレアな状況に全く気が付いておらず、

「素晴らしい友人ですよ」

と普通に言ったら少しばかり恥ずかしい台詞を、自然に口に出していた。

しかも口調は自嘲気味という卑屈っぷりだった。

竹の落ち込み具合は、もはや自暴自棄状態といっても過言ではない。これはさすがにまずいだろう、と思った紅葉は何をいうべきか悩んだ挙句、

「服を脱がせたのは実は私だ」と嘘をついてみた。

しかし、今や精神防御力が0に等しい竹はそれを真実だと思ったらしく、

「じょ……冗談でしょ？」と悲壮感たっぷりの表情で力なく聞き返した。

その竹の様子に、ふつふつと嗜虐心が刺激されてしまった紅葉は、「ごちそうさまでした」

暫くこの嘘を突き通すことに決めた。

藍の章 33 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

着々と時間は進んでおります。

一応主人公なのにゲロまみれはどうなんだろう、と思うところが多
少あった今話です。

藍の章 34

「冗談だろ」

「本当だ」

というような犬も食べないやり取りを暫くして、ようやく紅葉が嘘だったことを認めた頃には酔い覚ましの葉が僅かに効き始めたこともあって、最下層に沈んでいた竹の精神も徐々に浮き上がりだしていた。

「嘘で良かった……」

「さすがに出来ないだろう。もし私がその役をやれば、なし崩しに他の3人も参加する。最初が私じゃなくても同じだ。誰だってそんな地獄絵図を自分から描こうとは思わない。……いや、大神、山吹は危なかったな」

「ああ、はい」

竹は心底納得したように頷いた。

そこでその話も一段落し、そのタイミングを計っていたように襖が開けられた。

「失礼します」

八坂真実がお盆の上に新しい水と湯呑を乗せて、部屋に入ってきた。

真実が竹と紅葉に水とお茶を渡し、竹が飲み終えたコップを回収するとすぐに部屋から出て行く。

真実が部屋を出て行くと紅葉と竹は、それぞれ持ってきてもらった飲み物を一口飲む。

ゆっくり同じタイミングで飲み物を持った手を下げ、下げきったところで竹が口を開く。

「そういえばさ」

「なんだ？」

「他の奴等は？ まだ飲んでるの？ それとももう寝てる？」

まだ8時前だというが、昼からドンちゃん騒ぎしているのだ、もう寝ている者がいてもおかしくない。

「飲み会自体は一時間前に一度お開きにした。十三夜の連中も、客人たちも今はそれぞれ部屋にいる。十三夜の方は何人かそのまま畳の上で寝ていたな。女連中のことは私は知らないが、今は風呂を女の時間に行っているから誰かしら入浴中だろう。ちなみに男の入浴時間は8時半から10時までだ。その後は家人の時間。それが終われば後は自由だ」

「そうか。わかった」

「あと30分後だ。さっぱりしてくるといい」

「そうさせてもらいます」竹はアルコールと仄かに吐瀉物の臭いにする自分の体に、苦笑いしながら頷いた。

「それで、竹」

紅葉が少し声の調子を変えて切り出した。

「何？」

「脇から言付けがある」

「うん？」

「騎士団への賞金首の件を片付けるのに、この屋敷を利用したいそうだ」

「はい？ 話が全然見えてこないんだけど。てか利用したいそうだって、この屋敷は紅葉のдар……ってまさか」

自分の所有物の利用に関して、わざわざ竹に確認を取る必要はない。

だがそれをわざわざ報告、確認してきたということは――

「想像の通りだ。今から利用したいのだと言っている」

紅葉が言い終える前に竹は顰め面になっていた。

「それは……」

認められるはずがない。

脇が利用するということは、この屋敷を戦場にするということだ。情報を操作し、巢を張って待つ。

それが『電子の蜘蛛』^{マルミグナット}の戦闘方法だ。

恐らく目当ての賞金首に何らかの情報をリークし、この屋敷を巣として罠にかける気だろう。

しかし、戦闘を避ける為に、危険を避ける為に十三夜も女性達もこの屋敷に集合させたのだ。

ここを戦場にしてしまつては、まるで意味が無い。

だが脇も、そして紅葉もそれは重々承知のはずだ。

承知の上で言ってきたということは、何か竹を納得させるだけの腹案があるのだろう。

竹はそう理解して一度言葉を切ったまま、紅葉の発言を待つ。

「方法はいつもの方法だと言っていたな。巣を張り、獲物を待つ。まさに蜘蛛だな」紅葉は忍び笑いをする。

「それでだな、脇が言うにはその対局中、この屋敷にいるものには危険は及ばないそうだ」

「それはありえないだろう……って、ん？ 対局中？」

屋敷を巣にするということは、戦場にするということと同義だ。全く危険が及ばないなどと言い切れない。

しかし、対局という言葉に竹は耳をひかれた。

脇は自分の戦闘を行う時、対局などという言葉は使わない。

その言葉を使うのは――

「甲斐が作戦立案をしたようだ」
十三夜の頭脳だけだ。

「……カイカイが立てた作戦なのか」

多分、タイムリミットの短さに脇が甲斐に助けを求めたのだろう。騎士団へ賞金首を譲渡する仕事は、一ヶ月に2人を割り当てているが、必ず2人で完遂させなければいけないわけではない。

助力することもされることもありだ。

その辺はアバウトで、とにかく期限までに達成させられれば良いのだから、脇が甲斐に助力を願ったのは間違ではない。

そしてその甲斐が立案した作戦では、屋敷内の者に危険は及ばな

いらしい。

それを言っているのが別の誰かなら信じられないが、甲斐がそう言っているのならば信じられる。

危険なことにはならないのだろう。

ならば拒む要素はないのだが、

「うーん……」

竹は何故か首を縦に振らない。

「何か納得いかないか？」

「いや、まあ……」

頭では納得していた。

だが心のどこかがそれを最後まで拒んでいた。

甲斐が危険は及ばないといっているのなら、危険はないのだろう。

騎士団との約束の期限が近づいてきて、焦りだした脇の心情も理解できる。

しかし、今回は庵戸という存在が、そしてその裏で『唯一の一』オリジナルワンという存在が絡んできている。

そんな中で危険を自ら迎え入れるようなことをしても大丈夫だろうか。

絶対を言い切れない不安が竹の中にあつた。

「……紅葉は了解してるの？」

竹は結論を先送りするように、紅葉に聞いた。

「ああ、しているな。というかな。実を言えば竹以外は皆了解している」

「は！？ まぢで？」

「マジだ」紅葉はニヤリとした笑みに口元の形を変える。

「……ってことはオレのGOサイン待ち？」

「そうだな」

紅葉がニヤリとした笑みのまま頷くと、竹はやられた、という顔をした。

全員がこの屋敷を戦場になっても良い、と思っている以上、これ

から竹がいくら不安だから止めておこうと言っても、それは単に足並みを乱す行動にすぎない。

しかももし、反対案が採用されようものなら、我俣星の王子様になっってしまう。

残された竹の選択は自ずと、というよりも最初から一つしかなかったようだ。

「……了解。オレも賛成にしとく。……ただし」

「ただし、なんだ？」

「紅葉、深翠、蒼香、アレクサンドラ、それと一応、八坂姉妹は、自分が危機的状況にならない限り戦闘はしないこと。これが守られるなら文句はない。そうコーチンに言っておいてくれ。あとでオレからも話すけど」

危険は及ばないと甲斐が言っているのだから、この約束は意味がないことかもしれない。

それでも、竹にとってそれは譲れない、言っておかなくてはならないことだった。

竹は徹底的なまでに彼女たちが戦闘へ参加することを嫌う。

女だから、というよりも単純に彼女たちを大事に思っているからだろう。

「了解した」

紅葉は柔らかく微笑し、照れたように髪をかき上げた。

心配される、というのも悪い気分ではなかった。

しかしながら、ある面において素直になり切れないところのある紅葉はそれを誤魔化すように、

「そろそろ風呂の時間になるな」と言っでするりと立ち上がる。

「水が飲みたければ言ってくれ。持ってこさせる。まあ勝手に飲みにいつでも構わないぞ」

着物の裾を直しながら紅葉は言った。

竹はあとで水を取りに行こう、と考えながら紅葉に質問する。

「そーいやオレは向こうの大部屋に移動した方が良い？」

紅葉はその問いに鮮烈な紅い笑みを携えて、

「お好きに」と背筋を筆で撫でるような甘く静かな声で答えた。

その声にぞわぞわしたものを竹が感じると、

「移動先が私の部屋でも構わないぞ」と止めの言葉を刺して、紅葉は部屋から出て行った。

「……うおう」

竹は自分でもびっくりな心拍数の高さを、

「お酒はよくないね」

酔っているからだだと結論付けた。

それから5分ほどして吐き気やら心拍数やらがある程度戻ったので、竹は風呂へ行く準備を始めることにした。

準備といっても着ていた服は洗濯中だし、元々着替えは持っていないなかったので、準備するようなことは殆ど無い。

だから竹がする準備とは、部屋の隅に用意された浴衣を一度着ることだ。

さすがにTシャツにパンツ姿で、風呂場まで行くわけにはいかない。竹は部屋の隅まで移動し、着替えと同じ場所に置かれていた携帯や財布など、自分の所持品を一通り確認してから、用意された浴衣を手を取った。

「……」

浴衣を持ち上げた竹は、一瞬固まった。

浴衣の下には、なんと新品の下着まで用意されていたのだ。

竹はこの完璧なまでの準備の良さに、

「秋野家すげえ。超すげえ」と馬鹿っぽい感想を口にした。

まだ酔いは覚め切っていないようだった。

藍の章 34 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。
次話より佳境突入な感じになります。

藍の章 35

10

司法をつかさどるは藍の色。
愛は罪ではない。

だが全ての罪には愛がある。

恋愛。友愛。博愛。偏愛。畏愛。運命愛。恩愛。敬愛。渴愛。求愛。
眷愛。私愛。鍾愛。至愛。親愛。信愛。慈愛。自愛。純愛。情愛。
性愛。深愛。仁愛。聖愛。他愛。憎愛。惜愛。人愛。貪愛。寵愛。
忠愛。無我愛。母性愛。父性愛。汎愛。人類愛。祖国愛。同性愛。
憐愛。隣人愛。盲愛。
更に三愛。

人間の心に生じる欲愛・有愛・非有愛。
即ち情欲、存在欲、存在否定欲。
罪と罰。

愛なき罪は無く、裁きに愛はない。

天が定めし絶対の法の下、愛ある罪を裁く。

これ即ち、藍の裁きなり。

――初代、天岩戸司法部、斑鳩愛。
いかるがまな

＊

24日、クリスマスイブ。

とある聖人の記念日は、いまや恋人たちの記念日と化している。
こんな日に独りきりは寂しい。

そんな不可解な思想が蔓延している聖夜。

天倉竹は独り、日が暮れた夜道を歩いていた。

空は午前中こそ晴れていたが、今は生憎の雨模様だった。

イブに独りだからだろうか。

アスファルトを軽快に叩く細い水滴の音は淋しく聞こえ、

道路は厚い雲に閉ざされ一層暗い顔色に見え、

冬の夜の冷気は吸い込むと、痛みを感じてしまいそうなほどに鋭く感じた。

昨日からつい1時間前までの、友人たちとの暖かな賑わいを考えれば、天と地ほどの差がある。

それなりに聖夜の灯りを煌かせている住宅地とは切り離された、錆と灰かにオイルの臭いがする八里浜工場地帯。

自動車の工場地帯として有名だったこの場所も、今は親会社の経営不振の為に業務を停止し、買い手の付かぬまま売り地として半ば放置されている。

その空白地帯を現在利用しているのは、夜を駆ける若者たちだ。

だが毎夜のように喧しく賑わっている彼らの時間には、まだ少し早い。

午後6時前。

交通車両の通り抜けに利用されることのある昼間と、若者のイベント会場となる夜更けとの境界の時間。

工場地帯は異様なほどに静まり返っていた。

人の気配は皆無。

遠い間隔で、黒く濡れたアスファルトの路面を照らしている街灯が創る影は、竹が映りこむ以外に増えることも動くこともない。

聖夜というには、いささかおどろおどろしいその光景は、何か良くないことが起きる前兆に思えた。

しかし、時刻は逢魔時。

なればこそ、この不吉な予感も必定かもしれない。

それでも――今頃、秋野の屋敷はどうなっているだろうか。

そんなことを考える程度には、余裕があった。

白い和服に身を包んだ竹は、黙々と目的の場所へ歩を進める。

臙脂色えんじの和傘に落ちる雨音と、足下で弾ける水音だけが静寂の中で

異質だった。

工場の多かった区画から巨大な倉庫が並ぶ区画に入る。

E倉庫からA倉庫までが左側に並ぶこの区画は、倉庫区画の中でも一際大きな倉庫が立ち並んでいる。

廃棄される以前は、利用性の低い大型の荷を保管する為に使用されていたらしい。

その為か、道路の幅も他の倉庫街よりも広くつくられている。

そして倉庫区画の端に位置するこの区画の右側は、垂直のコンクリートの壁が設けられていた。

壁の向こう側が川になっている為、防波堤として作られたということになっているが、その必要性のないまでの高さを持った壁は、防波堤というよりは侵入者を阻む要塞のそれとしか思えない。

工場地帯に景観も何もないだろうが、それでもこの壁の高さはひと際、異彩を放っていた。

だがそれも今この時のことを考えれば、なんにもおかしいところはない。

まだ微かに酒気が残る白い息を吐き出し、未だ降り続ける雨に濡れることも気にせず、傘を閉じて脇に放り投げる。

B倉庫前。

無人の大通りの真ん中で、竹は立ち止まった。

「……よう」

長年の友人にするように声をかけながら、竹は左手に下げている長袋から夜月を取り出す。

5メートルの間合いで対峙する庵戸朋愛。

復讐に生きる藍色は、『最強の矛』の切っ先を持ち上げた状態で待ち構えていた。

ここに両側を人工の壁で隠された現代の決闘場が完成する。もう他の事を考えている余裕は、竹には残っていなかった。

「役目を与えられた途端、べらべらと喋っていたようで」

神の城の庭園にて、黒須螢と天野輝血は並んで隔絶された空間の境目を眺めていた。

「貴女の役目は今野大に登場を促すことだけだった。なのに貴女は、必要のない情報を彼に——いえ、彼らに与えてしまった。一体どういう見なんです？ 貴女ともあろう人が。それともあれが彼女の意思に基づくものだったとでも？」

黒須は、揶揄するような口調で言った。

「——彼女の意味、といえば意思だったのでしよう。私は彼に会うまでは言うつもりはありませんでしたから」

「では会った途端に言いたくなったと？ それはただ単に気が変わっただけではないですかね。過去の部下を前に情が動きましたか？」

「……さあ？ わかりません。あの時の私が何を考えていたかなど」

抑揚のない声で言って、輝血は自嘲気味に唇を歪ませた。

「どうします？ もし私が貴方の言うように、情に絆されたのだとしたら——殺しますか？」

輝血の言葉に黒須は肩をすくめる。

「まさか。そんな役割は受けていませんし、僕の力では貴女を殺せませんから」

「そうですか。それならばよかった。……しかし、貴方の悪魔ならば私を殺すことは不可能ではないと思います」

「過大評価ですよ」

黒須は苦笑いして言ったあと、どこか憂いを帯びた表情をつくり、

「——しかし、やはりと言うべきか、今野大は彼の下に戻りましたね」と言った。

白い外套の女は静かに頷く。

「『最強の盾』を封じる役目を終わらせたのですから、自然な流れでしょう」

「確かに。ですが、彼が戻れたのは『最強の盾』を生かしたからこ

そ。『封じる』ことは殺すことでも構わなかった。忠実な部下ならば、むしろ殺すべきだったでしょう。しかし、庵戸朋愛の忠実な部下にしたはずの今野大はそれに抗った。それは何故だと思いますか？」

「……私が彼に余計な情報を与えたからでしょうね。私が何も言っていないければ、このような形にはなっていないはずです」

終わったと思った話を蒸し返されたと感じた輝血は、眉を寄せて黒い外套の男を横目見た。

「ああ、違いますよ。別に僕は貴女を咎めるつもりはありません。勘違いさせてすみません」黒須は鼻の頭を掻きながら言った。

「いえ、こちらこそ早合点を。ですが、だとすれば貴方は何を言いたかったのですか？」

白い暴君の問いかけに、黒い魔法使いは慇懃な口調で答える。

「抗ったのが今野ではなく、本当は天倉竹だったのでは、ということですか？」

「——まさか。そんなことはありえないでしょう。彼は今野の事も、今野に課せられた役目も知らなかったのですから」

「確かにその通りです。ですがそう考えでもしなければ、僕には今の形が納得できない。仮にも彼女が直接与えた役割ですよ？ それがあんな中途半端な形で終わったと見做されている。これはどう考えても不可解では？」

「……つまり、天倉竹が物語を書き換えた？ 知らぬ事を？ 無意識に？」

輝血は信じられない、とかぶりを振る。

いくら『神の複製品』デッドコピーといえど、自らの知らぬ事柄を捻じ曲げ、書き換えることなど出来るわけがない。

もしそんなことが出来るというのなら、それは——

「『唯一の』オリジナルワン。全能たる彼女の領域に足を踏み入れていることになりですね、彼は。自覚があるか、ないか。知っているのか、知らないのか。程度の差はありますが」

「……まさか。それこそまさかです。そんなわけがありません。彼はその領域に辿り着けなかった。それがあの時に確定された答えのはずです」

隻眼の怪物はそう言って、魔法使いの方を向く。

白い外套が揺れる。

黒須も外套を揺らせて、静かに輝血を正面からとらえる。

そして空虚な笑みを浮かべ、

「貴女の言う通り、今の形は天倉竹によるものではないでしょう」と今までの自身の意見を完全に反転させた。

輝血は、黒須の急な意見の変更に一瞬面食らうものの、すぐに黒須が何を言いたかったのか理解した。

「そういうことです。この筋書きは『神の複製品』^{デッドコピー}が書き換えたものではない。何故なら、彼は何も知らなかったのだから。全能に届かなかった彼に、そんな事が出来るわけがない。ならば答えは自ずと導き出されるでしょう」

「……全て彼女の筋書き通り、というわけですか」

「恐らく。『最強の盾』が生きている事も、今野が十三夜に戻った事も、そして、その切欠となった、貴女のお喋りも。彼女が帰って来たときに聞いてみますか？」黒須は微笑を浮かべて言った。

輝血は黒須の微笑に、あえて無表情を作り、

「……その必要はないでしょう。彼女が話さなかったということは、私たちが知る必要のないことだということでしょうから」と言うのと体の向きを変え、再びこの世界の狭間を眺めだした。

そんな輝血の対応に黒須は苦笑い混じりに肩をすくめてから、輝血と同じように体の向きを変えた。

それから暫し沈黙する二人の間に、柔軟な風が流れる。

黒須がその風に乗せるように呟く。

「——どうなるんでしょうかね」

その呟きが消える前に輝血が問う。

「どれがですか？」

「さあ、どれでしょうかね」黒い魔法使いはいつもの調子で答えた。
その答えに白い暴君は、

「……どれであろうと、少なくとも貴方の遠回しな慰めよりは、わかりやすい結果になるでしょうね」

と風に流れる髪を抑えながら、皮肉な笑みを口元に浮かべて言った。
そして、それから二人は言葉を交わさず、ただ世界の境界線を眺め、
虹と黄金の少女が帰還するのを待ち続ける。

この空間の創造主は、やる事が出来たと言って外の世界に出かけていた。

筋書きにない少女の此度の行動。

これも彼女の筋書きなのか。

それは黒須にも輝血にも、わからぬことであつた。

藍の章 35 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

長く回り道をしていた物語もラストに向かいます。

それではどうか終点までお付き合いください。

藍の章 36

＊

夜に溶け込んでしまうような、深い藍色の服装で全身を固めた少年。庵戸が構える得物は彼の服よりもやや透明感のある藍色で、柄の先端に鋭利な穂を携えた、矛というよりは槍の形状をしている。

全体の長さは小柄な庵戸の身長とほぼ同じ、1メートル半強。どちらかといえば短槍の部類に入るだろう。

竹の心臓に向けて突き付けられた槍先は、温度の一切ない凶々しい殺気を宿している。

対して竹は両手をだらりと下げた状態で、まだ夜月を構えていない。だがお互いの間に流れる殺伐とした気配は、確実に臨界点間際だ。

「――一人で来たな」

庵戸が言った。

4年前より低くなっていた庵戸の声は、小降りになってきた雨音の中でよく響いた。

「ああ」

竹は自身でも驚くほど冷静な声で返す。

「正真正銘、一対一だよ。お前が色々やってくれたお陰でな。それともあれだけ手を回しておいて、オレが一人で来たのは意外だったか？」

「当然だろ。4年前に手前がてめえしたことを思えばよお」

庵戸はそう言って竹を睨み付ける。

その瞳の中にあるのは憎悪。

ただそれのみ。

しかし、竹はその視線を意に介した風はなく、それどころか口元を皮肉に吊り上げて庵戸を挑発するように言う。

「4年前にオレがしたこと？ 何だったっけか。すまんが覚えてな

いわ」

「なん……だと？」庵戸の目が驚嘆に開く。

それを無視して、竹は更に続ける。

「あー、アレだ。やられた方は覚えてても、やった方は覚えてない事があるのを感じた。まあ忘れてるようなことだ。多分、オレは大了したことはしてないんじゃないか？」

「竹、手前え……！」

噴出すような憤怒で端整な顔を歪め、庵戸は奥歯を噛み砕くほど力強く歯軋りをする。

その様子に竹は内心、ほくそ笑んでいた。

さすがにこんな安い挑発に乗っかってくれるとは思っていなかったのだが、庵戸は実にあっさりとそれに乗ってくれた。

——変わってないな。

幼友達を偲ぶ想いに駆られながら、竹は止めの一言を口にする。

「おっ、久しぶりにお前から呼ばれたな。もう二度と呼ばれる事はないと思ってたから、逆に新鮮だ。最後に呼ばれたのは——三対一で殺してやった時だっけ？」

「——っ！ 殺す……！」

「やってみろ負け犬」

竹がその言葉を言い切る間際に、般若の如き形相で庵戸は地を蹴った。

予備動作もなく、たった一蹴りでトップスピードに突入させる瞬間発力。

そして間合いに入った瞬間に、庵戸は竹の心臓目掛けて全てを貫く槍が突き出した。

何の技術もない、愚直なまでに直線的な突き。

しかし、その何の変哲もないはずの一突きは、間違いなく必殺の一撃であった。

最短距離で一直線に繰り出された超高速の槍を、竹は右に体を捻りながら避け、同時に右手に持っていた夜月を振り上げた。

銀色の刃が藍色の槍の柄を弾き上げ、冷たい火花が散る。

庵戸はそうされることがわかっていたかのように、撥ね上げられた槍をその勢いを利用し、くると反転させて穂先の反対側で再び突きの動作に入る。

穂先の反対側。先ほどもでは石突だった部分が、どんな不思議か庵戸が突きの動作に入る頃には鋭利に尖った穂へと変貌していた。

一呼吸せぬ間に必殺の二撃目が竹を襲う。

――防御は間に合わない。

一撃目を弾くのに振り上げてしまった夜月での防御では、流れの中で繰り出されたこの攻撃よりどうしてもワンテンポ遅れる。

更に半身だけ捻った今の体勢では、元より満足な受け方など出来るわけもない。

刹那にも満たぬ判断。

蓄積してきた戦闘経験と、身に付けてきた戦闘技術のはじき出した解は――

竹は初撃を避けるのに捻っていた体を、後ろに倒しながら更に回転させる。

槍の穂先が決るように胸元を切り裂き、白い生地が舞う。

独楽のように回転した竹は紙一重で庵戸の攻撃を躲し、そのままの勢いに任せて刃を横薙ぎに振るった。

コンマの遅れも、ミリ単位のずれも許されない薄氷を踏むような回避を竹は難なくやってのけ、そればかりか二度の攻撃により竹の間に合いに入ってきた庵戸へ、その刃を一閃させた。

鋼すらも両断しようかという神速の刀身。

それは庵戸の胴体を真一文字に切断するはずだった。

しかし――青白い火花と鋼が打ち合う甲高い音。

夜月の刃は、ぴたりと藍色の槍で受け止められていた。

瞬く間に繰り広げられた攻防。

その全てが必殺。

ぎりぎりと互いの得物が拮抗する

竹と庵戸から声のない凶悪な笑みがこぼれる。

『天岩戸』。

神を目指し、神の世界を目指した組織の歴史の中でも、最強の一人に数えられる傑作たる二人。

天倉竹。

庵戸朋愛。

互いにその実力を認め、そしてその相手が全力を以って自分を殺しにきている。

その偽らざる事実にも両者とも、どうしようもない愉しさを感じてしまっていた。

庵戸からすれば、これこそが長年の望み。

だが竹は――？

「はっ、ヘタレたと思っていたが、随分とマシな顔をするじゃねえかよ」

鏢迫り合いをさせたまま、庵戸は愉しげに言った。

「お前こそ挑発に乗ったのはブラフだったか。少しは大人になっているな」

「当たり前だろ馬鹿。4年前と一緒にすんじゃねえ！――それに待ちに待ったこの時を、そんな余分な物で汚したくねえだろ！」

「別に待ってはいなかったけど、その意見には同感だ。――自分でも驚くほど、オレは今の状況が愉しくて仕方ない！」

竹はそう言って獰猛に笑った。

4年前より相対したことがなかった、自身と拮抗した実力者。

それとの命の奪い合いが、押込められ燻っていた天倉竹の戦闘者としての本能に火を点けていた。

鏢迫り合いから一転、両者が間合いを開ける。

そして、先ほどと同様。

――否、先ほどよりも更に速度を増した激突が繰り返される。

刀と槍が打ち合う度、二人を中心にまるで嵐が吹き荒れているような、力の奔流が巻き起こる。

限界を知らぬように速度を上げ続ける剣戟は、もはや人の目では補足できない。

辛うじてわかるのは、激突ごとに唸りを上げる轟音。

そして、その余波で確実に崩壊していく倉庫街。

『神殺し』と『最強の矛』。

二つの神具の激突は、次第に周囲の気温さえも上昇させていく。

もはやこの場合は、冬の寒空の下とは思えない熱量に覆われている。

落ちる雨さえも蒸発させてしまうような、灼熱の戦場。

これは既に人の領域ではない。

有史の彼方。

神話でしか語られることのないはずの神々の戦^{いくさ}。

それが今この時、この場所でもさしく具現しており、そして確かに新たな神話を刻んでいた。

実力は完全に同等。

荒ぶる二人の神が演じる死闘は決定打どころか、どちらの攻撃も肌に掠りさえしていない。

勝敗の天秤はどちらに傾くのか。

相克する銀色と藍色の闘争は、まだオープニングを迎えたばかりだった。

＊

——同時刻、秋野の屋敷の一室。

作戦開始予定時刻、いや対局開始予定時刻まで数分と迫ったところで、甲斐輝明が無感動に呟いた。

「……めんどくさいな」

「な、なにが？」

傍らにいた脇が突然の甲斐の呟きに少し動じながら問う。

甲斐は脇のことを見ずに、一呼吸置いてから答える。

「——十枚落ちどころか、こっちの配置駒は王将だけ。一枚でも取

られたら負ける手合いなんて面倒以外の何者でもないね。これなら裸王の方がまだ指しやすい」

騎士団との約定の期限が迫った脇が甲斐に頼み、竹から認可が下りた今宵の作戦。

それは脇が事前に情報を操作し、此処、秋野の屋敷に賞金首を誘き寄せ捕らえるというものである。

しかし、配置駒が王将だけというのはどういう意味か。

それは今回の作戦が、誰も傷付いてはいけない戦いになるということだ。

全員が万全ならばまだしも、すでに負傷者を抱えた状態での戦闘となると、竹が昨日に言及していた悪循環が発生しかねない。

つまり、今回の対局では誰も傷付いてはいけない手合いを絶対的に強いられるのである。

故にこちらの盤上には、王将しかいないと甲斐は表現したのだ。

「……ああ、なんかもう申し訳なさすぎる。僕あ頑張りますよ」

非難めいた言葉を浴びせられ、脇は平謝りする。

「動かせるのは君とケンタだけだからね」

甲斐が頷きつつ疲れたように言った。

この秋野の屋敷には、十三夜の面々だけでなく屋敷の家人や、竹が呼び寄せた女性も三人ほどいる。

傷付けられないという意味では王将としているが、その性能で表すのなら金銀飛車角選り取り見取りのはずだ。

だが、今回の作戦を決行するにあたり、女性陣の戦闘参加は無論のこと、十三夜の面々も、これから起こる戦闘に手を貸さない予定だった。

これは何も今月の担当が脇と古巣だからなどという冷たい理由ではなく、作戦の特性上仕方のないことだった。

誰も傷付いてはいけない戦い。

これを完遂させる為に甲斐が選んだのは、絶対的な安全領域を作ることであった。

昨日から十三夜の全員が寝泊りしている大部屋。

今、その大部屋には古巢、甲斐、脇を除いた全員が揃っているはずだった。

そして、対局が開始されればすぐに甲斐もその部屋に戻る予定だ。ほぼ全ての戦力が集まるあの部屋は、王将が王将を守ることになり、確かに安全領域になるだろう。

しかし、迎撃態勢をとらなければならない今回の戦いで、戦力を一点に集めるのはあまり上手いとはいえないのではないだろうか。広大とはいえないが、それでも広い屋敷の敷地。

加えて脇が情報を操作し、今からこの屋敷に集まってくるであろう賞金首の人数は、甲斐の予測では十数人。

中には下位の者も数名混じっているが、それでも月のノルマである二名を大幅に超える数になる。

どこから進入してくるかわからない賞金首を、脇と古巢の二人だけで迎撃することが可能だとは普通に考えたら思えない。

——普通に考えたら、である。

「あ、なかった」

脇が何かに気付いたように言った。

甲斐はその声を合図にしたように腕時計で時間を確認する。

脇も首を伸ばして甲斐の時計を見る。

6時6分。

対局予定時間丁度だった。

「裏門のところに二人。いやあ、ばっちりじゃん」

脇は左手の指で何か操作する素振りを見せながら言った。

「ばっちりだよ」相槌を打ちながら甲斐は、腕時計を外しポケットから取り出した一枚の紙と一緒に、脇の傍らに置いて立ち上がった。

「それじゃあ、あとは言った通りだから」

甲斐は部屋の外に足を向ける。

大部屋へと移動する為だ。

「はいよー、わかった。波乱はなかったか。でも予定通りだったら、

戻る必要ないんじゃないのかい？ それにほら、前に『対局中に無闇に顔を晒すわけにはいかぬ』とか、かなり恥かしい台詞言っけなかったっけ？ 向こうに言ったら皆に顔を見られるよ」

部屋から立ち去ろうとする甲斐を引き止めるように脇が言った。言いながらも脇の指は絶えず細かく動いている。

甲斐は無表情で脇の方を向いて言う。

「言っただけ？」

「言っただよ」

「覚えてない。光太郎創ってるでしょ」

「創ってねえよ。それに甲斐輝明が覚えてないとか、ありえないから」

脇は断言するように言った。

しかし、甲斐はかぶりを振り、

「覚えてねえなあ。気のせい気のせい」と至極適当な口調で返した。

「……まあいいですけどね、そういうことにしておいても」

どこか含みを持たせた笑いを堪えながら脇が言った。

「……」

甲斐はそれに全く反応せず、すたすたと退室していった。

部屋に一人になった脇は、

「何だこれ」と呟いて甲斐が置いていった一枚の紙に目を落とす。

そして息を呑み、

「——甲斐輝明やっぱり天才だわ」とひとりごちた。

甲斐の置いていった一枚の紙には、初手から終局までの流れが時間を添えて描かれていた。

それは脇が事前に甲斐から聞いたものと寸分なく同じものだったが――

「……うっかりまでお見通しですか」

甲斐は脇が稀に起こすうっかりを見越して、その紙を用意しておいたのだった。

脇はうっかりを犯す、と考えている甲斐ならではの予防線。

それもまた妙な信頼関係だった。

甲斐は予測外の事態に備えて対局が開始するまで脇の所にいたが、そのような事態はなく、初手から予測通りに始まった。ならば賞金首たちが脇の下へ辿り着く可能性は皆無。

辿り着かれることがあるとするならば、大部屋の方になるだろう。それも脇に託した終局図にはない形だが、小数点以下の可能性でもあるのなら、自身の策に従い安全領域の強化に努めるべきだろう。そう考えて、甲斐は脇のいた部屋から大部屋に向かうのだ。

しかし、絶対的な安全領域を作るといっても、あの大部屋には既に十分すぎるほどの戦力が集中している。

それこそ甲斐がうっかり者の脇を置いていく必要もないほどにだ。だがそれでも甲斐は大部屋に戻る方を選らんだ。

それは何故なのか？

甲斐が大部屋の襖を開ける。

するとそこでは――飯泉、石渡を除いた全員が酒盛りをしているという、もはやお馴染みになっている光景が広がっていた。

甲斐が戻ってきた事に気付いた飯泉が声をかける。

「始まった？」

「うん」

甲斐は酒を飲んでいる連中を避けるように、飯泉の隣に座りながら答えた。

既に戦闘が始まり、これからもしかしたらこの部屋にも襲撃者が辿り着く可能性があるというのに、全く緊張感の欠片もない輩たちに甲斐は生温い視線を向けた。

それに飯泉と、その隣に座っている石渡が同調するように苦笑いを浮かべる。

「カイカイがこの部屋に賞金首が来る可能性は殆どないって言ってたし、これだけ揃ってれば大丈夫でしょ――って言ってあいつら飲み始めた」

飯泉が苦笑いしたまま甲斐に説明した。

甲斐は頷く。

それもまた予想通りのことだった。

昨日からアルコールで緩みきった友人たち、十三夜の中では真面目にカテゴライズされる飯泉と石渡を除いて、彼らがたかが賞金首の襲撃程度、それも可能性の極めて低いものと自らが名言した状態で止まるわけがないのだ。

だから甲斐こそは、この大部屋に戻ってきたのだった。

「何か飲む？」

石渡がウーロン茶が入った自分のコップを持ち上げて甲斐に聞く。

「……」

甲斐はポケットから携帯電話を取り出して時間を確認した後、

「いや、今はいい」と言って首を振った。

そして、楽しそうに騒いでいる友人たちを眺める。

——全員がもう一度揃ってから酒を飲もう。

そんな事を考えて、甲斐は聖夜の厳かな雰囲気がない宴の中で、乾杯の時を待つことにした。

藍の章 36 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

更新遅くてすみません。

書きあがっては気に入らず全削除、という作業を二回ほど繰り返した今話です。

とりあえず納得がいくものになりましたが、何かおかしな点を発見しましたらご報告お願いします。

藍の章 37

＊

右に、左に、烈風の速度で絶えず繰り出される突きと払い。

穂先に乗せられた殺意。

命中せずともその身を削り取っていくような絶え間ない連撃を、竹はひたすら捌き続けていた。

小回りの利かぬ長柄の武器。

その欠点は攻防問わずどこかで、槍を引き戻す作業が刀剣よりも長い時間が必要になることだ。

時間、といってもほんの僅かな瞬間だが、それでも攻守の合間に発生する一瞬の時は、竹が懷に飛び込むのに十分な隙になる。

懷に飛び込んでしまえば、槍と刀の間合いの差から一気に勝負を決められる。

しかし、その一步が遠い。

既に数十に渡り打ち合わされた互いの神具。

その間に竹が攻めに転じることが出来たのは僅か四度。

しかもその機会は戦いの経過につれ、少なくなってきた。

――まずいな。

庵戸は竹の記憶にある4年前よりも、確実に強くなっていた。

それに対して自分は、着実に弱くなっている。

その紛れもない事実と、圧され始めているという現実が、竹の内心に僅かな焦りが生む。

無論、庵戸はその焦りを見逃さない。

「動きが鈍くなってきたぜ？」

攻撃をする手は緩めず、庵戸は軽口を叩いて揺さぶりをかける。

「衰えたのか、それとも疲労が抜けねえか？」

肉体の衰え、そして連日の吸血鬼狩りによる疲労。

その両方が正解だった。

だが的確すぎる庵戸の揶揄に耳を貸さず、竹はただ戦闘に没頭する。

軽口に答えている余裕など、今の竹にはない。

開戦当初にあった笑みすらも消えている。

庵戸はその竹の反応に自身の有利を確信し、更に調子に乗ったように軽口を続ける。

「防戦一方かよ。全く無様だなあ。まあだからって手は抜いてやらねえけどなっ！」

縦横無尽に振るわれる庵戸の槍。

その速度も重さも、竹の振るう刀のそれを超えている。

「……っ！」

一撃を受け流すごとに、竹の骨が軋む。

身体能力での明確な差。

それを埋めているのは偏に、竹の技量によるものだ。

だが庵戸とて技量に劣っているわけではない。

生まれついで天稟、麒麟児とさえ謳われた少年が極限まで鍛え上げた槍術は、世界でも頂点に位置するものだ。

加えて、庵戸の持つ『最強の矛』。

本来であれば間合いを詰められる事を嫌う、長柄の武器。

その間合いの欠点が、かの神具にはなかった。

どうにか竹が槍の嵐をかくぐり、己の刃圈に庵戸を捉える。

槍を引き戻すよりも一瞬早く、振り下ろされたはずの刃。

しかし、竹の渾身の一閃を庵戸の槍は難なく受け止めていた。

先ほどよりも短い姿で――。

竹は小さく舌打ちをして、後方に跳躍してその間合いから離脱する。

折角縮めた間合いだったが、そうせざるを得なかった。

庵戸は一度退いた竹をすぐには追わず、悠々とした表情をみせる。戦況が決して五分ではなく、自身に分があることを庵戸は肌で感

じていたのだ。

竹も同じ思いを感じていた。

天秤が徐々に庵戸に傾いていつていることを。

いくら技量で上回ろうと、そこに決定的な差がなければ後は身体能力がものをいう。

このまま体力が削られ、低下していけば分が悪くなるのは明白。だがしかし、ここで諦めたら待っているのは冷たい死だけだ。

そんなものは、当然のこと御免だった。

竹は庵戸がすぐに追撃してこなかったこの時間を、上がった息の回復にあてる。

肩で息をしながら、微小の動きも見逃さぬよう庵戸のことを凝視し、次の動きに備える。

いつの間にか庵戸の手元にある槍は、先ほどの短いものから元の長さに戻っていた。

——それこそが『最強の矛』が有する能力だった。

この神具が持つ能力は、あらゆる防御を貫くという絶対的な攻撃力だけではない。

むしろその能力は逸話の側面が強く、確かに今まで貫けぬものなどなかったが、それでもあらゆるものを貫けるかといえば、疑問点が浮かばないこともない。

故にこの神槍の確かな能力として云えるのは、使用者の意思に従い、その長さを、そしてその形態を一定の形の中で変動させるといふ伸縮自在、変幻自在の槍になるというものである。

穂先が逆位置になったのもこの能力によるものだった。

意思一つで間合いを如何様にも変えることが出来る。

白兵戦において、これほど汎用性に優れた武器はないだろう。

現に竹は時に伸び、時に縮む神槍の奇抜な動きに翻弄され続け、漸く懐に入り打ち込んだと思ったところで、再びその伸縮自在なる槍の防御で阻まれている。

しかして、何故このようなことが可能なのか。

そもそもこの能力は本来ならば、一度の戦闘で使用出来て三度、四度という回数限定のものなのであった。

だが此度の戦闘で庵戸は、本来あるはずの回数制限など気にせず、幾度となくこの能力を使用している。

その原理、その理由ともに槍の周囲を見れば瞭然であった。

悠然とした構えで次の攻撃に移行しようとしている庵戸の持つ槍。その槍の周囲をきらきらとしたものが数多、飛散している。

――氷であった。それも極小の。

そして、槍を中心に剣戟によって上昇したはずの外気を再び、冬の零下へと戻すような寒冷の風が渦巻いていた。

『最強の矛』、その別名を『氷槍・青女』。

大気中の水分を絶対零度の力でその身に纏い、担い手の意思に呼応して操る、氷雪の女神である。

その女神の加護か、今宵の天候は雨。

この雨が降り続ける限り、周辺空気の水分が枯渇することはない。庵戸は何の制限もなく、『最強の矛』の異能を存分に発揮できるというわけだ。

それに対して竹の『夜月』は――

「やっぱり手前より、俺の方が強えな」

庵戸は槍を構えたまま、自身の優勢を確信したようにニヤリと笑う。

そして、自身の分析を自信満々で語る。

「運動能力、戦闘技術、どちらをとっても俺が上だ。そして、戦況を覆すはずの頼みの綱、『神殺し・夜月』。神性を持つものに対して、絶対的な威力を発揮するはずの死の刃は、俺の槍には何ら効果かねえ。どうしてかわかるかよ？」

「……」

庵戸の問いかけに竹は答えない。

返答をする余裕があるのなら、少しでも体力を回復することを優先するべきだ。

『夜月』を下段に構えて、竹は体に酸素を取り込む。

庵戸は返事をしない竹に不満そうに鼻を鳴らしてから、自ら出題した問いの解答を口にする。

「槍の全体に満遍なく氷を纏わりつかせた。たったそれだけで、その刀の切れ味は鈍^{なまくら}以下に成り下がる。何が『神殺し』だ。大層な名を謳っているが、実際は割り箸一本切り伏せる事が出来ねえ鉄切れだ」

神性を持つものには例外なく死の刃となる『夜月』。

だがこの刀は対象に神性がなければ斬ることが出来ないという、特性を抱えている。

そこを庵戸はついた。

自身の神具を高密度の氷で覆うことで、『夜月』を無力化したのだ。

単純な手だったが、しかし、その効果は絶大だった。

「……割り箸程度なら叩き折れるけどな」

竹はぼそりと呟いた。皮肉な笑みをつけることを忘れない。

「はっ、手前にはこれが割り箸に見えるのかよ？」

庵戸は薄笑いを浮かべて皮肉に返し、しとしとと雨を降らし続ける曇天の夜空をちらりと見た。

「見てみろよ。天が味方している今、俺の勝利は揺るがねえ。ったく、こんな事になるならあれこれ下準備なんかするんじゃないかったぜ。そうすれば、万全の手前を殺すことが出来たのに」

興が乗ったのか、庵戸は口を閉じない。

竹も多少息が落ち着いてきた為、肉体面での回復の為にこの会話を出来るだけ伸ばすことにした。

「オレが万全だったら、とっくにお前は死んでただろう」

「強がりには止せよ。例えば手前が万全だろうと俺は勝つ。——そうだが、四年前だって勝っていた」

「それを証明する為に『唯一の一』に頼み込んで生き永らえたのか？」

「ああ、そうだ——と言いてえとこだが、少し違うぜ」
「なら……何の為に？」

竹の問いかけに、庵戸の表情が醜く歪んだ。
それを見て、竹は表情を変えた。

庵戸の顔に浮かんでいた感情は、たった一つ——

「天岩戸の法の為に」

庵戸は腹の底から唸るように言った。

まるで腹の中に地獄の魔王が潜んでいるかのような声だった。

更に庵戸は続ける。

「手前は、『組織を離反することなかれ』という天岩戸の法を破つた者達の先導者だ。俺は『管理者^{セブンス}』の一角、組織の司法の総てを担う『藍の裁判官』の名において、手前を許すことは絶対に出来ねえ」

——だから裁く、死を以って償え、と庵戸は言った。

そして、その言葉に付け加えるように言う。

すると、その口元に先ほどの歪みとは別の、歪^{いひつ}なものが浮かびあがる。

「手前が最後に手をかけた吸血鬼がいたよな？ あの女は予定外の従僕だった。だから見逃してやつてもよかったんだ。最後まで俺の支配から抵抗していたしよお、俺としても下手な事をして、段取りを壊したくなかったしな。だけど途中で事情が変わった。——あの女は、この世界で手前の次に裁かなきゃいけない対象だった」

「……どうしてだ？」竹は表情無く、呟くように問う。

「そんなもん決まってるだろうが。——天倉竹を愛した罪だよ」

その言葉に、ぴくりと竹の眉が微動する。

「何を言ってるんだ？ 天岩戸の法では、愛は罪ではなかったはずだ。それを忘れたのか裁判長殿？」

竹が言う、庵戸は嘲笑するように返す。

「はっ、手前こそ忘れたのかよ？」

『組織内外問わず、何者であろうとも『天照』を愛してはならない。これを破った者は、『天照』の手により殺されるべし』。

これは天岩戸の法で唯一の例外だぜ？」

庵戸はそう言って楽しそうにケラケラと笑った。
歪み切った笑いだ。

そしてその笑いの中に見え隠れする、一つの感情は先ほどのものと同じだ。

「……オレは『天照』にはならなかっただろう」

竹は極めて冷静な口調で言った。胸の内から湧き上がる感情を抑えるように。

「ああ、確かにそうだったな。だが、次期『天照』だった。——この俺を差し置いてなあ」

その発声とともに庵戸の顔が再び醜く変化する。

禍々しい庵戸の表情に張り付いている、たった一つの感情——それは嫉妬だった。

竹は庵戸から発せられる嫉妬を、静かに受け止め、そして今は亡き一人の少女に心の中で詫びた。

偶然と不運の重なり。

巻き込まれた、巻き込んだ原因が何だったにせよ、荒川宿禰、彼女の人生を破綻させたのは、間違いなく天倉竹という存在だった。

竹は宿禰への謝罪をもう一度した後、今まで抑えつけていた、とある感情の楔を解き放つ。

「もう一度言ってやる。俺は『藍の裁判官』の名において——」
「——違うな」

竹は庵戸の言葉を遮るように言った。

抑制された表情。

普段の竹とは違う、威厳に満ちた声だった。

そしてその重々しい荘厳さは、竹の気配すらも一変させていた。

庵戸は竹の突然の変容に、戸惑ったように問いかける。

「何だ？」

庵戸は問いかけると同時に、あらゆる状況に対処できるよう全身を緊張させた。

人を心服させる威圧感。

近づきがたい貫禄。

他者を畏怖で呑み込む存在感。

今の竹が放つそれらを持つ人物を庵戸はよく知っていた。

だが庵戸はそれを認めないだろう。

それを認める事は庵戸にとって——絶対にしてはならぬ禁忌。

「教えてやろう、庵戸朋愛。復讐、法、裁き、いくら取り繕うと、結局のところお前はオレに嫉妬しているだけだ。手に入るはずだった地位、認められるはずだった力、中心に納まるかもしれないかった友人たちとの関係、その全てをオレという存在に奪われた。だからお前はオレに嫉妬した。つまるところそれがお前の始まり、お前の根源だ」

竹は毅然とした口調で庵戸に言い放つ。

その静かな気迫に押されたように、庵戸は目に見えて狼狽し始めた。

今の竹はまるで——天岩戸の支配者、『天照』そのものだ。

「ちっ、違う！ 俺は天岩戸の法の為に……！」

しかし、庵戸は自身に浮かんだ思いを拒絶するようにわめき散らした。

だが竹はそれを耳に通していない様子で言葉を紡ぐ。

「お前はオレが羨ましかっただろう？ オレが妬ましかっただろう？ 司法を司る人物にしては、随分と浅はかで醜い感情だ。劣

等感の塊とでも表現してやろうか？」

竹の両眼が淡く銀色に発光し始める。

「違う違う違う違う——断じて違うっ！！」

「違わない。まあそれを認めないならそれでも良い。だが一つだけ言っておく、手に入れるはずだった地位、認められた力、友人との関係、その全てがお前如きには荷が重い。オレとお前では——格が違う」

全てを決定付ける判決にも似た竹の言葉。

藍の章 37 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

週一のペースですみません。

一応今後の予定としては、残り4〜5話くらいで終わらせる予定です。ただ、元々が予定を大幅にオーバーしている今章ですので、正直どうなるかわかりません。

さすがにもう着地点が伸びないようにしたいです。

ちなみに、今章が書き終わったら翠の章を書きます。

＊

「な……何なんだよ……何なんだよ、これは……」

男は咽喉を絞るように必死に声を出す。

そうしないと目の前の現実には押し潰されてしまいそうだった。

賞金首、賞金稼ぎ、その他諸々、裏社会ではビッグネームである十三夜。

その数名が瀕死の重傷を負い、この屋敷にて密かに療養している。

そういう情報を掴んだからこそ、男は単独でこの屋敷に乗り込んだ。自分の実力には自信があった。

賞金首ランキング189位。

だがそれ以上の実力を、上位の連中にも引けをとらない力を、自分は持っているとは確信していた。

今日はそれを世間に知らしめるに絶好の機会。

十三夜の首を一つでも取れば、自分の名は一気に頂点のものに押し上がるだろう。

揚々とした気持ちで男は屋敷の裏門から息を潜めて忍び込む。

しかし――男を待っていたのは、ここに来るまで持っていた功名心、矜持、その全てを霧散に帰するもの――蜘蛛の捕食場ほしよくじょうだった。

最初は警備の為の大型犬か何かだと思った。

竹林の地面の上に真っ黒いものが数体横たわっていたのだ。

遠目から裸眼の瞳を闇に合わせる。

暗視スコープなんて野暮なものを使わない。

どんな状況でも最後に頼りになるのは己の肉体だと、男は知っていた。

曇天の夜空の下でも夜目が利くように、訓練を重ねてきたのだ。

だから最初に持ったその判断を、男は間違いないものだと確信していた。

大型犬、恐らくドーベルマンが3匹。

その程度の守りなど、男にとっては問題視するようなものでもなかった。

男は消音装置を取り付けたベレッタを構え、ゆっくりと黒い塊に近づいていった。

男が用意していたもう一つの銃。イングラムで一掃しても良かったが、たかが犬数匹を始末する為にはもったいないという判断と、今後の為にも温存することにした。

遠くから撃ち殺しても良かったのだが、撃ち損じがあつては面倒だった。だからギリギリのところまで足音を忍ばせ、闇に紛れて近づいていく。

だが30メートル、20メートルの距離まで近づいても、横たわる黒い影は一向に動く気配がなかった。

――随分と暢気な警備犬だな。まあ有難いことだ。

飛び込んできた情報といい、今の状況といい、自分は神に愛されているのだと疑いもなかった。

そんな風に、一つ歌でも歌ってしまいたい高揚した気分には駆られながら、そろそろ銃を構える。

そして3つの黒い塊に向けて、たて続けに3回引き金を引く。

全弾命中の手応えを感じながら、男は周到にタクティカルベストからナイフを取り出して黒い塊へと駆け出した。

肉弾戦へと移行する為である。

一般に訓練されたドーベルマンには人間は絶対勝てない、などといわれるほど強力な動物だ。

鉛弾の一つくらいで倒しきれぬわけもない。

ならば肉弾戦へなど移行せず、遠くからの銃撃で勝負を決めるのが賢明だったが、だが男はドーベルマン3匹を向こうに回しても引けをとらない実力を持っていた。

それにすでに彼らは手負い。

アドバンテージを取った自分とは、比べるべくもなかった。

一気に勝負を決めるつもりだった。

銃撃を避けたのは、屋敷内にいる標的に自身の存在を悟られたくなかった、という意味合いもある。

ここで派手に戦闘をするわけにはいかない。

サバイバルナイフとベレッタを手に標的へ向かう。

自身の流れるような行動に惚れ惚れすると同時に、男の胸に一抹の不信感が過る。

銃撃され、襲撃者が間近まで近づいているというのに、黒い塊は身じろぎ一つしないのだ。

だが既に全身に殺しの火が点いた男は、そんな不信感を振り切って駆けていき――その黒い塊が本当は何だったのかを理解して急停止した。

いくら夜目が利こうとも。

いくら場数を踏もうとも。

経験したことのない、理解出来ないものを正しく判断できるわけもない。

男が見ていた3つの黒い塊。

それは動かなかったのではなく、動けなかったのだ。

そして、それは大型犬などでは決してなかった。

それは真っ黒い糸で全身を巻きつけられた人間だった。

「……い、一体、何だってんだ……」

男の心中に経験したことのない恐怖が浮上する。

だが男も賞金首として今まで裏社会を渡ってきた者だ。

体に恐怖が行渡ろうと、染み込んだ経験と技術が自動的に己を奮い立たせる。

生き残る為に、冷静に。

男は全身に巡らせるように、一度深呼吸をする。

それだけで震えが収まる。

そして状況を分析する為に、その3つの人型を観察する。
真っ黒い糸。

初めはそう思ったが、実はそうではないらしい。

糸自体に殆ど色というものはなく、あえて言うなら乳白色。

だがそれを黒と認識させたのは、糸の僅かな隙間よりぽつぽつと湧き出る赤い液体。

血液だった。

その血液は糸の内側から流れ出ると、すぐさま凝固して鈍い赤褐色へと色を変えるのだ。

まるでそれ以上の出血は許さぬと、僅かな隙間に蓋をするように。

しかし、全体がどす黒く染まるほどの出血量。

恐らくは出血性のショックで中にいるであろう者たちは、既に生きてはいまい。

男は聞いたことがあった。

――十三夜には一匹の蜘蛛がいる。

何かの比喻だと思っていたが、この有様を見せ付けられて、そんな考えは吹き飛んだ。

同時に――逃げよう。

それが男が下した判断だった。

この3つの死体は何者かなど、もはやどうでも良い。

今はこの場から一刻でも早く離脱しなければならない。

生きる為に、生き延びる為に。

これは自分如きが足を踏み入れて良い領域ではなかったのだ。

それを本能から確信して、逃げると決めた後の男の行動は迅速だった。

すぐさま来た道に戻る為に方向転換し、全速を持って走り出す。

だがその途中、まだ5メートルと進んでいないところで、男の動きが止まった。

決して心変わりしたわけでも、自分から止まったのではない。

男は一瞬でも早くこの場を離れたい一心だった。

しかし――

「体が……動かない……?!」

逃げる男の行動は迅速ではあったが、致命的に手遅れだった。

この地は既に蜘蛛の巣の内。

足を踏み入れた時点で、そのような選択肢は残されていないのだ。

男は一切の抵抗をする余地もなく、その身体に何重もの糸で巻き付けられる。

身動きどころか声すらも出せない出来ない自分に、男は真に餌の気分を味わうことになった。

竹林に囲まれた屋敷の裏側の隅々まで張り巡らされた、目視どころか、触れても気付かぬほどの極細の糸。

蜘蛛の巣に絡めとられた不憫な毒蛾たちは、すでに4匹。

その全てが物言わぬ屍と化していた。

屋敷の一室に構える脇は、その指先で網に獲物がかかるのを振動で感じ取っては捕らえていく。

その糸の強度は鋼鉄の数倍、伸縮性にも優れ、そしてなにより細く、その寸断力は千年の時を経た巨木だろうと、さながらバターの如く切り裂くものだ。

巻き取られた獲物はその糸が肉に食い込み、十分と保たず息絶える。微かに乳白色掛かった糸の内側から流れる血液は、すぐに変色して、巻き付いた糸の色をどす黒く染め上げる。

しかし、それでも昏々と湧き出る赤い血液は、そのどす黒くなった糸の繭を赤い斑模様で毒々しく彩るのだ。

その獲物の姿はマルミグナット。

黒い体に赤の斑点を乗せた蜘蛛の姿に酷似していた。

藍の章 38 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

2日ほどぶっ倒れていたのも、予定より少しばかり短くなっており
ます。

今回登場した賞金首の男に名前がないのは仕様です。

決して名前が浮かばなかったからではありません。

藍の章 39

＊

さて、蜘蛛の糸とて有限である。

脇が斯様な巣を張ることができたのは秋野の屋敷の裏門、及び側面といったところ。

それでも十二分に広範囲だが、それとて侵入者を待ち構えるのにカバーできていない領域がある。

屋敷の正面だ。

竹林の闇の中、姿を見せず獲物を捕らえる捕食者。

それを蜘蛛に喩えるならば、正門で獲物を待ち構えるのは――

その門の前に辿り着いた時、彼らが全身に揚々と滾らせていた闘志と殺気は途端に、それらを上回る芳醇な恐怖によって飲み込まれていた。

頬がこけてしまったかのような緊張感。

研ぎ澄まされた本能が訴えている。

培われた経験が警鐘を鳴らしている。

これは決して先へは進んではいけない地獄門なのだ。

門の後ろよりも後方。恐らく敷地の対岸になるであろう地点から、時折、断末魔の呻き声と嗅ぎ慣れた血の香りが、雨の中でも確かに漂ってきていた。

もしあちら側から侵入をしていたら、その無様が降りかかったのは間違いなく自分たちだったろう。

そう考えると現状を安心する反面、ならばこちらには何が待ち構えているというのか、という不安に苛まれる。

そもそも今日この時に、自分たち以外の何者たちかが一斉に集まっていること自体がおかしなことだ。

それだけでも、自分たちが得た情報が誤り以外の何ものでもなかったのだと判断できる。

——退き返すべきか。いや、退くべきだろう。
誤った情報。

自分たち以外の侵入者。

そして、確かに香る血と死の臭い。

つまり、確かに、自分たちは誘い出されたのだ。

この先で待つ、相手方の真意などどうでも良い。

自分たちは嵌められた。

致命的なまでに絶望的な死地に追いやられているのだ。

——否、まだそこまで追い詰められてはいない。

せいぜい断崖絶壁の崖の端。

自分たちはまだ、眼前に聳える黄泉への入り口をくぐってはいない。
い。

まだ後戻りはできる。

4人組の男たちの先頭に立つ男の判断は、男たちの間を巡る異様な雰囲気の中でも極めて冷静なものだった。

「……退くぞ。今回の仕事はなしだ」

緊張感たっぷりの声で、男は後ろに控える仲間たちに言った。

午後に振り出し、一時勢力を弱めた雨の勢いはここにきて再び威力を増す。

重い雨に打たれながら、3人の男たちはリーダーの提案に頷いた。

「……あ、ああ、俺もその方が良いと思う。こりゃ俺等の手に負える仕事じゃないみたいだ」

頭が禿げ上がった小柄の中年男が、妙に渋めの声で言った。

寂しい頭髪が雨に濡れて、惨めに張り付いているのがどこことなく滑稽だった。

双子だろうか、同じ顔をしたラテン系の若い男女が続けて言う。

「早く」

「逃げよう」

「ここにいるのは」

「よくない」

息の合った掛け合い。

それを受けて、リーダーが即座に決断を口にする。

「撤た——」

「おいおい、逃げちまうのか？ 見損なったぜ『黒豹』の旦那くろうひょう」

「本当よねえ、いつからそんな腰抜けになっちゃったのかしら。ラ
ンクが私たちより落ちてからかしら」

唐突に何者かがリーダーの言葉を遮るように割って入ってくる。

それに対して、『黒豹』と呼ばれた黒人の男は軽蔑を含んだ眼差
しで、突如として登場してきた二人組の男女を見た。

「……『破鍋』われなべ、『綴蓋』とじふた。変態夫婦が何の用だ」

「ありやま、変態だってよ」

「そんなことないのにねえ」

二人の男女は同時に肩を竦めて、きひひと笑い合う。

『破鍋』われなべ。

『綴蓋』とじふた。

入れ替わりの激しい賞金首ランキングにおいて、49位と89位
の位置を、10数年に渡り変動なく維持してきたフランス系アメリ
カ人夫婦である。

そしてこの白人夫妻は、裏社会のみに生きる者が殆どの中位以上
のランカーの中では異色な顔を持っている。

国際指名手配犯として、世間的にも認知されているのだ。

少児性愛、嗜虐趣味、死体愛好、人肉嗜好。

彼ら夫妻の手にかかった幼い子供の数はわかっていただけで50を
超え、表沙汰になっていない人数も含めればその3倍は下らないと
言われている。

聞いているだけで胸が悪くなる、最悪の世界的猟奇大量殺人犯であ
る。

とはいえ、裏社会ではその手の異常者は珍しくもない。

今でこそ100位台まで落ち込んでいるが、一時期はトップランカーに名を連ねたこともある『黒豹』^{くろひょう}。

その彼がこの夫婦のことをわざわざ変態と呼んだのは、単純にこの二人組の見たままの印象に由来するものだ。

粗暴な男口調で話すのが妻の『破鍋』^{われなべ}。

婀娜^{あだ}っぽい女口調で話すのが夫の『綴蓋』^{とじふた}。

男女の役割を逆転させたこの夫婦は、12月も末の寒空の下、あろうことか下着姿だった。無論、下着の男女も逆転している。

『破鍋』と『綴蓋』^{とじふた}。

猟奇殺人犯は、夫婦ともども異性装嗜好の上に露出狂。

わかりやすい変態像である。

「……何の用だ」

『黒豹』^{くろひょう}は再び問うた。

短い言葉の端々に、変態夫婦への嫌悪が浮かんでいる。

「何の用って、怖気づいた獣を馬鹿にしてやりたかっただけに決まっ
ってんだろうよ」

衣類はグレーのボクサーパンツのみ。針金を束ね合わせたような、
軋やかな筋肉に覆われた肢体を惜しげもなく外気に晒した『破鍋』^{われなべ}
が嘲笑うように言った。

「うふふ、でも及び腰になったあなたも中々素敵よ」

脂肪だらけで、ぶよぶよとだらしのなく肥大した身体に女性用下
着を着用した『綴蓋』^{とじふた}が、うっとりとしてエロティックな視線で黒人の
男を舐める。

しかし、嘲られ、気味の悪い視線を向けられても、『黒豹』^{くろひょう}は眉
一つ動かさない。

恐らくは男にとってもっとも嫌いな部類に入る夫婦を前に、その
泰然自若はさすがであった。

「それだけか。ならば貴様たちの用は済んだわけだな。これ以上、
用がないのなら私たちは早急に退散させてもらう」

リーダーたる男はそれまでやり取りを眺めていた、仲間の三人に

合図をする。

『破鍋』^{われなべ}、『綴蓋』^{とじふた}の不意の登場はあったものの、それが自分たちに害のないものであることがわかった今、これ以上この場に留まるつもりはなかった。

それを待っていたように、仲間の三人は一斉に屋敷の正門から背を向ける。

だがしかし、それを『綴蓋』^{とじふた}が引き止めた。

「ちよっと待ってくれるう？」

既に夫婦に背を向けていた『黒豹』^{くろひょう}は首だけを回して聞き返す。

「何だ」

「あのね、この人はあなたをからかうだけが目的みたいに言っちゃったけど、実はそうじゃないの」

「だから何だ」

黒人の男は急かすように言った。

撤退と決めて、すでに行動を起こしている以上、迅速に行動したかった。

それでも『綴蓋』^{とじふた}の声に応じたのは、何も出来ずに尻尾を巻いて逃げる自分たちへの苛立ちと、十三夜の首を取るという壮大な目的に対して、いくら後ろ髪を引かれていたからだだった。

その思いは『黒豹』^{くろひょう}の仲間である小柄な中年男も、同じ顔をした若い男女も同じだったらしく、『綴蓋』^{とじふた}と自分たちのリーダーとのやり取りを静かに聞いていた。

女装した肥満男は狡猾ともいえる妖しい流し目で4人組を見やりながら、

「私たちに協力する気はない？」と言った。

「協力？ 何を協力するとうんだ。言っておくが、この屋敷は私たちと貴様等二人が手を組んだところで、どうにかなるような代物ではない」

「冷静ね。でもその通り、私たち6人じゃあどうにもならない。でも——7人だったらどうかしら」

『綴蓋』が『破鍋』に目配せをする。

「おう、出て来いや」

「……な、に……？」

『破鍋』の声の後に、闇の中からぬうつと出てきた人物。

その人物が現れると同時に、これまで終始冷静であった『黒豹』に羅刹も裸足で逃げ出すような形相が浮かび上がる。

「……『沈黙する水牛』」

「どうだい『黒豹』の旦那。こちらの旦那が味方とくりゃ、大分話も違ってくるだろ？」

『破鍋』は自分の隣に立つ、巨軀のネグロイドの男の肩に手を乗せながら言って、きひひと笑った。

しかし、『黒豹』はその甲高い笑い声が、まるで聞こえていない様子で巨軀の男の前まで歩く。

そして『黒豹』と『沈黙する水牛』は僅か30センチの距離で、睨み合うように対峙した。

同じ長身、同じ黒色の肌を持つ二人。

だがその印象はまるで正反対のものだ。

痩せているように見えて、その実、均一の取れた強靱な筋肉に身を包んでいる『黒豹』からは、俊敏な肉食獣を思わせる独特の気配、

隠しきれない天然の狩人としての野性的な威圧感というものがある。対して『沈黙する水牛』の方は190センチを超えているであろう

『黒豹』よりも更に5センチ程、長身なのだが、その身体から与える印象は対峙する男が小さく見える程に迫力のあるものだ。

文字通り筋肉の塊。

『沈黙する水牛』の全身は荒々しくも逞しい筋肉によって覆われていた。

いや、すでに男の身体は逞しいなどという言葉では片付けられないほどに、身体の厚みが尋常ではなかった。

奇形的なまでに発達した筋肉の塊は、削岩前の巨大な岩の塊とでも表現した方がいいだろう。

「……何故、お前がここにいる」

『黒豹』^{くろひょう}が鋭い眼光でねめつけながら言った。

「……仕事」

『沈黙する水牛』^{バツファロー}はくぐもった声で、ぼそつと返す。

「その二人の手伝いか」『黒豹』^{くろひょう}は視線を夫婦に向ける。

先ほどまでは嫌悪と軽蔑だったものが、怒りに染まっていた。

「違う、違う。逆だぜ旦那。俺たちが『沈黙する水牛』^{バツファロー}の旦那に雇われたんだよ」

「なんだと？」

「あら、驚くような事でもないんじゃない。普通に考えたらわかるでしょ？ 私たち夫婦の嗜好を考えればね」

「……」

言われてみれば、この夫婦は幼い子供以外の殺人には一切興味を持たない事で有名だった。

十三夜に属しているのは、須らく16、7の少年だというから、いくら十三夜の誰かが負傷しているという情報を得ようがこの場に出向くわけがない。

だが、既にその情報自体が誤り、自分たちを集める罠であった事がわかってしまった『黒豹』^{くろひょう}は、この夫婦も別の誤った情報。

例えば屋敷に絶世の美児童が幾人も監禁されているとかいう類のものに、釣られているのだと思っていたのだ。

だから『沈黙する水牛』^{バツファロー}が現れた時、夫婦はこの男を護衛として雇ったのだという風に理解していた。

しかし、それがまるで逆。

『沈黙する水牛』^{バツファロー}がこの夫婦を雇ったという。

その事実には、『黒豹』^{くろひょう}は驚きを隠せなかった。

『沈黙する水牛』^{バツファロー}、賞金首ランキング26位。用心棒。

雇われる事でのみ、その剛力を振るう存在。

この男が自身から何かをしようなどという事は、今までで一度たりともなかったことを『黒豹』^{くろひょう}は知っていた。

何故なら、二人は長年に渡ってチームを組んでいたのだから。

18年前に、とある仕事で下手を踏んで4人チームだったメンバーの二人が死亡し、決定的に決裂するまで。

「――用心棒という仕事に誇りを持っていたお前が、こんなところに現れた理由は何だ。その二人を雇ってまで何をするつもりだ。富の為か、名声の為か？ 何が目的なんだ『沈黙する水牛』」

「……教える必要はない。あんたはもうリーダーじゃない」

真直ぐに『黒豹』の眼を見ながら、『沈黙する水牛』は厚ぼったい唇を薄く開けて言った。

「……確かにそうだな。ならば俺たちは予定通りこの場を去らせてもらう」

「おいおい、ちょっと待ってくれよ。過去の因縁なんぞ、どうでもいいじゃねえか。それよりも重要なのは今だろ今。『黒豹』の旦那ここは一つ冷静に考えてみるよ」

再び踵を返した『黒豹』に『破鍋』が慌てて声をかける。

だがそれを『沈黙する水牛』が止めた。

「……いい。もう無駄。……あいつ腰抜け。だから昔、仲間死んだし決裂した。そろそろ時間。だからおれもう行く。お前たち二人も予定通り行動」

「でもよお」

「あなた。雇い主の言葉は絶対よ」

『綴蓋』が食い下がる『破鍋』を諭すように言った。

「わあったよ。報酬も前払いでもらっちゃまってるしな。ひひ、あれは久しぶりに美味かったよなあ」

「ええ、そうね。それじゃあ行きましょう。あまり雨に打たれすぎるのは、美容に良くないし」

そうして二人は自分たちに与えられた仕事を遂行する為に、悠然とした足取りで門前から姿を去っていく。

――みしりと、何かが潰れるような音がした。

『黒豹』の齒軋りであった。

雷光が『黒豹』の顔を一瞬浮き彫りにする。

その顔には自分自身への確かな口惜しさが刻まれていた。

だが今まさに屋敷の正門を破ろうと佇んでいる『沈黙する水牛』
も、闇に消える夫婦も、それを意に介すようなことはなかった。

それが一層、『黒豹』に刻まれた口惜しさを強める。

仲間の三人が彼を氣遣う様に、心配そうに見つめていた。

しかし、それでも男は既に決めた撤退の二文字を覆すことなく、
仲間たち3人を促して逃走の岐路につく——つもりだった。

撤退行動に移り、自分の前を走っている三人へ『黒豹』は走りながら声を投げた。

「……すまない、皆。私は——」

「戻るのかい、リーダー？」

『黒豹』と仲間の3人が立ち止まる。

「……ああ。私は戻る」

「そっかい。じゃあさっさと戻りましょうや」

小柄な中年が、ニカッと笑いながら言った。

その反応に『黒豹』は戸惑いながら返す。

「いや、お前たちは——」

逃げる。

そう言う前に、

「僕たちは」

「逃げない」

と顔の似た男女が真摯な視線を向けながら言った。

「そうそう。逃げない。過去がどうであろうが、俺たちのリーダー
はあなたなんだから。リーダーを置いて逃げられないさ」

中年男は同意するように、快活に言って、広がった自分の額をぺち
りと叩いた。

「っ……お前たち……すまない」

「謝る」

「必要はない」

主を崇める臣下のごとく、中年男と顔の似た男女は『黒豹』を見る。

「……」

『黒豹』は一度眼を閉じ、

「戻るぞ」と眼をゆっくり開きながら言った。

その鋭い眼光には、魔獣のごとき野性が漲っていた。

屋敷の正門前に戻った『黒豹』たちを、『沈黙する水牛』はまる

で彼らが戻ってくることを確信していたかのように、先ほどと変わらない正門前に佇んだ状態で静かに迎えた。

そして手を組むことを伝えた『黒豹』に、手短かに作戦を伝える。

その作戦は無謀にも思えたが、それが一番確かなものであることも事実だった。

『黒豹』とその仲間たちは、すぐにその作戦に賛同し、それぞれの配置につく。

そして、今屋敷の正門前には『黒豹』と『沈黙する水牛』の二人だけになっていた。

「……」

「……」

並び立つ二人が互いに交わす言葉はなく、予定の刻限をただ静かに待つ。

最後に並んで立った時、18年前のあの時も、似たような状況だったか。

時折鳴り響く雷が照らしだすのは、黄泉への入り口。

しかし、少し前までは恐怖を覚えたその門に、『黒豹』は全く恐怖を感じていなかった。

「――っ」

それが横に並ぶ勇猛な男の存在によるものだと、心が理解してしまい、激しい雨音に紛らすように小さく呟いた。

「……すまなかった」

それは18年前に言えなかった謝罪の言葉。

一つの最強を前に仲間たちをついぞ救えなかった慙愧。

その聞き取れるはずのない、消え入るような声に『沈黙する水牛』バッファローは、

「……謝る必要ない。あんたは正しかった。リーダー」

と彼が今まで出したことのないような野太く確かな声で返した。

「――あ」

『黒豹』クニヒョウが何か言い返そうとする。

だがそれは叶わず、時間がきてしまった。

「時間」

「――ああ、行こう」

決して先へは進んではいけない地獄門。

妖気漂う死への門へと、二人はそこへ向かって歩き出した。

そして二頭の獣は堂々と、しかし慎重に門下をくぐり屋敷の敷地内に侵入する。

侵入した二人の目に飛び込んできたのは、腹の突き出た少年だった。

『黒豹』クニヒョウと『沈黙する水牛』バッファローは少年を見た瞬間、すぐさま戦闘態勢に入る。

門外からでもわかった圧倒的な恐怖の正体が、この少年であったことを二人の野性と経験が見抜けぬわけもない。

二人は雄叫びを上げながら、目の前の少年に飛び掛る。

恐怖に、敵の存在の大きさにのみこまれそうになるのを拒絶するように。

――しかし、二人は知らない。

無意識の咆哮。

考えるまでもなく前進した四肢。

その行動の全てが、既に相手の存在にのみこまれた末の行動であることを。

野性と経験が正常に働いていたのなら、二人は逃げるはずだったことを。

少年——古巢謙太は向かってくる二頭の獣に臆した様子はなく——
「やっときたー。二名様ごあんなーい」

と緩い声で言って、突き出した両腕の指先をゆっくりと閉じていった。

——その直後、ぐらりと天地が揺れる。

『黒豹』。

『沈黙する水牛』。

二頭の獣は大口を開けた何かに包まれ、そしてのみこまれていく。
薄れていく意識、黒い肌の男たちが最後に聞いたのは、

「『暴飲暴食』」

——鯨の言葉。

「ごっつおさん」

古巢は不味そうに顔を顰め、食事を終える。

後に残ったのは、二人の人間の抜け殻。

正門で獲物を待ち構えていたのは、威風堂々、底なしの胃袋を持つ
飽食者。

『鯨吞たる双顎』。

魂を喰らう鯨の類であつた。

藍の章 39 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

ここにきて新たな登場人物投入、速効退場と忙しい話になりました。あと全然話で残り5話とか言いましたが、いい感じに予定をぶっちぎっております。

藍の章 40

＊

「……あの二人、死んだわね」

「ああ、そうみてえだな」

たった今、正門の方でした音と気配に夫婦が気付いた。

「どうしましょう？」

「んなもん決まってるだろうが」

二人は頷き合う。

『綴蓋』、『破鍋』は竹林に踏み入っていた足向きを変える。

二人の雇い主である『沈黙する水牛』。

それが死んだのであれば、これ以上この場にいることはない。

報酬を前払いで貰ったとはいえ、そんな義理など通す気はさらさらなかった。

自分たちの命と他生の義理など、天秤にかけるまでもないのだ。

とはいえ――

「逃げられるかしら？」

「馬鹿野郎、逃げなきゃ死ぬだけだろ」

『破鍋』、『綴蓋』は、地肌をべたべたと叩く雨の感触よりも不快なものが、いつの間にか自分たちの身体に触れている事に勘付いていた。

それは単に彼らが裸に近い格好をしているからではない。

それが長年賞金首ランカーとして、生き残ってきた者の研ぎ澄まされた感性。

上を目指そうと思えば、もっと上位のランカーになれるであろう夫婦の実力だった。

「そうね、でも――」

「この状況だもんなあ……」

『破鍋』^{われなべ}が右腕を少しだけ動かしてみる。

糸らしきものが動かした分だけ肉に食い込み裂けていく。
それを見て『綴蓋』^{とじぶた}が言う。

「駄目ね」

「駄目だな」

二人は諦めたように長く息をつき、

「捕まるのは仕方ないわね」

「そうみてえだ。だったらせめて――」

――生き残ろう。

生存の可能性を少しでもあげる為に。

自分たちが生き残る為に。

そう言って、二人は絡み付く糸への一切の抵抗をやめた。

人の振るう暴力が、自然の猛威の前では無力なように。

そういう無常な現実がそこにはあった。

＊

『沈黙する水牛』^{バッファロー}が彼らに授けた作戦は単純明快、正面、後方、側面からの同時攻勢。

正面は『黒豹』^{くろひょう}と『沈黙する水牛』^{バッファロー}。

裏側は『破鍋』^{われなべ}と『綴蓋』^{とじぶた}。

この二組の実力者たちを相手にすれば、正面と裏側に比べて元々守りの気配が薄かった側面の防衛は更に薄くなるはず。

その一瞬の隙を突いて、『黒豹』^{くろひょう}の仲間3名が屋敷内に侵入する。

侵入を許してしまえば、正面と裏側の守備にも乱れが起こるだろう。それが『沈黙する水牛』^{バッファロー}の作戦だった。

希望的観測に偏った、あまりにも楽観的な作戦だったが、退くという選択肢を排除した以上、それよりより上策は見当たらなかった。

乾坤一擲。

失敗は許されない。

だが実際のところ、^{くろひょう}変わるものなら側面からの突入の役目は、『^{バッファロー}黒豹』と『沈黙する水牛』の二人に譲りたかった。

せいぜい賞金首ランキング150位前後の3人。

例え侵入できたとしても、その後の行動に自分たちの実力では不安が残る。

しかし、それ以上に正門も裏門も自分たちには荷が重かった。だからこそこの布陣なのだ。

3人は自分たちの不甲斐無さに唇を噛みながらも、何が何でも役目を果たそうといきり立っていた。

自分たちのリーダーの気配が消えた事も知っている。だがそれでも、彼らは前に進んだ。

それが自分たちのリーダーに対する、絶対の想いだというように。そして3人はついに屋敷の敷地内、庭園のところまで辿り着く。

それは今宵、どんな賞金首たちも達成できなかった偉業であった。

＊

異変。

開いていた口が一斉に閉じられる。

雨戸で遮られて見ることは出来ないが、大部屋にいたものの全てが側面からの侵入者の存在に気付いていた。

酒盛りを続けていた十三夜のメンバーの視線が一瞬にして甲斐に集まる。

これから自分たちはどう行動すれば良いのか、彼らは問うていたのだ。

ここまで辿り着く可能性は殆どないという甲斐の予想だったが、現実には辿り着かれている何らかの行動を起こさなければならぬのは必然。

それが彼らの共通認識だった。

本来であれば指示を出すのは竹の役目だが、竹は当然のことながら

不在。

そもそも今回の作戦の発端となっている脇も古巣も不在となっているので、指揮権は順当に二人に策を授けた甲斐が握っていた。

しかし、片膝を立てて座った状態で、ぼんやりと騒ぎ続けていた彼らを眺めていた甲斐は、自分に視線を向けてきた面々を細い目で一瞥すると、面倒そうにその視線を受け流すだけだった。

もし必要に差し迫っているのなら、甲斐は臨機応変、的確に指示を出せる人物である。

だが甲斐から何も指示がない以上、勝手に行動してくれということだろう、と彼らは結論付けた。

次いで、仲間内で目配せをする。

どうするか、ではなく誰が行くか確認しているのだ。

彼らの中で、考えるまでもなく行動指針は決定している。

侵入者の排除。その一点だ。

作戦概要からいって、侵入してきた者が友好的であるはずがない。

そして、今慎重に、しかし着々と庭園を進んでくるのは、甲斐の方の予想を覆して辿り着いた者たちだ。

生半可な者ではないだろう。

表から滲んでくる威圧感^{プレッシャー}は、猛者というほど重厚でも鋭くもなく、むしろ彼らにとっては雑魚と表現できる程度のものだったが、一定のレベルを超えた実力者であれば自身の気配など簡単に偽ることができるだろう。

まあそこまでの実力者であれば、そもそも庭園への侵入にあっさりと気取られることはないように思うが、やはり前提として、小数点以下の可能性、招かれざる客であるという事実が彼らの中で重く受け止められていた。

ゆえに、彼らは誰がその者たちを迎え討つのが最善か、目線だけで議論していたのである。

その議論の中で、負傷者と甲斐は最初から除外されていた。

負傷者は理由を述べるまでもないが、甲斐は何故除かれたのか。

それは、甲斐がすでに策戦立案という働きをしていたから、という
わかりやすいものだった。

それぞれ自分の仕事じゃない事態に巻き込まれた場合、負担はなる
べく分散するのが彼らのやり方、暗黙の了解だった。
静まり返る室内。すっと立ち上がる人物がいた。

それは十三夜の誰かではなく、薄紅色の色無地を着た銀髪。
秋野紅葉だった。

紅葉は自身に一斉に降り注がれる視線を、緩やかな微笑で受け止
めると、十三夜の男連中に向かって恭しく言う。

「少し庭を散歩をしてきます。私のことは気にせず、引き続き宴を
お楽しみください」

一瞬、十三夜の殆どの者が呆気にとられた表情を作った後、渋い
顔になる。

この状況で散歩も何もないだろう。

紅葉が侵入者を排除しに行こうとしているのは明白だった。

女性陣は自分が危機的状況にならない限り戦闘はしないこと。

それが竹との取り決めであり、だからこそ自分たちだけで誰が行
くか決めようとしていたのだ。

このまま紅葉の行動を許せば、それを破ることになる。

判断に迷う、十三夜の面々。

しかし、その中で唯一、甲斐だけが表情を変えていなかった。

その甲斐の態度に不審がる彼らを尻目に、状況はさらに悪化する。

「あ、じゃあ私も行こうかな。散歩」

「それなら私も一緒に行きます。散歩に」

滅多に着ることのない和服、水色の色無地を着た蒼香と、松葉色
の色無地を着た深翠が示し合わせたように揃って立ち上がった。

更に動揺が広がるが、甲斐は顔色を全く変えない。

それに痺れを切らし、甲斐の隣に座っていた飯泉が問う。

「いいの、カイカイ？」

「うん。散歩を止めろとは言われてないから」

甲斐は口元に小さく笑みを浮かべて言った。

その言葉に、全員が哑然とした。

ただの散歩を止める権利はなく、もし散歩中に何か起きててもそれは正当防衛になる。

甲斐が言いたいのはそういうことだ。

しかし、それが許されるのだろうか。

甲斐の言わんとする事を理解した飯泉は、

「……はは、それって屁理屈じゃない？」と苦笑い混じりに言った。それに甲斐はすぐさま、

「じゃあ一つ」と付け加えるように言う。

全員の耳が甲斐の言葉に集中する。

「予想通り」甲斐は静かに言った。

——嘘くせえー……！

誰もがそう思った。

庭園内に辿り着く者が出ている時点で、甲斐の予想はほぼ外れていると言っても良い。

一応、『殆ど』と僅かな可能性を示唆していたものの、大別して辿り着かないと言っていた以上、そんなものは意味を成さない。

辿り着くか着かないか、二択の予想ならばそれこそ誰にだって出来るからだ。

だがしかし、甲斐の嘘くさい発言に突っ込むものはいなかった。

それどころか、

「……ああ、予想通りなんだ」

「……まあカイカイが言うなら」

などと無理やり納得しようとしている始末だった。

甲斐は基本的に仲間内で、突っ込みを回避するポジションにいる人物なのである。

その道理を無視できるのは、脇と竹くらいのものなのだが、生憎二人は出払っていた。

それゆえに、紅葉たちの散歩を認める雰囲気が出来上がりつつあ

った。

なんとも適当な連中である。

そして、その雰囲気にダメ押しをするものが現れる。

「散歩するなら、早く出たほうが良いと思うわよ？」

恐らくは人生で初であろう。梔子色の小紋に袖を通したアレクサンドラが口を開いた。

今度はアレクサンドラに視線が集まる。

よく見ればアレクサンドラや紅葉たちだけでなく、部屋にいるもののほぼ全員がどういうわけか和装であった。秋野家の使用人二人だけが、いつもの装いだ。

そんな和装ばかりの部屋の中で、ブロンド髪で生粋の西洋美人というアレクサンドラの姿は少しばかり浮いていた。

それでも美人とは何を着ても絵になるものらしく、アレクサンドラの着こなしはおかしいというほどではない。

唯一おかしいところがあるとするならば、彼女の特徴の一つである豊満な胸が洋装の時とは違って、目立たなくなっているところだろう。

和服マジック。

蒼いのが聞けば厭味にしか聞こえないはずだ。

「来ないのか？」

紅葉がアレクサンドラに問うた。

「あなたたち三人の散歩についてけると思う？ それに私がこの散歩に向いちゃまずいでしょうに。仮にも私はあなた達と対極を為す騎士団の王女よ？」

アレクサンドラは皮肉そうに言って、早く行くといいわとひらひら手を振った。

紅葉は肩眉を上げて薄く笑う。

「それもそうだな。では早急に。真実、真逆」

「かしこまりました」

紅葉が呼ぶと八坂真実が雨戸と窓を順に開け、八坂真逆は三足の

草履を縁側に並べていく。

その様子を男連中は何も言わず見ているだけ。

もう自分たちが行くつもりも、止めるつもりもないようだった。

外は雨脚のピークなのか土砂降り。

決して散歩などするような天候ではない。

しかし、紅葉、深翠、蒼香の三人はそれを全く意に介していないらしく、いっそ気軽な風に用意された草履を履いて、庭先に出て行った。

十三夜、王女、使用人、それぞれがそれぞれ別のことを考えて、三人を無言で見送る。

窓は雨が吹き込むのも構わずに、開け放たれたままだ。

暗い庭園を部屋の明かりが照らし、金、銀、黒の髪の毛が痛烈な雨に濡れて重くなっていく姿がよく見える。

一列に横並びで、ゆっくりと闇夜を歩いていく三人の姿は異様であつた。

だが土砂降りの中で傘も差さず、会話もせず、目も合わさないが、それは誰が何を言おうが散歩なのだ。

それは八百年ぶりの散歩。

『天岩戸』において三貴神と呼ばれた位階の者たちが、漸く足並みを揃えたのだ。

その様子は見るものを圧倒し、闇の中でも絢爛と輝いているようだった。

彼女たちの後姿を見つめる全員が息を呑むほどの美しさ。

しかし、残念なことに歴史的とも言ってよいその散歩は、たった数メートル進んだところで終了してしまった。

三人が同時に足を止める。

少女たちの目の前に侵入者が対峙していた。

その数は三。だが数こそは同じだが、彼女たちと比べるのが憐れになるほどに、平凡な存在だった。

なんという無粋。

そのような者たちが、この八百年ぶりの行進を邪魔して良いわけがない。

現れた三人の男女。一人は頭が禿げ上がった中年男、あとの二人は同じ顔をした若い男女。

見れば見るほど、彼女たちの輝きの前では滑稽なほど霞んで見える。しかし、その眼には彼女たちのそれに勝るとも劣らない輝きが灯っていた。

血走った眼といえはそれまでだが、だがそれはただ命を賭しているだけの眼ではない。

他者の命を背負っているだけでも、安易に未来への希望を抱いているだけでもない。

その者たちの瞳の奥に燦然と輝く一つの想い。

それは命を賭し、命を背負い、未来への希望を織り交ぜた——信頼という光輝。

その信頼が何に、誰に寄せられたものなのか、足を止めた彼女たちには判別できるべくもなかったが、それでもその輝きは、彼女たちが足を止めるに相応しいものであることに反するものはいないだろう。

彼女たちが足を止めると、そのタイミングに合わせたように先頭に立っていた中年の男がすぐさま叫ぶ。

「散開っ！ 各個撃破っ！！」

その声に応じて、若い男女が左右に散った。

同時に中年の男は必死の形相で正面に突進する。その両手には無骨な曲刀が二振り握られていた。

藍の章 40 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

そういえば予定なんてありましたよね。なんて自分に皮肉るしかない現状です。

元々は38〜次話の41までを1話……せめて2話でまとめる予定でした。……出来るわけがなかったです。

2倍から4倍の働き。字面だけならいい感じですが。

どこまでいくのか藍の章。次話は比較的早く更新できそうです。

それと短編を新たに載せましたので、興味がありましたら覗いてみてください。

藍の章 41

＊

——正面、双剣を振りかぶる中年の男を迎えたのは銀髪の鬼姫であつた。

袈裟に振り下ろされる二刃。

だがその刃は標的を捉えることは出来なかつた。

空を切つた刃の先を見送りながら男は我が目を疑つた。

空振つただけならば良い。

もとより初撃で決められるとは思っていない。

命が続く限り標的へ向けて二撃、三撃と続ければ良いだけだからだ。

だが——その標的が見えなければ刃を振れるわけがない。

別に紅葉が消えたわけではない。

男からしても、むしろよく見えているくらいだ。

そう。見えすぎている。

初撃で見失つた銀髪の少女は、直後に男から見ればほぼ同時に、彼の前後左右のいたるところにいた。

男の眼球と認識の速度を、紅葉の行動速度が上回つた。ただそれだけ。

そして二撃目に加えられず必死に紅葉の姿を追いかける男が、次に確かに紅葉の姿を捉えたのは、いつの間にか眼前に迫つた少女の細い五指と煌々と燃える赤紅の瞳だった。

同時に男の耳に、妙な音が聞こえる。

それは自身の頭蓋骨をぶち割られ、首の骨をへし折られる音。

「散歩の邪魔だ」

凄惨な笑みを口元に携え、宝石を擦り合わせたような独特な声での呟きは、既に頭部が半壊している男に届くわけもなく、瞬く間に男の体は地獄を思わせる灼熱の業火に包まれていった。

——右側に駆けたのは同じ顔をした男女でも女の方。

女は中央に穴の空いた円盤状の刃を、左右の人差し指で器用にぐるぐると回しながら殺戮の天使へと肉迫する。

チャクラム。女が操るのは古代インドで用いられた投擲武器の一種だ。

「——破っ！」

女の指から時間差で交互に円刃が放たれる。

先手必勝。

後手に回って相手の実力を測る余裕はない。

故に常に先を取り相手を圧倒する。

それが女の判断だった。

飛輪の名に相応しい飛翔を見せる20センチ程の刃は、空気を切り裂きながら金髪の少女に向かって滑空する。

女はそれの行く末を見届ける前に、素早く腰元から新たにチャクラムを取り出して再び投擲する。

都合四刃。

四方から標的を囲むように、高速で襲い掛かる円月輪に死角はない。——殺^とった！

油断か慢心か、金髪の少女は自分の攻撃に反応できていない。

女は自分の金星を確信しながら、次の刃を用意する。

しかし、次刃を回す指の速度が落ちた。

「そんな——っ」女の悲痛な声。

投擲武器としては珍しく、標的を斬ることを目的としている円形の鋼の刃は、それを優に上回る硬度の前に脆くも砕け散っていた。

突如として、蒼香の周囲に展開した純白の刃の数は九。

その一枚、一枚がそれぞれ個別の意思を持っているかのように、蒼香の周りで優雅に浮遊している。

まるで天から舞い降りた天使の羽根のように。

蒼香が女に向けてふわりと片手を上げる。

それが号令。

主の身を守るべく浮遊していた天使の羽根は、即座に主の敵を射抜き、切り裂く魔弾と化した。

対象を切り刻むべく、次々と女へ降りかかる九枚の白刃。しかし臆病ともいえる周到さが、女を救った。

女は次の投擲の為に用意していた両指の円輪の回転速度を、一気に指が千切れ飛ぶほど上げた。

そして超高速で回るチャクラムをぶつけることで、降りかかる刃の軌道を致命傷にならない程度にまで逸らすことに成功したのだ。

だがその代償は決して軽いものではない。

至近距離からショットガンを撃たれたかのような、苛烈なパワーを持つ純白の羽根を一枚受け流すごとに刃は欠けていき、しまいには砕け、それを実行した両腕の筋肉は軒並み切れていった。

更に自身の限界を超えた回転を支えた人差し指は、肉が削げ白い骨がむき出しになっている。左指にいたっては途中で千切れ飛んだ。

そして致命傷こそ避けられたものの、飛ばされた九枚の刃の悉くが、女の身体はどこかを貫き、または斬り裂いていた。

生きているのが不思議なくらいに満身創痍であったが、戦いは終わっていないどころか始まったばかり。

女はもう一度、先を取るために骨が見える右指と、左手の中指にチャクラムをはめて回し始めようとし——突然、猛烈に全身に駆け巡った虚脱感により前のめりに倒れた。

チャクラムがするりと指から抜け落ち、濡れた砂利の上で小さく跳ねる。

自分の身体に何が起きたのかわけもわからず、それでも戦闘を続行する為に身体を起こそうと砂利の上でもがく。

敵の足音が近づいてくる。

刻々と消え落ちそうになる意識を何とか踏みとどまらせ、やっこのことで顔を上げると、そこには悪魔のような笑みを浮かべ、小さな銃を額に向けて突きつける九枚の羽根を従えた天使の姿。

その瞳は暗い銃口よりも深い深い漆黒で、されど蒼穹の如く輝く蒼蒼。

「散歩の邪魔だよ」

謡うような美しい声の後、たん、たん、とりズミカルな銃声が木霊した。

――左に位置を取った年若い男は、慎重であった。

対峙していたのは見た目、十歳は離れているであろう年下の少女だったが、不用意に近付けば喉を食い破られる。

そんな実力差が、自分と少女の相手にはあることを肌で感じていた。だからまずは相手に攻めさせ、攻めの後に出来る一瞬の隙に全てを賭けるつもりだった。

彼は回避力には自信を持っていた。

同じ顔をした女――双子の妹の技術向上の為に自身を標的にさせ幾度も、幾度も迫り来るチャクラムを避け続け、未だ掠り傷一つ負ったことはない。

青年は時代遅れの狩猟武器、短弓を引き絞り鏃の先を黒髪の少女に向けたまま、精神を集中の海へ埋没させていく。

勝負は一瞬。

まだ相手は動かない。

視界の端に仲間が一瞬で消し炭にされた姿が映るが、気を割きはしない。

今は目の前の相手に集中するしかないのだ。

瞬きもせず、少女を凝視する。

二発の銃声が聞こえた。

それでも刹那も集中力を途切らせはしない。

少女の体の動きのみ注視している今、もし横からまたは後ろから攻撃されれば、彼は自分が反応できないことをわかっている。

青年は腹をくくっていた。

自分に課せられた、仕事だけは最後までやり遂げる為に。

例え、仲間が燃え尽きていようとも、頭に穴が穿たれていようとも、それでも最後まで仲間を信じ、自身の使命を全うするために全てを賭ける。

それが彼の覚悟だった。

月読の巫女は、立ち止まってから身じろぎせず、自分に鏃を向ける男を見ていた。

全てを一瞬、ただ刹那の一点に賭ける男。

そういう姿は見ていて悪いものではなかったが、だからこそいたたまれない。

何故なら——青年が今か今かと待っている時間が、あまりにも無意味なものであることを知っているから。

「——え」

足元に激しい痛み。そしてばりばりと、ごりごりと何かが噛み千切られる音がした。

耐え切れぬほどの激痛に、反射的に青年の集中が途切れる。

同時に自分の身長が急に縮んだような錯覚。

いや、それは錯覚ではなかった。青年の身体は確かに十数センチ程沈んでいた。

青年は自分から出たとは到底思えない絶叫を口から撒き散らしながら、彼はついに視線を移し、自分の身体が沈んだ原因を見た。

——狼。

それは闇に紛れるような暗緑色をしていたが、紛れもなく狼だった。その狼はいつの間にか青年の足元に数頭群がっており、今まさに食事の真っ最中。

暗緑色の狼たちは黙々と、肉も骨も構わずに青年を足元から噛み砕いていたのだ。

深翠は青年と対峙してから微動もしていない。

だがそれは、青年を警戒していたわけでも戦意がなかったわけでもない。

単に動く必要がなかっただけ。

深翠は蒼香や紅葉のように直接的な戦闘方法を持たず、代わりに自身に影の中に寧猛な獣を飼っていた。

深翠の影より生まれる緑影の狼。

——もし青年が深翠の姿だけに集中していなければ、仄暗い闇夜に紛れるように現れ、その身を隠して疾駆した暗緑色の存在に気付けたことだろう。

しかし、一点の曇りのない眼差しで、深翠の四肢の動きのみに囚われていた青年にそれを求めるのは酷だろう。

彼は悪くはない。あえて言うなら相性と運が悪かった。

青年には残酷すぎる言葉だが、残念ながらその一言に尽きてしまう。

「散歩の邪魔です」

その声で獲物から隠れる必要のなくなったと感じた狼たちは、低い呻り声を上げて大胆に食事を開始する。

四肢を、喉笛を、腸を、はらわた惨たらしく噛み裂かれる断末魔たる苦悶の叫び。

——凄絶なまでの深淵を覗く緑翠の瞳は、肉塊と化していく御霊を無慈悲に見送っていた。

＊

「……なんだあれ」

誰かの呟き。それを特定しようとするものはいなかった。

その場にいた全員がその光景に眼を奪われ、息を呑んでいた。

開け放たれた窓から、ぼんやりとした明かりに照らされる庭園。

横殴りの雨の中で、死を撒き散らす破壊の女神たちが舞い踊っていた。

彼らの眼に映ったのは、そんな美しくも壮絶な殺戮だった。

瞬きをする間に、あるいは長い息を吐き出した時には、それは完全に終わっていた。

一面、血に濡れた砂利の上に、廃棄物のように討ち棄てられた三

つの死体を見下ろし、三人の美姫が立っている。

あれが散歩の邪魔——などという巫山戯た理由の結末だ。
これが三貴神。

あらゆる位階の上に立つものたちの真の姿^{まこと}。

その戦姿は、それぞれが最強とすら呼ばれ、それを自負している『十三夜』のものたちが見ても圧倒されるものがあった。

「……竹って、あれに勝ったの？」

館花が横にいた松田に小さく問うた。

その問いに全員関心があったらしく、松田に視線が集中する。

「いや、勝ったけど……俺も紅葉ちゃんとは戦ったけど、でも強くなってるような……？」

松田はいつぞやの戦いと今見た光景を重ねながら、慎重に言った。

「……マジすか」

「まじで」

「……滅茶苦茶だなあ」

館花と松田の会話を横から聞いていた遠藤がぼつりとつぶやいた。
そして、十三夜の皆が同意するように頷いていた。

それだけ彼らの眼には彼女たちの戦いが鮮烈に、強烈に染み込んでいた。

それはもはや畏れに近い。

しかし、例えば彼女たちと単一で戦って負けるとは思わない。

実力でいえばまだまだ自分たちが上であると、彼らは冷静に分析している。

だが不思議なことに、胸を張って勝てるともいえなかった。

今の戦闘光景を見て、十三夜の誰もがそんな不可解な判断を下していた。

そしてそれに伴い、

「あー、松さ、今度久々に訓練しない？」

「おお、いいね。やろうやろう」

「俺も参加するわ」

「あ、じゃあ俺もいい？」

などと口々に言い出していた。

彼女たちの戦闘を見て体がうずうずした、というのもあるが、もし彼女たちと戦った時に体がなまっていたら、もしかしたら勝てないのでは、という不安めいたものがその発言の大本にあった。

女性相手に無様な姿は見せられないという矜持以前に、彼らの根底にあるものは、やはり生まれた時から染み付いている戦闘者としてのそれだった。

そして、ではどんな訓練をするか、なんて盛り上がり始める十三夜と、足取り軽く舞い戻ってくる三人の少女の姿を尻目に、アレクサンドラは難しい表情を浮かべていた。

大神深翠、山吹蒼香、秋野紅葉、そして自分。

それぞれ一度は、天倉竹と刃を交えた者たちではあったが、その明確な結果の違いは知っていた。

蒼香と紅葉の二人は片腕をもっていき、深翠は竹の全身に深手を負わせていた。

対して自分は、竹の体に傷一つ負わせられていない。

そして今の戦闘風景。

アレクサンドラは、ただの人である自分と彼の^か三人との決定的なまでの戦闘力の差を痛感していた。

——どうにかしなければ。

アレクサンドラは、秩序を護る騎士団の王女として、そして一人の女として、密かに強くなることを決意したのだった。

藍の章 41 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

40の後編的な感じです。

長くなりましたが、屋敷サイドのお話は終了。
次話から竹サイドに戻ります。

藍の章 42

＊

鮮血が僅かに散った。

「……くっ」

苦痛に顔を歪め、竹の口から微かに呻き声が漏れた。

「は、はは、はははははは」

——この顔だ。この声だ。

庵戸は手に伝わる手応えと、自身が待ち望んでいた標的の苦しむ様に、全身を歓喜に震わせ声高に笑う。

槍は左肩の付け根の辺りを貫いていた。

心臓めがけて放った一撃だったが、僅かに狙いは逸れている。

それでも庵戸には十分であつた。

力なく、だらりと落ちた左腕。

絶対零度の一撃は、竹の左腕の機能を完全に停止させていた。

回避する素振りを一切みせず、無防備に突っ立っていただけの竹の心臓を貫けなかったのは不可解ではあったが、不本意にも膠着していた戦闘の中で片手を使えなくしたのは、大いなる戦果であろう。

決着は近く、そして最後に戦場に立つ勝者は自分になるであろうことを、庵戸は狂喜の中に取り戻した冷静さで確信した。

庵戸は竹が肩を貫く槍を引き抜こうとする手も構わず、思い切り地面を蹴って後方に飛び退いた。

槍の抜き取られた傷口から、本来、吹き出るはずの血液の姿はなかった。

3メートル程の距離をとり、庵戸はあてつけるように勝者の笑みをこぼす。

竹の肩を穿った槍は、天青色のその身を深紅に染めている。後ろの景色が見えるほど、綺麗に空洞になった竹の左肩。

幸いにも傷は肺を逸れているようだが、グロテスクに剥き出しになった肉は紫に、ところどころ黒く変色しており、重度の凍傷であることを示していた。

竹は額に珠の汗を浮かべ、すぐに右手で傷口を抑えた。顔には隠しきれぬ激痛を貼り付けている。

数秒後、凍結していた肉の断面からぽつぽつと血液が滴り始め、白い和服を赤く濡らした。

それは誰が見ても敗北手前の弱者の姿。

そんな中で唯一、二つの銀の眼だけが変わらず強烈な輝きを放ち続け、眼前を凝視し続けていた。

しかし、庵戸は竹に対して、もはや何の脅威も感じていなかった。むしろ、庵戸はある種の虚しさすら感じている。

4年、いや、それ以前から募らせていたあらゆるものが、今、竹の命を絶てるという確信の前に霧散していき、胸の中をぽっかりと穿たれた穴の如き空虚が支配していた。

それでも――

「何か呟いてたみてえだけど、結局、何もなかったな。だけど、竹。これが結果だ。手前はここで俺に殺される」

庵戸はその空虚さを自らの勲功だと胸を張り、滑らかな口調で竹に声をかけた。

「……無駄口を叩くとは、随分と余裕だな」

「もう勝負はついたも同然だろうがよ。それとも、片腕の手前に俺が負けると思うか？」

「……思う、と言ったら勝負を待つか？」

「はっ、なわけねえだろ」

「だよな」竹は皮肉に笑う。その笑みには、どこか庵戸と同じ空虚さが滲んでいる。

「ああ、俺はここで手前を殺す。それで俺はやっと前に進める」

庵戸は凶悪に唇を吊り上げ、今度こそ急所を穿つ為に穂先を持ち上げる。

「最後に一つだけ聞いておくか。――その白装束は俺への当て付けか？」

『天照』だけに許された白装束。

それは庵戸にとって因縁の衣装であった。

庵戸は竹が自分へのあてつけとして、今宵の戦いにその衣装を選んできたのだと思っていた。

だが竹は――

「いや、この格好は不可抗力だな。少なくともオレの意思じゃない」と心の底からどうでも良さそうな声で言った。

そして同時に、庵戸に対して失望したような顔をする。

固執。

妄執。

最後の質問が衣装の事とは、救いのないほどの外れだった。

別に庵戸を挑発する目的の為に、わざわざ白い和服を選んだわけじゃない。

洗濯していた服がこの急な雨で乾かず、紅葉から借りることになった服がたまたまこれだったというだけだ。

それは竹だけじゃなく、秋野邸に残った他の面々も同じだった。なんとも締まらない真相。

しかし、そんな真相など知るわけもない庵戸は、竹の答えに納得がいかないらしく憎々しいしげに小さく舌打ちをし、それを切欠に最後の一撃を放つ。

真実を話したにも関わらず、納得してくれないというのは快いものではなかったが、頭から疑っている人物に何を言っても仕方ない。それに例え真相を一から伝えたところで、庵戸はそれも信じはしないだろう。

4年前に決定付けられた二人の關係に、もう二度と変化はないのだから――

3メートルの距離を縮める速度は、庵戸にとっても竹にとっても

瞬きよりも短い時だ。

すでに計算も、判断もない。

庵戸は竹の胸を貫くという一つの目的に、四肢の筋肉の運動を委ねているだけ。

勝者と敗者。

強者と弱者。

その位置が確定した今、もはやそれだけで十分なのだ。

『氷槍・青女』の血塗れた穂先は空気を切り裂き、主の命に従い今度こそ竹の心臓を捉える。

それが絶対の結末。

その間には、技量も運動能力も介在しない。

もしも――もしも、その結末を覆すものが存在するとしたら、それは、運命を捻じ曲げる神の所業。

否、それは運命を操る神への反逆か。

――そして、皮肉にも天倉竹は、それを可能にする無能であった。

「――っ?!」

声にすらならぬ驚愕。

次いで、戦慄に庵戸の全身を武者震いが駆け抜ける。

竹の胸を貫くはずの、『氷槍・青女』の穂先。

その穂先は竹の和服に僅かに穴を開け、竹の体の薄皮一枚傷付けたところで完全に停止していた。

――意味がわからない。

理解が追いつかない。

こんな、こんな――

「――ばっ」

馬鹿な事があるわけがない。

庵戸は目の前に起きた、事態を呑み込めずに動揺しつつも、それでも竹の胸元で停止した槍を先に進める為に、全身に力を込める。

しかし、槍はその場で固定されてしまったかのように、微動だにしない。

進まない。

進めない。

ここから先に、これから先に進めない。

それはまるで――庵戸朋愛という少年そのものを暗示しているようだ。

竹は惑う庵戸を尻目に、右手に持った夜月を無造作に離し、そしてゆっくりと、自身の胸に突きつけられた槍を右手に掴んだ。

すると、槍全体が竹に掴まれた部位から、これまでよりも鮮やかな天青色に輝きだした。

「くあ――っ」

槍が輝くと同時に、庵戸から苦痛の声が上がった。

庵戸は一体何が起こったのかもわからず、反射的に、あるいは本能的に両手を槍の柄から離す。

庵戸がその手を離す時に再び、呻きが漏れ、何かが剥がれる音がした。

「な、な――」

槍から手を離し、一目散に竹と距離を取った庵戸であつたが驚きに言葉が続かない。

確かな事は、庵戸の両手のひらの皮がずるりと剥けていること。今まで庵戸が手にしていた槍の柄に庵戸の手の皮がくっついていること。

そして、力強く白銀に燃える瞳を持つ竹が、その槍を持って悠然と佇んでいることだ。

「『氷槍・青女』。さすがに『神具』を奪うのは楽じゃないな。奪うのに、ここまで時間がかかるとは」

竹は静かに呟き、槍を一薙ぎした。

振るわれた勢いで、手の皮が飛んだ。

飛んでいった手の皮は庵戸の体にぴしゃり、ぴしゃりと当たる。

そこで庵戸は、はっとしたように、

「う、奪う、だと？」とやっとのことで問うた。

「ああ、オレはお前からこの槍の使用権を奪い、獲得した。つまりは、オレが『氷槍・青女』の担い手だ」

「ど、どうということだっ?!」

「どうということって、そのままの意味だ。ああ、そういえばお前は知らなかったっけな。オレの持つ異能――

『影見る蛇の眼』。

万物を解析し、理解し、獲得し、1と0の間にある無限の階段を昇る為に、

0を1に近づける為に、運命に与えられた銀色の鏡。

それがオレの能力だ」

「そ、そんな能力を持っているなんて、聞いていないぞ!」

「当然だろ。オレのこの力を知ってるのは、『影見』が発現した時に一緒にいた『十三夜』の連中と、何人かの例外だけだ。そもそもこの力を使ったのは、今回で二回目だ。知れ渡るわけがない」

「だったら『夜月』はどうなる?! 『神殺し』の使用権が手前の力じゃ――」

震えた声で庵戸は叫んだ。

『神具』という最上級の神秘を扱える者は、往々にしてその神秘を発現することが出来る起動キーとして、使用権自体が生まれ持った異能として認識されている。

二つ以上の異能を操る者は希少なれど存在するが、『神具』の使用権が二つ以上の異能を所有することは、ほぼないといっている。

もし『神具』の使用権が、それとは別の力を持っていた場合、それは再現不可能な異能ではなく、再現可能な技術。もしくは、その血肉に受け継がれた特異体質である。

だが、竹のいう『影見る蛇の眼』はそのセオリーを根底から覆すものに他ならない。

「二回目、って言ったろ。神殺し『夜月』。その使用権を獲得したのは、この眼が発現した時、『影見』を最初に使った時だ。まあお陰でこの様だけどな」

竹は自嘲気味に鼻を鳴らした。

しかし、庵戸にはその笑いの意味はわからない。

その笑みの意味を考えるより以前に、庵戸は自身の理解を超えた存在を前に、恐怖に震えていた。

彼にとつて、恐らく生涯で二度目の体験。

オリジナルワン

『唯一の一』を前にした時に、虚勢を張りつつも根源的な部分で感じていたものと同種の恐怖が庵戸の体を支配していた。

鬼気迫る表情で、『最強の矛』を右手に構えた竹は、月光のように輝く銀眼を藍色の少年に向けた。

庵戸は呆然と、竹の姿を見つめながら、

デッドコピー

「……『神の複製品』。まさか、手前が最初にそれを使った相手は——」何かに気付き呟いた。

竹は口角を微かに持ち上げ、槍の穂先をぴたりと庵戸の心臓へ合わせる。

新たな担い手に応じるかのように女神の槍は、その身にまばゆいばかりの天青の水を纏いだす。

そして、就くことのなかった『天岩戸』という組織の頂点を彷彿とさせる声で——

かつての友に、判決を言い渡す。

「法を司り、法に殉じる。」

そこに私情を挟んではならない。

この矛は、この槍先は今のお前を映していたよ。

復讐、羨望、妬み、その熱に侵され、それらを隠した為に濁らされた冷氣……。

温かった。温すぎた。

この槍の『本当』はそんなものじゃない。

この槍の女神の嘆きの声が、お前には聞こえてなかった。

だから、すでに壊れたオレの眼如きに使用権を奪われたんだ。見せてやる。

この槍の、『最強の矛』の本当を。

——『氷槍・青女』——

芸のないひと突きだった。

ただ距離を詰め、愚直なまでに一直線に目標へと繰り出された槍先。

しかし、その芸のない、言い換えれば洗練された刺突は、その柄の長さを自在に変える槍が空手の標的を目指すのであれば、最高の一撃ともいえた。

槍術において、自他ともに最高の技量を持つと認める庵戸も、同じ状況ならばそうしただろう。

——そう。その芸のないひと突きは、まるで庵戸の技術を模倣しているかのようだった。

それもまた『影見る蛇の眼』という、反則的な異能の恩恵によるもののだろう。

そんな風に考えながら、庵戸は竹の放った槍が、正確に第六と第七の胸骨の間を抜けて、心臓を貫いていくのを感じていた。

絶叫が吹き上がり、全身が痙攣した。

そして、その痙攣を止めるように、穿たれた傷から庵戸の体が首から上を残して、一瞬にして氷に包まれていった。

これこそ、竹のいう本当。

『氷槍・青女』。

大気の水分を凍り付かせる氷雪の女神が、人体の水分を氷結できぬわけがない。

その力は混じり気のない、真正の冷氣。

心を凍らせた者のみに、使いこなすことの出来る力であった。

仰向けに倒れる庵戸の口から鮮血が垂れ、コンクリートに叩きつけられた身体が砕けた。

「——何でだよ……何で組織を裏切った……」

それが神に近づく為に製造されたものの生命力か。

首だけになった庵戸は、擦れた、もはや声になっていない声で問

うた。

砕けた庵戸の体から抜けた槍を右手に持ったまま、竹は冷たい眼差しで言葉を紡ぐ庵戸を見下ろした。

敗者たる庵戸の眼から、憎しみは薄れていた。

彼の瞳に残っているのは、憎しみを凌駕する藍色の悲愁。

持っていた力、持つべきはずだった権力、日陰に住まった4年間の日々、信じていた友情、その他の全てから裏切られた者の絶望と深い悲しみが映っていた。

庵戸朋愛、藍の裁判官は命の光が消えていく瞳で訴えかける。

——お前たちの行動は間違いだ。

組織の念願だった『岩戸』を越え、あの絶対者と対峙した時、お前たちは最低の自己保身と最悪の自己欺瞞に陥った。

逃亡。

そして逃亡が叶わぬと知り、『岩戸』を破壊した。

人は自分の見たい現実だけを見る。

お前たちは、その見たくない現実から逃げ出し、遠ざけ、蓋をした。

オリジナルワン

『唯一の一』の事など知らぬと、自分たちに言い聞かせ、気楽に生きてきたんだろ。

そうしないと、心が潰れてしまうから。

だが、しかし、代わりにお前たちは喪ってはいけないものを喪った。魂と誇り。

心を生かす代わりに、腑抜けた心を手に入れた。

それは死者の人生だ。

人の行く道は生まれたときから決まっている。

それを踏み外すことは愚かしい。

何故なら、踏み外す前の道こそが最善だからだ。

踏み外した先に待っているのは破滅でしかない。

だから、お前たちの行動は間違いだ。

「竹……俺はお前を信用していたのに……何で、何で——」

哀れみすら誘う、庵戸の最後の問いかけ。

それを——

「さつき、最後って言ってたろ。だからその問いに答える義理はない」

それを竹は非情にも一蹴した。

「——畜、生。俺は、竹が羨ましくて……妬ましかった——」

最後に、庵戸朋愛は否定し続けていた本心、隠し続けた激情を死に逝く中で、熱く、口の端から洩らし——

——そして、息絶えた。

「……」

竹は息絶えた庵戸の首をじっと見つめながら、悲壮な面持ちで優しく語り掛ける。

「——間違いじゃない。例え道を踏み外して手に入れる死者の人生だったとしても、その先に待っているのが破滅だったとしても、オレには一緒に生きたい友達が、信頼し合える友達がいた。

——オレはお前のことも信頼してたよ。朋」

竹が抱いていたのは信頼。

庵戸が抱いていたのは信用。

その小さくも、大きな差。

それが4年前に、二人を決別させた決定的に埋まることのなかった断崖絶壁たる溝。

竹は、ふと息を洩らし肩の力を抜いた。

強烈な銀色の光を燃やしていた瞳から色彩が失われていく。右手から槍が落ちる。

同時に、竹は右手で左目を覆った。

「う、うう……っ」

襲い掛かる苦痛に耐え切れず、両膝をついた。

どろり、と指の隙間から何かが落ちる。

それが『神具』を操るといふ、規格外の異能を奪った代償か。

竹の左眼は腐り堕ちていた。

昏く窪んだ左目から流れる血は、友人を失った悲しみを表す涙のよう
に頬を伝った。

首だけになった哀れな藍色。

変わらず夜、暗く、厚い雲で覆われた銀色の夜空。

冷たい雨は、粉のような雪へ変わっていく。

ホワイトクリスマス。

色の失われていく夜道。

傘もささず雪を被る隻眼の少年の歩いた道だけが、赤く滲んでいた。

藍の章 42 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

藍の章終了。残りはエピソードその他です。

あと少しだけお付き合いくださいませ。

アラタナハジマリ 43

エピソード

脇と古巣が大部屋に戻ってきてから数十分後、ようやく竹が帰ってきた。

その出て行った時の姿とは180度違う、ボロ雑巾のようなみすばらしい状態になって戻ってきた竹を見て、大部屋にいた全員がたじろぎ、そして閉口した。

新品だった白い和服はぼろぼろの上に赤く染め上げたように血で濡れ、左鎖骨の下には穴が開き、顔の左側は和服の片袖を破って作ったらしい眼帯で覆われていた。

自分で応急処置を施したのか、血は殆ど止まっているようだったが、それにしても惨めなものだった。

庵戸との戦いが厳しいものになるであろうことは予想がついていたとはいえ、ここまでやられて戻ってくるとは誰も思っていなかったのだ。

それだけ竹に寄せられていた信頼は大きなものだった。

竹はそんな皆の想いを、ひしひしと肌に伝わってくる空気と、そして皆に張り付いた表情を、一つとなった瞳でもって感じとり苦笑いする。

自身を過小評価する節のある竹にとって、その信頼とある種の期待を再確認するのは、どこかむず痒いものがあった。

しかも、彼らが竹に寄せる信頼と期待はここまで無様を晒しているにも関わらず、全く揺らいでいないようだった。

だから竹はそれに応える為に、あえて明るい表情を作った上で口を開いた。

「あー、ご覧の通り、ぼろ糞にやられたわ。それじゃ、なお。治療よろしく」

取り繕ったのが見え見えの竹の態度であったが、それでも皆は一樣に安心した様子だった。

それがいつもの竹であり、そういう態度が取れるのであれば、それはいつも通りということだ。

「あいよ。わかった」

返事をしながら、石渡はここで治療するのか、と視線で問うてきた。竹はその視線を受けて、

「よろしく。ここじゃさすがになんだから、別室に行こう。紅葉、昨日の部屋は使える？」と紅葉に聞いた。

紅葉の和服は、何故か竹が出ていった時のものと変わっていた。

「無論だな。あと着替えも用意しよう」

「ありゃ。洗濯物まだ乾いてないの？」

さすがに乾いているだろうと思っていた竹は、意外そうに言った。その声に答えたのは、紅葉ではなく八坂真実だった。

「お召し物は既に乾いておりますが……」

その辺りは使用人の領分ということだろう。

「だそうだ。だが時間も時間だ。あの洋服よりは寝巻きの方が良いだろう。その傷のこともあるしな」紅葉は鹿爪らしく言った。

「そりゃそうか。じゃあお言葉に甘えるよ」

竹が頷くと紅葉は薄く笑って、

「貸した服をそこまでボロボロにしておいて今更だろう」と言った。竹はそこで自分が着ていたのが、貸し与えられたものだということを思い出したらしく、

「……弁償？」と本気と冗談を半々にブレンドした微妙な声で聞いた。

紅葉は一瞬考えるように間をおいて、

「――怪我人に鞭打つ真似はしない。それに鞭を振るえば面倒そうだしな」と会話に入れないでやきもきしている女性数名を流し見て、両眉を僅かに持ち上げた。

紅葉と同じく、若干二名、竹が出て行った時と服が変わっている。

「はは——」

竹は小さく笑うと、そこで会話を切り上げて、いつの間にか隣に立って移動するのを待っていた石渡を促して大部屋を後にした。

治療自体はさほど時間はかからなかった。

竹の応急処置が的確だったことと、石渡の治療技術の高さと限界によるものであった。

肩口の傷は重度の凍傷と合わせてかなりの深手だったが、機能停止した左腕をすっぱり諦めることでどうにか事無きを得た。元々が義手だったので、諦めるのに躊躇はなかった。

左眼の方も綺麗に腐り堕ちていた為、極々真つ当な治療しかできなかった。

石渡は治す人であって、創る人ではないのだ。

失われた左腕と左眼の傷口に最高の治療を施すと、

「あとは松に頼んで」と自分の仕事はここまでだという風に石渡は言った。

松田に義手と義眼を創ってもらえということだ。

元よりそのつもりであった竹は、治療を終えた石渡に軽く頭を下げた。

「あいよ。さんきゅう」

竹の取った態度に石渡は眉を寄せて、

「……タダじゃないよ?」と念を押すように言った。

「怪我人から金取るのか……」竹は茶化すように言った。

「いや、それが仕事だったの」

石渡はこの状態で冗談を言う竹に呆れたように息をついた。

「そりゃそうか」

「そうだよ。あと俺、貧乏なんだよ。どっかの人形師にぼったくられるし」

石渡は苦々しい顔を作った。

それに竹は鼻先笑いをして、

「それじゃ治療費はあとで請求してくれ。あとぼられたのは、ごんまい」

と口元を緩めたまま言った。

別に恨みつらみを言いたかったわけではなく、冗談を言う竹に乗っただけなのだろう。

石渡は竹と同じく口元を緩めて、竹の言葉に小さく頷くと、

「それじゃあ——」と立ち上がった。

治療が終わったので大部屋に戻るつもりようだった。

竹もそれに続こうとしたのだが、石渡に目で制された。

「——ん？」

よくわからなかったが、とりあえずそれに従って座ったままでいると、石渡は竹をおいてそのまま部屋から出て行ってしまった。

安静にしているってことか。

竹は首をかしげる。

確かにこの数時間で、竹は十三夜での怪我人ランキングトップに一躍、躍り出たわけだが、それでも絶対安静にしていなければならぬという程ではないと考えていた。

しかし、本職の石渡が止めるくらいだから思っているよりも、悪いのかもしれないと、あっさりと自分の判断を覆して、竹はほうと息をついた。

「……疲れた」

肩の力を抜くと、無意識ながらそんな言葉が出た。

なるほど石渡は自分の疲れを見抜いて制したのか、と納得しつつ無意識の発言に苦笑いする。

包帯で頭と肩をぐるぐる巻かれた男が、一人になった途端、ぼつりと弱音とも愚痴とも取れる独り言を呟くという気味の悪い光景を頭に浮かべて、自分のことながら可笑しくなった。

竹はくつくつと声を押し殺して笑った。

それもまた不気味な光景だろうと、再び思って更に可笑しくなったが、さすがにこれ以上笑うと完全に危ない人なので、大きく深呼吸

して笑いを止めた。

笑いを止めると、そのタイミングに合わせたように襖が開く。

「危ない人がいるわね」

似合っているようで似合っていない和服姿のアレクサンドラは、ずばりそのまま率直な感想を述べて、部屋に入ってきた。

どうやら笑い声が部屋の外に漏れていたようだった。

しかし竹は、なんのことだ、と恍けた表情を作ってアレクサンドラを見返した。

アレクサンドラは肩をすくめて竹の正面に座ると、背筋を伸ばし、肅然とした声でアレクサンドラは言う。

「あちらに戻る前に伝えておくことがあります」

「何？」

アレクサンドラにつられて竹も背筋を伸ばす。

「今月分の賞金首の受け渡し。確かに完了しました。今回受領したのは『破鍋』^{われなべ}と『綴蓋』^{とじふた}の二人です」

アレクサンドラは騎士団の王女の顔をして言った。

騎士団と十三夜の間の取り決め。

竹がいない間に決行された作戦で、今月の担当者である脇と古巢の捕らえたのは、それなりに有名な夫婦であった。

竹はそれを聞いて、

「ああ、そう」

この報告の為に石渡は自分を残して出て行ったのか、と的外れなことを考えながら、気の抜けた返事をした。

「ああ、そうって……それだけ？」

あまりに気の抜けた竹の返答に、アレクサンドラは顔を顰めた。しかし、竹はアレクサンドラの反応を不思議そうに見た。

何か対応を間違えたのだろうか。

そう考えても思い当たることはなかった。

『破鍋』^{われなべ}と『綴蓋』^{とじふた}。

悪名高い非道な夫婦を捕らえた事に驚けばよかったのだろうか。

だが竹にとって脇と古巣がかの夫婦を捕らえた事など、驚くほどのことでもなかった。

竹にとって、十三夜にとってその辺の賞金首など歯牙にもかけぬ存在なのだ。

むしろ竹が驚くとするならば――

竹は顔を顰めるアレクサンドラに何か言った方が良いのだろうと察して、言葉を搜した挙句。

「その二人しか捕まえられなかったの？」

それに命を賭け、生業としている賞金稼ぎが聞けば、激昂するよなことを竹はやはり気の抜けた声で言った。

今回の作戦――対局では、脇と古巣の二人に加え、甲斐が助力していた。

その上でたった二人しか捕らえられていない事実が、竹にとっては驚くべきことであった。

しかしその対応は、どうやらアレクサンドラが期待していた類のものではなかったらしい。

アレクサンドラは顰めた顔そのままに、

「捕まえたのは他にもいたわ。でも大半が死体だったから、受け渡しには使えなかったの。まあ死んだのは全員、受け渡しに使えない下位のランカーだったから問題ないけど」と言った。

「そういうことか」

竹は得心がいったというふうに頷いた。

だが、やはり何故アレクサンドラが顔を顰めているのかわからない。

つい先ほどまで庵戸という、間違いなく世界最強の一人である人外と戦ってきた竹にとって、かの夫婦の存在などちっぽけなものだ。例えその夫婦が、アレクサンドラにとっては大戦果に映る対象だったとしても。

屋敷の庭先で繰り広げられた、三人の女神の戦姿を目の当たりにして感じた差。

それに追い討ちをかけるような竹の気の抜けた反応。

あくまでも人間の域を出ない自分と、人外の領域に当たり前に住まう者。

その差を、自分と竹が違うものであることを、改めて痛感しアレクサンドラは顔を顰めたのだ。

とはいえそれはアレクサンドラにとって無自覚なものであった。

人の上に立つべくして生きてきた彼女は、本来であればそんな劣等感を表に出してはいけない。

「……何で怒ってんの？」

アレクサンドラの表情が変わらない理由のわからない竹は、その不思議を考えることをやめ、本人に聞くことにした。

アレクサンドラはここでようやく自分が不快に顔を歪めていた事を自覚した。

そして、無自覚ながら僻みに似た感情を前面に出していた事を恥じるように、頬を赤くした。

「怒っていないわよ？」

頬を染めたのは一瞬だった。

アレクサンドラはすぐに澄ました表情を繕い、なんのこたかしら、と優雅に笑みをこぼした。

「ならいいけど」

確実に嘘だとわかる反応だったが、竹は追及しなかった。

普段であれば、S心が刺激されて少し追及したであろうが、今の竹はそんな気分でも体調でもなかった。

「それで、死体の処理は？」

逸れた話を元に戻すのに、竹はあえて事務的な口調で聞いた。

「勿論、終わってるわ。この家の使用人にも協力してもらったみたいだけど」

「協力？ どうして？」

死体の処理なら脇と古巣だけで十分に出来る。

わざわざ協力してもらった理由が、竹にはわからなかった。

「向こうからの申し出よ。まあどちらにしろ、私も協力してもらうつもりだったけど」

ますますわからなかった。

アレクサンドラが何を協力してもらおうというのだろうか。

「捕らえた賞金首を野ざらしにしておくわけにもいかないでしょ。少なくともタケ君が良しというまで、私たちはこの家に留まらなければならぬわけだし。だから協力してもらったの」

アレクサンドラは、何を今更というように首を振った。

「あ」

「え、何？ まさかその事、考えてなかったの？」

「……まったく」

「呆れた……」

竹は賞金首を捕らえるところまでの事は考えていたが、捕らえた後のことはさっぱり考えていなかった。

それだけ差し迫っていた庵戸との戦いに集中していた、ということだろう。

屋敷を提供してもらったことも、服のことも、此度のことも、本当に紅葉には頭が上がらない。

竹は頭を掻きながら苦笑いした。

女の勘か。

自分以外の女のことを竹が考えているのを察したアレクサンドラが眉を寄せた。

それに気付いた竹は咄嗟に、早口にまくし立てる。

「じゃあ『破鍋』^{われなべ}と『綴蓋』^{とじふた}の二人は捕らえられたまま、屋敷のどっかに収監されてるわけだ？」

幾人もの女性に好意を持たれる者の処世術であった。

とはいえ、その処世術はさり気なく自然に行わなければ意味のないものであり、そもそもそんな状況に持っていた時点でダメダメなのだが、しかし、その上で天倉竹という人物は許されるのだから、もはや流石と賞賛される領域であろう。

「そうね。でも収監されているのは、正確には二人じゃなくて四人よ」

ため息をつきながら、アレクサンドラは指を四本立てて竹にみせた。

「四人？」

「ええ、四人。『破鍋』^{われなべ}と『綴蓋』^{とじぶた}の二人の他の生存者。さっき大半が死体だった、って言ったけど、生きてるのはその四人だけってわけね」

「いや、わけねっていわれても。その残りの二人は――」

「『黒豹』^{くろひょう}と『沈黙する水牛』^{バツファロー}」

竹が言い終わる前に、アレクサンドラが残りの生存者二名の名を告げた。

「あらら、それなりに大漁だな」

その二人の名を聞いても、竹の感想は淡白だった。

その反応はやはりアレクサンドラの求めたものと違い、再び差を感じさせるものであったが、彼女は今度は表情を変えなかった。

ある程度、予想がついていたこととはいえ、それはさすがに王女といったところだろう。

同じ過ちは繰り返さない。

「生存者っていつても、『黒豹』^{くろひょう}と『沈黙する水牛』^{バツファロー}は殆ど死体みたいだけど。まるで廃人ね。静かなものよ」

「ケンタか」

竹はすぐにその二人が誰の手に掛かったのか察した。

「らしいわね。何をどうしたかは詳しく知らないけど。『破鍋』^{われなべ}と

『綴蓋』^{とじぶた}も静かだけど、あれは話たくても話せないって感じかしら」

アレクサンドラは得体の知れない糸で隙間なく、ぐるぐる巻きにされた夫婦の姿を思い出して、肩をすくめた。

そちらは脇によるものだろう、と竹は声に出さずに頷いた。

そして、そこであることに気がついた。

「あれ？ 捕らえたのは四人なんだよな？ だったら何で受領した

のは二人だけなんだ？」

捕らえたのは四人。

騎士団との協定では、月に二人以上の賞金首ということになっているから、それ以上引き渡してもいいはずである。

むしろ引き渡すべきだろう。

十三夜にとつて、そんなものは手元に置いておいても意味はないものだし、騎士団にとつて捕らえられた賞金首を見過ごす必要はない。

「ああ、それなら――」

竹の当然の疑問に、アレクサンドラはどこか困ったように口を開く。

「『黒豹』^{くろひょう}と『沈黙する水牛』^{バツファロー}の二人は来月分、ということらしいわ」

「は？」

「だから来月分よ」

アレクサンドラは苦笑いを貼り付けて、その来月分とやらの経緯を説明し始めた。

『おい、ラッキー。二人余るじゃん！』

なあケンタとコーチンよお。丁度いいから余った二人売ってくれないかー？

来月の担当俺らなんだよ。

ケンタにやられた方がいいなー。残りの二人は来月までそのままじゃ保ちそうにないし。

いいちゃんもそれで良いよなー？』

古巣と脇が四人の賞金首を持ち帰った時、浅黒い肌の変態はそう言つて、騎士団の王女の目の前で捕らえた賞金首の売買という、とんでもないことを平然とやってのけたそうなの。

そんな説明を受けた直後、竹はその漁夫の利男の破天荒な行動に、さすがに言葉が出なかった。

TPOをぶつちぎりすぎだった。

「……………それで、君はそれを見過ごしたと」

なんとか言葉を絞りだした竹から出たのは、アレクサンドラへの確認だった。

「ええ……まあ、口を挟む余地もなく、ね」

アレクサンドラは曖昧に笑った。

「すみません……」

いくら自分たちが型破りだとしても、いくらなんでも型破りすぎた。

竹はアレクサンドラに心からの謝罪を送ると同時に、とりあえず遠藤には何らかのペナルティを課そうと考えた。

これではさすがに、アレクサンドラの面子に泥を塗る。

しかし、アレクサンドラは何故かかぶりを振った。

「別に私のことはいいわ。あなたたちの前では私の面子なんて、それこそ無意味なものだから。それを再認識できたことだし」

「いや……でもさすがに」竹はアレクサンドラを哀れむように見た。だが、その視線をアレクサンドラは受け流し、

「哀れみなら別の人たちにしてあげて」

と深い哀れみを浮かべた。

「夕食、二食分で売られた身からすれば私なんて幸せな方よ」

『黒豹』と『沈黙する水牛』。

長年に渡り第一線を張ってきた高名な二人の賞金首の末路は、夕食二食分であった。

「――ああ」

竹とアレクサンドラは二人同時に、二人の賞金首を悼むように深く息をついた。

アラタナハジマリ 43 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

エピソードです。微妙に長くなったので二つにわけること。もはや長くなるのは必然でしょうか。

アラタナハジマリ 44

そこでアレクサンドラからの話は終わったらしい。

息をついた後に黙ったアレクサンドラを見て、竹はそう判断した。竹は「それじゃ、戻るか」と言って立ち上がった。

一瞬、オレンジの瞳に何か迷うような色が浮かんだったが、結局、アレクサンドラは何も言わずに竹に続いて立ち上がった。

部屋から出て、二人は並んで大部屋まで板張りの廊下を歩く。

その途中、この角を曲がれば大部屋への扉が見えるというところで、アレクサンドラは立ち止まり、いよいよ何か決意したように口を開いた。

「私、暫くお父様のところに戻るわ」

凜とした声が大部屋からの喧騒が微かに漏れる廊下に響いた。

竹は立ち止まりながら、突然のその言葉に戸惑った。

元々、騎士団の王である父の反対を押し切る形で、この国に留まった彼女だ。

今月の頭にも、騎士の派遣を断っている。

それらのことが何か拗れたのだろうか。

それとも――

アレクサンドラは、色々立場のある人間である。

竹の知らぬところで何か問題を抱え、その上での帰国なのだろうか。

はたまたそれは自分に関連してのことかもしれない。

表沙汰になってはいないとはいえ騎士団の王女と、十三夜のトップが形なりとも婚約をしているのだから。

竹が困惑顔のまま色々と考えを巡らしていると、アレクサンドラは小さく微笑んだ。

「心配してくれるのね」

「あ、ああ、まあそりゃ……」

少なくとも竹の知っている限り、アレクサンドラはつい最近まで帰国など口にしなかったし頭にもなかっただろう。

もしそれが望まぬ帰国で、竹に責任があるとするのなら――

「いいえ、違うわ。タケ君は関係ない。……いえ、少しはあるのかしら？」

アレクサンドラは口元を緩めたまま、くすりと笑った。

「……どうして？」

急に帰国する気になったのか。

竹はわからぬままに、口にしていた。

その自分でもわかる狼狽した口調に、竹は自分のことながら驚いていた。

竹の狼狽が楽しいのか、アレクサンドラは眉尻を下げる。

「理由は、色々あったのよね。その大半が騎士団の王女としての務めに関すること。でもそんなことじゃ私は動かなかった。でもね、今日、というかついさっき決定的な事が起こったのよ」

「……何？」

「オオガミシンリ。ヤマブキソウカ。アキノクレハ。彼女たちの散歩姿を見て思ったのよ。今のままじゃ私は逆立ちしたって彼女たちに勝てないって。それが理由」

「散歩？」

何のことかわからぬ竹は、眉を寄せた。

「ええ、散歩。彼女たちの散歩の邪魔をする路傍の石。癪だけどそれが今の私」

「は？」

言っている意味がわからなかった。

アレクサンドラは、困り顔の竹に助け舟を出すように、

「正当防衛は、タケ君との約束を破ったことにはならないのね。随分派手な散歩だったわ」

と言って曲がり角から先にある部屋を目で追った。

「え？ あ――」

竹はまさか、という表情を一瞬浮かべた後、やられたと両肩を落とした。

「まあそういうわけだから、私は一旦本国へ戻ります」

何がそういうわけなのか、結局のところ竹には本質は理解できなかったが、それで揺ぎ無い決意を秘めたアレクサンドラの表情に竹は、しっかりと頷いた。

「わかった。それでどのくらい戻るつもり？」

「ふふ、寂しいの？」アレクサンドラはどこか嬉しそうに言った。

「さあ？　それがわかるのはいなくなってからだろ」

既に先ほどの狼狽も、困惑もなくなった竹は、極々普段通りの口調で返した。

その竹の答えにアレクサンドラは、嬉しそうにしていた表情を不満に染めて、その整った顔を竹に近づけた。

じい、っと橙色の瞳で竹を見据える。

「それもそうね」

不満気な顔から一転、アレクサンドラは表情を緩めると、

「いつ戻るか決めていないけれど、浮気しちゃだめよ？」

唇が触れるか触れないかくらいの微かな口付けをして、早足で竹の元から去っていった。

「……………うおう」

唐突な攻勢に完全にフリーズした竹が、なんとか機能を再開して搾り出した声は、なんとも締まらぬものであった。

竹は再起動してすぐにアレクサンドラの後を追ひ、大部屋に戻った。

一斉に視線が集まる中で、アレクサンドラとも目が合ったが、彼女はいつもと同じ澄ました表情で、ありていに言えば普段通りだった。

思春期まっさかりの中学生でもあるまいしそんなものかな、と竹は納得して適当に皆に声をかけると、これまた適当なところに腰を

下ろした。

竹が腰を下ろすと、蒼香と深翠がすくっと立ち上がり、そして竹の隣にそれぞれ腰を下ろした。

アレクサンドラと紅葉は、そのままの位置に座ったままだった。実はアレクサンドラも先の二人と同様に移動したかったのだが、それは出来なかった。

澄ましているように見えて、彼女は先ほどの自分の行動に内心バクバクであった。

紅葉はそんなアレクサンドラを見て、何やらニヤニヤとしていた。どうやら廊下でのやり取りは彼女には筒抜けだったようだ、とニヤニヤしている紅葉を見て考え、すぐに紅葉を視界から外した。

紅葉はニヤニヤしてはいるものの、微妙に額に青筋が立っていた。触らぬ神に祟りなし。

竹は自分に言い聞かせるように、心の中で繰り返した。

そんな事をしていると、いつの間にか蒼香が竹の前にグラスを差し出した。

「はい。これ竹の」

「ああ、ありがと」

竹が右手でグラスを受け取ると、そのグラスに深翠が酒を注ぐ。

グラスに注がれていく透明の液体の匂い、否、全く匂いのしないその異変に竹は気付いた。

「深翠、ちょっとストップ！ これはオレ飲めない奴だ」

空のグラスになみなみと注がれたそれは、用意されたアルコールの中で一、二を争う度数を持つ酒であった。

「それがどうしましたか？」

「いや、どうかしましたか、じゃなくて」

ロシア人だってこんな量は注がないというくらい、無色の液体が注がれたグラスを抗議交じりに深翠に突きつけ――気がついた。

深翠の額に浮かんだ青筋に。

「んなっ?!」

竹は驚きと恐怖で深翠から目を逸らす。

逸らした先に待っていたのは、同じく青筋を浮かべた蒼香であった。

「あれ？　どうかした？　竹」蒼香のスイートボイス。

だがこの状況で甘さの濃度は恐怖に直結する。

「どうもしませんよね？」聞いたことのない深翠の甘い声が、耳元でささやかれる。

何故、深翠と蒼香がキレているのか。

多分、というか確実に青筋立てたニヤニヤ笑いで困窮する竹を眺めている紅葉の仕業であることは間違いなかったが、兎にも角にも離脱するのが優先事項であった。

竹は腰を浮かそうとして――失敗した。

竹の両脇はすでにがちりとホールドされていた。

逃亡は不可能。

竹はがっくりと頭を垂れて、
「せめて……せめて割ってくれ。それでも怪我人なんです」と懇願するように言った。

その普段は見せない、弱った竹の素振りに蒼香と遠目で見ていた紅葉は気持ちを動かされたようだが、

「それは邪道ですよ」

と深翠は竹の懇願を一蹴した。

翠の人は厳しかった。

――血も涙もねえ……。

もし母親になったら子供の漫画とか平気で捨てるタイプだ。

鬼だ。この女は鬼だ。

ていうか本物の鬼が揺らいだのに、揺らがないってどういうことよ。竹はさすがに抗議の声を上げようとして――

「飲め」

その深翠の鬼もかくやという一言の前に、口を噤んだ。

触らぬ神に祟りなし。

竹は再び心の中で復唱した。

その一連のやり取りを気の毒そうに、あるいは楽しそうに眺めていた十三夜の面々だったが、そのやり取りが一先ず終わったところで、松田がよく響く高い声をあげた。

竹が何事かと、松田を見るとその手には酒の注がれたグラスを持っていた。

見回すと、全員が手にグラスを持ち、その時を今か今かと待っている。

そういうことか。

竹はこれから起こる事を理解して、松田の口上に耳を傾けた。

「えー、それじゃあ、TKも帰ってきまして、クリスマス・イブと
いうことで――」

――メリークリスマス!!

全員が口々に声を出し一斉に、グラスを掲げて打ち鳴らした。

――それは誰の為の宴か。

生誕を祝う聖なる前夜祭。

しかし、十三の夜に限って今宵の宴は祝うものではなく、別れを告げるものであったのかもしれない。

＊

天倉竹を愛した罪。

庵戸はそう言って、荒川宿禰に罰を与えた。

しかし、竹を愛するということ意味では、宿禰以外にも該当者はいる。
大神深翠。

山吹蒼香。

秋野紅葉。

アレクサンドラ・ワナー。

その中で何故、宿禰だけが庵戸の標的として、藍の裁きに掛かっ

たのか。

それは――偽物を裁くつもりはない。

この言葉に尽きるだろう。

与えられた愛。

偽物の愛と、真実の愛の差。

運命を捻じ曲げられ、生き残ったが抱いた偽物。

そんな紛い物を、自らを誇り、自らを信じた、あの高潔な法の使用者が手にかけるわけがない。

庵戸にとっては、彼女らの愛は汚物以下のものだった。

そういうことだ。

しかし、竹は想う。

例え偽物であろうと、その内に秘める物が本物以上に輝いているのなら、それは何よりも尊く気高いものだろう、と。

本物しか認められなかった庵戸。

偽物でも認めることの出来る竹。

つまるところ、二人の差はそんなものだ。

しかし、竹なら受け入れる偽物は、決して庵戸は受け入れることができない。

生まれた時から本物を追い求めていた庵戸と、生まれた時から偽物を知っていた竹とではスタート地点もゴール地点も違いすぎた。

ゆえに、ついぞ二人の道が交わらなかったのは確定された物語。

それでも――

知らない奴の事はどうでも良い。

でも、知っている奴をどうでも良く思えるほど強くはない。

それが美少女ならなお更だ。

そんな信条を持つ竹に、今回のことは堪えた。

身体にも心にも。

かつての友と本物の愛を抱いた少女。

その二人を竹は己の手にかけた。

新月の夜に始まり、

満月の夜には仮初の、
そして、月の欠けた聖なる夜に真に終わりを告げた、藍色の物語。
竹はこの史上最悪の12月を胸に刻み付け、それでも前に進むこと
を新たに決意する。
竹の不自由な視界には、好きな人たちが楽しそうに笑っているのが
映っていたから。

アラタナハジマリ 44 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

エピソード後半部です。

やっとここまでできたなあ、と感慨深かったりします。

が更新が遅いせいですね。すみません。

あと1話で終わり……のはずです。あと少しだけお付き合いください。

復讐裁判官 45

復讐裁判官

寒い冬の日。

黒と白の外套が訪れる。

怪物と魔法使いが、黄金からの許可を言い渡す。

相容れなかった銀色への復讐。

時はきた。

藍色は矛を手に取り狂喜に吼える。

この手で裏切り者を裁くのだと。

例え、それが叶わぬことだとわかっていても。

例え、それが自らの誤りだとわかっていても。

もう止まらない。

誰も止めてくれない。

信じ切ることが出来なかった藍色に頼るべき友はいないのだ。

――それでは、友愛に背いた罪への裁きを受けるとしよう。

4年前に止まった時を進めよう。

復讐心を後押しに、止まらない事が庵戸朋愛への裁きなのだから。

＊

――疲労と高濃度のアルコールの猛攻に、ぱたりと電池が切れたように意識を失い、竹が目を覚ました時、すでに皆の姿はなかった。

時刻を確認すると、正午を回っていた。

重くだるさの残る身体。

それは溜まりに溜まった疲労が原因なのか、それともアルコールの残滓に起因するものか、はたまた12時間以上の眠りによるものなのか。

その全てが当てはまるようで、どこか違う気もした。

独りきりになった大部屋は面積以上に異様に広く感じられ、祭りの後のような静けさで少し寂しい。

柄にもなく素直にそう思ってしまった。

だから多分、この身体の重さは精神的なものが比重の多くを占めているのだろう。

そもそも物理的には片腕一本分は軽くなっているのだから。

竹は本気なのか冗談なのか、自分の考えに落ちをつけてから、帰り支度をする為に立ち上がった。

仕度といっても『神具』の二つと携帯電話、自分のライターを手元に持ってくるくらいのものであった。

タバコは昨晚吸いきってしまったのか、それとも吸われきってしまったのか、見当たらなかった。どちらなのかよく覚えていなかったが、別段どちらでも良いことだった。

それらの仕度があらかた終わったところで、八坂真逆が大部屋にやってきた。

乾いた洋服を手渡され、食事をしていくかと聞かれたが竹は丁重に断った。

腹が空いていない以前に、皆が帰った以上自分もそうするべきだと思っただのだ。

「他の連中は？」

「今朝早くに皆様お帰りになりました」

その時、起こしてくれても良かったのに、と思ったが今更だったし、皆が帰ったことに気付かないくらいに爆睡していたのは自分だ。そんな些細な不満を述べても仕方のないことだった。

八坂真逆は着替えを手伝いますといってきたが、竹はこれも断った。

片腕の竹を案じての善意か、もしくは職業精神によるものだと思われるが、竹はここで軽々しく頷くほど軽薄でも、軽率でもなかった。

た。

八坂真逆は一瞬、難色を顔色で示したが、お客様の要望ということで食い下がることはせず、帰りは車で送ると少し強い語調で竹に伝えた後、準備が済んだら声をかけるように告げて、退室していった。

竹は最後の申し入れは断らなかった。

片腕と左眼のない、出来損ないの海賊みたいな状態で、堂々と公共機関を使って帰路につく勇氣は竹になかった。

義手と義眼が完成するまでの辛抱とはいえ、外を歩けば否応なく注目が集まるだろう。

救いといえば、学校に行く必要のない冬休み期間に入ったことか。まあその分、平日だろうと外に同じく冬休みを満喫している学生が増えているので、微妙なところだったが……。

暫くは引きこもりの生活になるか。

食べ物が出前か、松田あたりに頼めばいいだろう。

そんな風に考えを巡らせながら、竹は普段の倍近い時間をかけて着替えを完了した。

ジャケットは袖を通さず羽織るだけ留め、『夜月』と『青女』を右手で抱えるようにして、八坂真逆を捜す為に部屋から出た。

八坂真逆は捜すまでもなく見つかった。部屋の外で待っていたらしい。

竹が準備を終えたのを確認すると、八坂真逆はそのまま竹を従えて玄関まで歩を進めた。

竹が綺麗に揃えられた靴を履き終えると、正門を出たところに車が待っていると八坂真逆は告げ、恭しく頭を下げて竹を送り出した。

竹も軽く会釈を返し、連日の礼を一言二言告げて正門まで一直線に歩いていく。

昨晚の雪が少しだけ積もっていたが、天気は快晴だった。

それでも冬の寒さが肌を刺す。

見送りがあるかな、と思ったが紅葉の姿は最後までなく、竹は正門

前につけられた車の傍らに立つ女性に会釈した。

運転手はこの屋敷に來た時と同じく八坂真実。

双子の姉妹だからなのか、それとも長年の努力で身に付けた賜物なのか、八坂真実は妹と寸分違わぬ恭しいお辞儀をし、洗礼された動作で助手席の扉を開けて竹を座らせた。

竹は乗り込むときに一瞬、躊躇った。その車の派手さに。

車種まではわからなかったが、フェラーリである。それも見事なまでに真っ赤だった。

誰の趣味なのか言うまでもないことだったが、そこを突っ込むべきか、それともこんなものを購入できる経済力に突っ込むべきか、もしくはここまで俗世間に染まってることを突っ込むべきか。

そんなことを考えてるうちに赤いフェラーリは動き出していた。

エプロンドレスがフェラーリを軽やかに走らせるという、非常にシユールな光景を横目に、竹は八坂真実と少しだけ会話をした。別に彼女の姿を見る必要はなかったのだが、運転中に決して長くはない髪をポニーテールにされては、見ざるを得なかった。

仲間内でしか知られていないことだが、竹はその髪型が大好きだった。

さて、彼女の話では竹が死んだように眠った直後、深翠がアレクサンドラに怒られたらしい。

何故、竹が起きている時に怒らなかったのかといえば、昨日アレクサンドラがああ降、竹に近づかなかった事を考えれば理由はなんとなく察した。

アレクサンドラの怒りはかなり凄かったらしいが、深翠の牙をむき出しにした対抗心も中々のものだったとか。

蒼香と紅葉は怒りが飛び火することを避けて、深翠の助けには入らなかったらしいが、『もしお二方があの喧嘩に介入したら戦争になりまっていたでしたね』、などと八坂真実は笑えない冗談を言ってくれた。

車中での会話はその程度で終わった。

会話が続かなかったのではなく、竹の自宅マンションに到着したからだ。

道交法という言葉は秋野家の従者にはないらしかった。

道路に雪が積もっていなかったのは精神上、本当に幸運だったといえる。

竹は『神具』二つを引っつかんで車から降りると、微妙に引きつった笑いでスリルドライブをかましてくれた八坂真実に礼を言って、爆音を残して去っていく赤いスポーツカーを見送った。

幸いにもマンション前に人通りは少なく、竹は奇異の目が集まる前に足早にマンション内に入った。

そして――自宅の扉の前に立つ男女を前にして、自分が気を抜きすぎていたことを初めて認識した。

激戦の後の油断。心の隙間。

その世界に身を置いた者として、いかなる時でも持っていなければならぬ心構えを竹は完全に解いてしまっていたのだ。

そんな状態の竹にとって――

黒須螢。

天野輝血。

この二人の存在は、あまりにも強大で、最悪だった。

全身が粟立つ。

警鐘が鳴る。

今、この二人と戦闘すれば手負いの自分は間違いなく殺される。

そんな確信めいた思いが胸中を支配した。

同時に、どうすれば生きる事が出来るか必死に計算する。

だがどんなに計算しても、出される解は『死』以外になかった。

それだけ絶望的な状況。

ならば腹を決めて最後まで足掻くのみ。

しかし――竹が覚悟を決めたところで、天野輝血が声をあげて笑った。

その横で黒須螢も苦笑い交じりだが、それでも輝血に同調するように笑う。

そこで二人から竹へと、巧妙に隠されながらも濃厚に突きつけられていた戦意が拡散していった。

「安心してください。今日は戦いにきたわけではありません」

「少し、悪ふざけが過ぎました」

黒須と輝血は口々に言って再び笑った。

どういうことかわからなかったが、竹は二人が解いた戦意と、その言葉に嘘がないことを感じ取り、強張った身体から力を抜いた。それでも最低限の警戒心だけは残した。

それで良しとしたのか、黒い魔法使いと白い暴君は口元を緩めたまま互いに頷いてみせた。

そして微笑はそのままに姿勢を正すと、

「彼女から一つ託けたくけを預かってきました」

ゆっくりと静かな声で言った。

「————っ」

黒い外套の男の口にした彼女という単語に、竹の心臓の鼓動が一気に跳ね上がる。

黒須の言う彼女。

それは『唯一の一』オリジナルワンという筆者。

虹と黄金の少女。

極光アウロラの名を持つ全能。

天倉竹を壊し、『神の複製品』デッドコピーの名を付けた絶対者。

何故、どうして、様々な思いが竹の脳内で駆け巡るが、その中で大半を占めていたファクターがあった。

それは、何を言われるのか、という恐怖であった。

竹は目の前の二人に問いかけようと再び、いや先ほどよりも更に強張った顔で口を開こうとして——白い外套の女の声に遮られた。

「メリークリスマス」

「——は？」

その間の抜けた反応は、気を張っていたからの反動か。

それとも、恐らく生涯で初めてであろう言葉を言った怪物に対しての驚きか。

混乱気味の竹には、そんな自分の心境を冷静に分析できるわけもなく、

「いや、え？ ……それだけ？」

と歴史を操る少女の従者に問うのが精一杯だった。

「ええ、それだけです」

黒須は慇懃に、されどにこやかに頷いた。

「メリークリスマス。これが彼女からの託けです」

啞然とする竹に、含み聞かせるように輝血は丁寧な声で再び言った。

まさかそれだけではないだろう。

ただこの一言を言うためだけに、この二人が遣わされたのだとしたら、とんだメッセンジャーだ。

この二人は、竹が一瞬でも死を覚悟させられるほどの存在なのだから。

しかし、そんな竹の思惑に反して黒須と輝血は、黒と白の外套をはためかせ、殺気も戦意もなく、するりと竹の脇をすり抜けていく。

——本当にこの二人はたったそれだけの為に現れたのだ。

竹はそう理解すると、この二人をただこれだけの為に動かす一人の少女へ再び深い畏怖を覚えた。

「ああ、そうそう——」

なんととはなしに黒須が声をあげた。

竹はその声に反応して、後に振り向く。

相変わらず微笑を絶やさない男と、すでに表情を消した女が立ち止まっていた。

最強の魔法使いは竹が振り向くと、その後方にある扉に視線を合わせ、

「そろそろ起きる頃でしょう」と言って踵を返した。

竹がその言葉の意味に気付く直前だったか、直後であったか、恐らくその境界線上の刹那。

蛇の名を持つ白い再生者は、長い絹のような髪の毛をかき上げて、「お揃いになりましたね」

一筋の刀傷によって永遠に閉ざされた左目を見せ付けた。

それを見てどこかそわそわしながらも無然とした表情を返した竹に、輝血は再び前髪で左目を隠し、一瞬、母性に溢れた笑みを微かにみせると、黒須のあとを追うように踵を返した。

竹は二人が去るのを最後まで見届けず、大慌てで玄関を開けて自宅へ入った。

鍵は予想通りかかっていなかったが、そんなことはどうでも良かった。

真っ直ぐに寝室へと向かい、扉を勢い良く開ける。

昨日の決意を月まで吹き飛ばす衝撃。

隻眼の視界に飛び込んだ光景を見て、竹は下唇を噛みながらも、その口元には抑えきれぬ微笑が浮かべていた。

雪の残るクリスマス。

銀色を訪れた黒と白は、黄金からの託けを言い渡した。

聖夜の贈り物。

極光のサンタクロースから――死した少女への生のプレゼント。

復讐裁判官 45 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

ラストの話も長くなりましたので、切りのいいところで3話にわけ
ることにしました。

＊

肉を食いちぎり、血管を食い破る。

そこから止め処なく噴出する大量の血潮を、喉を鳴らして飲み干す時が、最高の瞬間だった。

血は限りなく甘く、全身を恍惚に満たす。

痙攣する犠牲者の身体に何度も爪を立てながら、殺戮の愉しさに酔っていた。

耳元で誰かが叫んでいた。

更なる血を、更なる肉を。

その声は恐ろしい猛獣か、この世のものでない怪物みたいだった。

声の主を捜して後を振り返ってみると、そこには人の血を吸う化物が薄気味悪く笑っていた。

それは私の姿をしていた。

そこで漸く、私は自分がしている事に気が付いた。

それは幸運なことだった。

だって、ただ暴力的な欲望の洪水に巻き込まれているだけでは、吸血鬼の醍醐味は味わえないから。

自覚してこそ、真の快樂が待っている。

私はこの時、人間だった自分を捨てた。

それからの記憶は曖昧だった。

殆ど覚えていないといっても良い。

ただ快感に酔いしれていた私は誰かに敗れ、そして殺されたという事実だけが頭にあった。

私を殺した人は誰だったか、名前も顔も思い出せない。

でも、何かとても大事な人だったような気がした。

それは気のせいだったかもしれない。

それでも暗闇の中で、私はずっとその人の事を思い出そうと必死だった。

この暗闇が何なのか。

これが死後の世界なのか、はたまた別の何かなのか。

そんなことはどうでもよかった。

ただただ、その人のことが気になった。

殺戮、破壊、吸血、どの衝動も起きることのない、たった一人の暗黒世界で、私はその人のことだけを考えていたんだ。

どれくらいの時間をそうしていたかわからない。

もしかしたら時間なんて経っていないのかもしれない。

何も判別できない闇の中、その少女は現れた。

現れた、というのは間違いかもしれない。

私はその女の子の姿も見えていなければ、声も聞いていない。

でも、その女の子はそこにいた。

極光に煌く圧倒的な存在感。

闇を払う、黒金の剣。

女の子は笑った。

見たわけじゃないけど、そんな気がした。

その笑みは、ずっと考えていた人の笑いに似ているような気がした。

そしてその女の子は——私の胸をその剣で貫いた。

全てを灼きつくす炎の渦が体中で、踊り狂っているようだった。

このまま消えてなくなってしまういたい。

そう思わせるほどの苦痛。

だけど、私は消えたくなかった。

消えてしまえば楽になる。

でも消えたら二度と、その人のことを考えることが出来なくなってしまう。

だから、私はその身を焦がす業火の中で一心不乱に唱え続けたんだ。その好きな人の名前を——

「——天倉君っ!!」

>i2490—341<

目の前が急に明るくなったことよりも、なんだか久しぶりに自分の声を聞いたことよりも、私が驚いたのはその名前を私が思い出したことだった。

思い出してみると、どうして忘れてしまっていたのか不思議なくらいだった。

以前の私は四六時中、その人のことを考えていたくらいなのに。

「……そうだよ。天倉君だよ」

うんうん、と自分に言い聞かせるように頷いてから、やっと辺りを見渡した。

見たことのない部屋だった。

半身を起こした私はベッドにいたから、多分寝室だと思う。

しかし、私はどうして知らない部屋のベッドに寝ているのだろう。首をかしげて考えてみてもよくわからない。

よくわからないけど、一つだけわかることがあった。

私は服を着ていなかった。

下着すら着けていない。

……裸。

何故裸なのかは、理解不能だったが間違いなくよろしくない状況である、と私は判断した。

私がそう判断して確認するように頷くと、扉の外に人の気配がした——かと思うとその人はノックもせずに入ってきた。私は慌てて布団を被る。

タバコを燻らした色白の男の子だった。

片腕はなく、左眼は眼帯で覆われている。

目が合った——

その男の子は驚いた顔で私のことを見ていたが、すぐに気を取り直して、

「おはよう。荒川さん」

ゆつくりと微笑みながら、私の名前を口にした。

その男の子は私がずっと考えていたその人で――私は彼に向かって跳びあがった。

「天倉君っ！」

――その後、私こと荒川宿禰は彼の指摘を受けて、お腹の底から悲鳴をあげた。

＊

ひとしきり悲鳴をあげると、宿禰はなんとか落ち着きを取り戻した。逃げ込んでいたベッドの中からよろよろと這い出ると、首から上を真っ赤に染めたまま着替えを始めた。

この時、当然ながら竹の姿はなかった。

つんざくような悲鳴を受けた竹は、素早く右手に抱えていた洋服を宿禰に渡し、すぐに部屋の外へ出ていた。

ラフな、恐らく竹の寝巻きだろう服に袖を通し終えてから、顔の火照りが収まるまで宿禰は竹に声をかけなかった。

渡された服の中に当たり前だが下着はなかったので、どこか落ち着かない。

宿禰は所在なさげにベッドに腰掛けて、少し伸びた感覚のある前髪をいじりながら深呼吸をした。

3分間ほどそうしていると、そこそこ落ち着いてきた。

まだ完全とはいえなかったが、部屋の外で待っているであろう竹を待たせたくなかったし、早く顔を見てちゃんと会話をしたいと気持ち之急いでいた。

「……えっと、おっけいです……」

弱弱しく扉の外に声をかける。

一瞬間が空いて、

「おはよう。荒川さん」

もう一度、先ほどと同じ言葉を口にして竹は寢室に戻ってきた。

その表情には全くといっていいほど動揺は見られない。
いたって平静。

どうやら先ほどの事は忘れるつもり、何もなかったことにするつもりらしい。

宿禰はその平然とした竹の様子に不満を覚えないでもなかったが、竹の眼帯で覆われていない右頬を見てその不満を抑えた。

竹の右頬は赤く――というかすでに内出血を起こして青く腫上がっていた。

錯乱した宿禰に平手ではなくグーで殴られた結果だった。

避けることも出来ただろうが、避けなかったのは竹の誠意だろう。

……単純に目の前に広がっていたパライソに眼を奪われていただけかもしれないが。

竹は背の低い小さなテーブルを挟んで、宿禰の正面に胡坐をかいて座った。

カーペットは敷かれているものの、殆ど床に直接座っているようなものだ。

家主がその位置で、自分がベッドに腰掛けたままではおかしいだろうと思い、宿禰も床に腰を下ろそうするが、

「そのままでもいいよ」という竹の声に制された。

宿禰は少し迷ったが、不承不承頷いてみせた。

そんなことをいちいち論じるよりも、本題に入るべきだと思ったのだ。

宿禰の心中を察したのか、それとも元々そのつもりだったのか、竹はタバコを取り出すと火はつけず、手で遊ぶように持ったまま、

「それじゃ、何から話そうか」と宿禰を見上げながら言った。

宿禰は竹の問いかけのような言葉にあれこれ考えを巡らし、

「……何で私、生きてるの、かな？」

無難な、されど核心ともいえる疑問を投げかけた。

竹はすぐには答えず、手に持っていたタバコを銜えると火をつける。

片腕の挙動だがぎこちないものはなかった。

どうして片腕なのか、と気になったが口にはせず、宿禰は竹の答えを待った。

本日二本目のタバコ。一本目のタバコは宿禰パンチの際に、お釈迦になっていた。

竹は紫煙を深く吐き出すと、

「荒川さんは一度、死んだ。覚えてる？ オレが殺したことを」
落ち着いた、感情を感じさせない声で言った。

「はつきり覚えてるよ。私はあの時、あの公園で天倉君に殺されたよね。でもだから――」

つい数ヶ月前までは自分と同じ世界の平凡だと思っていた。

それはまるで思い違い。

天倉竹は平凡の対極にいる存在だった。

血を吸う鬼となり果て、人間を圧倒的に超えたはずだった宿禰を容易くあしらえるほどの超越者。

それだけの者の手に宿禰はかかったのだ。

だから――何故生きているのかわからない。

最後の最後で手を抜かれた、という考えが浮かんだがそれは絶対に違う。

手を抜かれようが抜かれまいが、あの時、宿禰は確かに死んだのだ。

事実、竹は宿禰が一度死んだ、と確かに言っている。

竹は灰皿を叩くように灰を落とすと、

「オレはあの時、手を抜いてないし、それどころか身体をぶち抜くつもりでやった。ただ荒川さんが今生きてるのは、吸血鬼としての驚異的な回復力ってところかな。だからまあ死んだっていうのも正しくない。正確にはあの後、荒川さんは殆ど死んでたっていうのが正しい」

吸血鬼という人外ゆえの、死の淵からの奇跡の生還。

竹はそう表現した。

だがそれは半分嘘で半分本当。

竹の最後の一撃は、獲得してきた技術を用いた業ではなく、ただ硬く固めた拳の打撃。

それは宿禰の肋骨と背骨を粉碎したが、彼女の筋肉の鎧は奇跡的に内臓の全壊を寸でのところで守り切っていた。

だから竹はそのまま宿禰を自宅に連れ帰り、色々と手を尽くしたのだ。

吸血鬼の回復力に賭けて、蘇生を試みた。

もし宿禰に引導を渡した攻撃が一手前のものであったなら、宿禰は喉を大きく削り飛ばされており、竹はそんな気を起こさなかっただろう。

宿禰が最後の最後で掴んだ奇跡を竹は形にしたかったのだ。

だがしかし、例えそのような経緯があつたとしても、竹が宿禰に下した拳は紛れもなく死の鉄槌。

荒川宿禰は死の淵に留まっていなかった。

すでに死んでいた。

竹が手を尽くしても、どうにもならなかった。

奇跡という名の幻想は、そこで打ち止め。

そのはずだった――

「天倉君。嘘だよ、それ」

宿禰は竹の言った嘘に気付いていた。

自分のことだからわかる、というのも変な話だが、宿禰は自分があの時確実に死んだことをわかっている。

「嘘？ 何が？」

竹は表情を変えずに宿禰の言葉に反応した。

宿禰はそんな竹の対応を嬉しく思う反面、憤りを覚えた。

いや、むしろ憤りの方が強い。

この期に及んでなお、竹は宿禰を蚊帳の外に置こうとしていることが見え見えだった。

本当に今更だ。

心底そう思った。

それは宿禰の身体がすでに吸血鬼になっているから、とかそういうことではない。

竹が遠ざけようとしているもの。

それと宿禰はすでに出会ってしまったているのだから。

「――私は死んだよ。天倉君に殺されてね。どんな経緯があったのかわからないけど、死んだ私を天倉君はここに運んだんでしょ？多分、っていうか希望も入るけど、天倉君は殺してしまった私を助けようとしてくれたのかな。でも駄目だった。やっぱり私は死んだままだった――」

宿禰はそこまで喋って言葉を区切った。

少し目線を下げて竹を見る。

吸血鬼となった時に向上していた視力だったが、今はあの時以上によく見える気がした。

眼帯で覆われていない右眼の奥まで見えるようだ。

厳しくも何かを覚悟したような眼だった。

長い沈黙の後、何か確信めいた口調で宿禰は言う。

「私を生き返らせたのは、吸血鬼の生命力でもなんでもない。たった一人の女の子だよ」

「――あれに、会ったのか？」

タバコの吸殻を灰皿に落とし、硬い声で竹は尋ねた。

「会ってはいないかな。でも確かにあの女の子はいたの。暗い世界に落ちていた私を強引に引き戻したの。こう、グサツと、だね」

宿禰は剣で突くような真似をみせて相好を崩した。

その自然な微笑には一切後ろ暗いものはなく、全てを受け入れた上の前向きさが現れていた。

皮肉なものだった。

数ヶ月前には平凡を絵に描いたような平穏な宿禰が今では、それとは対極の極地にいる少女とある意味一番近い場所にいる。そして、宿禰はそれを承知の上で笑ってみせたのだ。

尋常ではない精神力だ。

それは吸血鬼という人外だからだとか、そういう問題ではないだろう。

多分、それは荒川宿禰という少女が、普通から異常を経ること得たものだ。

だから竹も覚悟を決めて宿禰に問う。

神様の壊れた模造品としてではなく、天倉竹として。

「荒川さんは、もう普通の女の子じゃない。

人の血を啜わなければ生きていけない吸血鬼。

例えば自分からそうと願ってそうだったわけじゃなくても、時間は巻き戻らないし一生吸血鬼のままだ。

そして、君はその欲望のままに何人もの人を殺した。

その罪も当然、消えることはない。

その上で荒川宿禰に問おう。

君は——これから生きていけるのか？」

罪を背負い、人の身でなくなった宿禰にこれから待ち受けるのは、平穏とは隔絶した、普遍を逸脱した未来。

それに堪え、笑い飛ばして、先細りしていく道を歩き続ける覚悟があるのか。

竹が問うているのはそういうことだ。

もしその覚悟がないのなら——荒川宿禰はここで死んでおくべきだ。

そう竹は考えていた。

しかし——

「殺して……なんて言わないよっ！」

しかし、宿禰にそんな問いかけは今更だった。

竹の質問の意味をわかった上で、宿禰は愛嬌のある屈託のない笑みを返した。

「私は確かに人を殺したし、人間じゃなくなった。でも天倉君は言ったよね。時間は巻き戻らないって。だから私は前に進むしかない

んだよ」

「何の為に？」

「私が奪った命の為に——っていうのは少しだけ本当で、やっぱりでっかい嘘かな。」

私はね、この与えられた命を自分の為に使うつもりなの」

「自分の為？」

「うん。自分の為。私は好きな人の傍にいたい。その為に生きるんだよ」

高らかに宿禰は宣言した。

ニコリと微笑んだ口の隙間から発達した八重歯が覗く。

変わった、と竹は思った。

それは外見ではなく、清新なまでの魂の力強さ。

その変化に最初に気付いたのは、投げかけられた質問の時。

以前の宿禰であれば、十中八九自分が聞くべきことよりも先に、竹の姿への疑問を口にしていただろう。

自分のことよりも、まず人のことを優先させる節があった。

だがそれが今はない。

謙虚というよりもいつそ臆病なほどだった気弱さが、節度を保った自己顕示に変わっている。

その変化は間違いなくよいものだといえる。

ただ一つ残念なことがあるとすれば、もし宿禰に腕や眼のことを聞かれたら、『友達が欲しがったからくれてやった』くらいの気の利いた台詞を用意しておいたのに言えなかったことだろうか。

まあ永遠に言う機会を逃したわけではないし、別に必ずしも言いたい台詞でもないので問題はないのだが。

竹がまじまじと宿禰の顔を見て彼女の変化を考えていると、宿禰ははにかんで言う。

「変わったと思うかな？　でも私もそう思うよ。実際、私は生まれ変わった、っていつでも大げさじゃないしね」

「——そうだな」

竹は苦笑しながら、頷いた。

一度死に、そしてあの黄金に生を与えられたのだから、その言葉は実能的を射ていた。

「それとね、もう何が起きても私は狂気に溺れるつもりはないから安心して」

そう呟く宿禰の薄い黄色に変色した瞳にもはや狂気はない。
だから竹は、

「信じてる」

しっかりと宿禰と眼を合わせて言った。

左眼を失った竹と、吸血鬼として一度死に、そして再び生を与えられた恩恵により更に視力の増した宿禰。

お互いが確かな目で見ることはなくなった。

しかし、それでも二人はしっかりとお互いを見据えていた。

「信じて。私も信じてるから。もし私が危なくなったら、今度こそ助けてねっ！」

「ああ——今度こそ」

竹は朗らかに笑いかけて、心の底から力強く頷いた。

二人の間で結ばれたのは、間違いない信頼であった。

「——さて」

あとはこれからのことでものんびり話をしよう、と竹は新しいタバコに火をつける。

——きゅるるるる。

可愛らしい音。

どちらかの腹の虫が鳴った。それもソロで。

竹はタバコを銜えながら宿禰を見た。

「……………」

気の毒なくらい顔を真っ赤に染めていた。

まあそりゃ全く食事をしていなかったのだから、仕方ないだろう。そう考えて、

「何か出前でも取ろうか？」と竹は宿禰に聞いた。

「……えっと、私じゃないよ？」

白を切るつもりのようだった。

だが、先ほどまでならまだしも、すでに余裕を持った竹にその行為は逆効果だった。

「うん。だから何か出前でも取ろう、か？」

つい数十秒前の優しい笑顔はどこにいったのか、竹はニタニタとした笑いを作っていた。

再三繰り返すようだが、竹は真性のSである。

だがしかし——こんな場面で言い返せなかったであろう、以前のウブな宿禰はすでにいなかった。

何故なら彼女は生まれ変わったのだ。

「うー……、いいよ出前なんて取らなくてもっ!!」

竹は一瞬、宿禰の気迫に気圧されながらも、それでもニタニタ笑いを崩さない。

「え、そう？ お腹減ってるんじゃない？」

「減ってるよっ！ 減ってるから——天倉君の血をもらうのっ!!」
割と笑えない冗談だった。

いや、冗談とは言い切れない。

彼女はまごうことなき吸血鬼なのだから。

竹の背に嫌な汗が伝う。

「いや……冗談ですよね？」

「本気だよっ！ 意地悪をする人の血なんて、全部吸い尽くしちゃうんだからっ!!」

——冗談じゃねえ。

「ちよっ、待って、タイム。ストップ。ごめんなさい、オレが悪かった！」

情けない声をあげて竹は立ち上がろうとする宿禰を止めた。

「むー」

宿禰はむくれた様子で、僅かに浮きあがっていた腰を下ろす。

「いや、まちでごめんなさい」

竹は深々と頭を下げた。

何か二人の立ち位置が新たに決定されたようだった。

「……じゃあ許すけど。でも一つだけお願いを聞いて。これはさっき私の裸を見たペナルティだよ」

「え？」

竹は驚いたように下げていた顔を持ち上げた。

今更その話を持ち出されるとは思っていなかったようだ。

宿禰はそんな竹をじいっと力のこもった視線で見た。

認識の温度差があったようだが、乙女の裸は安くない。

グーパン一発くらいで完済した気になられては困る。

責任を取ってもらわねば。

竹はがっくりと肩を落とし、

「何でしょう……」

恐々とした様子で宿禰を見る。

位置取り的な問題ではあるが、見上げる形になるのがまた情けなかった。

宿禰は表情を引き締めると、

「名前——これからは名前で呼んで欲しい……よ？」

いくらか頬の赤さが残った状態で振り絞るように言った。

「あ——」

竹はその要望を聞いて、いくらか安心したような顔をした。

そして——しまった、もっと言ってもよかったんだっ？！

という宿禰の後悔を見抜いたように、

「わかったよ。宿禰」

とすぐさま口元を緩めて彼女の名前を口にした。

これで交渉成立。

出された言葉は戻ってこない。

それでもクーリングオフは通用するかもしれないが、しかし、初めて名前を呼ばれた後の宿禰は、後悔もなにもかもが吹っ飛んだ様子で耳たぶまで朱色に染めて——

「は——は、はいっ！」

と返事をするので精一杯だった。

——後日、宿禰はどうしてその時の勢いで、竹の事を名前で呼んでおかなかったのかと後悔するはめになる。

決定したかに思われた立ち位置は、残念ながら逆転していた。

復讐裁判官 46 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

物語としてはラストです。次話は短いですが、次につながるお話と
いうことで分けました。

＊10／27

宿禰のイベント絵を挿入しました。

＊

黒き古書のページが進む。

第六幕。

愛を裁く藍の少年の物語は、
相容れなかった銀色の矛によって閉幕し、
退場と復帰、哀歓を共存させて物語は最終たる第七幕へ。

次の役者は、紫の魔女。

神の複製品の物語は、

収拾のつかぬ蒐集劇になろうと続いていく。
いつか来る、終幕を目指して。



「――何故、彼女に生を与えたのですか？」

一先ずの役目を終えた黒色の問いかけ。

虹と黄金の少女は優雅な微笑を口元に浮かべた。

「どっちでも良かったの。落ちた駒を拾うか、拾わないかというだけの話し。」

それはあの藍色にしても同じことね。

しいて言うなら、どちらが観ていて面白いか、それだけのお話しよ。
でも付け加えるなら一つだけ。

殺し奪う、複製品では生は与えられない。

それでも彼は殺した吸血鬼の死体を持ち帰り、蘇らそうと色々手を
尽くしていたわ。

それが無駄な努力だということをわかっている、彼は運命に抗おうと必死だった。

その滑稽さがあまりにも可笑しくて」

幼子のような外見にはそぐわない絢爛にして不遜な態度。

しかし、その全てを恐れぬ言動こそが彼女には相応しい。

事実、彼女は恐れ振りまくことはあっても、恐れるものはなにもない。

世界の頂点。

不動なる絶対者。

虹色の髪と黄金の瞳を持つ、唯一無二の全能たる存在。

それが『唯一の一』オリジナルワン、アウローラという名の少女であった。

「慈悲深いことです」

「慈悲？ それは違うわ。これは愛よ。私から彼へのね。この物語のラストには相応しいでしょう？」

くすくすと、アウローラは笑い、魔法使いと怪物を黄金の瞳で捉えると、遠くを見るように眼を細めてみせた。

全てを破壊し、創造せしめるその瞳に射抜かれ、黒と白は直立不動のまま口を噤んだ。

声を発するどころか、呼吸すら許されぬ完全なまでの静寂が訪れる。

でも――

その静寂の中で唯一の権利を持つ、極光はつぶやくように言う。

「でも、もしかしたら彼はわかっていたのかしら。私が彼女を蘇らすことが」

――まさか。

身じろぎ一つ出来ない中で、二人の下僕は考える。

まさかそんなことがあるはずがない。

少女が起こした行動は突然の思い付き。

その思い付きは運命を捻じ曲げる程の行為であったが、例えば少女を映した存在であっても、その行動を読めるわけではない。

歴史に、『黒の書』に記述があるなしに関わらず、だ。

少女は誰にも理解されず、また理解できることはない。

故に『唯一の一』なのだ。オリジナルワン

しかし、確かに彼の行動はそれを予見していたかのように、不条理なものであった。

死体を持ち帰り、蘇らそうと手を尽くしたところまでは良い。

だが、その後、それが結局叶わぬと知ってから彼も彼は死体を処理しなかった。

何かを待つように。

まるで、生き返る事を知っているかのように。

一縷の希望に縋り付くように。

「そういうことね。まあどうでも良いことよ。

それよりも重要なのは、これで一つ役者が増えたということ。

神生みの恩恵で、あの吸血鬼は死ぬ以前よりも力を増しているわ。

それこそ滅びた純血種と同等かそれ以上かしら。

——ふふ、前にも言ったけど、やっぱり彼女は運が良いわ」

少女は再び破顔した。

静寂の時間が動き出す。

「役者——というならもう一人増えました」

白色からこぼれた言葉に、少女は頬を緩めたまま頷いた。

「そうね。でもその方が面白いからいいわ。夜が本来の形に戻ったほうが」

十三夜。

しかし、座っていたのは十二人。

空席だった夜が一つ戻り、夜は完全な形を取り戻した。

だが少女はそれで良いという。

その方が面白いから。

極光の笑み。

アウローラは未来を謡う。

「童子の面は割れ、子供でいられる時は終わったわ。

4年前の楔は取れた。

止まっていた分、あとは加速してください」

少年から青年に。
フィナーレは盛大に。
終わりは近い。

（了）

復讐裁判官 47 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

予定の倍近い文章量になりましたが、どうにか完結です。
やっと完結できました。

長かったです。長すぎて書いていた時の心境とか覚えていません。
ただところどころ苦しく、大抵は楽しく書けたような気がします。
長い間、お付き合いいただいた方、更新遅くてすみませんでした。
その分、それなりのものが書けたような……とか言ってみたいテンションです。すみません調子に乗りました。

人物設定と年表は既存のものに加筆・修正して近いうちに載せておきます。

次章は満を持して深翠がヒロインの『翠の章』になります。時系列的には蒼の前になりますね。

馬鹿みたいに登場人物が多かった今章からは考えられないくらい少人数でお送りする予定です。

ただ例の如くの更新までは、また間が空くと思います。

どのくらい間が空くかはわかりませんが、恐らく今月末か来月頭くらいになると思います。

それでは未熟な作品にお付き合い頂き、本当にありがとうございます。
しました。

巡りあわせとは不思議なもので、今日10月11日は期せずして十三夜でございました。

人物設定 藍1（前書き）

『藍の章』終了時点の人物紹介です。

ネタバレ含みますので、『藍の章』を読み終わった方のみご覧に下さい。

人物設定 藍1

庵戸朋愛（あんど ともちか）【藍の裁判官】

元天岩戸、司法所属。

最年少で『管理者』に選ばれた天才。

今章においても一人主人公と呼べる存在。

藍色の洋服で上下を固めたジャンプ風の少年。『D&』の本当の製造者の一人。ネーミングセンスはない。

4年前に竹に神性を奪われ、瀕死だったところを『唯一の一』の手によって蘇らせてもらう。

プライドの高さゆえに基本的に人を信じなかったが年少時、とある裏切り者と道具の始末任務の際に一緒に任務についていた人物二人を信用したのが切欠となり、他の者に対しても見方が多少変わる。

その後、自分を差し置いて次期『天照』の位に選ばれた天倉竹のことを嫌悪しつつも、いつのまにか信用し始める。が、結局その信用は裏切られることになる。組織の天倉竹を信用していた庵戸と、庵戸朋愛という人物個人を信頼していたすれ違いであろう。

もし彼が竹に向けていたのが信用ではなく、信頼であったならば今回の物語は別の結末を迎えていたかもしれない。

神具、最強の矛『氷槍・青女』の担い手。

槍使いとして最強最速を誇る。その実力は戦闘畑の者だろうと一歩もひけをとらない。

事実、技術部所属だった大木を素手であっさり倒してのけ、戦闘部所属だった館花にも自身はほぼ無傷で傷を負わせた。

単純な戦闘能力ならば竹より一枚上手だったが、竹の本来の異能を知らなかった為に氷槍を奪われた末に敗北。

しかしそれは敗因の一要因ではない。敗因の本質をあげるとするなら、4年前より身体的にも精神的にも成長していたが、その心が竹に裏切られた日より止まったままだったことだろう。そして止ま

つたいた時は進むことはなく、童子のまま彼は死亡した。
その死と引き換えに竹の左眼と左腕を奪う。

とはいえ4年間、日の当たらない場所でただ復讐に生きてきた結果が、外見上は再生できるそれらでは本人としては割には合わないだろう。

アウローラ（あうろーら）【唯一の一】

全能。黒金。虹と黄金。オリジナルワン。

『歴史の筆記者』で『黒の書』を書いた人物。

一筋一筋が長く紡がれた、宝石のような七色に輝く髪。金色の瞳。
この世のものとは一線も二線も画した、悪魔めいた神々しさを持つ美しい顔立ち。

黒須蚩（黒の教団）、天野輝血（天岩戸）、そして、少し異色ではあるがエドワード・エルガー（騎士団）、という過去の三大勢力（騎士団のみ現存）での最強の人物を調整者として従えている。

しかしそれも彼女にとっては戯れ。

全ての究極点にあり、世界の終着点にいる彼女の退屈しのぎでしかない。

現在は彼女がこちら側に創った世界で物語を観測していて、それ以外の時は寝ている。

今章では前章のただただ眺めていただけの姿勢から一変。物語に過剰なまでに介入した。

これは庵戸朋愛という死せるはずの少年を4年前に生き永らえさせたことに起因しているのだろうが、それもまた一側面でしかないのだろう。彼女の真意は傍に仕える調整者たちでさえわからず、戸惑いすら覚えるものだ。

『夜月』と対をなす神具、神生み『朝日』を所持。その力は絶大で、死者すら蘇らせるもの。『夜月』が神性を奪い、神を殺すものであるのに対し、『朝日』は神性を与え、神を生み出すもの。

本来、この二振りの剣は彼女の所有物。全能たる彼女は神々の生殺

与奪すら握っていたということだろう。

4年前に一人の少年を再生させたのが一つの始まりだったとするならば、その4年後に一人の少女を再生させたのは確かに新たな始まりなのだろう。

天倉竹（あまくら たけ）【神の複製品】

元天岩戸、司令部所属。

無能。故に万能。白銀。デッドコピー。色白。

高校2年生。神の一部を植え込まれた擬似神にして、4年前に天岩戸を崩壊させた張本人。

普通に高校生として過ごす傍ら解決士としてアングラな世界で様々な仕事をこなしている。

現在は天岩戸を崩壊させたメンバーで『十三夜』というチームを結成している。

端的にいうとわかりづらい人柄。

人を引き付ける何かを持っていて、水と油が多い十三夜のメンバーを繋ぎ合わせる接着剤になっている。

知らない奴の事はどうでも良く、知っている奴をどうでも良く思えるほど強くはないらしい。美少女の場合は更にその傾向が強くなる。神具『夜月』に加え、『氷槍・青女』を保有した。

『夜月』と自らの能力『影見』の影響で、身体能力と視力が4年前から現在進行形で低下しつつある。

そして今章では、『影見る蛇の眼』を完全解放し、結果庵戸相手に勝利を収めたが、その代償に左眼は腐り落ちた。

十三夜全員にいえることだが、『唯一の一』と一度出会っており、それが天岩戸を壊滅させる引き金となった。

『夜月』は元々、彼のものではなく、『唯一の一』を映した結果手に入れたもの。その代償が身体能力と視力の低下である。

『唯一の一』に根源的な恐怖を抱いており、もう二度と出会いたくないと思っているが、それが淡い希望であったことを知りつつある。

映すことが彼本来の能力だが、それが壊れ『夜月』に魅入られてから、奪い、殺すことに特化し始めている。

それゆえに好意を向けてくれていた少女を殺す羽目になり、信頼していた友を再び手にかけてことは、彼の宿命であったのかもしれない。

左腕は肩から完全に消失（元から義手）、左眼とともに松田に義手、義眼の製作を依頼した。

ポニーテール好きという性癖が明らかに。

万物を映し、その異能すらもコピーしてみせる銀眼は脅威的といえる。

仲間内でのあだ名は『竹』、『竹君』、稀に『TK』。

>i2750—341<

荒川宿禰（あらかわ すくね）【真なる吸血鬼】

高校生。不幸。巻き込まれ型。

竹と同じクラスで、人を安心させる可愛らしさと人付き合いの良さからクラスのアイドルとなっている女子。ただ実際の彼女は地味な性格であり、今のポジションをやや窮屈に感じている。しかし、持ち前の人の良さからそのポジションを頑張って、演じている健気な美少女である。釜蔵に住んでいる。

実はその観察眼はかなりのものであり、竹や怜の本質に気付いている。しかしやや天然気質である為打ち消しあって土0になっているとか。

喫茶店でウェイトレスをやっていて、それを学校側に無申請でしている事を違反だと考えている辺り真面目な子。

前章から引き継いでいた吸血鬼の性質に今章では抗いきれず、結果として血を啜る魔性と化した。

その結果、最愛の人であった竹の手にかかり一度は死亡するのだが、今章のラストで『唯一の一』の手により再び生を与えられる。瞳の色はそのときに薄い黄色へ変わる。

その時に神性の付加もされた為、擬似的な吸血鬼だった彼女は完全無欠の吸血鬼になっている。その影響か、それとも一度死んで吹っ切れたのか、以前と多少性格が変わっている。

結果、変な方向性に突出。萌えキャラと化した。

人殺しの罪と人でなくなった事実を胸に、それでも彼女は想い人と一緒にいるため前向きに生きるのである。

それは愛の章に相応しいものであっただろう。

> i 2 4 9 1 — 3 4 1 <

石渡直也（いしわた なおや）【意外精神】

元天岩戸、治療部所属。ドクター。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。何故か貧乏。

天然パーマで、それを『パーマ』、『やきそば』などのネタにされるのを嫌う。

そのどちらも最初にネタにしたのは竹。

昔は松田と犬猿の仲だったのだが、今はそれほど悪くない。

むしろ今は、何かと突っかかってくる大木に容赦ないローキックを炸裂させている。

ぼろっついアパートに住んでいるが、彼の本宅はその地下にあり、万全の設備を兼ね備えた研究所兼病院と、生活空間に分けられている。その中に『医神の間』があるが、こちらは滅多なことでは使用しない。

『D&』の成分を調べたり、負傷者の治療に追われたりと今章では何かと働いてくれた。その治療技術は死んでさえないなければどうにかできる、といっても大げさではないが、喪われているものは治療できない。

色々と役立っているのに、ぼったくられたり、小火を起こされたりと報われていない。

さりげにどちらも松田が要因であり、その点については多少憤慨していたりする。

治す者と創る者とは本質的に合わないのかもしれない。
仲間内でのあだ名は『なおやん』『なお』『なおや』。

大神深翠（おおがみ しんり）【月読の巫女】

本物の神の末裔。神格は月読の始祖に迫る。

黒髪、翠眼、三貴神。

雪のように白い肌を持った美人で、蒼香とは対称的に日本人形のよ
うな顔立ち。誰に対しても敬語で話す、基本的には真面目な人。

普段は大人しいが嫉妬深く、怒りで我を忘れるタイプで、竹の事にな
るとその効力は倍以上になる。

『月夜見』という能力であらゆるものの記憶と記録を読むことが出
来る。能力使用時には瞳が緑翠に輝く。

その他に『緑影の狼』、『神殿形成』など様々な能力を持っている、
数少ない複数異能保有者。

今章では秋野の屋敷の庭にて、竹を除く十三夜メンバーなどが退く
くらいの惨殺劇を見せた。

現在の彼女の实力は竹にやられた時よりも、確実に向上している。
最近、自分に対する竹の扱いに不満が募っていたりする。

ヒロインなのに影が薄いと噂されている人、その1。

>i2310—341<

山吹蒼香（やまぶき そうか）【殺戮天使】

金髪、蒼眼、三貴神。

平均よりやや小柄で華奢、西洋人形の様な顔立ちをしており色白の
美人。性格はドライで勝気。実は寂しがり屋である。

『月読の巫女』と同値の神格を持っており、その戦闘能力は父であ
り、過去天岩戸最強であった『無音の凶刃』に迫る。

戦闘の際には形見である天使の羽根で作られたナイフと、デリンジ
ヤーを隠し玉に戦う。

現在、自由意志で自身の力を解放できる。その際には瞳が青蒼に輝

く。

今章では秋野の屋敷の庭にて、竹を除く十三夜メンバーなどが退くくらいの惨殺劇を見せた。

現在の彼女の実力は竹にやられた時よりも確実に向上しているが、深翠や紅葉と違い実はまだ己の能力の本質には気付いていなかったりする。これは彼女の生い立ちが二人とは違った特殊性を帯びていたためである。

最近、自分に対する竹の扱いに不満が募っていたり。

ヒロインなのに影が薄いと噂されている人、その2。

>i2035—341<

松田聡也（まつだ としや）【創生の絡繰師】

元天岩戸、製作部所属。アーティスト。

明るい性格で十三夜の盛り上げ役。

かなりの女たらしであり、常に様々な女性と付き合いがある女好きのB—BOY。本人曰く、全て浮気ではなく本気であるので問題ないらしい。しかし彼のそんな態度を大木直也は好ましく思っていないらしく、女性関連の話題では何かと突っかってこられている。付き合った女性には確実に貢いでしまう癖がある。

やや太めで口周りと顎に鬚を蓄え、更に坊主と厳つい外見だが、声はわりと高い。

宝具『土人形（偽）』を所有している。

どうやら脱ぐ癖がある模様。

今章では佐藤とともに本多の護衛をかねて迎えに行くが、ものの見事に失敗して帰ってきた。

仲間内でのあだ名は『松』『まっつん』

人物設定 藍1（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

長くなったので3分割にします。初っ端から重要人物が目白押しです。

人物設定 藍2（前書き）

『藍の章』終了時点の人物紹介です。

ネタバレ含みますので、『藍の章』を読み終わった方のみご覧に下さい。

人物設定 藍2

黒澤怜 （くろさわ れい） 【不明】

元黒の教団所属。魔法使い。

セミロングの髪を束ねて後ろで結び、少々吊り上った三白眼をした二十代半ばの女性。日々タバコとコーヒーで過ごしている。

宝具の蒐集家であり、宝具のことになる、精神年齢が下がり子供のような顔をして古今東西飛び回る。その真意は全て竹の為であるらしい。

竹とは3年前からの付き合いで、姉のような友人のような微妙な関係である。

竹曰く、保護者。

今章では、相変わらず『黒の書』の解読に苦戦中。

黒須蛭の弟子にして腹違いの妹。

秋野紅葉 （あきの くれは） 【鬼姫】

銀髪、紅眼、三貴神。『赤き秘宝』。

生まれてからずっと石間山の地下に幽閉されてきた少女。

赤衣着物に女の子らしくない口調。自分では饒舌ではないと言っているが、結構な饒舌家である。

鬼の力を取り込んだ秋野神楽の娘で『血液の搾取』とは別に『血液の炎焼』という能力を持っている。二種異能保持者。

その異能を使う際には、瞳が赤紅に輝く。

釜蔵在住。

今章でも屋敷を提供したり、助言を与えたりと懐の広い良い女として君臨した。

紅葉が私室を物で埋め尽くそうとしているのは、彼女がかつて幽閉されていた場所に必要最低限のものしかなかったから、その反動である。

今章では秋野の屋敷の庭にて、竹を除く十三夜メンバーなどが退くくらいの惨殺劇を見せた。

他の二人と違い、すでに完成されている為に力の向上はほとんどみられない。

赤いスポーツカーはもちろん彼女の趣味。

> i 2 1 6 4 — 3 4 1 <

脇光太郎（わき こうたろう）【電子の蜘蛛】

元天岩戸、情報部所属。マルミグナット。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。

あらゆる情報を調べる事が出来る情報屋として、個人的にも活動している。

今章でもやはり竹から情報収集を頼まれそれを完璧にこなしたが、賞金首を捕える月担当の仕事を忘れるという、うっかりさんな面も露呈した。

とはいえ、甲斐の助けを借りてではあったが、古巣とともにきっちり仕事をこなした。

彼の戦闘方法は蜘蛛の二つ名の通り、糸を用いた待ち構える類のものであったが、移動しながらだと戦闘できないというわけではない。今回は効率と屋敷内に侵入者を許さないという方針から、ああいう手段をとったというだけだ。

しかし、移動しながらと今回のように待ち構えた手段とどちらがより力を行使できるかといえれば後者であるのは間違いない。

群がってきた賞金首の殆どを捕縛（殺害ともいう）した。

記述はないが実は眼鏡男子である。

仲間内でのあだ名は『コーチン』、『光太郎』。

横田大河（よこた たいが）【ドラッグの売人】

21歳の薬学部に通う男子大学生。

今章ではすでに死者。

『D&』の製造者ではなく、実はただのバイヤーだったことが判明した。

アレクサンドラ・ワーナー（あれくさんどら・わーなー）【王女騎士団の主、ヴィンセント・ワーナーの娘。

ブロンドの髪、橙眼。

美少女。豊満なボディの持ち主。特に胸。

通常はフレンドリーな口調だが、騎士団関係の話になると口調が変わる。

父親よりは融通が利く人物。

中々の策略家で、竹を未来の旦那様とする。

彼女は父親のようにはなれないが、それゆえにただの人として、天野輝血を殺害出来る運命を持っている。

今章では、父親からの騎士の派遣を断固として断ることを目的に、

竹に連続猟奇殺人事件の犯人を捕えることを依頼した。

竹が依頼を持ちかけるように促した真意を間違えて取ったり、迎えるの足に使われたり、深翠、蒼香、紅葉という人外の力をまざまざと見せ付けられてへこんだりと不憫。

今章後に自らを鍛えなおす為に本国へ帰国。

竹の唇を奪ったのは、その決意を固める為であったとか。

「キスくらい婚約者なら当然よね」

宝具、『聖槍ロンギヌス』と竹の自宅の合鍵を所持。

>i2488—341<

ヴィンセント伯爵ヴィンセント・ワーナー伯爵（ヴின்せんとうわーなー）【魔人】

騎士団の主にして、世界の3分の2に賞金首に懸賞金を掛けている大富豪。

20年前に両親を天野カガチに殺されており、その復讐心から血の滲む努力によって単体でも人外と渡り合える程度の力量を手に入れ

た。

しかし、その実力は既に魔の領域に踏み込んでおり、それ故に『歴史』には選ばれずカガチに復讐を果たすことは出来なかった。

今章では、娘が心配のあまり騎士の派遣を行おうと躍起になったり、ほぼただの親馬鹿として登場。

ランス・アームストロング（らんす・あーむそとろんぐ）【風脚】
騎士団6番隊隊長。故人。

部下数・2人。名前の通り槍を使う騎士。実直な英国紳士。三十代
なのにナイスミドル。

前の『六番目』とはこの人のこと。

現在、すでに騎士団には新しい『六番目』が補充されている。

青山衛（あおやま まもる）【17歳・高校生】

上田千紗（うえだ ちさ）【20歳・専門学生】

木嶋のぶゆき（きじま のぶゆき）【21歳・公務員】

国分寺博士（こくぶんじ ひろし）【19歳・漁師】

澤郁美（さわ いくみ）【16歳・無職】

下嶋圭吾（しもじま けいご）【23歳・会社員】

曾我宗助（そが そうすけ）【22歳・DJ】

常盤敦子（ときわ あつこ）【21歳・看護士】

二本木大二郎（にほんぎ だいじろう）【20歳・大工】

三橋拓也（みつはし たくや）【18歳・大学生】

森えりな（もり えりな）【16歳・高校生】

それぞれが連続猟奇殺人事件の犯人であり、全員が『D&』の常習
服用者。そして擬似吸血鬼と化したものたちである。

全員、竹の手によって処分された。

被害者ともいえるし、加害者ともいえる。

とはいえ彼らの末路は、自分たちが薬物に手を伸ばしたゆえのこと
なのでやはり自業自得。

黒須螢（くろす ほたる）【黒い魔法使い】

元黒の教団所属。男性。最強の魔法使い。

長身でやや細身、黒い外套を羽織っている。丁寧な口調。

黒澤怜の師匠にして、腹違いの兄。

以前、『黒の書』を入手した時に、『黒の教団』に所属していた人物を全て殺害した。

その中には当然。彼や怜の両親も含まれている。

『唯一の一』の作った『歴史』通りに物事を進める為に、舞台を整えている調整者の一人。

今章では庵戸に始動の許可を伝え、竹にアウローラからのメッセージを伝えただけで、完全にメッセンジャーとしての役割しかなかった。

輝血が今野に必要な以上の情報を与えた事を、アウローラによる歴史の操作と見抜く。

といっても見抜いただけで、彼は何も出来ない。それが全能の前では無意味なことだとわかっているから。

天野輝血（あまの かがち）【白い暴君】

天岩戸のトップだった女性。怪物。

先代の天照とは彼女の事を指す。隻眼。白い外套を羽織っている。

メリーゴーラウンドの馬などを軽々と投擲する怪力を持ち、その身体能力もずば抜けている。

だが彼女の怪物たる所以は、心臓を破壊されようと、頭を吹き飛ばされようと、四肢を千切られ様と、死ぬこと無く再生するその体である。

蛇の名を持つ、彼女は殺されることはあっても、死ぬことは無い。決して死ぬことがない彼女だが、その神性ごと殺されれば再生は出来ない。

隻眼なのはその為で、その傷を負わせたのは竹。しかし、竹にはカ

ガチを殺す『歴史』が無かった為、それ止まり。

最終的に彼女を殺すのは、ただの人であるアレクサンドラである。

『唯一の一』の作った『歴史』通りに物事を進める為に、舞台を整えている調整者の一人。

今章では庵戸と今野に始動の許可を伝え、竹にアウローラからのメッセージを伝えただけで、完全にメッセンジャーとしての役割しかなかった。

今野に必要な情報を与えてしまったのは、無自覚にアウローラに操られてのことである。天照として君臨していた彼女ですら、全能の力には抗えないということだろう。

赤の女王・本名不明【管理者】

天岩戸、管理者の一人だった人。

紅葉の母親である、秋野神楽の妹の子孫。

製作者として天才的に優秀な女だったらしい。『神の製造方法』の本当の確立者。

次期『天照』の指名を断った竹をに可笑しそうに眺めていた。

黄の翁・本名不明【管理者】

天岩戸、管理者の一人だった人。

次期『天照』の指名を断った竹を可笑しそうに眺めていた。

大木直也（おおき なおや）【足跡の旅行者】

元天岩戸、技術部所属。メッセンジャー。

ひょろっとしていて背が高い。十三夜のメンバーの一人。日焼けにより茶色い肌。

身長こそ十三夜で2番目に高いのだが、逆に身体能力は下から2番一番下である今野が復活したので、名実ともに下から2番目となった。

現在恋愛に関して6連敗中であり、そういう点から常に女回りの良

い松田を妬んでいる節がある。ただし、同じく女回りの良い竹にはそういう眼は向けない。

今、好きな子は荒川宿禰だが、どう考えても報われなさそう、というよりもすでに戦わざるして負けている。7敗目は不戦敗だろう。石渡に絡んでは、いつも激しい返り討ちにあっている。

素面の時はKYと紙一重な発言をする節があるが、酔うとそれにお釣りがくるほど楽しい人物。

今章では庵戸の奇襲に合い、瀕死の状態にまで追い込まれた。

それでも逃げ切れたのは彼の異能の力ゆえである。

4年前に本多とともに竹に協力して、庵戸を殺害する。

これが真っ先に大木が庵戸に狙われた理由である。

傷は今章後、1週間たたずに完治。石渡から膨大な治療費を請求されたとか。

仲間内でのあだ名は『大木』。

エドワード・エルガー（えどわーど・えるがー）【剣手】

騎士団1番隊隊長。部下は邪魔になるのでいない。

聖剣の担い手。聖なる血を引くもの。聖者。王の剣。

人を惑わす正邪。

金髪で甘いマスク、フランクな物腰からは想像できない強さで当代一の若さでno.1まで上り詰めたツワモノ。剣の腕前は他の物に追隨を許さぬ程で、聖剣と合わせた彼の实力は世界でもトップ10に名を連ねるだろう。

騎士団の掟を他の騎士団員より重視しておらず、その事から一部の騎士団員からは慕われていない。

彼の行動には多々不審な点があるが、それらは全て『歴史』の調整者の一人としての行動。ただしヴィンセントに心から忠誠を誓っているのも本当。

何故ならそれら全てが『歴史』に記述されていることだから。

カガチ曰く、その在り方は『灰色』

宝具『聖剣エクスカリバー』を所有。

日に一度しか使用出来ないとはいえ、全てを焼き払うその聖剣の力は、全宝具中最高クラス。

今章ではヴィンセントに助言を与えるが、どう考えても面白がっていたとは思えない。

クリスティーナ・ビアンキ（くりすてぃーな・びあんき）【炎脳】

騎士団2番隊隊長。部下数不明。

赤い髪の女性。馬鹿。

その実力は、十三夜のメンバーと1対1でやりあえるものなのか。

賞金首の受け渡しがなかった場合、十三夜の討伐隊としての指名されて大いに喜んだが、結局それは叶わなかった。

そんな彼女を諫めるのに、ヴィンセントとエドワードは苦勞したとか。

古巢謙太（ふるす けんた）【鯨吞たる双顎】

元天岩戸、製作部所属。ソウルイーター。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。デブ。糸目。くせ毛。

以前はスマートな体型だったのだが、高校入学あたりでぶくぶくと変わり果てた姿に。

その後はデブキャラが定着。十三夜では、ある種のマスコットの存在に。

人をおちよくるような態度を取るが、何故か憎めない。

今章では脇と同じく自分が今月の担当者であることを忘れていた。

彼の扱う異能は『神具』とセットである。両手に鯨の口がくっついていて、とでも思えばいいだろう。その口に飲み込まれた者は魂を喰われ、廃人となる。

それだけ強くてなんで戦闘部じゃなくて製作部なんだ、と大抵の人が一度は思うが、その理由の一つは彼の『神具』が常にメンテナン

スが必要なものであるということ。

そして、もう一つは単純に適性の問題である。

古巣が今回、倒した賞金首は『黒豹』と『沈黙する水牛』以外に、小物一人だけ。

仲間内でのあだ名は『ケンタ』『デブ』。

館花直人（たてはな なおと）【支配領域】

元天岩戸、戦闘部所属。スラッガー。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。

十三夜の中でも随一の戦闘力。

180センチを超える長身に、服の上からでもわかる隆々とした筋肉。

野性味溢れる顔立ちで、ショートスタイルの髪を茶系に染め、顎に整えたヒゲに、やや切れ長の瞳。

その風貌はワイルドなB系の兄ちゃんといった感じ。なのだが、中身は結構純情だったりする。

時間にはきっちりしていて常に5分前行動。

今章では庵戸の奇襲にあうが、これを撃退。

最後は神具を使われて傷を負わされるが、生身のまま一矢を報いた。彼の重力を操る、という能力は正確にはその身に流れる血による特異体質である。

電柱のような巨大な金棒は『神具』であるが、名称は現在不明。

負傷した右膝は、3日ほどで完治。

仲間内でのあだ名は『おいちゃん』。ただその由来は自分でも不明だとか。

佐藤顕志（さとう けんじ）【戦神の左手】

元天岩戸、戦闘部所属。ウェポン。

十三夜のメンバーの一人で、竹たちとは違う高校に通っている。彫りの深い顔。

明るく優しい人物で、見えるところ見えないところで、色々と気を回している。

酔いが回ると甘えだし、更に酔いが回ると突然マシンガントークを繰り出す。その勢いは誰にも止められない。

今章では松田とともに本多の護衛を兼ねて迎えに行くが見事に失敗。とはいえ、本多が止めを刺される前に助かったのは彼の能力と起点による功績だろう。

仲間内でのあだ名は『ケンジ』『ケンさん』『KJ』。

本多雄貴（ほんだ ゆうき）【不明】

元天岩戸、戦闘部所属。

短い茶髪の癖っ毛をしている、十三夜のメンバーの一人。

かなりの優柔不断で、たまにぶっ飛んだ発言をする。

最強の矛と対をなす『神具』最強の盾を所持。

今章ではその『神具』を持つゆえに、邪魔者を排除しようとする庵戸に標的にされた。

4年前に大木とともに竹に協力して、庵戸を殺害する。

今野に受けた傷の治りは遅く、完治に2週間かかったとか。それでも石渡に請求された治療費は大木の10分の1。

仲間内でのあだ名は『本』『本ちゃん』。

人物設定 藍2（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
人物設定その2です。

人物設定 藍3（前書き）

『藍の章』終了時点の人物紹介です。

ネタバレ含みますので、『藍の章』を読み終わった方のみご覧下さい。

人物設定 藍3

今野大 （こんの だい） 【名称不明】

元天岩戸、技術部所属。

がりがりで目の大きい、十三夜のメンバーの一人。

断食でもしてるのではないかというほど細い体躯だが、しかし、断食どころかかなりの大食いであったが、今章後に旺盛だった食欲は何故かぱったりと収まり、見た目そのままに小食となった。

これは与えられていた役割の性質から、自分たちに4年間バレないようにカモフラージュとして大食いの役割を付加させられていたからだ、などと十三夜の面々は適当な理由をでっちあげたが、実際のところは何故かは不明。

縦浜の喫茶店での大食いキング（昼）はこうして消えていく。

4年前の天岩戸への反乱時（正確には決行前）に死亡したが、アウローラの手により生き返った。

ひよこひよことした歩き方が特徴的。

『神具』である宝飾剣と自身の身体を使って、『自傷癖』という異能を完成させた。

殆ど防御不可能なこの攻撃方法は、敵対する相手にとって厄介なところの上ない。

事実、絶対的な防御力を誇る最強の盾すらも、この異能の前では無意味なものであった。

とはいえその代償に自身の身体が傷ついていくのだから、乱戦に使うには適さないだろう。

古巣をマスコットに喩えるなら今野はペット的存在だろうというのが十三夜内の共通認識。

だが「あっ、大木タバコ吸ってる。生意気じゃん」の台詞でわかる通り、大木には厳しい。

ペットに手を噛まれるのは、所帯で最下層の位置にいる人物なので

ある。

仲間内でのあだ名は『大ちゃん』。

飯泉和典（い い ず み か ず の り）【不明】

元天岩戸、戦闘部所属。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。

十三夜の良心にして、規律。肉体のスペックなら十三夜随一。更に頭脳もかなり高い。

天岩戸時代は館花とコンビを組んで、戦うことが多く、攻守ともに最強のコンビだった。

今はその余りあるパワーを生かせる、引越し屋のバイトをしている。何故、アルバイトをしているかという点、現在、個人的な活動を控えているので、生活の為である。

何故、彼が個人的な活動を控えているのか、理由は不明。

今章では特に何もせずに事態を静観していたが、実は今野の復活を一番喜んでいたのはこの人。仲が良かったから、とかそういうわけではなく、それは彼の心の清らかさによるものだろう。さすが十三夜の良心。

ただ遠藤の提案を受けて、来月分の賞金首をゲットするなど抜け目はない。

仲間内でのあだ名は『い い ちゃん』。

遠藤涼也（え ん ど う り ょ う や）【不明】

元天岩戸、技術部所属。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。結界師。やや色黒。結界を作る能力は黒須よりも遥かに上らしい。

常人とは感覚がずれているので、本気で誰かが引くような発言を平気でする。

豪快に笑うのも彼の特徴。

彼も飯泉と同じくアルバイトをしているが、これは飯泉とは違って

生活の為でなく、あくまでも趣味。

アルバイト先はコーヒー豆の専門店『豆』。

今章では、特に何もせずに事態を静観していたが、最後の最後でたなぼたゲット。

ただ酒を飲んでいただけで来月働かなくていい権利を得た彼は、もしかしたら今章で一番得をした人物かもしれない。

仲間内でのあだ名は『マメ』。

甲斐輝明（かい てるあき）【伽藍の軍使】

元天岩戸、作戦部所属。プレイヤー。

竹たちとは違う高校に通う、十三夜のメンバー。細い目。薄く茶色がかった肌。

十三夜の頭脳で竹の数十倍は頭が回るらしい。寡黙な人物。

松田と誕生日が一緒なのだが、性格は正反対で相性も悪い、とは竹の私見。

今章では脇に頼まれて作戦立案をした。作戦実行のことを対局と呼び、局中にいる人物を将棋の駒に喩える。

その作戦立案能力は殆ど予知の領域に入る予測演算である。

しかし女性陣を危険に晒さないように、というのが竹の条件であったが、それを結果的には完璧なまでに無視をする形になった。

これは別段危険はないと判断したのか、止めるのが面倒だったかどうか、もしくは両方だと思われる。

仲間内でのあだ名は『カイカイ』『輝ちゃん』『輝明』

八坂真実・真逆（やさか まみ・まさか）【双子メイド】

秋野家で働いている二卵性の双子メイド。姉が真実で妹が真逆。

年齢はガッツポーズ出来てしまう外見だけ見れば、竹たちとそう変わらない。（実際の年齢は不明）。ただ車を運転出来るので、無免許でなければ18歳以上である。

紅葉の忠実な従者で、料理、運転、宿泊者の着替えの用意に死体の

処理、果てはホステスさんばりの接待までと仕事の出来る姉妹である。

車の運転をするのは常に真実なので、そちらは姉の担当のようだ。エプロンドレスにポニーテールは、誰かさんにストライクだったとか。

斑鳩愛（いかるが まな）【名称不明】

初代、天岩戸司法部。女性。

庵戸と違い、藍の外套も授かっていなければ、裁判官の名もない。

これは当時まだ管理者の制度ができていなかった為であり、『初代、天岩戸司法部』の名前からわかる通り、彼女は一人で組織の司法の全てを担っていたとか。

その後、管理者の制度など司法部は集団としての体制を形成するのだが、その礎を築いたのは彼女の功績である。

『愛なき罪は無く、裁きに愛はない。』

天が定めし絶対の法の下、愛ある罪を裁く。

これ即ち、藍の裁きなり』。

そんなスローガンを掲げて、礎を築いた彼女だがこれは殆ど彼女の趣味によるものだったとか。彼女が愛に生きる女だったが為に、天岩戸の司法は微妙におかしなものに形成されてしまった事を後世の者たちは知る由もない。

もしも司法部を立ち上げたのが彼女でなかったら、あらゆる物語に影響を与え、そもそも今章すら存在しなかっただろう。

だがしかし、そんな歴史はないのだ。

誘い出された人（さそいだされたひと）【賞金首】

サバイバルナイフとベレッタを用いる、賞金首ランキング189位の男性。

そこそこ高ランクにいるが、彼が生きてきたのは裏社会でもまだ浅い場所だった。

無知ゆえの自尊心。あっけなく蜘蛛の糸に絡め取られ死亡。

ドーベルマンが3匹（どーべるまんがさんびき）【賞金首】
189位の人が暗がりですーベルマンと見間違えるほど、赤黒く血に濡れていた。
性別もランキングも不明だが、受け渡しに使われなかったことや、脇の攻撃で生存できていないあたり、やはり浅い場所に住まう人々だったのだろう。

本名不明【黒豹】

今でこそ賞金首ランキング100位台まで落ち込んでいるが、一期はトップランカーだったこともある壮年の黒人。くろひょう。痩せているように見えて、その実、均一の取れた強靱な筋肉に身を包んでいる。

その身から発せられる雰囲気はまさに黒豹と呼ぶに相応しい。とはいえ性格もそれなりに冷静でリーダーとしての資質も兼ね備えている。

部下からの信頼も厚い。18年前までは『沈黙する水牛』と他2人と組んでいたらしいが、とある仕事でそのうち二人が死亡し、それを機に別々の道へ進んだ。その時、彼らを追い込んだのは当時、最強の名を欲しいままにしていた白い怪物だったとか。

撤退を決めながらも、最後の最後でそれに徹し切れなかったのは、彼と『天岩戸』という組織の因縁によるものだろう。

鯨に魂を食われ半死亡。

年が明け騎士団に引き渡された後、処断される。

黒豹の部下その1（くろひょうのぶかそのいち）【賞金首】

賞金首ランキング150位前後で双剣を扱う、小柄な中年男。禿げ上がった頭と、妙に渋めの声が特徴。

『黒豹』の忠実な部下であり、彼の方針に最後まで従う。が、忠実な部下であるならやはり止めるべきであった。

散歩の邪魔という理由で紅葉に頭部を半分吹き飛ばされ、身体の内側から業火に焼かれ死んだ。

黒豹の部下その2 （くろひょうのぶかそのに） 【賞金首】

賞金首ランキング150位前後でチャクラムを扱う、ラテン系の若い女。推定年齢27歳。

その3の人は双子の兄。

『黒豹』の忠実な部下であり、彼の方針に最後まで従う。

先手必勝の考えは悪くなかったが、残念ながら実力差、というよりも存在自体に差がありすぎた。

散歩の邪魔という理由で蒼香のナイフに身体を裂かれ、頭部に銃弾を受けて死亡した。

黒豹の部下その3 （くろひょうのぶかそのさん） 【賞金首】

賞金首ランキング150位前後で短弓を扱う、ラテン系の若い男。推定年齢27歳。

その2の人は双子の妹。

『黒豹』の忠実な部下であり、彼の方針に最後まで従う。

自身の回避力に絶対の自信を持っており、仲間がやられても乱すことのない驚異的な集中力を持っていたが、それが逆にあだとなった。散歩の邪魔という理由で深翠の狼たちに足元から喰われ死亡した。

本名不明 【破鍋】

賞金首ランキング49位。フランス系アメリカ人。われなべ。

粗暴な男口調で話す女性。『綴蓋』の妻。変態。

異性装嗜好の上に露出狂。衣類はグレーのボクサーパンツのみ。針金を束ね合わせたような、軋やかな筋肉に覆われている。

少児性愛、嗜虐趣味、死体愛好、人肉嗜好。

猟奇殺人犯であり、国際指名手配犯として世間的にも認知されている。

彼ら夫妻の手にかかった幼い子供の数はわかつていてだけで50を超え、表沙汰になっていない人数も含めればその3倍は下らないと言われている。

『沈黙する水牛』の依頼で今回の件に手を貸すが、彼が死亡したのがわかるとさっさと逃亡しようと企てる。

しかし、それは叶わずすでに蜘蛛の捕食場にいた彼女は逃亡を諦め、生存を選ぶ。

今章で騎士団に引き渡された彼女だが、国際指名手配犯でもあるだけに内々で処分することが出来ず、警察機関に引き渡され、その後脱走に成功するとか。

とはいえ、蜘蛛の糸によって付けられた傷は深く、脱走後は以前のような振る舞いは出来ずに賞金稼ぎの脅威にただただ怯える日々が待っている。

本名不明【綴蓋】

賞金首ランキング89位。フランス系アメリカ人。とじぶた。

婀娜っぽい女口調で話す男性。『破鍋』の夫。変態。

異性装嗜好の上に露出狂。ぶよぶよとだらしのなく肥大した身体に女性用下着を着用している。

少児性愛、嗜虐趣味、死体愛好、人肉嗜好。

猟奇殺人犯であり、国際指名手配犯として世間的にも認知されている。

彼ら夫妻の手にかかった幼い子供の数はわかつていてだけで50を超え、表沙汰になっていない人数も含めればその3倍は下らないと言われている。

『沈黙する水牛』の依頼で今回の件に手を貸すが、彼が死亡したのがわかるとさっさと逃亡しようと企てる。

しかし、それは叶わずすでに蜘蛛の捕食場にいた彼は逃亡を諦め、生存を選ぶ。

今章で騎士団に引き渡された彼だが、国際指名手配犯でもあるだけ

に内々で処分することが出来ず、警察機関に引き渡され、その後脱走に成功するとか。

とはいえ、蜘蛛の糸によって付けられた傷は深く、脱走後は以前のような振る舞いは出来ずに賞金稼ぎの脅威にただただ怯える日々が待っている。

本名不明 【沈黙する水牛】

賞金首ランキング26位。用心棒。バッファロー。

2メートルに届く身長と、奇形的なまでに発達した筋肉が覆う肉体は、対峙した190を超えるはずの長身を持つ『黒豹』を小さく見せるほどのもの。

文字通り筋肉の塊。巨躯のネグロイドである。

くぐもった声でぼそぼそと話す。

8年前までは『黒豹』と他2人と組んでいたらしいが、とある仕事でそのうち二人が死亡し、それを機に別々の道へ進んだ。その後、彼は常に第一線で活動してきた。

『破鍋』と『綴蓋』のいけ好かない夫婦を雇い、罠だとわかっていて今回参戦した。

罠だとわかっていて現れたのは天岩戸の者が絡んでいたことと、その現場に『黒豹』がおびき寄せられることを知った為である。罠だと見抜いたことや、『黒豹』の動向を知る辺り、見かけによらず情報収集が得意だったようだ。

過去の因縁を清算する為に、かつてのリーダーを許し助ける為に参上したのだが、結果、鯨に魂を食われ半死亡。

年が明け騎士団に引き渡された後、処断される。

>i2751—341<

人物設定 藍3（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

人物設定ラストです。本当に登場人物が多い章でした。

なので、もしかしたら抜けている人がいるかもしれません。もし気がつきましたらご報告ください。

歴史年表 1

年表

それ以前

『岩戸』が閉じる。

2000年前

天岩戸の元となる集まりが出来る。

その間

斑鳩愛、一人司法部を発足。

1000年前

天岩戸が組織として形を成す。

管理者、幹部、それに伴い7つの部署が生まれる。

800年前

秋野神楽、石間山の鬼を討伐。『岩戸』を開く方法に至るも天岩戸を抜け、石間山に留まる。

以降、天岩戸から『素戔鳴』地位が消える。

その一年後、鬼子、秋野紅葉が生まれ、すぐに眠りに付く。

700年前

石間山に鬼が再来した噂が流れ、討伐隊が向かった夜、石間山が炎上。生存者は秋野家の当主のみ。

以降1000年毎に、このような事が起こる。

650年前

500年前

黒の教団が設立される。

380年前

騎士団が発足する。

90年前

赤の女王、生誕。

84年前

耶麻寺早雲、生誕。

55年前

天使が『岩戸』の前に現れる。以降研究材料に。

天使の羽根を用いたナイフを、耶麻寺早雲らが開発。

50年前

山吹九音、耶麻寺早雲の手によりより製造される。

＊方法を確立したのは『赤の女王』。後に『岩戸』を開く方法にも至る。

39年前

天野輝血が生まれる。

34年前

黒須蛭が生誕。

30年前

九音により、天照が殺害され天野輝血がわずか9歳にして天照となる。

その後、九音は天使とともに『岩戸』の向こう側へ逃走。姿を消す。
耶麻寺早雲、釜藏の独房に幽閉される。
耶麻寺の一族は皆殺しにされる。

26年前

山寺一馬、天岩戸に拾われる。以降、道具として赤の女王に教育を受ける。

24年前

黒澤怜、生誕。

20年前

ヴィンセント・ワーナー、両親が天野カガチに殺害され、自身も重症を負う。

18年前

黒豹のチームが天野カガチの手にかかり解散。

17年前

天倉竹、庵戸朋愛ほか、現十三夜のメンバーが生み出される。

16年前

九音が天使とともに、赤子（蒼香）を抱いて『岩戸』からこちら側に戻ってくる。

天使はその後死亡。

九音は組織から逃亡。天使の呪いで記憶を失う。

蒼香は、組織とは無関係の孤児院へ送られ、その後とある家庭に引

き取られる。

7年前

黒須螢、黒澤怜の兄妹により、黒の教団に所属していたものが皆殺しにされる。

ただ、実際に手を下したのは黒須。黒の教団壊滅。黒の書が黒須の物になる。

怜が両親の故郷に戻り、一人で暮らし始める。

庵戸朋愛が史上最年少で管理者に抜擢。

6年前

秋

蒼香、引き取り先の家庭を皆殺しにされ、殺し屋の山吹九音と相棒の山寺一馬と出会う。

蒼香、九音へ復讐を誓う。

九音、一馬、蒼香行動をともにする。

冬

一馬が九音を殺害。蒼香の一つ目の復讐が終わる。

一馬、蒼香に生きる目的を与える。

蒼香、一馬に復讐を誓う。

一馬、耶麻寺早雲の独房へ逃げ込む。

怜が紹介者の仕事を始める。これにより騎士団から追われない立場に。

5年前

天倉竹が次期『天照』に選出される。

竹、これを断り十三夜の前身チームを発足させる。一人司令部。

4年前

現、十三夜のメンバーが『岩戸』の向こう側に到達。

そして帰還した直後、天岩戸への反乱を起こす。
天岩戸崩壊。

庵戸朋愛は瀕死状態から、今野大は死亡状態からアウローラの手により復活させられる。

3年前

竹、黒澤怜と出会う。

天倉竹、松田聡也、佐藤顕志、館花直人が黒澤怜の口利きで、英国にて騎士団と共同戦線を張る。
吸血鬼が滅びる。

その結果、十三夜と騎士団の休戦協定が張られる。

2年前

竹、依頼の最中に人質に取られた荒川宿禰を救う。

宿禰、竹に一目惚れするも忘れさせられる。

竹、宿禰と会ったことを気に留めず、忘れる。

1年前

竹など十三夜のメンバーが高校入学。

宿禰、入学式で竹に再び一目惚れ。

現在

4月

蒼香、一馬を殺害。二つ目の復讐を果たす。

再び目的を失った直後、黒須に出会い蒼香は殺戮の天使へ。

5月 【翠の章】

竹、大神深翠と出会い、自らの警護を依頼される。

深翠、竹に敗北。

竹、この物語を解決する。

殺人鬼のニュースが流れ始める。

6月

黒澤怜、耶麻寺早雲に殺人鬼の捕獲依頼をされる。

怜の紹介した賞金稼ぎが、返り討ちにあう。

7月 【蒼の章】

騎士団6番隊壊滅。

竹、殺人鬼の捕獲を怜に依頼される。

耶麻寺早雲、精神崩壊後に黒須とカガチの手により殺害される。

蒼香、竹に敗北。

竹、蒼香との戦闘により左腕を失う。

蒼香、山吹姓を名乗る。

下旬、若者を中心に『D&』の流通が開始。

8月 【紅の章】

竹、黒澤怜、松田聡と『赤き秘宝』のお披露目会へ向かう。

竹、秋野菊代、アレクサンドラ・ワーナーと出会う。

紅葉、松田には僅差で勝利するも、竹に敗北。

竹、秋野神楽（菊代）の首を刎ねる。

竹、左肩から完全に義手になる。

／30

ヴァインセント・ワーナーが夢の国に入城。

9月 【橙の章】

竹、騎士団との交渉の為、甲斐輝明から策を授かり夢の国へ。

竹、交渉の場でプロポーズ。交渉は破談。

パレード開幕。4種の音による交響曲が奏でられる。

騎士団と天岩戸関係者の戦闘は、天岩戸関係者の全勝に終わる。
アレクサンドラ、いい感じに竹をハメて事実上の婚約。
ヴィンセント、剣と盾を連れ本国へ帰還。

／23

吸血鬼（猟奇殺人事件）最初の被害者が出る。

10月 【黄の章】

初旬

紅葉、釜蔵に良物件を見つけ、そちらに双子メイドと引っ越す。
石渡直也、竹に頼まれて紅葉の主治医に。
怜、『黒の書』の解読に苦しむ。

吸血鬼のニュースが話題になり始める。

／31

十三夜の宴。

宿禰、夜たちとニアミス。

竹『D&』のバイヤーを始末するも宿禰、吸血鬼化。

11月

／1

宿禰、高校の階段の踊り場で全てを思い出す。
吸血鬼のニュースが鳴りを潜める。

歴史年表1（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

文字数はそんなにありませんが、改行があるためこれも二つにわけ
ることにしました。

藍の章以前の現在の年表になります。

歴史年表 2

12月 【藍の章】

吸血鬼（猟奇殺人事件）のニュースが再び沸き立つ。

／4

吸血鬼（猟奇殺人事件）の被害者が20名に達する。

／5

竹、宿禰を連れて石渡の下へ。

石渡、『D&』の分析結果等を二人に告げる。

宿禰、疑似吸血鬼であることと元に戻れないことが判明。

竹、吸血鬼（猟奇殺人事件）と『D&』の関連性の調査を脇に依頼。
アレクサンドラ、竹との電話にて騎士の派遣の件を話し、それを阻止する妙案がないか問う。

脇、竹に調査結果をメールにて送信。仕事早い。

宿禰、竹に連絡を入れず夜の街へ、吸血行為をしに繰り出す。以降
消息不明に。

アレクサンドラ、ヴィンセントに1ヶ月で倍の成果を出す約束。

竹、再びアレクサンドラと電話。吸血鬼（猟奇殺人事件）の犯人を
捕える依頼をしてもらう。

／6

竹、吸血鬼（猟奇殺人事件）の犯人を捕える為に行動し始める。

／14

竹、6体の吸血鬼を処理。松田の家で一時の休息。hip hop
煩い。

宿禰、相変わらず行方知れず。

庵戸、宿禰のリミッターを外す。

宿禰、5人の青年を殺害。人の血を啜る鬼へ。

竹、宿禰による殺害の現場に到着、血に誘われた吸血鬼を更に一体
処理。

／15

以降、吸血鬼（猟奇殺人事件）による被害者が一気に増加する。

／21

吸血鬼（猟奇殺人事件）の被害者は44名に。

竹、処理した吸血鬼の数が11体。残り1体に。

宿禰、竹、16日ぶりの再会を果たす。このとき吸血鬼（猟奇殺人事件）の被害者は50名に。

竹、宿禰と戦闘。宿禰死亡。

／22

竹、大木が負傷したという電話を松田から受ける。

竹、宿禰の遺体を一度自宅に持ち帰り、適切な処置を施す。

宿禰、裸にされる。処置の為だったとはいえ、乙女心に大ダメージ。だが返事はない。屍のようだ。

竹、石渡の自宅へ。

大木、石渡と松田の治療により一命を取り留める。

石渡、小火を起こされる。

竹、十三夜の面々に大木が負傷したことを伝え、警戒を促す。

アレクサンドラ、ヴィンセントに約束を果たしたことを伝える。

ヴィンセント、竹に対して大いに憤慨する。

エドワード、ヴィンセントに助言。

ビアンキ、ひゃっほう。

ヴィンセント、ふははははは。

アレクサンドラ、竹に今月の賞金首の受け渡しについて確認の電話。大木が負傷したことを知る。

竹、松田、自宅へ戻る。竹は再度、宿禰に対して処置を施す。

館花、コンビニに行った帰り道に童子面の男に襲われる。この際に右膝を負傷する。

庵戸、館花の反撃に合い、顔がばれる。

館花、治療の為に石渡宅へ、竹、松田、佐藤が集まり、庵戸に襲われたことを報告。協議の結果『唯一の一』が関係しているだろうと

いう推測に行き着く。背筋が凍りつく。

竹、念のために十三夜全員に召集をかける。佐藤の発言により松田とともに本多を迎えにいかせる。

／23

松田、佐藤、本多、緊張感なくビール片手に石渡宅へ。

大木、目を覚ます。今更、庵戸の情報を言われても誰も驚かない。本多ら、今野に襲われる。

本多、負傷。

佐藤、咄嗟の判断で今野の意識を刈り取る。

松田、念のためという名目で今野に要らぬ止めの一撃を加える。

竹、負傷した本多と今野を抱えた松田、佐藤の姿に驚く。

竹、松田だけ批判。その後、集まった全員に一連の説明をする。

竹、紅葉に連絡を取り、屋敷の提供を許可してもらう。

竹、深翠、蒼香、アレクサンドラも集めることを決める。

十三夜、全員で秋野の屋敷にお泊り。メイド運転のバスにて移動。

脇、今月の担当者であったことを竹に言われて思い出す。うっかり。

アレクサンドラ、蒼香、深翠を迎えに車を出す。

アレクサンドラ、深翠、竹の自宅に夜月を取りに行く。宿禰の存在には気付かず。

蒼香、部屋の外に残る。庵戸と邂逅。竹宛のメッセージを受け取る。十三夜、秋野家に到着。喫煙率9割。

今野、お目覚め。寝起き直後に大木批判。松田の豪快すぎる行動に皆がひく。

竹、今野から大筋の事情を聞き、ほぼ全てを理解する。今野にエスパール呼ばわりされる。

アレクサンドラ、蒼香、深翠、秋野家に到着。

紅葉、到着した3人を妾呼ばわり。

竹、現実を直視できない。

紅葉、家主の特権により竹と二人きり。何気なく誘ってみる。

竹、一步踏みとどまり、宴会の用意を頼み、これを承諾される。鳩

サブレー。

宴会開始。昼。

竹、深翠、蒼香に集めた理由の説明を終え、庵戸からのメッセージを蒼香から伝えられる。これにより今後の方針が完全に固まる。竹、女性陣から逃げるために酒を利用。結果、潰れる。ゲロまみれに。

竹、夜に起きて死にたくなる。

紅葉、竹に脇からの提案を伝える。賞金首を捕えるのに屋敷を利用することに最初難色を示すが、竹以外の全員が承諾済みの上に甲斐立案の作戦ということもあってこれを了承。条件は女性陣を危険に晒さないこと。

竹、秋野家の準備の良さに馬鹿みたいな台詞を吐く。酔いはまだ抜けず。

／＼24

竹、庵戸と4年ぶりの再会。一対一の勝負へ。

アウローラ、竹の自宅へ。宿禰に『朝日』を突き立てる。

宿禰、再生へ。

脇、作戦の為に屋敷の裏手に巣を張る。

古巣、作戦の為に正門に構える。

甲斐、脇にうっかりを起こさせないように作戦の全てが書かれた紙を託す。

石渡、飯泉、大部屋にて静かに時を過ごす。甲斐もそれに付き合う。それ以外の十三夜、そんなことはお構いなしに酒を飲み続ける。

脇、張った巣に獲物が掛かり始める。

古巣、正門にて『黒豹』と『沈黙する水牛』を食べる。その後、もう一人だけ食べて仕事を終える。

脇、変態夫婦を捕えた後もせっせと働く。

紅葉、散歩の邪魔という理由で侵入者を殺害。

蒼香、散歩の邪魔という理由で侵入者を殺害。

深翠、散歩の邪魔という理由で侵入者を殺害。

アレクサンドラ、その様子に愕然とする。

十三夜、その様子にドン引きする。

竹、左眼と左手を喪うも庵戸を殺害する。『氷槍』を獲得。

脇、古巣、アレクサンドラに賞金首を引き渡す。

遠藤、飯泉、余った賞金首をゲットする。

竹、秋野の屋敷に戻る。

アレクサンドラ、竹に一時帰国を告げ、唇を奪う。

深翠、蒼香、紅葉、大激怒。

弔いの宴。

／25

竹、八坂真実の運転で自宅へ戻る。エプロンドレスにポニーテールは凶器。

輝血、黒須、竹の自宅前にて待ち構えアウローラからのメッセージを伝える。

宿禰、神性を与えられた本物の吸血鬼として目を覚ます。少しばかりキャラが変わる。

宿禰、前向きに生きることを決意し、竹に名前と呼ばれることを望む。

竹、宿禰の裸を見たペナルティにこれから名前で呼ぶことを科せられる。お安い御用。

歴史年表2（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

長い物語だったので整理を、というところで細かく記しました。7つ目の物語の時にはまた簡略化されます。

これにて『藍の章』は完全終了です。

次章は時を戻って7つの物語の一番初め、『翠の章』。ヒロインは深翠になります。

更新できるのは11月に入ってからだと思われます。それではありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7354d/>

復讐裁判官 藍の章

2010年10月8日16時18分発行